Taike
Tomekichi
part.1
BOOK

ISBN 978-4-908193-18-7
C0302 ¥3000E
定価 3,000 円＋税

9784589030870
1921032025009

UTA BOOK UTA ブック

Taike Tomekichi

part.1 反省研修会

1985 年 1 月～ 1990 年 10 月

Taike Tomekichi　part.1 / table of contents

Taike Tomekichi 発刊に寄せて　塩川香世　1

序章　「意識の流れ」からのスタート　5

第1章　発端　17
田池先生の生い立ち　18
陸軍士官学校へ　19
教師への道　21
お母さんの反省　23
心を見る勉強会へ　26
田池先生が書き残した戦時下の市岡生　27
田池先生が書き残した戦時下の軍事教練　28
田池先生が書き残した信太山の生活　29
1985 年１月神理をまなぶ会第1回開催　31
田池先生の手紙　嫁と姑の関係で悩んでおられる方へ　35
田池先生の手紙　夫婦の不調和で悩んでおられる方へ　38
この時期、田池先生と出会った方たちの思い　41
参考資料「神の子の道」　45
アンケート「田池先生との出会い」　1950 年代～ 1985 年　46
Mother and Reflections on Mother　62

第２章　反省研修会、はじまる！！　65
第１回反省研修会　67
熱海富士屋ホテルでの田池先生の講話　84
アンケート「田池先生との出会い」　1986 年～ 1988 年　86
Idolatry and Reflections on Idolatry　94

第３章　反省研修会、海外へ！！　96
第１回 ロサンゼルス反省研修会での田池先生の第一声　99
ロスセミナーに集った人たの声　102
1989 年１月、昭和が終わりました！
　― 昭和天皇とロックフェラー３世 ―　121
1988 年 12 月、「神の子の道研修センター」オープン！　131
第2回ロサンゼルス反省研修会に集った人たちの声　144
あるご姉妹 にとってのアメリカセミナー　157
あるご夫妻 にとってのアメリカセミナー　160
先祖供養から自己供養へ　167
1989 年７月 初の韓国セミナー　177
アンケート「田池先生との出会い」　1989 年～ 1993 年　178

第４章　反省研修会からエルランティの光セミナーへ　194
ニューヨーク・セミナーでの講話　196
「エルランティの光出版」がスタート　200
エルランティの光出版５年間の刊行物一覧　205
1990 年４月のロサンゼルス反省研修会に参加しました！　214
ニューヨークレポート vol. 1　218
ニューヨークレポート vol. 2　222
ニューヨーク・セミナーでの体験　224
アメリカ大陸横断自動車旅行　239
第１回エルランティの光セミナーのスタート　240
アンケート「田池先生との出会い」　2005 年～ 2011 年　246

おわりに　251
闇出し現象で感じた心（塩川香世）　252

Taike Tomekichi 発刊に寄せて

あなたは、３分冊のどのタイミングで学びに集ってこられましたか？

塩川香世

　このたび、UTA ブックさんが、田池先生とともに学ばせていただいた軌跡を、Taike Tomekichi　３分冊に収録されて発刊されました。

　あなたは、３分冊のどのタイミングで学びに集ってこられましたか。

　膨大な資料を整理された UTA ブックさんに感謝するとともに、何よりも田池先生とともに学ばせていただいた喜び、幸せをかみしめながら、少々思いを綴らせていただきます。

　私は、1992 年 12 月、大阪の八尾に当時あった神の子の研修センターで、田池留吉という方に初めて会わせていただきました。

　何か聞きたいことがある人はいませんかということで、挙手しました。当時の私の状況の打破に何かコメントをという思いからでした。

　その時、喜びが少ないとか、学びの本を読んでくださいとか、そういうアドバイスをいただいたように記憶しています。

　明けて 1993 年４月、身辺整理ができ、セミナーに参加するという環境が整っていました。

　一泊の熱海セミナーに単身で乗り込みました。新幹線の車窓から富士の山がはっきりくっきりと見えていました。

　その後、何度も新幹線に乗り、セミナー参加をしてきましたが、あのときほど富士の山が綺麗に見えたことはありませんでした。思えば、あの最初の熱海行きが、田池留吉の世界への宣戦布告でした。はっきりとくっきりと目に心に映った富士の山がその象徴でした。

　私は、１分冊に納められている反省研修会時代を全く知りません。ただそこから読み取れるのは、真実に目覚めていこうという呼び掛けに多くの学びの友が集まり、思いが確実に形となっていった喜びの手応えでした。

　残念ながら、私はその当時はまだまだ、文字通り肉、肉の生活をしていて、こういう学びがあるよと母から事あるごとに聞かされ

ていたけれど、聞く耳持たずでした。

そんな私がようやく重い腰を上げて、自ら学びの門を叩くことになったのは、ご多分に漏れずひとつの現象があったからでした。このあたりの経緯は拙著 2006 年8月初版の「ありがとう」、10 年後の 2016 年6月発刊の「ありがとう　復刻版」に纏めてありますが、この「ありがとう」が私の学びの原点だと思っています。

1993 年4月からこの「ありがとう」の本を出版させていただいた 2006 年8月の 10 年余りの年月が、今世の私の学びの基礎固めとなりました。もちろん、その中心柱は、2004 年、「意識の流れ　アルバートとともに」が発刊されるという大きな喜びの仕事を通して学ばせていただいたことでした。

学びの基礎固めに大いに手を貸してくれたのが、当時毎月２回開催があったエルランティの光セミナーであり、田池先生が 2000 年後半頃から開設してくださったホームページでした。

まさに、私はセミナーとホームページによって、自分の学びの基礎を固めていった、真実に目覚めるためのお手伝いをしていただいた、そう言っても決して言い過ぎではありません。

やがて、エルランティの光セミナーも UTA 会セミナー、UTA の輪セミナーと名称を変えていきますが、田池留吉という道しるべが指し示してくれた方向に心を向けて合せていきましょうということには全く変わりはありません。

私達は肉ではなく、意識、波動、エネルギーであるという肉から意識への転回が待たれています。

世の中のいわゆる濁流という流れに流れながら、決して流されず沈まず、自分の中に厳然としてある意識の流れに心の針を向けて合せていく生き方をしていこうという思いの結集されたものが、Taike Tomekichi　３分冊だと思います。

どうぞ、今世、田池先生とともに学ばせていただいたことを、それぞれの宝物として、これからの転生に自分を繋いでいってください。そして、三次元最終の 250 年後の出会いを必ず果たしてください。

そして、そして、まさに意識の流れに軽やかに乗り、私達の心のふるさと「愛、母なる宇宙」への旅路をともにしてまいりましょう。私達の心の中で、大きく両手を広げて待ってくれている田池留吉、アルバートの波動をしっかりと受けていってください。

「私はあなた、あなたは私、ひとつ。
帰ってくるのを待っています。」

Taike Tomekichi part.1 / table of contents

Taike Tomekichi 発刊に寄せて　塩川香世　1

序章　「意識の流れ」からのスタート　5

第1章　発端　17
田池先生の生い立ち　18
陸軍士官学校へ　19
教師への道　21
お母さんの反省　23
心を見る勉強会へ　26
田池先生が書き残した戦時下の市岡生　27
田池先生が書き残した戦時下の軍事教練　28
田池先生が書き残した信太山の生活　29
1985 年１月神理をまなぶ会第1回開催　31
田池先生の手紙　嫁と姑の関係で悩んでおられる方へ　35
田池先生の手紙　夫婦の不調和で悩んでおられる方へ　38
この時期、田池先生と出会った方たちの思い　41
参考資料「神の子の道」　45
アンケート「田池先生との出会い」　1950 年代～ 1985 年　46
Mother and Reflections on Mother　62

第２章　反省研修会、はじまる！！　65
第１回反省研修会　67
熱海富士屋ホテルでの田池先生の講話　84
アンケート「田池先生との出会い」　1986 年～ 1988 年　86
Idolatry and Reflections on Idolatry　94

第３章　反省研修会、海外へ！！　96
第１回 ロサンゼルス反省研修会での田池先生の第一声　99
ロスセミナーに集った人たの声　102
1989 年１月、昭和が終わりました！
― 昭和天皇とロックフェラー３世 ―　121
1988 年 12 月、「神の子の道研修センター」オープン！　131
第2回ロサンゼルス反省研修会に集った人たちの声　144
あるご姉妹 にとってのアメリカセミナー　157
あるご夫妻 にとってのアメリカセミナー　160
先祖供養から自己供養へ　167
1989 年７月 初の韓国セミナー　177
アンケート「田池先生との出会い」　1989 年～ 1993 年　178

第４章　反省研修会からエルランティの光セミナーへ　194
ニューヨーク・セミナーでの講話　196
「エルランティの光出版」がスタート　200
エルランティの光出版5年間の刊行物一覧　205
1990 年４月のロサンゼルス反省研修会に参加しました！　214
ニューヨークレポート vol. 1　218
ニューヨークレポート vol. 2　222
ニューヨーク・セミナーでの体験　224
アメリカ大陸横断自動車旅行　239
第１回エルランティの光セミナーのスタート　240
アンケート「田池先生との出会い」　2005 年～ 2011 年　246

おわりに　251
闇出し現象で感じた心（塩川香世）　252

2015 年 1 月『意識の流れ』初版が発行され、その年の9月から 12 月にかけて、岐阜県の下呂温泉「水明館」、
滋賀県の「琵琶湖グランドホテル」において 3 回にわたって「意識の流れ・出版記念セミナー」が開催された。

序章　「意識の流れ」からのスタート

私が、一生かけて知りえた真実を伝えたいと思いますが、如何でしょうか。

1. 人間はなぜ生まれてくるのでしょうか。
2. 地球人類はどうして数え切れないほど転生を繰(く)り返してきたのでしょうか。
3. 現在の人類は、まったく生き方が間違っています。人間は意識、エネルギーであり永遠に存在します。意識の転回が絶対重要です。(コペルニクス的転回)
4. すべては愛です。やがてその事実が現象化してくるでしょう。天変地異、愛に目覚める絶好のチャンス。
5. 私は、250年後、アメリカの地に転生します。そして、皆さんと共に次元移行を果たしていきます。
6. 間もなく肉体を置いていきますが、死後も仕事をしていきます。ただただ喜びです。幸せです。
7. あなたは愛です。信じていきましょう。私はあなた、あなたは私、一つ。初めから幸せ、喜び、温もり、大きい大きい存在です。もっともっと心を大きくして生きていってください。
8. 私よりも、もっともっと長く生きて、真実を知ってください。喜んで、すべてにありがとうと思いを発信しながら今世を閉じていきませんか。

お母さんの腕に抱かれ、お乳を頂きながら、すべてを委(ゆだ)ね安心していた自分(0歳)を思い起こしていきましょう。できるだけ「お母さん、お母さん、お母さん」と呼び続けていきませんか。

では、お健(すこ)やかに。

田池留吉

私はこれまで約 20 年にわたって、主にこの日本の国でセミナーを開かせていただきました。それはある年齢に達したとき、私はひとつの仕事をするために生まれてきたことが、自分の中で見えてきたからです。

私は、自分の心を見るという作業を通して、自分の心で分かってきたことがあったのです。

そして、何らかの形で私は自分の心で分かったことをお伝えしたい、また、お伝えすることが私の喜びであるという思いを強く持つようになりました。また、このことは決して片手間ではできないことであり、私のすべてを懸けてお伝えしたいと心から思いました。

そして、それがセミナーという形となって、約 20 年間続けさせてもらったということです。

私はお伝えすることが喜びという思いだけで今日まで存在してきましたし、その思いは、これからも全く変わることはありません。

私は、セミナーに私のすべてを注いできました。私にはセミナーで名を残そうとか、財を築こうとか、セミナーに集ってくる人々を救っていこうとか、そういう思いは一切ありませんでした。ただ私は喜びでセミナーを開かせてもらい、喜びでセミナーを閉じていくだけでした。

セミナーに集ってきた人達は私の肉声を通し、また印刷物を通し、一通りのことはすでにご承知です。しかし、そういった方々でも本当にお伝えしたいことを分かっていただくのは難しいというのが、実際のところでした。それは本当のことはあなたの頭では理解できない、あなたの頭脳を遥かに超えたところに真実があるということが、なかなか理解してもらえなかったからです。

頭ではなく、知識としてではなく、自分の心で分かるということが分からない、難しかったということでしょう。私達人間は、五官、すなわち目、耳、鼻、舌、皮膚を通して感じる世界が本当の世界であると思い、今、目の前に広がっている形の世界に自分は生きていると思ってきたし、今も思っています。確かに目に見えて、耳で聞こえて、手に触れるものがある世界は実感があります。その世界こそが現実の世界であると信じて疑わない思いが、非常に強いのです。そして、その中で幸せになろう、喜びを見出そうと、それぞれが「人生」と呼ばれる時間の中で一生懸命生きています。しかし、私は、その思い、その考えが根本的に間違っているということを、約 20 年かけてセミナーに集ってくる方々に伝えてまいりました。

（『意識の流れ』より）

I have been conducting seminars for about twenty years, mostly in Japan. When I reached a certain age, I realized in my heart that I was born to do this.

Through the practice of reflecting my heart, I strongly felt that I wanted to share what I realized through my heart and that it was my joy to do so. However, this was not something to commit to half-heartedly, and so I sincerely hoped from my heart to put all of my energy into showing others what I had found in my heart.

My thoughts actualized in the form of seminars.

I have lived feeling only joy to communicate my message to people, and this will not change in the future.

I have put one hundred percent of myself into those seminars. I never had the desire to achieve wealth or fame, nor to save people who came to the seminars. I just started each seminar with joy and closed each seminar with joy.

People who have attended my seminars understand the principles through my lectures and printed work. Yet, even they have had difficulty in fully understanding what I had been trying to communicate. Most tried to comprehend the meaning with their brain, yet it's something that exists far beyond that.

I realize now that it was difficult for them to understand that the truth can only be understood with one's heart. As humans we believe that we exist in the physical world that we experience through our five senses—sight, sound, smell, touch, and taste. Indeed, a world that consists of things we can see, hear, and touch is tangible. We have a strong tendency to believe that such a world is the real world without question. And in that world, each person lives through a time that is their so-called "life," trying hard to achieve happiness and joy. Throughout my twenty years of conducting seminars, I have told people that such thoughts and ideas are fundamentally wrong.

("The Flow of Consiousness")

「意識の流れ」からのスタート！

この本『Taike Tomekichi』の編集中、鹿児島の読者の方から『意識の流れ』を図書館で見つけたと、その読まれた感想が弊社へ送られてきました。

少し長くなりますが、この方が『意識の流れ』と出会われた衝撃を、まずは紹介させていただきます。

送られてきた読者からの感想

この日は忘れもしない……。

私は、もう 56 歳になっていた。

年が明けて夫の休みがようやく取れたので毎年行っている近所の神社へ初詣に出かけた。その頃には、横着にも自分なりの持論というか哲学のようなものができていて、今思うと、自分で自分の精神状態を保とう、守ろうとしていたのではないかと思っている。

お賽銭を入れ柏手を打つ。頭を下げる。何も願いごとはしない。

「世界が平和だったらいい……」、そんなことをチラッと思うくらい。

夫は毎年購入している交通安全のお守りを買おうと色とりどりに並んだお守り売り場の前へ進む。

私は「いらないんじゃない⁉」

すると、たまたまなのか、その夫の気に入っているスタイリッシュなお守りがなかった。

「ほらね！ だから、もういいんじゃない⁉」と言うと、主人は「ん……ん……まぁね！」と半分、残念そうに言った。

駐車場へ戻り、車に乗り込んで、前年度に借りていた図書を返却するため図書館へ向かう。

車を運転しながら、私が「何かさ、なくてよかったんじゃない？ だってお守りがあるからって事故しないわけではないし……実際、大破した車の窓ガラスにはお守りがぶら下がっていたり、後ろにステッカー貼ってあったりじゃん‼ そんなのお願いしたりするほうがおかしくないっけ～⁉」と言うと、夫も「言ってることは確かにそうだと思う。自分も、あんまり、そこまでは思っとらんたいね」と……11 歳年下の夫は、半分納得させられたのか（笑）そんな話をしながら図書館に着いた。

「今日は返却するだけだから、すぐ返ってくるから車の中に居ていいよ！」と声をかける。夫は「わかった」と、スマートフォンを手に取った。

係りの方に返却分の本を差し出し、借りるつもりはないけど……と思いながらも、ちょっと見るだけと、足はやはり図書館の一番奥にある哲学のところへ向いてしまう。

今まで、これだけ哲学のところにある本を読みあさっても何も出てこない。ならば……歴史上の哲学者の本を読むしかないのか⁉ と、図書館で一番奥で、一番高いところにある、ソクラテス、プラトン、デカルト等の名前を、「見るだけで頭が痛くなりそうだな！」と思いながら脚立（きゃたつ）を探そうと目線を下のほうへおろしたとき、ふと「意識○○○」という文字が目に入った。

ふ〜〜ん！ ここにも「意識……」って本があるんだと、何気なく手にとってパラパラとめくる。

んっ！ 字が大きくて読みやすい。借りるつもりはなかったため老眼鏡（ろうがんきょう）を持ってこなかったけど読める。助かるー！ と思いながら最初にある見出しのところに目が止まった。

「あなたは今までに、この世のどこかに真実というものがあるのではないか……」から始まった文に、

「まさに、そう、これだ！ 本当に探して探して、私自身が心の奥底から望んできたのは、このことだった。」

何か震（ふる）えるようなジーンとくるものが心の中に響いた。

やっと出会えた！ 目頭（めがしら）が熱くなった。

（中略）

どれぐらい私は突っ立っていたのだろうか…… はっ！ と我に返った。

『意識の流れ』と、その横にあった『続意識の流れ』という本と、2冊の本を借りて自動ドアを出るときに、あっ！ 夫を車に待たせたままだったことを思い出し足早に駐車場へ。

車へ戻ると、夫は、「あれ？ 遅かったね！」と。

私は「あっ、ごめんごめん、でもね見つけた！ 本当に探してた本、出会いたかった本に出会えた。良かった〜、良かった〜うれしい。も、もうね、何て言うかな？たまらんね！」

夫は「ふ〜〜ん」と言っただけで、帰りの車の中も私だけが変な言い回しで何か言ってたように思う。

家に帰ると、いろいろとすることもあり、夜が来るのが待ち遠しい。

やがて夕方になり、そして夕食も済ませ、早めに布団へ入る。

でも文章は難しい、なかなか理解しがたい文章が並んでいる。

「それって、つまりどういうこと⁉」と、何度も何度も同じところを行っては戻りを繰（く）り返すため、先へはなかなか進まない。

私の中は、スーッと何かが吸い込まれていくのに約一週間近くかかった。

その一週間近くの1月11日の夜。本を読みだして6日目。

いつもの通り、読みかけの途中から目を通していくと、なぜか涙がポロポロと流れて文字が見えづらくなった。

なぜかわからない、だから本を横に置いた。そしたら、突然、私が泣き出した。

何か悲しいわけでも、夫とケンカしたわけでもない。しかも、まるで小さな子供が泣くようにワンワン泣きじゃくり、夫が隣の布団から、「なっ！ 何かしたっけ？」と言ったのは聞えた。

それでも泣くのは止まらない、何で泣いているのかもわからなかった。ただ、そのまま受け入れて、そのまま泣いていた。

そして、それは、いつまで続いたのかよく覚えていない。

気が付いた時には朝になっていた。

あれだけ大泣きしたにもかかわらず不思議と目が腫れていない。目覚めもスッキリしている。

普通に朝食をつくり、いつも通りの私に夫は何も言わなかった。

夫を送り出した後も、ふと昨夜のあれは、一体、何だったんだろう⁉

何であんな風になったんだろう⁉ と思い出したりだったが、それはそれ！ っと、頭の隅っこに置いとくことにした。

夜になると、本も毎日読んだ。

初めは、あんなに「つまり、どういうこと⁉」を繰り返していたが、頭で考えることをやめてみた。

心で感じればいいんだ。そう思うと、すらすら読めて、心地よい風、優しい優しいぬくもりが全体に広がっていく感じ。コペルニクス的転回も、「地球が太陽の周りをまわる」って常識的に考えてあたり前！でもよ！ 昔は地球が中心で、その周りをまわってたと考えられていた。

これを肉と、これを意識とするなら……

左手はグー！ 右手は人差し指を下に向け何度もまわし、今度は反対に右手をグーにして……と、まるで保育園のお遊戯さながら（笑）そして、いつか、あっ、あっ、あ……っ、何か何かきそう……そう思ったが、いつの間にかまた眠ってしまっていた。

次の日、目覚めると、何かよくわからないが、何か、ふーーっと、あっ！ わかったかも⁉ わかった気がすると思った。

そんな簡単なことではないんだと思うが、何だか、何かがひっくり返った。

　今までは、この見える世界を本物の世界。私たちが生きていく世界だと、それがあたり前だと思っていた。実際、その中で生活が存在しているのだから、あたり前だと誰も信じて疑うことはしないだろう。

　でも、本物は、心で感じる意識の私だった。これこそが本物だった。あー、だから、ずっと間違ってきたんだね。

　これがしっかりと揺るぎない中心にある存在だったんだ。

　すると自分の中にずっとあったモヤモヤが、まるでシナプスの中に溶剤を入れたかのように次々に溶けていった。

　自分で自分の心を見る。

　こんなにも、すぐ近くにあったなんて……「意識の転回」として、心の針をしっかり向けることができれば自ずと広がっていくのですね。

　あぁ、今やっと平等なもの見つけたという感じです。

「たくさんのありがとうの気持ち？」

『意識の流れ』という一冊の本に出会わせていただき、本当にありがとう、ありがとうという気持ちでいっぱいです。

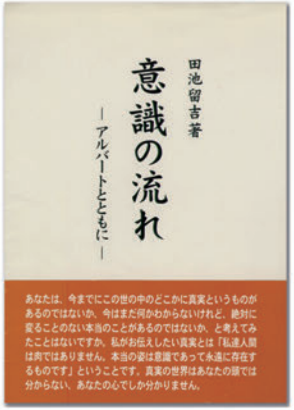
　田池留吉という方の存在があって、

　塩川香世さんという真実に目覚め、心でわかった方がいらして、私は、肉の田池留吉氏との出会いはなかったが、桐生さんはじめＵＴＡブックの方々の図書館への寄贈や労力があり、私も、この本に出会わせていただき「感謝」と一言で済ませられない。私の一生の幸せ、最高の幸せ、そして本当の喜びに出会いました。

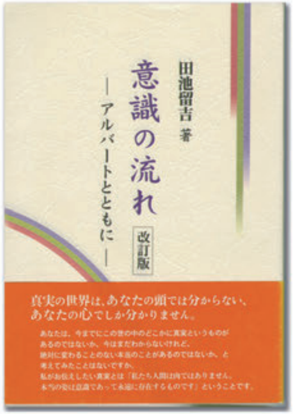
　これからも、ひたむきに、まっすぐ一つ一つ丁寧に自分の心を見ていく、これを忘れることなく日々を送って、この肉がいつか終わりを迎えるときは、すべてに感謝し、この限りない幸せを心に、この肉を置いていくことができれば、こんな喜びあふれる人生はないだろうと思います。

（岩井敬子さんからの手紙）

『意識の流れ』――ってどんな本？



2004 年 12 月 10 日 初版



2005 年 12 月 10 日 改訂版

2008 年 12 月 10 日 改訂版

2012 年 9 月 10 日増補改訂版

田池先生 ―― 学校の校長先生だった関係で、この呼び方が愛称（あいしょう）のようになって定着してしまいました。そんな田池先生が 20 年かかってたどり着いた「意識の世界」の真実、それが「意識の流れ」です。でも、このことに触れる前に、まずは田池先生の書かれた「直感」という一文をご覧ください。

直　感

「初めに意識ありき。意識は愛、愛はエネルギー、波動、パワー、エネルギーは仕事をする。愛は無限、永遠に存在する。」はどうしてなのか。

私が２０歳前後の頃、マックス・プランク著『自然科学と宗教』を使ってドイツ語の授業を受けた。「宗教ははじめに神が、科学は後に神が……」と述べてあったと思います。また、当時、若い者の間で、「宗教と科学は両立するか」をテーマにして盛んに討論が行われていました。しかし、私は、どちらかというと宗教的な生き方をしていました。聖書、般若心経などがいつも手元にありました。

４7歳が転機になりました。自分の思いが声となって響いてきました。

「私が説いてきた愛は偽物（にせもの）だ」と。

全く白紙。そして、母親の反省、瞑想となっていきました。その時から、何か自分が知りたいことが、真実が、分かってくると思うようになってきました。そして、「直感が」となってきました。後は、耳を傾（かたむ）けてくれる人がいれば話してきました。そして、仮説、実験、実証、確信と進んでいきました。

現在は、どうしても意識の転回と愛の覚醒（かくせい）をと心から思っています。死ぬまで、死んでからも正しい瞑想と愛のエネルギーの確認と愛の覚醒を伝えていこうと思っています。

意識の流れを確信してください。次元移行を共に果たしていきましょう。

「あなたは意識、愛である」ことを確信する道をひたすらに進んでいってください。

文中、「耳を傾けてくれる人がいれば話してきました」と、田池先生が言われるように、「神理をまなぶ会」「反省研修会」「エルランティの光セミナー」と、20年以上を私たちに語りかけられ、ともに学び、その行き着いた到達点が『意識の流れ』という出版物になりました。

ところで序章のトビラに掲げた８つの項目ですが、これは田池先生がある方に宛てた手紙の一部です。先生からお預かりしたハードディスクに入っていたものですが、短い文章の中に田池先生の思いがあふれているように感じ、この本の冒頭に使わせていただきました。まずは、この８項目をもう一度見直してみましょう。

1．人間はなぜ生まれてくるのでしょうか。

2．地球人類はどうして数え切れないほど転生を繰り返してきたのでしょうか。

3．現在の人類は、まったく生き方が間違っています。人間は意識、エネルギーであり永遠に存在します。意識の転回が絶対重要です。(コペルニクス的転回)

4．すべては愛です。やがてその事実が現象化してくるでしょう。天変地異、愛に目覚める絶好のチャンス。

5．私は、250年後、アメリカの地に転生します。そして、皆さんと共に次元移行を果たしていきます。

6．間もなく肉体を置いていきますが、死後も仕事をしていきます。ただただ喜びです。幸せです。

7．あなたは愛です。信じていきましょう。私はあなた、あなたは私、一つ。初めから幸せ、喜び、温もり、大きい大きい存在です。もっともっと心を大きくして生きていってください。

8．私よりも、もっともっと長く生きて、真実を知ってください。喜んで、すべてにありがとうと思いを発信しながら今世を閉じていきませんか。

『意識の流れ』を読まれた方ならわかっていただけると思いますが、これら箇条書きは、そのまま『意識の流れ』を読む上でのポイントになっています。逆に言えば、これら８つの項目を念頭に置きながら『意識の流れ』を、今一度読み返してみると、これまで見えなかったものが見えてくるのではないでしょうか。

そして、この『Taike Tomekichi』という本も、これらの８つの項目を念頭に置きながら、田池先生の足取りと、皆さん方の思いの変遷をたどっていこうとしています。

１巻、２巻は、『意識の流れ』が完成するまでの道筋。３巻では、『意識の流れ』発行後、田池先生がお亡くなりになるまでの道筋をたどっていく予定です。

※ 資料 :『意識の流れ』は、大きく初版、改訂版、増補改訂版の 3 種類が発行されています。途中、出版社が「かんぽう」から「UTA ブック」へと変わったため、体裁だけが変わったりも致しましたが、改訂なり、増補版と言えるのは、この 3 種類です。

　そして、この 3 種類の発行ごとに、皆様の協力で図書館寄贈を行いました。そして 2020 年 10 月末現在で、下記の表のように、全国で 538 館の図書館に『意識の流れ』が蔵書されております。

　『意識の流れ』が発行された時、田池先生は、自分が亡くなった後、学びのことで分からないことや迷ったときは、この『意識の流れ』に寄りなさいとおっしゃいました。その時、田池先生と交わした一つの約束があります。

　どんな時代、どんな状況になっても、この本『意識の流れ』を必要とする人のために残していくということ。その一環として、国内外への図書館への寄贈をＵＴＡブックの大きな事業としております。このためＵＴＡブックをはじめとする図書館寄贈用の出版物は、どれも『意識の流れ』に目を向けてもらえるような本造りを目指しております。

「意識の流れ」　都道府県別図書館蔵書数

都道府県	初版	改訂版	増補改訂版	合計
北海道	13	1	22	36
青森県	4	1	2	7
岩手県	8	0	9	17
宮城県	7	0	0	7
秋田県	3	0	6	9
山形県	4	0	6	10
福島県	2	1	6	9
茨城県	6	2	5	13
栃木県	9	0	6	15
群馬県	4	0	2	6
埼玉県	1	0	7	8
千葉県	4	1	8	13
東京都	3	3	8	14
神奈川県	2	0	3	5
新潟県	5	0	8	13
富山県	3	0	2	5
石川県	4	0	2	6
福井県	2	0	2	4
山梨県	3	1	3	7
長野県	6	0	4	10
岐阜県	2	2	5	9
静岡県	5	0	2	7
愛知県	15	2	17	34
三重県	6	2	4	12
滋賀県	3	1	2	6
京都府	4	4	8	16
大阪府	17	5	7	29
兵庫県	5	1	4	10
奈良県	2	2	2	6
和歌山県	5	1	2	8
鳥取県	1	0	0	1
島根県	6	0	3	9
岡山県	9	1	3	13
広島県	14	1	3	18
山口県	7	0	6	13
徳島県	1	0	1	2
香川県	1	0	1	2
愛媛県	7	1	3	11
高知県	1	2	1	4
福岡県	13	1	7	21
佐賀県	1	0	1	2
長崎県	6	4	5	15
熊本県	11	1	4	16
大分県	3	0	6	9
宮崎県	4	0	2	6
鹿児島県	8	3	6	17
沖縄県	14	1	13	28
蔵書図書館合計				538

1985 年 8 月 17 日～ 8 月 18 日　三重県湯の山温泉で初の一泊研修会が開かれる。

第1章　発端

1926 年（大正 15 年）田池留吉氏、大阪市港区に生まれる
1926 年 5 月（大正 15 年）北海道で十勝岳大噴火、死者 144 名
1932 年 4 月（昭和 6 年）大阪市立吾妻尋常小学校入学
1938 年 4 月（昭和 12 年）旧制大阪府立市岡中学校入学
1942 年 8 月（昭和 17 年）市岡中学校生の宿泊修練道場完成
1943 年 3 月（昭和 18 年）旧制大阪府立市岡中学校卒業
1944 年 12 月（昭和 19 年）東海地方で大地震と津波
　　死者 998 人、負傷 3059 人、不明 253 人。
1945 年 1 月（昭和 20 年）三河地震
　　死者 1961 人、負傷 896 人。戦争末期で報道されず。
1945 年 3 月（昭和 20 年）陸軍予科士官学校卒業
1945 年 4 月（昭和 20 年）陸軍航空士官学校入学
1945 年 8 月 15 日（昭和 20 年）終戦
　　旧制大阪高等学校（現大阪大学）卒業
　　大阪市立西中学校で補欠要員として数学・英語を教える
　　大阪市立高津中学校教員
　　大阪市立夕陽丘中学校教員
1946 年 12 月 21 日（昭和 21 年）南海大地震
　　死者 1330 人、負傷者 3842 人、不明 113 人。

1948 年 6 月 28 日（昭和 23 年）福井大地震
　　死者 3769 人、負傷 22203 人。大火が発生し 3851 戸が焼失。
1951 年 10 月 14 日（昭和 26 年）ルース台風
　　死者行方不明 1200 人。この年、赤痢流行で死者 14 万人
1952 年 3 月 4 日（昭和 27 年）十勝沖地震
　　死者 28 人、負傷者 287 ～ 621 人、不明者5人。
1962 年 4 月（昭和 37 年）大阪府立市岡高等学校教員
1974 年 4 月（昭和 49 年）大阪府立西成高等学校教員
1977 年 4 月（昭和 52 年）大阪府立登美丘高等学校（教頭）
1984 年 7 月（昭和 59 年）ロサンゼルス・オリンピック開催
1985 年 1 月 13 日（昭和 60 年）第 1 回神理をまなぶ会
1985 年 3 月 3 日（昭和 60 年）第 2 回神理をまなぶ会
1985 年 8 月 12 日（昭和 60 年）御巣鷹山　日本航空 123 便墜落事故
　　死亡者数は 520 人、生存者は 4 人
1985 年 8 月 17 日～18 日(昭和 60 年)湯の山温泉で第1回宿泊セミナー
1986 年 3 月（昭和 61 年）大阪府立東百舌高等学校（校長）
　　定年の1年前に依願退職
1986 年4月 26 日（昭和 61 年）チェルノブイリ原発事故
1986 年5月（昭和 61 年）反省研修会がスタートする。

2007年6月に『時を超えて伝えたいこと』が発行されました。この本の取材のため、田池先生に、何度も何度も、奈良の拙宅へ来てただいたことがあります。本来ならこちらからお伺いすべきところを、先生の希望もあってお越しいただくこととなり、ご自身の生い立ちや、学びの始まった経緯について詳しくお話しくださいました。こちらも好奇心に任せ、根掘り葉掘りお尋ねし、田池先生も、幾度も幾度も懲りずに話してくださいました。そのお話をもとにして、田池先生の生い立ちから、学びが始まるまでの流れを、少し長くなりますが、ここに紹介しておきます。

田池先生の生い立ち

田池先生は、大正15(1926)年、大阪市港区に生まれました。この年12月25日、大正天皇が崩御し昭和元年となりました。当時言われていた皇室の始まりから数える習わしでは、皇紀2586年になるといいます。この年、韓国では6月10日に日本からの独立を目指す運動が大弾圧を受ける、いわゆる万歳事件が起こりました。日本では1月15日、京都学連事件で、はじめて治安維持法が適用されました。5月24日には北海道で十勝岳が大噴火し、死者144名を出しました。

こんな時代環境の中で、田池先生は成長していきましたが、小さな頃から「本当のことを知りたい」という欲求が強く、そのことに対し一途でもあり、ご両親は、田池先生のことを「どへんくつ」(頑固者)と呼んでいたと言います。

お父さんは高松の出身ですが、大阪へ出てきて「大津組」のもとで「田池組」を興し、荷役業に従事していました。いわゆる任侠の人でありました。ただ子供の教育にはあまり熱心ではなかったようです。自分自身は字が読めなかったため、小学校低学年の田池先生に新聞を読んでもらっていました。好きな野球の試合について知りたかったのだといいますが、もちろん小学校低学年で新聞が全部読める訳ではありません。分かる文字を拾いながら推測して読んでいくのです。しかし、お父さんにしてみれば鼻高々、息子は小学校の低学年にもかかわらず字が読める。字が読めるのに勉強などする必要はないと考えておられたようです。

このため、田池先生は、学業は良くできたのですが、教科書一つ買ってもらうにしても、入学時に買い与えられるものだけで、遅れて入荷した教科書などは「必要なものは、みんな最初に買ってある」と追加購入してもらうのも大変な状態だったといいます。

大阪市立吾妻尋常小学校を卒業した田池先生は、大阪府立市岡中学校へと進学しました。当初、その人の資質を知る恩師は、大阪きっての名門校である北野中学への進学を助言していましたが、それを聞いたお父さん、学校へ出かけていき「うちの子は電車で通うような学校へは行かせない」と、旧制市岡中学校への進学が決まったといいます。電車賃を払って通わせるような余裕はなく、それより野球の強い市岡へ行かせたいというのが、お父さんの本音だったようです。

陸軍士官学校へ

そのお父さんが、中学四年の時に亡くなりました。食道ガンを患い、その手術後、肺炎を病んでの最期でした。亡くなる前は、よく咳き込んでいたといいます。学年主任の先生や担任の先生は、何とかその人に勉学を続けさせたいと案じていたのでしょう。「自分が学費を出してやるから進学しろ」とまで言ってくれました。

また、ある企業が、学費を負担するので、市岡中学校からも一名を選ぶよう言ってきており、それに選ぼうともしたようです。

ところが田池先生、「人に金を出してもらってまで勉強したくない」と両案ともに断ってしまいました。一計を案じた学年主任の先生は、「海軍兵学校」「陸軍予科士官学校」「高等商船学校」へ願書を提出したうえで、受験に行くよう、田池先生に指示したといいます。ここなら授業料もいらず、学業が続けられるとの配慮からでした。

しかし海軍兵学校の入試では、選考試験の最終段階で、「おまえの父親は国賊である」と言われたそうです。お父さんが任侠に生きた人だからでしょうか。その話をした時、お母さんが「悪かった」という顔をされたのが忘れられないといいます。海軍に比べ、陸軍ではこのようなことがなく、あくまで成績重視でした。結果、陸軍予科士官学校と商船学校の二つに合格しました。どちらにするか迷ったといいますが、田池先生が言うには、

田池先生　幼少のころ、お父さんと

陸軍予科士官学校入校式

「兄貴が海軍に行っていたので陸軍にすることにした」ということで、このようにして一人のどへんくつな陸軍将校生徒が誕生するに至りました。

こうして陸士60期として陸軍予科士官学校を卒業した田池先生は、埼玉県入間郡にある陸軍航空士官学校に配属されました。ちなみに陸軍航空士官学校は60期をもって敗戦により終了しているわけですから、最後の入校生となったわけです。

「陸軍の中枢にありながら空襲の驚異に曝(さら)されることが少なかった」と、田池先生は言います。日本本土を空襲するようになったアメリカ軍は、東京を空襲する際、まず富士山を目標に飛行し、富士山上空で方向を予科士官学校へと転換します。さらに予科士官学校上空で、再び東京市街へと方向転換することになります。つまり予科士官学校は、アメリカ空軍が東京を空襲する際の通り道であり目印になっていたわけです。

こんなエピソードを聞かせてもらいました。朝霞(あさか)の陸予士時代、米軍機が飛来すると蛸壺(たこつぼ)に避難するのですが、実際に爆弾を落とされることはなかったそうです。それが航空士官学校に配属され、入間へ移るなり、その一週間後、自分たちが避難に使っていた朝霞の蛸壺に1トン爆弾が落とされたというのです。

僅差(きんさ)のズレで空襲から逃(のが)れ、命拾いをしたといいます。

また訓練中に心臓の不調から病棟に入院させられるという事態が起こりました。軍医は「ゆっくりしていけ」といいますが、出席日数が足りなくなると卒業ができなくなります。あわてて、「回復したので退院したい」と言っても、「貴様は優柔不断である」と認められない。おそらく戦局を考慮しての軍医の配慮だったのでしょうが、何より卒業できない、卒業が遅れるということが耐え難く、何度も「回復した」旨を訴えたということです。

事情を察した軍医がやっと退院を認めてくれました。ただし練兵休ということで

訓練には出ず通院することになりました。
　そんな折り、米軍機が襲ってきたのです。練兵休で寝ている兵舎で、米軍機が機銃掃射しながら真っすぐに自分に向かってくるのが感じられました。その時、なぜか逃げようという気が起こらず、死を覚悟し、そのまま寝台に寝ていたといいます。
　やがて米軍機が、自分の真上を通り過ぎていきました。後で分かったことですが、米軍機が狙っていたのは、兵舎の向こうに作られた爆撃機の実物大模型だったらしいのです。
「しかし、あの時、間違いなく死を覚悟した」と、つぶやかれるように言われました。
　もう一つ不思議なのは、航空士官学校の生徒でありながら飛行機に乗ることがなかったということだそうです。
　普通、航空士官学校の生徒は、在校期間中に約150時間の飛行時間を消化します。それが戦局の悪化に伴（ともな）い、関東地区での飛行訓練はできなくなりました。昭和20年に入り、第59期生からは満州に移り操縦訓練に当たることになりましたが、この年８月、ソ連軍の侵攻で満州での演習計画も潰れるに至ったのです。

教師への道

　敗戦ですべてが変わりました。皇国日本の現人神（あらひとがみ）であった天皇が、「人間宣言」を行い、神から人間になったのです。その皇国日本を救うため、「お国のため、陛下のため」と一命をなげうって戦ったのは何のためだったのでしょう。「鬼畜米英」と叫んだその口が、今や欧米文化をもてはやす始末。価値観が180度転換してしまったのです。ただ、田池先生が、終戦間際（まぎわ）、特攻として死ぬべく、自分と真向かいになり「死生観」を培（つちか）ったのは紛（まぎ）れもない事実でした。
　しかし、田池先生が特攻機に乗るより、終戦になるのが早かったという次第。
　田池先生は、生きて復員しました。そして家庭教師をしたり、亜鉛工場でアルバイトをしたりしながら、旧制大阪高等

田池先生　陸軍航空士官学校時代

田池先生　大阪市立西中学校３年Ｅ組担任時代

学校（現大阪大学）を卒業したのです。

理数系を専攻した田池先生は、卒業後は、教師を志しました。曰く、「生物は解剖があるから嫌い」「理科は実験があるから危険」。そこで目指したのが数学教師だったといいます。最初は、大阪市立西中学で補欠要員として「数学」や「英語」を教えたりもしていましたが、職業軍人だった教師が、軍属の公職追放で辞めることとなり、二年Ｃ組の担任がいなくなりました。そのクラスを引き継いだのが、田池先生でした。

その後、３年Ｅ組のクラスを受け持つようになりましたが、そのクラスの黒板の上には、いつも一枚の紙が貼られてありました。そこには「自然に従い　真実を愛し純粋な魂の命ずるままに　自己及び自己以外の人々への愛を尽くさん」という言葉が掲げられてあったといいます。

田池先生は、「あの頃は何も分かっていなかった」「言葉はきれいだが、中身は空っぽだった」と、その頃を恥じるように話されました。しかし、３年Ｅ組は和気あいあいとしていました。ある教え子の方は「そら、高度な授業でしたで」と当時を懐かしむように話してくれました。「できない子も、率先して数学の問題のガリ刷りをしてましたなあ」とも言います。

田池先生が宿直当番の夜は、生徒たちが毛布を宿直室へ持ち込んで、分からないところを教えてもらったりして一緒に泊まり込みました。その時、みんなで安いキャベツを食べたりしたので「カエル学級」という名前が付いたといいます。田池先生は、金のない学生時代、新世界の串カツ屋でよくキャベツを食べました。キャベツはいくら食べてもタダなので、串カツは二本と決め、後は、ひたすらキャベツを食べたというのです。串カツ屋の親父も、良くしたもので、見て見ぬ振りをしてくれたそうです。

その頃の思い出からか、田池先生は、宿直室へ毛布を持って押し掛けた子供らに、「キャベツは、カエルの食い物や」と、

よくキャベツを振る舞いました。それで「カエル学級」というらしいのですが、なぜ、キャベツがカエルの食い物なのかがよく分かりません。一度、訊いてみたいと思いながら、そのまま忘れて今に至っており、もう訊くことはできなくなってしまいました。

お母さんの反省

田池先生が子供の頃から思っていた疑問、本当のことを知りたいとの切実な思いは、戦争中、特攻として死ぬかもしれないという状況の中で、更に拍車がかけられました。

戦争は終りましたが、抱えている疑問は解決されないまま残ったのです。

「人はなぜ生まれてくるのか?」「自分とはいったい何者なのか?」

田池先生は思いました。

（自分は数学教師だ。自分が子供に問題を出す時は、必ずその設問が解けるようヒントを与えている。だから、自分が抱えている問題だって、必ず、誰かしらがヒントを与えてくれているはずだ）と……。

しかし、いくら自分の周りを見渡しても、そんなヒントを暗示してくれるような「人」はいそうもなかったといいます。

それが昭和 49 年のことです。「おまえの説いてきた愛は偽物だ」と、自分の中から響いてくる思いがあったといいます。人から言われたことではなく、自分の胸奥から響いてくるのだから認めざるを得ませんでした。

更に、その翌年のこと。当時は、西成高校で教鞭をとっていたのですが、問題が山積みしており疲労困憊して家路に着くということが多くありました。我が家にたどり着くと、疲れて何をする気もなくボーっとテレビを観ていることもあります。当時、テレビドラマで「銭形平次」という番組がありましたが、いつも同じパターンで安心して観ていられる。そんな理由から、田池先生も、毎回、観るともなく、その番組を観るようになっていました。

ところが番組の終わり頃になると、ドラ

田池先生のお母さん　田池このゑさん

田池先生と奥さんの陽子さん

マの筋とは関係なく、なぜか母親のことが思い出され、目頭に涙が滲(にじ)むようになったといいます。それが何度も続くのです。

まさかと思いました。

お母さんは何の取り柄(え)もない人でした。文字も知らず、教養もない。

活動写真（映画）が好きで、赤ん坊であった田池先生を、「危ないから」と、柱に長い紐(ひも)をつけて括(くく)り付け映画を観にいくような人でした。

だからと言って、お母さんを見下す気持ちはありません。こんな両親のもとに生まれて不幸せだとか、惨(みじ)めだったとか、そんな思いもありません。

地区の町会長などは、長い間、田池先生とこのゑさん（お母さんの名前）が親子だということが分からずにいたといいます。陸軍士官学校へ行くような秀才と、信号を無視して小走りに道を渡っていくこのゑさんが、どうしても結びつかなかったのだというのです。

そんなお母さんが、自分の長年の疑問にヒントを与えてくれている？!

そこで、田池先生は、お母さんの反省をしてみたといいます。部屋に閉じこもり、母親が自分にしてくれたこと、逆に自分が母親にどんな思いを使ったのかを大学ノートに書き始めました。

涙が止まらなくなったといいます。特別に慈悲(じひ)深いとか、何か特別なことがある訳でもなく、母親が、言葉ではなく大切なことを自分に伝えてくれていたのに思い至ったというのです。申し訳ない思いと、うれしい思いで、畳が、涙でグショグショになったといいます。

そんな折り、学校の春休みに滋賀県の草津高校へ視察旅行に行くことになりました。昭和51年3月のことです。視察旅行を終え、田池先生は、他の先生と別れ山中温泉へと足を延ばしました。旅行の目的は、母親の反省をすることでした。そして「北陸荘」に宿を取り、思うまま、感じるままに母親への思いを書き始めたのです。「北陸荘」から帰ってからも、春休み中、

母親の反省を続け、書き出した大学ノートは7冊にもなったといいます。

もう間違いはありませんでした。お母さんこそ、大きなヒントを与えてくれている人でした。母親の思いが分からなければ、本当のことなど分かるはずがない。本当のことが分かるために、人間は肉体を持って生まれてくるのだということ、そのためにお母さんとなる人に産んでもらってきたのだということ、そのことが確信となっていったと言われます。

自分は何者か、何のために生まれてくるのか……その答えはすべて自分の中にある。自分を見ていけばいい、自分の中を探っていけばいい。

しかし、自分を見るというのはどういうことでしょうか。瞑想をすれば、座禅を組めば、教典を読めば、それで、自分が見えるとでもいうのでしょうか。そんな訳はありません。

自分に一番近い存在は、お母さんだ。お母さんがいない人は存在しない。その母親に、自分がどんな思いを出してきたか。またお母さんは、あなたにどんなことをしてくれたのか、どんなことをしてくれなかったのか、思い出せる限りを書いていく。

肉体はその時代に戻れなくとも、思いは、いつの時代へでも自由に向けることができる。そうしていく中で、今まで見過ごしてきた汚い自分が見えてくるかもしれない。見たくない自分が顔を出してくるかもしれない。許せない自分が現れてくるかもしれない。そんな自分を許し受け入れていくことから、少しずつ、自分の本質に近づいていけるのでは……。

人間は生まれ、その環境の中で生きていくうちに、肉体を自分と思い、数々の心癖や汚れを付けてくる。自分を見ることで、その心の闇に気付き、それを排除するのではなく受け入れ認めていく。

その汚れは、今だけのものではなく、長い転生の中で培(つちか)われてきた闇や心癖もある。それに気付いていくこと、それこそが肉体を持つ目的ではないだろうか。そ

教頭職時代の田池先生

の自分と対面するために母親という存在がある。そのためにこそ、母親は自分を産んでくれたのではないだろうか。

それらのことが、「母親の反省」を通して確信になっていったといいます。

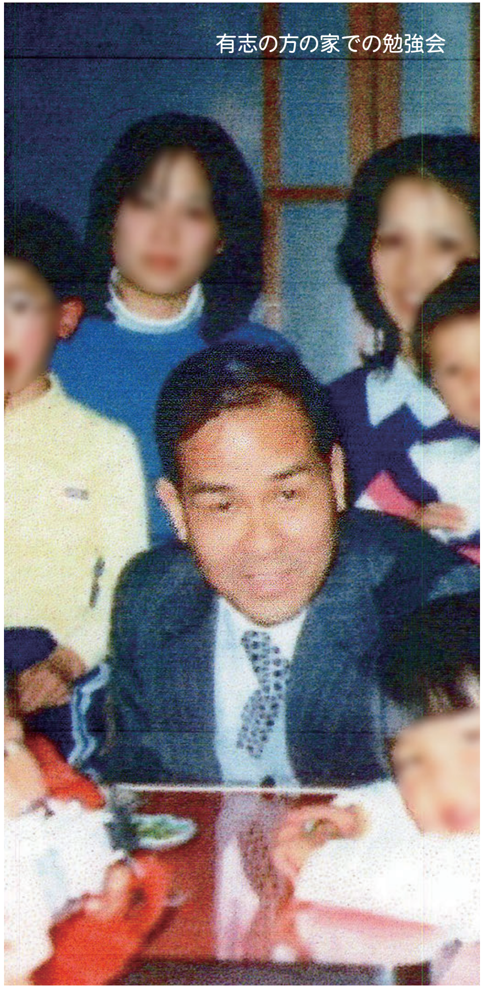
心を見る勉強会へ

以来、多くの人が、田池先生の話を聞くようになっていきました。学校の休みの日に、喫茶店で、また有志の家で、いろんな形で、いろんな機会に、田池先生は、自分の気付いたことを無償で多くの人に伝えようとしました。

耳を傾けようとしたのは、子供の問題を抱える主婦、仕事のことで悩むサラリーマンや経営者、人の身体を治す治療師、心の問題を扱う心理療法士、インチキ宗教団体にだまされた人、超能力を求め心をゆがめてしまった人……そして、本当のことを知りたいと思うたくさんの人たち。

とても、学校の休みを利用してできる範囲のことではなくなってきました。しかも校長職として学校に勤めている限り、思うように休暇をとることはできません。

田池先生は、定年を翌年に控えて、これからは命がけで本当のことを伝えていこう。本当のことを知りたいと思う人の手助けをしていこうと、校長職を依願退職したのです。やがて、心を見る勉強会がスタートしました。


有志の方の家での勉強会

人間は霊です。人間の主体は霊です。
肉体は従です。霊が肉体を支配するのです。
肉体とは乗り船です。意識は船頭です。
そして船頭が舟を操つり目的の地へ辿り着くのです。

田池先生が書き残した戦時下の市岡生

（市岡高等学校 70 年記念誌より転載）

白線３本は市岡生の憧れであり、誇りであった。

服装は胸のポケットのところに名札をつけた。これは校外にあってはポケット内に入れておくが、校門を入ると同時にこれを出して胸にぶら下げることに定められていた。また登下校にはゲートルを着用し、水筒を肩にかけ、鞄（かばん）と水筒とをバンドでしめていた。そして今週は鞄は右肩来週は左肩という風に指示があり、全校生徒がいつも同じ方向に鞄と水筒をかけていた。

徒歩通学区域が定められていて、例えば東は本田町１丁目で乗物から下車して学校まで歩いた、西は朝潮橋であった。この徒歩区間を２列側面縦隊で行進した。その際先生に出あった時は先頭の右側の者が「歩調を取れ」「頭右」と号令をかけて敬礼していた。先生に対する敬礼は厳しく、いずれの場所でも、先生にお会いしたときは、まず直立不動の姿勢をとり、挙手の敬礼をした。上級生に対しても礼をするようになっていた。正門を入るときは、校舎の中央部に向かって挙手の敬礼をした。これをおろそかにして、上級生の週番からどなられている光景がよく見られた。朝礼は毎日あった。このとき服装検査があり、帽子や鞄の型や、ゲートルの巻き方、水筒の水の分量、鞄の中味等が調べられた。また朝礼体操があり、その後上半身裸で厳寒の運動場を走ったこともあった。

授業のとき、先生が来られるまで教室で黙想していることになっていた。定期考査等の後必ず成績順に発表された。また出席番号は前学年の成績の順になっていた。

昼食のとき、自席で担任の先生から諸注意を受けてから食事をはじめた。日直がカレーライスやパン等の注文をまとめていた。清掃は特に徹底していた。海軍式清掃訓練が実施され、甲板洗いの要領で教室廊下等の床を雑巾（ぞうきん）をもってこすった。牛乳の空瓶でこすっていたものもおった。

本校教諭　田池留吉（中 39 期）

校門前で挙手の礼

田池先生が書き残した戦時下の軍事教練

（市岡高等学校 70 年記念誌より転載）

軍事教練での射撃訓練の模様

入学してまず苦労したのがゲートルの巻き方である、結び目がズボンの横の縫目のところにこなくてはならない、教練の時間の始めに検査があり、よくやりなおしをさせられた。

つぎは徒歩行進、歩幅は 75 ｃｍ、歩兵操典に示された要領でやる、なかなかうまくやれない、上級生になると軍人勅諭を覚えねばならない。これが超長文で、このためにしごかれたものの数は数え切れない。泣いたやつもいた。そのうちに要領を得てくると、厳しい中にも柔い雰囲気さえ感じられるようになっていった。

雨天の時は講義で教官によっては面白い時間もあった。戦術の話などに興味のあるものが多かった。陸軍現役将校が1名配属されており、かなり強い権限を持っていた。

その他に３名程の教官がいて指導に当っていた。堺方面へ学校から歩いて行き、そこで敵味方に分れて野外教練を実施した。前を走っていたものが急に姿が見えなくなったかと思うと肥つぼにはまっていたりした想い出はつきない。

夜間演習もあった。耐寒訓練強行軍で四条畷へ向かった年もあったが橿原神宮へ参拝に行く年が続いた。行程は十里になんなんとしていた。

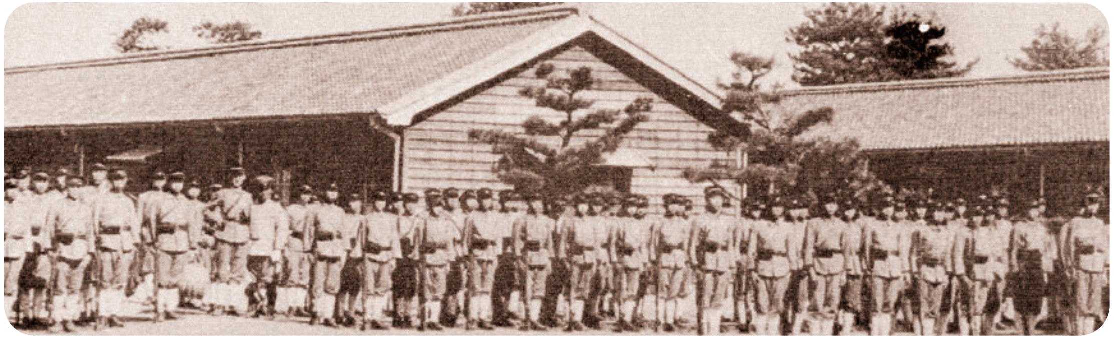
宮城前広場において天皇陛下のご親閲を仰いだこと、大阪師団長李王殿下の台臨を仰ぎ雨の中を行進した想い出等尽きない。査閲の前は全校あげて緊張した毎日が続いた。講評はいつも優秀だった。

本校教諭　田池留吉（中 39 期）

敵味方に分かれての野外教練

田池先生が書き残した信太山の生活

（市岡高等学校 70 年記念誌より転載）



府下中等学校野外連合演習　信太山営舎前に整列

養生道場での生活は3組単位で2泊3日が原則で、大体つぎのようなものであった。

第1日、朝学校を出発、市電にて阿倍野橋へ行き、阪和線を利用して和泉府中で下車しこれより徒歩約6ｋmで道場に到着する。持参の弁当を食べてから午後の日課に入る、野外演習の後入浴して楽しい夕食となる。夜は教科学習または講話があり、9時頃就寝する。

第2日、日の出前に起床して、光明池（道場の前を通る父鬼街道を約 300 m南のところにあった）まで駈足、ここで日の出を拝し爽快な気分を味って体操をする。午前は3、4時間の授業があり、午後は自習、作業または教練があった。夕食後には講堂で、自慢のかくし芸の披露（ひろう）や寸劇自作の漢詩の吟詠（ぎんえい）等をやって楽しんだ。

食事は炊事当番が出て、主食、副食の盛分け、汁の配分等を行った。用意が終れば号令によって各部屋に待機している生徒が手に手に箸を持って食堂（講堂）に行進、全員が着座すると、先生または代表者に続いて五訓を唱和してから「いただきます」といって食事を始めた。終れば炊事当番が食器を片付けて洗う、飯は1合の盛切りで少々空腹気味で辛（つら）かった。

部屋は畳の間で階段式の寝台が両側にあった。就寝の合図後も、先生方の監視の目を避けて、静かに？ 騒いだり、ほんとに静かに、色々なことを話し合った。一番楽しい一時であった、汚染混濁した空気の中の生活から逃（のが）れた道場生活は辛い反面楽しい青春もあった。

（田池留吉）

信太山道正道場について

皇紀 2600 年（昭和 15 年）記念事業として、当時の保護者会は「市岡中学校生の宿泊訓練道場を郊外に建設し、よって同校生徒の心身練成上大いに貢献せん」と決議し、昭和 15 年7月泉北郡信太山（しのだやま）付近に候補地を決め、同 17 年3月土地買収8月 27 日竣工式が行われ「信太山養正道場」とされ以後宿泊訓練の場となった。

なお、この道場は、その後昭和 36 年に売却され、創立 60 周年記念事業として建てられた新澪標（れいひょう）会館（現食堂）の建築費にあてられた。

信太山道正道場

1985 年 8 月 17 日　湯の山温泉で最初の一泊研修会

1984 年　ロサンゼルス・オリンピック

1985 年 1 月 神理をまなぶ会 第 1 回開催

1984 年（昭和 59 年）はロサンゼルス・オリンピックが開催され、体操の具志堅、柔道の山下らの活躍で大盛り上がりした一年となりましたが、明けて 1985 年（昭和 60 年）の1月 13 日、大阪は羽曳野市の一角で、田池先生が主催する「神理をまなぶ会」が産声をあげました。

これまでも、田池先生は、有志の方々のご自宅に出向き、そこに集まってきた方たちに「人生の目的は？」「人間は意識です」「人間は霊です」と話し続けてこられましたが、その延長線上でのスタートであり、ここから更に「反省研修会」へと発展していくことになります。

では、その第１回「神理をまなぶ会」での田池先生の第一声をご紹介させていただきます。

神理をまなぶ会について

今年から、「神理をまなぶ会」として皆さんと一緒に神理を、まなんでいきたいと思います。

「まなぶ」とは、平がなで書きます。会と名前は付けてありますが、私が先生でも、会長でも、また誰が会長でもありません。皆さんが会員でもありません。

一緒に神理を学ぶ集いとでも言いましょうか。従ってこの会は、会則も会費もありません。話を聞きに来て嫌だと思えば来なくてもよいし、また、それを誰が咎（とが）めることもありません。

今年は、反省、指導を重点にしていきたいと思います。生まれ変わるということが大事です。生まれ変わるということはどういうことかというと、永遠の生命を得るということです。（中略）

生まれ変わるには、まず暗い心を明るい心に変えていくことです。苦しんだり、暗くなっていることには、必らず原因があります。その原因をとりのぞく反省をして、明るくし、そして、神の光を受けられる自分になろうと決心し、実践していくのです。

それを邪魔しているのは、「我（が）」なのです。「我」があるからできないのです。「我」をなくした時、本当に自分が「神の子」であり、慈悲（じひ）と愛の塊（かたまり）であり、みんな兄弟であり、みんな同根であり、みんな自分の為に存在して、我（われ）は宇宙そのものだ。

すべての人＝「多」ですね。私＝「一」ですね。「一即多」、「多即一」、同じなのです。そこには差別もなければ、区別も、憎（にく）しみも、争（あらそ）いも、貧乏人も、金持ちも、頭の良いのも、悪いのも、何もない。何もない。

ただあるのは、命がある。その命は、すべてを生かす命、すべてを生かす命しかない。だから「我（が）」がある時は、その命は弱まります。

「我」を捨てなさい。「我」こそ罪の根源です。苦しみの根元は、「我なのです。偽我です」ね。肉のことを言うのです。人間というのは、肉の生活のことが欲しくなるのです。だから努力しているのです。

けれど、それだけでは、いけません。そうしていると、いつかは色々な困難が起こり、争いが起こり、病なり、苦しみなり、災難が起こってきます。それを、「してはいけない」とは言っていないのです。それだけに終ってしまって、魂を磨くことを忘れていると、言っているのです。

自分が蒔いた種を見つけ、それを取り除く反省をし、明るい心になって、明るくしていくのです。取り除くのは、自分しかできません。相手の罪を、大きく思うのは、自分の「我」が大きいからです。「我」を、捨てて行くのです。

（1985年1月13日）

丹田呼吸と反省について

坐って楽な姿勢で丹田で息を整える。丹田とは、おへその少し下です。この呼吸法は腹を立てやすい人に良い。息を吐く。吐くと、お腹がへこむ。お腹の中のもやもやを全部出すつもりで息を吐く。吐いた後、息を吸うとお腹がふくれる。ふくれると息をとめ「一つ、二つ」と、八つ数える位迄息を止める。無理をして止めないこと。そして、また、お腹の中のものを出すつもりで、ハァーッと吐く。だいたい3回位繰り返す。

私はこれが自然で良いと思ってやっています。すると気持が落ち着きます。落ち着いたら、反省をする。反省するのも楽な姿勢でする。まずは、お母さんの反省をする。お母さんに過去で約束しましたね、お母さんは生まれ、そして相手の男の人と結婚しましたね。相手を見つけるのは大変ですね。相手が違う人だったら、みなさんは、今、生まれていませんね。

予定通りに結婚してくれると大変ありがたいですね。結婚しても仲よくしてくれなかったら、私は生まれません。仲よくしてくれて肉体を作ってくれたでしょう。だから、その肉体に私は入っていけるのです。

今度は長い間育ててくれたでしょう。その時、お母さんの環境を見てみたら、御主人がパチンコをしたり、競輪、競馬に凝って、貧しいとかいろいろありますね。その中においても、お母さんは心を動かさないで、やさしく、温かい心で育ててくれました。それは大変な愛情ですね。こんな子供いらないと思われながら生まれてごらんなさい。

お母さんは喜んで私を生んでくださったのです。今は簡単に堕ろしてしまいますね。だから日本で生まれるのは大変なんです。途中で殺されないかと思うんですね。そんな心配もなく安心して、お母さんのお腹におって、そして生まれてきたのです。大変だったお母さんに感謝ですよ。これほどありがたいことはないですよ。そのお母さんへの感謝をしっかりと思いおこすことが

大切です。

生まれる前とか、1〜2才の覚えはないけれど、一つ位は覚えていることがあると思います。あるいは人の姿を見て（電車に乗って、子供がお母さんのおっぱいをもらっている）とかを見て、私もあんなようにして育ててもらったのだと思い、自分も子供を育てたけれど、人が子供を育てているのを見るのは、また違いますね。

私があんなにひどいことを言ったのに、お母さんは広い心で育ててくれたと思い感謝するのです。実際に思い出したら、それを一つひとつ感謝して、そして、逆にお母さんを困らせた悲しませたことを詫びる。そうしたら本当の感謝が湧いてきて、「お母さん、ありがとうございます」と、お母さんに対して、感謝と喜びが湧いてきます。

お母さんの顔が悪かろうと、教養がなかろうと、歯が全部抜けておろうと、そんなことは関係なく、母親であるということだけで「ありがたい」という気持になります。そういう反省ができて、「お母さんごめんなさい」と、自然に手をついて、涙を流して感謝、一日ではできません。何回もして、ある時、ふっと反省が育まれるのです。そうしたらサァーッとできます。

そうしたら御主人の心も、御主人との不調和もわかってくるのです。だから、お母さんの反省をまずすることです。お母さんをやっていると、お父さんのことも出てきます。出てきたら、お父さんの反省もしたらよいのです。また、お母さんに戻って徹底的にするのです。

お母さんの反省をまずしっかりとすることです。そして、自分の主人、お父さん、あるいは姑さんと反省していくのです。

自分を責めるのではありません。過去を振り返えると、夫を裏切ったとか悪いことばっかりしてきたとか、それも反省しなくてはいけません。最初は苦しいですが、心配は要りません。あまり自分を苦しめずに、自分のしたことには自責の念は持たなくてはいけません。

悪かったと思い心から詫びて、「ごめんなさい」と言えば終りと違います。人に怪我をさせて、ごめんねと言って、知らんふりをしている、あれとよく似ています。怪我をさせたら「ごめんね」と言って償いをしなくてはなりません。ある程度するとそれ以上償うことはありません。

自分が精一ぱい償うことです。そして後は、パッと放すのです。そうすると心がパッと明るくなって爽やかになります。そうしたら喜びと感謝しかありません。その心を持って生きていこうということが、神の心を現わすことです。愛の実践です。順序を守って反省すること、まずはお母さんの反省をすることです。

お母さんの反省ができなかったら理屈っぽくなるのです。

第２回「神理をまなぶ会」での講話

人類が平和を考えなくては、平和は来ないと思います。それぞれ人と人が争っていては、決して平和は生まれないのです。争っていること、これが一番悲しいこと、一番愚かなこと、最大の罪悪だと私は思います。喧嘩しながら平和は叶えられないのです。

幸せでない人が、人を幸せにはできないのです。なぜなら幸せを知らない人が、どうして幸せが解るのでしょうか。物質のみに振り廻され、足ることを忘れ何が真実かも解らず、お金、お金に執着し、物質ばかりを求め続けているのです。原点を解らずして「誠」のことは解らないのです。

ずばり原点に入ります。

人間死んだら終りではありません。この世の裏にあの世があります。あの世なくしてこの世はあり得ません。死後の世界はあります。ある方が「生まれ生まれ生まれ、生まれ始めに暗く、死に死に死に、死んで終りに冥し」と言っておられます。死に変り、生まれ変り、死に変り、生まれ変り、死に変り、生まれ変り………、その先がどうなって行くのか……とおっしゃっておられるのです。

次に、なぜ生まれてきたのか、これが解らないと、どう生きていったら良いのか解らないのです。なぜ生まれてくるかというと、魂を造りに、そのために生まれてくるのです。お金を儲けるとか、ノーベル賞を貰うとか、有名人に成るとか、勲章を貰いに人は生まれてくるのではないのです。魂を造りに生まれ、魂を造っていくと、この地球が平和に豊かに、勿論、自分も豊かになるのです。魂を磨くために夫婦、親子、会社の同僚とか色々な組合せがあるのです。色々な苦しみや悲しみがあるのです。乗り越えていけない苦難は、決して目の前に現われてきません。必らず乗り越えられます。思いを正し、許し合い、生かし合って魂を磨いていってください。

話は飛躍しますが、その魂を磨く自分とは一体何なのかと言いますと、神の子です。水で例えるとコップの中の水が、神としますと、その中から出た一滴が人間なのです。

人間は霊です。人間の主体は霊です。肉体は従です。霊が肉体を支配するのです。肉体とは乗り船です。意識は船頭です。そして船頭が舟を操り目的の地へ辿り着くのです。

人間というのは、あるがままに、自然に生きていけばよいのです。人間だって自然のある一つの存在なのです。男も女も、子供も、大人も、日本人も、アメリカ人も、アフリカ人も、皆、平等なのです。

もっと魂に重点を置いていってほしいと思います。色々な物を通して魂を磨いていってください。

（1985 年３月３日）

田池先生の手紙 嫁と姑の関係で悩んでおられる方へ

　今日は、嫁と姑に悩んでおられる方を、心の中に描きまして、その方に、お手紙を書きました。お姑さんとお嫁さんの争いと同時に、夫と妻の不調和、あるいは親と子供の不調和、職場における上司と自分、あるいは、自分と同僚、自分と部下の不調和と同じ内容が含まれている訳です。
　だから、嫁と姑の不調和と、夫婦の不調和とは基本的に異なる所はないのです。

1985 年 8 月 12 日　御巣鷹山に日航ジャンボ機が墜落

　今日も暗い顔をされていますね。また、姑さんの言われたこと、なされたこと、心の中で、どう思っておられるだろうと思うことで、心を縛ってしまったのではありませんか。心を暗くし、小さくしてしまうと、苦しくなり、悲しくなるばかりですよ。姑さんに腹をたてたり、自分の運命を呪ったりしても、ますます落ちこむだけでいっこうに事態の解決には、なりません。それよりも、姑さんの気持や考えになってみて、どうして姑さんが、そのようなことを言われるのか考えてみてください。また、どうして、姑さんが、そのようなことをなされるのか、心の中で、そのように思われるのかも考えてみてください。さらに、姑さんに対して、どうして、腹がたつのか、憎んだり、恨んだり、反発したりするのか、また、姑さんに受け入られない自分を、嘆いたり、悲しんだりするのか反省してみてください。心を内に向け、しっかりと自分の心を見つめてください。そして、苦しみ、悩む原因を追究してみてください。蒔かぬ種は生えません。蒔いた種は刈りとらねばなりません。眼・耳・鼻・舌・身・意の五官六根の煩悩にふりまわされている弱い自分、自己保存・自己中心的な勝手気ままな自分・欲望と執着の虜になっている汚れた自分が、一切の苦悩の原因であることに気付いてほしいと思います。姑さんを、恐がってはなりません。明るい心で、姑さんを信じてください。そして、姑さんが、してほしいと思っておられることを、して差しあげたら喜ばれるだろうと思っておられることがあれば、心からして差しあげてください。思いやりの心と謙虚な気持を忘れず、己れには厳しく、相手には寛容（広い心）であるということが大切です。勇気と知恵を出して、努力してみてください。自分が、変れば、相手も、おのずから変ってくるものです。相手を、変えようと思ったり、したりしても、相手を変えることは、難しいことでしょう。自分の心を小さくしたのが、自分なら、自分の心を大きくするのも、丸く豊かにするのも自分であるということに気付いてください。

ある方の反省

お母さんのこと、ご主人のこと、お姑さんのこと

私の母は、私が３才２ヶ月の時亡くなりました。そして、「次の母」は小学校３年の時に亡くなりました。そして、「今の母」は、私が中学３年のときに来てくれました。

二番目の母の時、妹、弟が生まれ、「継母（ままはは）」みたいなつらいときがありました。今、思うとそれは仕方のないことで、私がその生き方をしても、やはりそのようになると思い、むしろ、そうしなければならない母がかわいそうと思います。

この母が亡くなって、今の母がこられるまで、母と呼べる人がなく、さみしい毎日を送っておりました。母が来てくれて、うれしかったのに、生活する中で、「生みの親やったら、ああも、こうもしてくれたろうな」と思うようになり、母のありがたみを失ってしまい、暗い世界へと歩んでいました。

でも今は、この母のような生活をしなさいと言われても、私にはできません。本当にりっぱな母です。

少し前、生みの母の33回忌をつとめてくださいました。そして、親類のおじさん、おばさんたちに、今の幸せを話させていただき、主人も、「おまえがしゃべりになって、みんな、びっくりしてはったんとちがうか」と言われました。

私は、自分は「無口でかわいそうな人間だ」と、田池先生に会わせていただくまでは思っていました。田池先生に会わせていただく機会を作ってくれたのは、父の死です。父の死によって、私の心を見つめることができたのです。

田池先生とお会いして、先生から出た最初の言葉は、「今のお母さんに詫（わ）びなさい」という一言（ひとこと）でした。

その時、心の中では、自分は悪くないと思っているから、「詫びてほしいのは私のほうだ」と思いながら家に帰ってきました。

でも、母のことを思うと、女は結婚したら愛する人の子供を生みたいのに、母は私たちのために自分の子供を生まなかった。それほどまでにしてくださっている母に、不平、不満を思っている自分が見えてきました。

顔を見て詫びるのは照れくさいので、電話で母に詫びていると、妹が来てくれ、「姉ちゃん良かったね」と言い、田池先生からも電話が入り、「これからも頑張ってください」と言われました。先生には何も言ってないのですから、「先生は人の心の中を見通す人、こわいなぁ」と正直に思いました。

また主人と不調和で苦しんでいるとき、あなたが変われば御主人も変わられると言われました。私は主人があんなにしているのだから、これは「主人が悪い」と先生が言ってくださると思って電話しても、「あなたが変わりなさい」と言われるだけでした。

お姑さんとの不調和も、「あなたが変わりなさい」と言われました。もう私は、「なぜ私ばっかり悪いのか」と先生に背を向

けたときです。お姑さんが病気になり「肺ガン」で後三ヶ月の命だと病院で告げられました。私は「お姑さんも悪いから病気になるのだ」と冷たい心でいました。

でも、病院でお姑さんの看護をするうちに、このまま亡くなりはったら、私、後悔する。今迄、何一つ嫁らしいこともしてないし、お姑さんも苦労だけの一生、あまりにもかわいそうと思い、田池先生にお姑さんのことを話すと、「お医者さんは医師の立場で病名を言われるが、必ず治るから神を信じ、お姑さんとのことを反省して、お姑さんにやさしく接してあげてください」と言われました。

主人が畑で仕事をしながら泣いている姿を見ていたら、私には何の力もないけれど、田池先生の言葉を信じ、主人に、「万分の一の光でもあるのなら、その光を信じ、お姑さんの助かるという言葉を私たちだけでも信じて頑張ろう」と励ましあいました。

そして、結婚してそれまで、一度もお姑さんの手や体を触ったことがなかったのに、お姑さんの身体をさすりながら、今迄のことを詫び、主人に対しても私の悪かったことを話し、これから何でもお互いに言い合い仲よく生活していきましょうと話しました。

病院から夕方、私が帰ろうとすると、お姑さんは、廊下の窓から手をふって見送ってくださるまでに元気になりました。今までの私は、お姑さんに、「家事や洗濯、やってあげる」と言われても、よう任せられませんでした。洗い方とか干し方とか、いろいろと気に入らず、心を閉ざしたきつい嫁でした。今は、何でもやっていただき、こんなにしてもらってよいのかと思う位です。

主人と畑の仕事に力を合わせ、仲よくできるようにもなりました。主人は、「お母ちゃん、治ると言うてくれたのは、おまえだけやな」と喜んでくれています。そして、お姑さんも、「あなたに命を助けてもらった」と言ってくれますが、私は、逆に、お姑さんが苦しい思いをして、私の魂を救ってくださったことに気づかせてもらいました。

ありがとうございます。あいかわらず、お姑さんに腹を立て、不満を言いながら、仲よく、お姑さんが折れてくださっているようですが、一応は仲よく生活しております。

先生も苦笑しておられると思います。お姑さんを入れると、私には四人の母を与えていただき、その母たちにいろいろなことを教えていただきました。

今の母が来てくれたおかげで、私は、駒ケ谷に嫁に来られました。そして、主人、子供たちもやさしく、何より、田池先生の話を聞きに行きたいと言ったとき、お姑さんが行かせてくださったのです。「あなたが幸せになるのなら」と。

それを自分一人でやっているような顔していた私、本当にごめんなさい。私は今まで暗い世界に閉じこもっていたのを、少しずつ、母、お姑さん、主人、子供たちが引っ張ってくれたのだと思います。

田池先生、お姑さん、母、主人、子供たちのおかげで、私は救われました。本当にありがとうございました。

田池先生の手紙　夫婦の不調和で悩んでおられる方へ

1986 年 4 月 26 日　チェルノブイリ原発事故

今日は夫婦の不調和で苦しんでおられる奥さんの意識に向けて、私がお手紙を書きました。これを読んでいるうちに、「それは私のことを思われている」と思われたら、自分なりに気付き反省して自分の心を見てください。夫婦のことと思わないで、御主人というのを、姑とか子供に置きかえたりしてみて、自分の立場として、とらえるような読み方をしていただきたいのです。また、Aという方が、私に質問されて、それに答えている場合も、多くの方々に向けても答えているのであり、そのような気持で手紙を読んでいただきたいと思います。

昨晩御主人のことで、お電話を頂きましたね。その時、私がお話申し上げたことは、おわかりいただけましたでしょうか。今の私にはあなたの悲しみ、苦しみをどうしてあげる訳にもいきません。ただ御自分の心をしっかり見つめ直していただき、今ある苦しみの一切の原因が、御自分の心の中にあることに気付いていただきとうございます。あなたが現在、見たり、聞いたりなさっている世界は、あなたの心の中の世界のものだということに一時でも早く気付いてほしいと思います。

あなたはどうして、御主人を憎んだり、責めたり、また怖がったりなさっていられるのでしょうか。金遣いが荒いからでしょうか。酒を飲んでは、口汚くののしるからでしょうか。暴力を振ったりするからでしょうか。

ではどうして御主人がそのような振る舞いをされているのか、お考えになったことがあるでしょうか。御主人の気持を聞いてあげたことがありますか。少しでもお気持をわかってあげようと思われたことがありますか。

あなたは昨晩、電話でいくども、「今迄、御主人に尽くしてこられた」とおっしゃっておられましたが、本当に御自分のほうから心を開き、そのようになさってこられたでしょうか。御主人を心から愛してこられましたか。心底大事な方だと思ってこられましたか。

あなたは、私のこの言葉にきっと御不満のことと思います。しかしおそらく、あなたの心は、さみしく、冷たいものになってしまっておられるのではありませんか。神の知恵と、愛と光を遮っておられる御自分を、今、あなたはどのようにお考えになりますか。心を汚し、罪をつくっておられるのは、あなた御自身ではありませんか。

ところで、あなたは、御自分の財産や、世間体などについて、どのように思ってこられましたか。これらについて、もう一度あなたの心の中をお聞かせいただきたいと思います。

御自分が霊であり、神の子であることに、お気付きになれずに、いたずらに物や形にとらわれ、外の世界だけに心を奪われておられますと、本当の世界が見えな

くなってしまい、御主人の現在の本当の姿や、状態が解らなくなってしまいます。
　御自分ばかりを労わるのではなく、御主人も、さびしく苦しんでおられることに、愛情を注いであげてほしいと思います。
　もしあなたが、御主人と立場をかわられたらどうでしょうか。あなたが結婚されてから今日迄、心の中で思ってこられたように、また、それを言葉にしたり、態度や行為に現わしてこられたように、御主人があなたになさってこられたら、あなたは御主人をどのように思われるでしょうか。
　それでもあなたは御主人を許し、御主人を心から愛されるでしょうか。それとも結婚を呪い、不運を嘆き、心も荒み、捨てばちになられていかれるでしょうか。
　今、あなたにとって大切なことは、財産とか、世間体とかではありません。心から神に詫び、御主人に詫びることです。そして思いやりの心のとぼしい自分、冷え切った暗い自分の心、感謝と喜びを忘れさってしまっている生活に気付いていただきたいと思います。
　たがいに助け合い、与え合い、相手のためにお役に立とう、尽くそうと、心に念じながら、まず御自分を変えていく、行いをしっかりとやっていただきたいと思います。反省をおこたらず、御自分の心を明るく、さわやかに、清らかに、清めて、精進努力を続けていっていただきたいと思います。

ある方の反省

夫婦間の不調和について

　田池先生に初めてお逢いした頃、私は流産を何度もくり返し主人のパチンコや競馬がとてもいやで、今思えば、とても暗い想念の毎日でした。
　でも必死でした。どうしても赤ちゃんを産みたいと。上の子供の時は５ヶ月まで、下の子供の時は１０ヶ月間、ねたり起きたりの生活でした。主人や母に対して本当にいっぱい愛を与えていただきました。その時の私は、この学びは道徳のようなものだと思っていたのでしょうか。頭で本当だな、そうだなと思っていて、実践はともないませんでした。
　そして二年前、子供のチックのことで、

田池先生に初めてお電話しました。「魂を磨きにきました」という言葉を聞いたときの感動は、今も忘れません。

６年生の時、父を交通事故で亡くしましたので母に対する感謝の心は常にもっていると思っていました。そして早く楽になるように大きなお家に住ませてやろう、今思えば物質で愛をはかっていました。そうだ、私がしっかり学んで母に心のやすらぎを与えていただくことが本当の親孝行だと思いました。感謝の涙いっぱいでした。

昭和58年11月３日、田池先生にお逢いしました。私の第一歩というか、本当の愛の思いをわからせていただきました。前にすわってくださり、私は目をつむり手を合わせ母の反省をしました。ふたつのことが何回も何回も心の奥からわき出てきました。今まで気づかなかった思いです。でもとても根強く思っているのです。ひとつは、母に、私を産んでくれた環境を恨んでいるのです。もうひとつは、私たちを残して亡くなった父に対しての恨みでした。

自分でびっくりしました。涙があふれ、申しわけない思いでいっぱいになりました。「どうですか」と聞かれ、私は先生を、周りを見ましたが、何も変わらず、よっぽど悪い思いがあるんだとがっくりしました。

「もう一度、光をいれます。何も思わないで、ただ私を意識してください」と言われました。目をとじて心の中で「田池先生、助けてください」と思いました。静かにしていると、頭がさがってきて、ひれふしている状態になりました。今度は何も思わず手を合わせるように言われじっとしていて、「いいですよ」と言われ目をあけました。

私は静かにゆっくり揺れていました。とても暖かく気持ちがいいのです。私の心の中は何もないのです。母のこと､主人のこと､子供のこと、お金のこと、何もなくただあたたかい思いで揺れているのです。

「先生、お母ちゃんのお腹にいるみたいです。」

「気持ちがいいでしょう。その思いで、お母さんを、子供を抱いてやりなさい。しっかり憶えておくように」と言われました。そして伝えていくようにとおっしゃいました。

そのときの思いが、今、よみがえってきました。この体験を心の支えとし、これから一歩一歩、歩いていきたいです。

本当に気づかせていただくことがいっぱいです。主人に対しては責め、裁き、愛の心、感謝の心何もなかったです。ただ形にとらわれている私でした。こんなに頑張ってるのにという思いがあり、奢りの心でいっぱいでした。

波動で伝わっていくのですね。田池先生がおっしゃいました。「ご主人に感謝するのですよ」という言葉が、このごろ、ようやくわかってきました。わからせていただいたのです。主人のお陰でいっぱい気づくことがありました。（村岡節子）

この時期、田池先生と出会った方たちの思い

野川京子さんの思い

私が初めて田池先生に出会ったのは校長先生をしていた頃です。

田池先生が学校の帰りに立ち寄られ、この学びのことをお話しされていたのが大阪府富田林市富美ヶ丘でした。私たち家族が夫の大阪転勤で九州から引っ越してきたのが富美ヶ丘。そこに住んでいた方から田池先生のことを聞かされました。この学びは心の勉強で宗教ではないから一度先生のお話を聞きに来ませんかと誘われました。宗教ではないというし、心ということに以前から何となく惹かれるものがあったので、その先生のお話を聞いてみようと思いました。

それは富美ヶ丘のある方のお宅でした。そこで初めて田池先生と出会いました。そこには私を含め数人いたように思います。その中に足腰がとても悪く不自由な身体の女性がおられました。

その方は「こんな見苦しい身体に生まれてきてどんなに苦しかったか、苦しいんです。こんな身体に生んだ親をお母さんを恨んでいるんです」と、その苦しい気持ちを切々と先生に話されました。

その時に話された先生のお話はこんなだったと思います。

「意識のあなたがあって、あなたがその身体を望んでお母さんに生んでもらったんですよ。あなたがその肉を選んだのです。だから誰を恨むこともないんです」と。

初めて聞く話に、私はすごいことを言われる人だなーと思いました。

私も厳しい環境を恨み、「生まれたくなかった」とお母さんを責めて裁いて恨んできた自分を思い出し、それも自分が決めてきたというのか……。

聞きたい、この先生のお話をもっと聞きたいと思いました。初めて会って聞いたお話に私の心は惹きつけられました。忘れられない田池先生との出会いです。

それから後日、ある会合(個人宅)で先生がお話をされるということで私はその会合に参加しました。そこからが私の学びの始まりでした。

富美ヶ丘に住んだこと、それまでの色んな経緯が偶然でもなんでもなく田池先生と出会うための設定だったんだと思うと、意識の世界の緻密さを思わずにいられません。

田池先生との出会いに、ただただありがとう、うれしいです。なぜ生まれてきたのか、心で知って自分を学んでまいります。

北川美智子さんの思い

30数年前田池先生に初めてお会いした頃に思いを馳せていたら、中から「私は

パワーを求めてきました」という明確で強い意志のような思いが伝わってきました。その明確な強い思いに肉持つ私は驚き戸惑い心は何かとても大きなショックを受けたようでした。

幸せになりたいとの願望を強く持つ私は病弱な子供を抱え途方にくれる日々からの脱出を願い、救いを必死で自分の外に求めていました。しかし神社仏閣、十字架等々の見える形ある偶像崇拝の類は違うという思いがあり、見えない世界に惹かれる思いは幼い頃からあるのを何となく感じてきましたが、こんな強い思いだったとは思いもしない展開でした。

そうです。田池先生と初めてお会いした時、私は田池留吉氏のパワーに魅せられ、他力信仰の延長線上でしっかり田池留吉氏の肉を掴み、貪欲なまでの欲する思いに気付かないふりのまま今の今まで隠し通してきたのです。肉を本物とする私の欲の思いが作った神仏、宇宙のパワーの宗教の世界に亀裂を起こすには30数年の徹底抗戦の年月が必要だったということでした。宗教の世界の崩壊の始まりを感じるとともに呪縛からの解放感も同時に感じています。

ふるさと苑移住を4か月後に控え受けた最初の種水判定での恐怖で狂った巫女の自分を制御できなくなり、ポッドキャストから塩川さんへ送らせて頂いた支離滅裂メールの送信ボタンを押した瞬間我に返った体験等々から真剣に自分と向き合っていこうと決意しました。先々月の7月橿原セミナーでの種水判定の時再びあの恐怖が蘇ってきました。しかし、前回と中の様子が全然違うんです。嬉しいんです。優しいんです。恐怖がずいぶん和らいでいるんです。

心を見ていく中で巫女の恐怖の思いの先にあるのは宇宙のパワーでした。瞑想の中で宇宙のパワーを思うと阿鼻叫喚、魑魅魍魎と四字熟語が出てきます。宇宙のパワーの実態が伝わってくるほどに、恐怖の坩堝のパワーの世界で待ってくれているたくさんの自分にお母さんの温もりを優しさを愛を伝えていきたい、いこうと真剣に思います。田池先生から塩川さんからその手立てを手取り足取り伝えていただいている今世の私は本当に幸せ者です。

UTAブックさんの企画参加から、動機の修正がいかに大切かをずいぶんの時を要しましたが気付かせていただいています。肉基盤の上で、たった一つの真実はどこかに必ずあるとの思いや、転生輪廻からの解脱を求め幸せになるために作り上げてきた「我は神なり」という凄まじいまでの自己顕示欲の宇宙等々肉を本物とする宇宙が底なしにあることも響いてきます。

そんな自分が作った宇宙と「共に帰ろう、愛、心のふるさとと母なる宇宙へ帰ろう」と伝え合い、響き合える肉が、今ここにこうして存在できている事実に、本当の自分に、お母さんにゆるされて愛されている幸せな自分を感じ心は叫びます。「お母さん、ありがとう。生まれてこれてよかった。お母さん、産んでくれてありがとう」と。残されている今世の肉の時間、この思いを次なる転生に微かでもいい繋いでいく実践に励みます。

石黒ムツ子さんの思い

先生に最初にお会いした翌日の夕方、いつものように、台所で夕食の準備をしていた私の中から、うれしい、うれしい、うれしい……今迄一度も経験したことのない深い喜びが、どんどん出てきます。

「何？ 何?」と思う私がいました。今迄にない強烈な体験でした。

何年も経（た）ってから、後で思いました。田池先生にお会いできたことを、本当の私が喜んだのだと思いました。私の中からの輝くような喜びは、学びの中で、立ち止まった時の私の支えとなってくれました。

このような体験をさせていただき、私は、何だ？ 何だ？ と、学びに引きつけられていったと思います。

私は、新潟県の農家に生まれ、雪深い自然の中で23年間を過ごしてまいりました。どうしてそんな記憶があるのか、私にも分からないのですが、幼い頃（3才位?）花を摘（つ）んで一人で遊んでいた私が、「なんでこんな世界があるの？ なんで私がいるの?」と、一瞬、そのことにびっくりして立ち尽くしました。心の衝撃が大きかったです。それが、私の中で不思議な思いとして残っています。

小学4年生の頃、芥川龍之介の「くもの糸」を読んでから、天国はあるの？ 地獄はあるの？ と思い、そこから人は死んだらどこへ行くのだろうと、小学生の間中、私の中で重大問題となりました。その後、いつの頃からか、人が生まれ、学校へ行き、働き、結婚して、家庭をもち、そして死んでいく……これって何のための時間？ これって何のためにあるの……？ と思い続けておりました。

その後、白桃園で結婚し、この地で田池先生と出会ったのです。

田池先生に、自分の心を見なさいと教えていただき、人は、これ程、自分のことを知らないで生きていたのかと思ったものでした。闘いのエネルギー、己を現したい思い、支配欲、好い人、好い嫁と苦しみを積み上げてきた私は、本当に救ってもらいました。安らぎを頂きました。

周囲や他人が気にならず、私がどう思われるかも気にならなくなりました。

心の針を向ける先があることを、教えていただけたことは、本当にうれしいです。

末広和子さんの思い

私は田池先生に出会って50年近くになります。いろんな出来事がありましたが、一番凄（すご）い体験を書いていこうと思います。家でいつもの瞑想中に、父親が語ってきました。（いいか、先にわしが田池先生に会うために生まれるから、お前達も絶対先生に会うために生まれてくるんやぞ。私達姉妹を抱きしめる感覚で父親が先生の後に生まれるようです。先生も生まれられる前の世界のようでした。

以前、セミナー中、先生の近くに座っている時、先生が私に「姉ちゃん（私は先生にこのように呼ばれていました）あんたが学べるのはお父さんのお陰（かげ）やで、分かってるか？」

その時のことがバーンと蘇(よみがえ)りました。

私は、セミナーに参加できるように主人にいつもお願いしてもらっていたので、「はい」と答えましたが､肉の話ではなかった!!と気がつきました。涙が止まりませんでした。先生と父親に抱きしめられている感覚で泣いていました。なんて幸せな私だろう、「ありがとう ありがとう」でした。ああ私は、ずっと母に抱かれながら存在していたと思いました。心の中にこの温かな温もりを感じて瞑想していきます。私は幸せです。ありがとうございました。どれほど大事なことなのかがようやくわかってきました。

荒木紘美さんの思い

家族、経済、健康、現象的にはすべてに恵まれていましたが、なぜか満たされない日々を送ってました。その内に夫婦の問題を感じ始め、何とかこの心を解決したい、そしてもっともっと幸せになりたい、自分を高めたいと、たいたい……の強欲(ごうよく)ではじめた学びでしたが、その一方で田池先生にお会いする毎に不思議なほど爽やかで喜びに満たされる心がありました。

今では、自分の思いの囚われが軽く軽くなりました。すべてにおいて肉が基盤の世界観でしたが、学びと出会い、その真逆の世界観が育(はぐく)まれていきました。有形から無形へ、現象から意識へ無尽蔵(むじんぞう)に広がっていく世界、宇宙……愛、波動、次元移行、意識の流れ……ただただ幸せな自分の存在を知りゆくことが喜びです。

幸せも喜びもすべてが自分の中……もうすでに､最初から幸せの中に存在してる!!そう肉に言い聞かせながら、共に学んでおります。

ここまで田池先生の書かれたもの、学びの友の書かれたものを読まれて、今では使われていない言葉や用語が出てくるのに気づかれたと思います。

「神」「神の子」「正法」、「エルランティ」や、ここではまだ出てきませんが、「エルカンターレ」「守護霊」「指導霊」等々。

というのも、出発点から、すべてが分かっていたわけではなく、田池先生も述べておられるように「人間は意識」だという「直感」からスタートし、集まった方々とともに学びながら､次第に本当のもの「核心」に行き着いたって感じだと思うのです。そして、その到達点を『意識の流れ』という出版物として残されたのだと思います。

田池先生も、ご自身の抱(かか)えた疑問を解決するため、初期の段階では、高橋信次さんが説(と)かれる「ＧＬＡ」という団体に学ばれたこともあったようです。今では「死語」となった言葉が出てくるのも、そのためであり、本当のことが明らかになってくるに伴(ともな)い、これらの言葉が消えていっ

たように思うのです。

ですから、当時のことを掘り起こすのは無用の混乱を生みかねませんが、本当のことに到着するまでの過程でもありますので省くわけにもまいりません。

賢明な読者におかれましては、この辺のことを考慮しながら、読み進めていただければと思う次第です。

では更に、田池先生と出会った方々の思いを、アンケートの形で募集させていただきましたので、これを時代ごとに、表形式で紹介させていただきたいと思います。

※参考資料

さて、この時期、田池先生がテキスト代わりにまとめられたものが「神の子の道」と題されたレジュメです。その全体は 5,000 字を超えるものですが、ここでは参考までに、その見出しの項目だけを紹介させていただきます。

〔神の子の道〕

1 人間はどこから来て、どこへ行くのか。
2 目に見えない世界こそ実在の世界であって、目に見える世界はその影・現象の世界である。
3 神は全てのものをこのうえもなく生かしている光、愛の生命・エネルギーである。
4 人間は全て神の子であり、平等である。
5 生命は永遠である。
6 人間（霊）は過去世、現世、来世の三世を流転する。（転生輪廻）
7 人生の目的と使命は自己の魂の浄化と神意の具現・最終ユートピア建設にある。
8 意識・心が肉体を支配する。
9 肉の思いは、己の心を汚し、神の光を遮り、己の心を神の心から離してしまう。
10 想念はものを作る。
11 自分の世界に起こる一切の諸現象の原因は自分の心の中にある。
12 神は人間に理性と自由を与えている。
13 苦悩の原因は己の無知とエゴにある。
14 暗い意識・粗悪な波動を出している者は悪霊に憑依され霊障を受ける。
15 試練は神の愛の揺さぶりである。
16 反省は神の慈愛である。
17 母の愛情は神の愛に通じるものである。
18 愛の実践によって己の神性が開顕する。
19 神と一つになり、心底から熱心に祈れば、その祈りは神の心に通じる。
20 浮かばれていない死者の霊は、物や形ではなく、愛によって救われる。
21 宇宙における地球の存在意識及び絶滅の危機に瀕している今日の状態を正しく認識し、遠い宇宙の天体から投げ掛けられている神の使者の愛の光を感謝して受け取り、地球救済と宇宙のユートピア化の為にエルランティと共に最善を尽くす事が当面の最大課題である。
22 自己の確立に努め、霊の道、神の子の道を真っすぐに進み上がっている時に本当の幸せが感じられる。
23 喜びは神の愛である。喜びは喜びの種を蒔き、喜びの花を開かせ、喜びの実を結ぶ。
24 最終ユートピア建設の幕は上がっている。

学びの仲間の皆さんに次の4項目についてアンケートをお願いしました。

「1. 田池先生に出会われたのはいつ?」、「2. この学びに集われた動機は?」、「3. 田池先生(この学び)に出会う前の自分の人生について」、「4. 田池先生(この学び)に出会って何が変わりましたか?」

1956年(昭和31年)に出会われた檜木須美子さん

1	田池先生に出会ったのは、高校の入試の日でした。先生は自分の中学の生徒を引率して来られていました。私はその高校を受験するのは私の中学からは2人だけだったので、姉が付き添ってくれました。田池先生は姉の中学の時の担任の先生だったので、そこで紹介されました。それが先生との初めての出会いでした。先生からよく便所の横で出会ったと言われていました。
2	実家で先生が講話をされるとのことで、姉に誘われて、別段困った問題はなかったのですが、しいて言えば子供のころから、私は何でここに居るんや、何で世の中こんなに不公平なんや、とずっと思っていました。 ある集会場の講話で「人間はすべて平等、公平です」て言われた先生の話で勉強してみようと思いました。
3	お金です。お金があったら、何でも幸せは手に入ると思っていました。お金を貯めなあかんて、若い娘が貯めるお金は知れていましたが、一生懸命貯めました。でも一つ手に入れるとすぐに次また次と欲に限りがありません。エンドレスです。自分でも嫌になっていた時、少しずつ、あちこちに先生の講話を聴きに行きました。何かほっとして楽になっていくように思いました。 お金では幸せにならない。今世、はっきりとすっきりと何もない、何もいらない幸せを学べたこと、最高の幸せです。
4	長い長い間さっぱり分からなかった、もやもやとしていた、「人間て何者、人生て何」が明瞭、明快、明確に伝えて頂いて、心は泥沼、葛藤、格闘の連続でしたが今は年も年です。そのせいかもしれませんが、本間にはっきり、すっきり、スカッといたしました。 周りを見る思いが少し変わりました。ちょっとは優しくなったと思います。

1962年(昭和37年)に出会われた中田和子さん

1	高校2年生(昭和37年)の時、母校に赴任されて来られました。たまたま数学の先生が病気で、代行として教えていただきました。
2	ある人から見せていただいた本の中で「田池留吉」という文字が目に止まり、あの時の先生が? と思い、八尾で開かれた大阪セミナーに初めて参加しました。
3	結婚して、家庭を守り、良妻賢母が、人生設計(結婚が幸せと思っていませんでした)だと育ちましたが、かと言って結婚を急かされもせず、簡単に結婚には踏み切れず、一人で! と思い、生活設計を立てて、老後の為に国家資格を取り、悠々自適の設計を立てました。肉的には何不自由なく、思うままの日々を過ごしていました。
4	性格が変わりました。(元々は、几帳面で、いい加減ができなく、こだわりが酷かったし、建前と本音を持っていました。自分の思いは全く言えなかったのが、言えるようになり、仕事においても寛大になったように思います。何でも掴んでいたのが、掴まなくなりました。 田池先生のイメージが怖かったのですが、優しいと思えたことが一番です。

1964年(昭和39年)頃に出会われた原田美恵子さん

1	64年ごろかな、友達に誘われて東京のKさんの自宅かなと思います。

2	夫婦の問題です、夫婦の仲が悪くてどうして仲が悪いのか知りたくて行きました。
3	私は、すべて、人のせいにしてきました。私は悪くない、悪いのは周りが悪いのだと正義をふりかざしてきました。この思いは絶対に曲げたくなかったです。 自分が間違っていることが許せなかったです。だから正しい生き方を模索してきました。
4	私は、田池先生に出会い、これだと思いました。 先生が怖かったですが、精神的に不安定な時期もありましたが、先生が誠実に接していただき、乗り越えてこられました。 心を見ることがどんなに自分に優しいかということをわからせていただき、今までの私は悪くないが少しずつですが、薄らいでいってるかな、そして自分というものが少しわかりかけてきて、ものごとがはっきりしてきたようです。

1974 年（昭和 49 年）頃に出会われた牧村市太郎さん

1	45 年前 25 才の時です。
2	若い頃から、田池先生の集会に参加しながら、ＧＬＡにも参加していた。パワーを求めていたが、その間違いに気付いた。
3	肉守るために、仕事上の力を付けることに努力していた。生き易くする為のパワーを求めていた。
4	すべて変わった。ずっと田池先生に反発しながら、田池先生の意識の中で生きてきたと思う。

1974 年（昭和 49 年）頃に出会われた牧村清子さん

1	私の中学 3 年生の担任が田池先生でした。その後会うこともなく結婚後の昭和 49 年 2 月、結婚記念日にばったり出会いました。
2	主人の病気とそれにいるお金の苦労とで苦しい毎日をおくっていました。そのことがきっかけでした。
3	とにかく毎日が苦しかった。実の両親にも相談もできない苦しい心で生きていました。地獄の中をあるいていました。 でもその頃は地獄とは思ってもいませんでした。
4	閉じ込めていた心を開いていくこと、恐怖から解放されていくことを体験し、自分が使ってきたエネルギーをはっきりと知れたことが嬉しいと思うようになりました。先生が私に言ってくれていたポイントが意識の私に届いていくのを感じています。 自分を大事にしてこなかったことに気が付いて 「ごめんなさい、ありがとう、沈んでいかないよ、きっときっと自分を救っていける」と思えることがうれしいです。

1977 年（昭和 52 年）4 月に出会われた伊丹裕子さん

1	私が 1977 年 4 月、大阪府立登美丘高校に教諭 2 年目で転任した時、田池先生は教頭先生として赴任してこられました。
2	1979 年 9 月、夫婦関係に問題が起こり、心身ともに弱っていたところ、養護教諭の先生に、田池先生に相談してみたらどうか、とアドバイスしていただき、相談したのが学びに繋がった最初でした。
3	とにかく一番でいたい、認められたい、そのための努力はしましたが、元来怠け者、ラクしていいとこ取りしたい、めくるめく恋をして面白おかしい人生を歩みたい、などなど考えておりました。その一方、自分自身を持て余し、何とかしなければいけない、との思いもずっとかかえていました。

4	たったひとつの真実を教えていただき、「そういうことなんだ、よかった、本当によかった」と思いました。 「40 年以上田池先生を思って生きている」と言えば素晴らしいのですが、私のはいまだに他力、「助けてください」の世界にいることを今改めて感じています。 ほとんど何も変わっていないのかもしれません。 それでも思いを向ける方向を教えていただいたので、ヨロヨロしながらも、また戻ってきています。 脱線気味の回答で申し訳ありません。常に私はちゃんと学んでいないという後ろめたさを抱えていますので（元来の怠け癖もあり）アンケートに答えるのもためらっておりました。ずれていたらごめんなさい。

1977 年（昭和 52 年）頃に出会われた植野隆子さん

1	22 歳頃、出会いました。
2	高橋信次の説く学びから始まり、それが、「間違っているよ」と教えられ、そのうちに、田池先生が、駒ヶ谷の従姉妹の家で、お話しされるという機会に巡り合えました。 動機は、苦しい自分から、逃げたかった。
3	満足という生活ではないが、それなりに自分の人生を謳歌していました。
4	今まで、自分の周りで起きた色々なことが、「ああ、そうやったんか」と全部自分の中で納得できました。 今までの思いが、全部図式化され、解説されたと思えるから、本当に幸せです。

1977 年～ 78 年（昭和 52 ～ 53 年）に出会われた村岡節子さん

1	昭和 52、3 年だった思います。M さんのお家でした。なんでもわかる先生と聞いて、怖いなあ思いました。占いのたぐいの人と思ってました。 玄関先であった時の情景が今でも鮮明に覚えています。肉は何も思わなかったけど、意識はやっと、やっと出会えた、振り返るといつもその情景を思い出します。
2	初めて先生に相談というか、言ったのは、主人のことでした。 家族一緒に遊ぶのでなく、自分一人で、遊び、パチンコや競馬に出かけるのが、嫌で苦しかったです。 その後、数年が過ぎて、子供に怒ってばっかりの自分が嫌で、怒りをなくしたいと思って、初めて先生に電話しました。 それからが、本当に学ぶことになりました。
3	私は 12 才の時、父親を交通事故で一瞬でなくし、母子家庭で、育ってきたので、結婚して、子どもには、寂しい思いをさせないように、あったかな家庭を作りたい、そう思って大きくなりました。主人は、外で、私は中で、家族を守っていくのが、仕事、専業主婦で、頑張ろう思ってきました。
4	先生が亡くなられてからです。大間違いでした。基盤が違ってた。自分を信じていきや。最初に言ってもらってました。今は、ひとつ、ひとつの先生の言葉が、私の宝物になっています。まだまだ肉肉の思いとてもとても強いけど、信じて待ってくれてる自分に最敬礼です。

1979 年（昭和 54 年）頃に出会われた麻野泰子さん

1	40 数年前。父が亡くなってから主人の従姉妹が田池先生の教え子でした。どんな人か会いたいと思い紹介されました。

2	父が亡くなり、表向きは仲の良い親子関係でしたが父が亡くなる瞬間に母ともめて、その姿を見ていた父が私の目を見て「お母さんと仲良くしてな」と言っているように見えたので、この短気で頑固な自分を変えたいと、そして母と仲良くなりたいと思いました(母は養母でした)。 田池先生に出会って、最初の一言は「お母さんに謝りなさい」でした。お姑さんが肺がんで3カ月の命と医師に告げられたとき、このままお姑さんがなくなったら私は後悔しながら生きていかな駄目だと思いました。田池先生はお姑さんの反省をして、それをお姑さんに話しなさいと言われ、必ず治ると言われました。肺がんになったのは65歳で3カ月の命と言われたのが、3カ月で退院してきて86歳まで生きてくれました。
3	養母とお姑さんと仲良くしようと思いましたが、養母にもお姑さんにも優しくなれなかったし、反発ばかりでした。養母もお姑さんも、ここぞと思うことを言ってくれていました。その言葉でだんだん閉じ込めていた心がほころんできました。生母から養母、お姑さんとバトンタッチされて幸せとは何かを教えてもらったと思いました。お母さんが居ない私に3人の母に出会わせてもらいました。
4	田池先生に出会わなければ、こんなにうれしいと思ったことはなかった。母たちのことを話すとき、私の顔は自然とほころんでいます。本当の喜びを知りました。 田池先生、ＵＴＡブックさん、ありがとうございました。

1979年(昭和54年)頃に出会われた植野雅子さん

1	４０年前になるでしょうか、ある講演を聞きに田池先生と一緒に行きました。帰りの電車の中で、「結婚して何年や？」と聞かれ、「１年です」と答えた私に、「えらい毒ためたなぁ……」と言われて、車内でわぁわぁと泣いてしまいました。
2	過去世や不思議な世界を自分で知りたいと思いました。そう不思議な力、パワーをつけたいと、知りたいと、チャネラーですね、それを求めました。
3	仕事、金儲けに一生懸命でした。私の家に田池先生が来られた時、仕事を片付けたい私は、「来てもらったら困る、仕事がはかどらない、早く帰って」と思いました。
4	何度かお会いしてお話して、ぐんぐん惹かれていきました。会いたい、会ってまた話が聞きたいと思いました。ある時、家に来て下さったとき、私はこう話しました。母と心が通じないんですと。先生は「あんたからお母さんに心を開いていきや」と言われたとたん、私の心は広がり広がりお母さんと一つになった感覚を味わいました。あの時のうれしさは私の宝です。

1979年(昭和54年)頃に出会われた朝日江美さん

1	1979年に富田林のOさん宅で田池先生が講話されているのをはじめて聞きました。全く未知の世界に触れる不安と期待を感じ、長女めぐみを抱いて富田林の駅に降り立ったことを覚えています。
2	世界で１番好きな母がガンで亡くなった後、Kさんからこの学びの存在を教えてもらいました。肉体はある日突然消えたものの、母の心は絶対に何処かにあるはずだと思っていました。母はいったい何処へ行ったのか？ それが知りたくて学び始めました。
3	小さい頃から「人間は何のために生きているのか。死んだらどうなるのか」ということを疑問に思っていました。 そして見えない世界の存在を信じて 怖いと思っていました。私たちの不幸はすべて見えない世界の力によって引き起こされると思ってきました。 なので、神社仏閣やお墓や仏壇に不幸がこないことをお願いしました。また、月や星や太陽をみて 幸せを願っていました。 母の病気が分かった時、見えない世界に願う心は更に膨らんでいき、母を死なせてなるものかと、たくさんの他力信仰をやってきました。
4	まだまだ頭でしか理解できていないですが、自己選択自己責任、人に不幸の責任を転嫁することではないと教えてもらったことがうれしいです。 病気 事故 家庭の不和など、苦しい時は自分のエネルギーの確認からスタートできること。今の自分だけでなく 心の中に住むたくさんの自分との共同作業ができることがうれしいなぁと思います。ついつい五感を優先してしまいますが、「あぁ、そうだった」と思い出せることがまたうれしいと思います。 この作業のために生まれてきた……そうだったんだね。小さい頃の自分に教えてあげたいです。

1979年（昭和54年）頃に出会われた桐生由美子さん

1	29歳の頃、大阪市内のSさんのお宅でお会いしました。大勢の方が来られていました。
2	何かわからないのですが、自分の中から探している感覚が湧き上がってきていました。具体的にはわからなくて「本当のもの」を探していました。
3	小さい頃から、人は何のために生まれて死んでいくのか不思議でした。何をするために生まれてきたのか知るために、色々なことをしました。 結婚したら、子供ができたら、好きな趣味に没頭したら……でも結局、何もわからなくて探していました。常に絶望しかなくて、死を考えていた10代でした。
4	やっと出会えた気持ちでした。やっと探し続けてきたものと出会えたと思いました。 世界の果てまでも探して探して……そんな気持ちだったのです。 先生と出会えて、目の前に遠くに小さな灯が見た思いでした。 足元はまだ暗いままだけど、あの灯を目指して進みたいと心から思いました。 ただ、自分の探し続けたものを見つけた安心から、未だに先生の言われていたことができていません。 心を見ることを教えていただき、少しずつ少しずつ自分の間違いに気づけ、ずっと間違ってきた過去世からの自分を供養しました。 やっと過去の自分を受け入れて、愛していけるようになった頃から人生が180度変わった気がします。 こんなに温かい中に生かされている自分。周りみんなに感謝しかないと分かりました。 意識の自分から流れている愛の大きさ。 （それは全員が同じなんです）でも、肉の自分は相変わらず愚か極まりないこと。 田池先生ありがとうございます。先生とお出会いできていなかったら、多分私はこの世にいませんでした。 たくさんの過去世たちと同じように自分で自分を殺しておりました。 先生と出会って、すべてが変わりました。ありがとうございます。

1981年（昭和56年）頃に出会われた高岡滋子さん

1	1981年頃、昭和56年頃のことです。
2	息子が中学2年生の時に、私に反抗して、私は家を締め出しました。 中1位の時に主人が、単身赴任になり、私はイライラして怒りまくっていました。 息子の友達の家に電話して、その時、田池留吉という高校の先生がおられて、「お話を聞きに、どうですか?」と誘われ、嫌でしたが、その方の顔を立て行くことにしました。初めは、白桃園のNさんの家で主婦の集まりが何度かあり、しばらくしてから、田池先生が来られて何度か話を聞いて、田池先生の家に1人で伺い、そのあと、主人と二人で伺い、話をききました。理由は息子をちゃんと自分の思うように育てたかった。先生は、子供は放っときなさいと言われました。 最初にお伺いした時、光を入れてもらいました。その時の、あの感動は夢見心地でした。 動機は、あの光を入れてもらったことで、もう一度という思いがずっとありました。
3	自分は、正しい!!　自分は、間違ってない!!　私は立派!!　この塊でした。 ですから、私の言うことを聞かない息子が悪いとずっと思って真っ黒なエネルギーを浴びせ続けました。
4	私は間違っていました。田池先生の言われることが、なかなか理解できないで、長いこと長いことかかりましたが、やっと、「私は間違っていました。お母さんごめんなさい、ありがとうございます」と思いました。すごく楽になりました。お母さんのぬくもりを知っていきます。

1980 年（昭和 55 年） 5月 3 日に出会われた田中美穂さん

1	昭和 55 年 5 月 3 日、今から 39 年前です。大宝の先生のお宅に伺いました。
2	短大 2 回生の 4 月に妊娠していることが分かって、U さん夫婦に相談しました。U さんのご主人が「田池先生に相談するしかない」と先生に電話されました。「どうぞいらっしゃい」ということですぐにお伺いしました。先生のお部屋に 1 人通されました。先生は勉強机の椅子に座っておられ、座っている私に向かってお母さんに打ち明けるように言われました。私は死んでも母には言えないと答えました。先生は「私を一番大切に思っているのがお母さんです」と何度も話してくださいました。お母さんに話して、「出来ることなら一緒になって子供を育てていけばよいね」というお話でした。不思議ですが、その時の先生のお姿と話されたお顔は今もハッキリと覚えています。
3	3 人娘の末っ子、それもすぐ上とは 6 歳も離れて生まれてきたため我儘気まま、何でも思い通りにならないと泣き出す、駄々をこねる、最低な幼少期でした。それでも母は私を溺愛し、5 歳からピアノ、12 歳からは YMCA と惜しみなく教育費を注いでくれました。しかし、その溺愛が重荷に感じる年頃から反抗期に入り、母を見下しながら、自分の良いように利用していました。もっときれいなお家に生まれたかった、もっと美人に生まれたかった、中学から私学に通わせてもらいながら不平不満の塊でした。自分に無いものは羨ましい、妬ましい、自分さえ良ければ良い人間でした。姉が結婚して他人が家に入ったことで、家の空気が一変しました。皆が気を使いながらキュウキュウ暮らしている感じがとても嫌でした。結果 1 年も経たない間に、私は結婚したら幸せにしてもらえると信じて 19 歳で結婚し家を出ていきました。
4	私は他力一色でしかなかったということが分かりました。この肉をどう生きていくのかということを中心においていました。その心をひた隠しにし、欲をもってセミナーに参加していた、その欲を満たすために田池留吉をも利用しました。そんな私に先生は優しかったです。「離婚したらあかん」この言葉だけを頼りに人生を歩みました。「あんた何歳になった？」「42 歳です」「42 歳、まだまだひよっこや」年月はあっという間に過ぎ去っていきます。58 歳の今、セミナーに参加できることがうれしい、幸せです。塩川さんから田池留吉を感じることが出来るセミナーは言葉に言い尽くせません。最高です。何にも代えられない時と空間です。大切にしていきます。この私が「この喜びだけで他は何も要らない」と叫ぶからです。何時も何時も思うことが出来る幸せを感じています。あなたは意識ですよ。あなたは愛です、永遠に生きています。あなたは目には見えない存在ですと。そんな私に今伝わる思いは「あなたは田池留吉を信じていますか？」です。掴んでばっかりのこれまでから、離してのこれからを歩みます。

1980 年（昭和 55 年）頃に出会われた皿谷紀美子さん

1	昭和５５年頃に A さんに誘われて、初めてお話をお聞きしました、その時先生が、両手を握りしめてから、指を一本一本開いていって「最後にパーになったら、何もおまへんやろ、握るから苦しいんでっせ」とおっしゃった言葉が忘れられないです。 しかし、この後、私は親、家族ぐるみで○○教団に入信していましたので、先生のところには行きませんでした。
2	夫婦問題が原因となったと思ってきましたが……今思うと当時は何もかもが、いやになって、何もかにも信じられない、もう嫌だ死んでしまいたい、しかし死ぬことも、子供たちのことを思うとできない、絶望の中で田池留吉先生を思いだして、先生なら本当のことを教えてくださると思ったからです。
3	父親が 10 歳の時に病気で死んで、母親は 4 人の子供を連れて大変な苦労をして育ててくれました、それなのにそんな母を見下げて、馬鹿にして、嫌って、嫌ってきました。母さんのような生き方はしないと心に決めていたのです。自己中心な欲張りで我がままで、無知、そのものでした。自分の思い通りになることが幸せになることと思って、祈ってきました。形がすべてと思って頑張って、頑張ってきたのです。
4	本当のことを伝えていただきました。この学びに繋がって本当に良かったと思います。私自身の強欲、己一番、妬み、嫉妬、恨み、呪い……ドロドロでした。元々何もないのに、握ろう、掴もうとするから苦しいんだよと最初に教えていただいていました。先生が伝えてくださっていたことの意味がやっとやっと少しだけ頭に心に入ってくるようになりました。苦しい人生だと思っていましたが……すごい学びに集っていることを感じます。まだまだ肉の中におぼれていますが、何とかそこから一歩抜け出していこうと思っています。うれしいです。この学びに出会えたこと本当にうれしいです。

1982 年（昭和 57 年）頃に出会われた白川イツ子さん

1	校長先生をしておられた時。37 年前。
2	悩み事相談
3	人間関係がうまくいかない、全部人のせいにして、病気を繰り返す人生でした。
4	人ではなく、全部自分の心が間違っているから、肉基準な生き方をしている自分でした。その心癖はしつこく出てきます。 でも学びに出会えたことはうれしいです。奇跡です。

1982 年（昭和 57 年）3 月頃に出会われた岡田宮子さん

1	昭和 57 年 3 月
2	特別、家庭の中に問題もなく子供にも恵まれ、それなりに幸せな人生だと思っていました。私たちの地域に田池先生が立ち寄ってくださり、初めてお会いしてお話を聞く機会を得ました。その時、本当のあなたはこの肉体ではなく、あなたは「意識、心」ですよと話された時、目から鱗が落ちるような思いで驚きましたが、それからこの学びをもっと知りたいと思いました。
3	中学生の頃から、本当のことが知りたいと思っていました。 それは漠然としていて何がということは解らなかった。 神社仏閣には本当の神や仏は存在しないと思っていたから、きっとどこかに私の知らない真実、本当のことがある、それに出会いたい知りたいと思っていました。 そんな折、エホバの証人という人が家に来て、月に二回、自宅で聖書を学ぶ機会を一年ほど持ちました。 聖書の中に出てくるエホバが本当の神ではないかとも思いましたが、私の心にピーンと響く決定的なものがなく確信はありませんでした。 きっとどこかに本当のことを教えてくれる人がいるに違いないと求めている時、田池先生に出会いました。 校長先生といっても威厳があるわけでもなく、ごく普通の方で誠実な感じが安心しました。私は常々、知りたいと思っていることを直接聞きました。 人間は死んだらどうなるのか、身体は朽ち果て無くなり土に返ってしまい、魂も消滅して全て無になってしまうのかと尋ねると、先生は肉体は朽ち果て無くなってしまうが、意識、心は永遠に生き続けることを話してくださいました。その時、何故か心の中からうれしいという思いが湧いてきて、この方の話されていることを私は信じようと思った。どうしてこんな思いになったのか不思議だったけど私は田池留吉をしっかり心に入れてこの学びに集いました。
4	夫にもこの学びを伝えることが出来、夫婦ともに喜んでいます。二人が共に勉強することはとても大切です。例えば家の行事、以前はしていたお盆や墓参りや葬式、初詣など自然と遠のいて夫婦で学べる大切さを実感しています。

1983 年（昭和 58 年）頃に出会われた岩本祥子さん

1	泊りのセミナーの始まる前、家の隣で先生が勉強会を開いていて、母や近所の人がお話を聞いていたころ。
2	小さいころから敏感で、金縛りとかによくあっていて、見えない世界があるのでは？ とか、死んだらどうなるのだろうとか思っていて怖かった。 母に言ってもわからないと言われたけれど、母が田池先生のお話を聞いてから、「さっちゃんの言うことは本当だった。見えない世界はあるんだよ」と言ってくれたので、とてもうれしく、安心して、田池先生の言うことは本当だと思ったから。
3	子供だったので、そんなに人生経験はないけれど、敏感だったのと、病気で小児科に長く入院していたので、そこで赤ちゃんが死んだりして、ほかの子供よりは死というものを身近に感じていたと思う。肉的には優等生だったので、そつなく色々こなしていたと思うが、生きてることにむなしさを感じていた。

4	むなしくて死にたいと思っていたけれど、もちろん、そんな勇気もないけれど、先生に出会って死んでもその先があると確信したので、死ねないと思った。 自分の生きている目的が、最初は頭だけだったけどわかって、若かったので紆余曲折はあったけど、だんだん、心も少しついてきて、生きているのが楽になった。

1983 年（昭和 58 年）頃に出会われた渡辺秀雄さん

1	1983 年か 1984 年、正月の数日前
2	超能力を手に入れる為、その方法を教えてもらえると思いました。
3	本当の自分とは何かを探し求めてきました。 将来を見渡せるそんな力があれば幸せになれると思い知識を詰め込み、宗教にも心がひかれました。
4	田池先生が超能力はありませんと言われましたが、隠しているのではないかと思いました。 自分の心を見るということを初めて知りました。自分の中より色々と思いが出てきました。

1983 年（昭和 58 年）頃に出会われた駒井美智子さん

1	初めて先生にお会いしたのは昭和 58 年、先生がまだ高等学校の校長先生をしておられた頃、N さんのお宅でした。けれども、その少し前に N さんから電話をいただき、先生からの伝言で、まだ一度もお会いしたこともない先生のお宅に電話をすることになりました。 電話の向こうで淡々と話してくださる先生のお話を聞きながら堰を切ったように、心、涙が噴きあがってきたのを昨日のことのように覚えています。
2	突然の姑との同居、嫁姑の戦争、姑の病、私にその言動を通して私の心を見せてくれる姑が憎かった、許せなかった、姑との葛藤の中で心も体もくたくたに、毎日が苦しかった。そんな時、近くの古くから学んでおられた O さん、S さん、I さんといった方達から誘っていただいた。
3	何が本当の幸せか、喜びかわからないままに、肉を掴んで肉、形の中に喜びを幸せを求めてきた。物やお金、環境に恵まれ、わが思いのままに肉を掲げて生きていくことが幸せであるかのように思っていた。心を中に、自分を知ることが分らなかった。人との比較、競争の中で自分を小さく小さく生きてきた。
4	愛を、安らぎを求めながら心をどこに向ければいいのかもわからず苦しみの中をさまよい続けていた私、すべては自分の中にある、何よりも心を自分の中に、田池留吉に向ける、思うこと、心見ることを学ばせてもらう中で、いつの間にか３０数年という年月が過ぎ去っていました。 「私を苦しめることしかしない人なんや」と、あんなに憎んで恨んで、責め裁くことしかできなかった姑が、私の中で少しずつ変わってきました。まだまだ頭の段階に過ぎないのかもしれませんが「お姑さんは、あんたにいちばん愛をくれる人なんやで」と、先生に言っていただいた言葉が今、優しく心に響いてきます。 「お姑さんごめん、お姑さんありがとう、あなたがこの家に来てくれたから私は田池先生に出会わせてもらうことができた」そう思える私があります。心の安らぎを感じている私があります。うれしいです。ありがとうです。

1983 年（昭和 58 年）頃に出会われた足立泰代さん

1	中学生の頃
2	初めは母に連れられて、全然学びをするつもりはありませんでした。独身で自由で好き放題してきましたが結婚して子供が出来て何一つ自分の思い通りにならなくなって苦しくてこの苦しみをどうにかしてほしい、助けてほしい、救ってほしくて学びに集いました。
3	わがまま放題、好き放題で肉の欲望を全て満たさないと気が済まない、気に入らない事はすべて叩き潰すぐらいのエネルギーを使ってきたと思います。今もそうですが肉の自覚は全くありませんでした。

4	本物の自分はこの肉じゃないと教わりました。長い間信じられませんでした。でも不思議な体験を何度か経験させてもらったなかで１番すごいのは自分の体調がものすごく悪い時期が何年もありましたが田池先生がセミナー中のチャネリングの時に「僕が治してあげるよ」とおっしゃって 180 度自分の身体に変化があり、本当に治ったことです。肉じゃなくて意識の世界は本当だと思いました。

1984 年（昭和 59 年）頃に出会われた保野美津保さん

1	定かではないのですが、35 年以上前だったかと思います。友達にさそわれて、千里の O さん宅で田池先生と初めて出会いました。 その時、常々、漠然としていたことが、私と同じようなことを思っている人がいたことに本当にびっくりしたのです。
2	私自身、こんな風に思う私は少しおかしいのだと思っていたのです。
3	それは、こんな生き方をしていて本当にいいのか。他に何かしなければならないことがあるのではないか。やるべき何かが本当にあるのではないのか。 このまま、このように、今のまま、生きてそして死んでいっていいのか。もし、死んでからやるべきことがあったと気付いたらどうするのか。それでは遅いと。 本当にやるべき何かがあるのなら、それに出会いたい。こんな思いを人に話したら、「お前はアホか。何をねごと云っているのだ」と一笑されたのです。 私は自分は少しおかしいのだと思っていたのです。でも私と同じようなことを思っている人がいたことに、本当にびっくりしたし、うれしかったのです。 答えをもらったと、そう感じたのです。それが始まりでした。
4	全部自分の外に責任転嫁してきました。けっして自分は間違っていないと本気でそう思っていました。それが間違いだと伝えられて猛反発しました。 くそ田池！！の連呼でした。30 年を経て、今やっと、やっと自分が間違ってきたことを気付いていくことが出来る喜びを感じ始めています。 うれしいという思いが、これ程の思いだったなんて、本当に信じられない程うれしいです。 何が？ 何で？ なんて何も関係なくて、本当に何もないのにうれしいなんて、ありえないけれど、あるんです。

1984 年（昭和 59 年） 6月 4 日に出会われた倉本季子さん

1	昭和５９年６月４日です。
2	夫婦の問題で苦しんでいました。何をしに生まれてきたのか知りたかったのです。
3	５歳か６歳の時から何をしに生まれてきたのか誰か教えてと探している子供でした。母に聞いたら「女の子は学校行って大きくなったらお嫁に行き、赤ちゃんを生んで」と言って教えてくれました。中学校を卒業してから５年間お屋敷で住み込みで働きました。何でも揃っている所でも苦しみはあるんだなって若いながら感じました。21 歳でお見合い結婚、主人は 24 歳でした。幸せになれると思いましたが、一週間で「結婚って一人の時より大変や」と驚きました。 23 歳で長男を、24 歳で長女を、26 歳で次男が生まれました。主人は大喜びしていました。リューマチを患ったお姑さんの介護と小さな子供の育児で毎日がへとへとになりました。今世界で一番忙しい人は私だと思いました。次から次へと心配事があります。ままならないことがあります。手のかかる姑に朝一番に苛立ちます。「ああ早く楽になりたい、楽になりたい」と思う毎日でした。夜になって台所のテーブルにうつむいて５分間じっとするのが唯一の楽しみでした。 結婚すれば幸せになれると思ったのは甘い考えでした。次から次へと心配があります。それをなくしたいから子供に怒ってばかり、主人を責めてばかりいました。 手のかかる姑がいなかったらこんなに忙しくないのにと朝の一番から思いました。12 年間お世話が続いたある日「わしが死んだら多恵子の病気を大きな川に流してやるから忘れず耳元で大きな声で言いや」と言われました。それを聞いて私は孫の病気を心配してくれていたんやなあ、悪かったと泣きました。 それから２年後、田池先生とお出会いしました。同じ富美ヶ丘に住むＹさんに田池先生のことを伝えてもらったのです。

4	昭和５９年６月４日に白桃園のNさんのお家で田池先生と初めてお会いするなり「お会いしましたね」と、開口一番に言われました。どこでお会いしたのか考えていますと「まぁまぁ、いい」と言われ、「法があります」と物を上から手を離すしぐさをされました。それからは何か分かりませんが、うれしい気持ちで家事をやるのです。子供たちの土曜日のお昼ご飯はサンドウィッチを３人分作って田池先生の追っかけです。 36 歳で「私学校に行きたいと、いつも思うのです」とお話したら「田池学校にいらっしゃい」と言ってくださり「はい」と入学しました。 38 歳の時は、「今までの 36 年間よりもこの２年間のほうが良いわ」と思いました。 小学校の子供の懇談会に行くと「お母さん、多恵子ちゃんがいい子になりました。お家で何かありましたか?」とお聞きになりました。同じ日、次男の懇談でも同じことを聞かれました。「田池先生と出会ってから私がうれしい気持ちで暮らしているからかな?」と、それしかありません。 主人の大病も自分の心を見ながら「恐ろしい私」と思いました。酒飲みの夫を嫌がり嫌う冷たい冷たい私でした。まだまだこれから溜まった間違いを見ていかないと、この苦しく感じる心を楽に自分でしていこうと前向きに思えるのがうれしいのです。 主人が「水が美味しい。酒より美味い」と言います。30 年以上かかりました。 30 年前、田池先生が私がお酒で苦しんでいる時「飲まなくなるからね」と励ましてくれたことが、令和元年、お正月のお酒も飲まなくなりました。 後先になりますが、私は平成元年１月 17 日(今から 30 年前)に精神内科に入院したことがあります。意識を受けていた時です。中から脅してきて混乱してしまったのです。ふっと我に返った時、田池先生にお電話で「どんな時も喜んで喜んでいきなさい」と教えていただきました。 退院してから「ご心配をおかけしてすみませんでした」とお詫びに伺いました。「私は何も心配していません」「これは奥さんが通る道でした」と主人に言われました。「これから供養していきなさい」と私に言われました。まだ始めのころでしたからなかなかうまくいきませんでした。 こんな大変な私を心底大事にしてくれる学びの友達に会えて、毎日が楽しくなってきました。うれしかったです。 「心の中のものはみんな自分です」と思えるようになりました。２０１９年８月橿原セミナー現象の時間、「私が望んで差別のなかに生まれてきたあ〜」と、はっきり思い出しました。塩川さんが「もう狂うことはありません」と言われました。うれしくてうれしくて。ありがとうありがとうありがとうと言いました。田池学校で真実を学びます。塩川さん、ありがとうございます。学びの友達、ありがとうございます。UTA ブックさん、ありがとうございます。

1984 年(昭和 59 年)５月頃に出会われた水本佳典さん

1	1984 年5月頃。大学1年生。
2	友達に誘われて信仰しようとしていた宗教をめぐって両親と対立し、困った母親が、当時、近所で開かれていた集まりに時々参加していたのだが、その田池先生の勉強会のことを思い出して、一緒に田池先生のところに相談に行こうと言い出した。そして、先生の自宅で話を聞いているうちに、こちらの学びをしようと思ったのがきっかけだった。
3	教育にとても厳しかった両親が言うので、一生懸命、勉強をして、目標の大学に合格できたので、ほっとしていた。自分自身は、なんとしてでも、いい大学に行きたかったというわけではなかったが、私立にでも行こうものなら、「働いて授業料を払ってもらう」といわれていたので、ほっとしていた。 その一方で、極度の緊張症の自分は、とてもまともな社会生活は送れそうもないような気がしていた。そういった意味で、無茶苦茶落ち込むわけではないが、八方ふさがりというか、袋小路というか、出口の見えない気分だった。
4	別に、先生に相談したわけでもなかったのだが、極度の緊張症がすごく改善されていったので、びっくりした。 もう一つは、当時、研修会や一日の勉強会で先生の話される内容が、まさに、自分が思い悩んでいること、自分のこと、本当に、「隣で見てたんか?」と聞きたくなるくらい自分のことだったので、それが本当に驚きだった。 また、その答えが、今まで誰からも聞いたことがないような答えだったので、そして、何とも言えない暖かい答えだったので、聞いていて、何度も泣きそうになるのだが、当時は、こんなところで泣いたらあかんと思っていたので、必死で涙をこらえながら講話を聞いていました。

1984 年（昭和 59 年）頃に出会われた水本裕子さん

1	小学校 3、4 年生の頃、家の近所のNさん宅で行われていた勉強会に田池先生が来られていて、そこに母と一緒に行かせてもらった時に田池先生と初めて会いました。
2	小学生から高校生くらいの間は、正直、母に連れられてセミナーに参加していたのが現実でした。社会人になり、セミナー参加を一緒にと誘ってくれている母に対して、「何回言われても行かないから、もう誘わないで」と言ったことを覚えています。それでも本当に親子で一緒に学びたいという母からの思いに後押しされる形で下呂セミナーに参加する機会があり、3 日間のセミナー中、心を向ける、自分を思うということをやってみようと思えたことから現在に至ります。
3	小さい時から人見知りをして、すぐに自分を小さく小さくする心癖がありました。学級委員などに自分から立候補したり、それでも自分の思い通りにはいかない時には、やはり自分は駄目だと心を小さく閉じ込めていました。そして時には願いを叶えてもらえるように心の中で祈っていました。それが叶った時に自分は幸せだ、願えばいつかは叶うものだと感じていたのだと思います。
4	まず田池先生に会うと、何かわからないけれど心に響くものがありました。それは今思えば田池先生から流れる波動でしたが、田池先生の目を見ると、どこまでもただただ優しい、そんな思いを会うたびに感じて、自然と涙が溢れ自分に素直になっていこう、素直になってみようと思った時、その思いに沿って肉の自分が自然と動いていたことを覚えています。今まで感じたことのな優しい優しい思いでした。自分の思いに素直になることを体験させてもらっていたのだと思います。

1984 年（昭和 59 年）頃に出会われた朝日めぐみさん

1	小さい頃（弟が生まれていなかったので多分４歳とか５歳ごろ・約３５年前)、母に連れられて。
2	幸せになりたいという思いがとても強かった。どうすれば幸せになれるのか、いつも考えていた。家族、友達、異性、仕事…、結局、私が求めた幸せはどれもうまくいかなかった。頭打ちになり、生きている意味がわからなくなって、生きている意味がないんじゃないかとまで思うようになり、18 歳の時に母がやっていたこの学びに行ってみようと思った。
3	幸せを全部自分の外に求めていた。苦しくて苦しくて仕方がなかった。その苦しさをどんな手を使ってもなんとかしたかったけれど、なんとかすることも誤魔化すこともできなかった。実際に学びに集うまでの学生時代は、幸せになるために自分が持っている最大限のパワーを使った。苦しんでいる姿を見たくなかったから、家族や友達など周りの人がみんなが幸せになれる方法を考えていた。そのパワーはアマテラスのパワーだったと今思う。
4	田池先生に出会った後も、苦しいのは変わらなかった。本に書いてあることは私にとって異次元のことだった。異次元のことなんだけど、その話を聞きにセミナーに行っている自分という存在に対しても不思議に思っていた。でもこの学び以外に私の探す答えは見つからなかった。田池先生は何者なんだろうとセミナーに行くたびに考えていた。何度もセミナーに足を運ぶうちに、ある時「この本に書いてあることが本当のことだったら」と思い、他にこれだと思うものもないし、この学びを真剣にやってみようと思った。やってみて、ダメだったらその時考えようと。 自分にとっての人生、生きていく方向が変わったと思う。方向を教えてもらったことはすごいことだと思う。

1985 年（昭和 60 年）7 月 15 日に出会われた三室勝文さん

1	昭和 60 年 7 月 15 日。羽曳野のＳさん宅 2F。
2	高校の 3 年先輩から誘われ「高橋信次の流れをくむ話をする元高校の先生がおられる。 2、3日後に会合があるが、どうですか」と誘われ、何のためらいもなく、OK し当日車で参加。

3	ずっと道を探していました。他力信仰をしながら、とくに、その本部発行の冊子とかパンフは読み漁りました。どれもウンと感じるものがなかった。そのころ先の先輩（N氏）から GLA の存在を聞き、本はかなり読みました。会員になる直前に田池先生に出会えました。他力信仰の神々が捨てられることを察して先手を打たれたのか知らないが、（昭和 59 年 4 月 24 日午後 8 時ごろ）強烈な心臓発作をおこしました。死ぬと思うぐらいだった。
4	セミナーに5、6回参加したころふと気がついたこと。犬に吠えられなくなった。それまでは犬の９割以上に強烈に吠えられるし、猫は猫で背中をまるめ、フウーーッと睨みつけられていた。猫にたいしては「こちらも負けておれるか！！」と睨め返し相手が逃げるまで、目をそらさなかった。 今思えば、ほんと、おそまつそのものでした。もうひとつ、同じころ気づいたこと。モノ集めのかなりきつい執着心が消えていた。なにもそのことに関するような反省などしてなかったのに。これは自分でも不思議でした。直そうと思ってもなかなか直せないこと、いっぱいなのに。

1985 年（昭和 60 年）頃に出会われた蓮沼邦子さん

1	出会った時は、まだ校長職に就いておられました。白桃園の友達の家で、暑い暑い夏の8月11日だと記憶しています。その後は富田林のTさんのお宅で、毎日のように先生を囲んでお茶したり食事をしたりの雑談の中にも、今振り返れば今日の講話の中の文言と変わりはなかったと記憶しています。
2	嫁姑戦争です。その中で、パチンコ狂い、キッチンドリンカーで、自暴自棄の時でした。
3	夫も子供達にも問題はなく、私の生き方に問題があったのですが、その時は、苦しいとか辛いとかの心の状態も精神状態も分からないです。何が正しくて、間違っているのかも分からない。恥ずかしながら、したいことをし、やりたいことをする、そんな日々を時間を過ごしていました。学んでから振り返れば異常事態だと分かり始めました。
4	どんな方法で自分を変えたかではなく、先生に出会って、いつの間にか変わらせていただいていたといった方が良いと思います。縋ったというのではなく、先生の話を聞いていくうちに、「ああ、母の反省ね」と、イヤイヤ始めてたら自分の愚かさが見えてきたということでしょうか。

1985 年（昭和 60 年）3 月頃に出会われた渡海恵子さん

1	1985 年 3 月
2	夫婦の問題と病気
3	幸せ、優しさは誰かにしてもらうものだと思っていました。いつもいつも心は外へ向いていました。初めはいいのだけどお付き合いをしてもなんか違うとすぐに離れていきました。就職しそこで主人と出会い、みんなに優しいし、社内では評判もよかった。結婚すると思っていたのとまったく違かった。帰りはみんなが寝静まってからだし、休日は家にいないし、家族で出かけることもなかった。毎日が寂しくて主人をずっと責め続けていました。まだ 22 歳。文句も口には出せずにいつも飲み込んできました。すぐに体に出てきました。次から次へと大きな病気ばかりしてました。全部主人のせいにしてきました。最後は鬱になり寝られない日が続きました。お酒でも飲めば寝られるかなと思い飲んでも駄目でした。そんなときに田池先生の話を聞いた友達から電話があり、私の今の状態を話しました。次の日に朝早く奈良から来てくれて帰る間際「あなたに神の話をしたら蹴られそうだけど」って言いながら「田池留吉さんていう学校の先生が N さんのとこに来られていていろんな話をしてくださる」と聞いたとき、私はその N さんの家に飛んでいきました。夕食の支度をされていたので 2 階に案内され田池先生が「神は愛なり」というテープを聞かせていただいていると、泣けて泣けて鼻は出るし、間違っていました間違っていましたって出てくるのです。今迄私は自分が間違っていたなんて思ってもいなかったのに何がおきているのか、初めての体験でした。
4	ずっとずっと長い間大嫌いやったお母さん。恨んで、呪い続けてきたけど、今、お母さんと思うと、ごめんなさい、ありがとうが言えることがうれしいです。

1985 年（昭和 60 年）頃に出会われた小泉淑子さん

1	34 年前、JAL の御巣鷹山の事故の後、田池先生がMさんの実家でお話をされた時に初めて参加しました。Mさんの奥様とは中学からの同窓でした。 たまたまその直前に、私は夫婦の問題で悩んでおりました。Mさんが好いお話をしてくださる方がみえるので……と誘っていただいたのが田池先生との初めての出会いです。
2	夫婦の問題
3	夫婦の問題が起こる前は、人生とは？ など深く考えることもなく、それなりに幸せな人生だと思っていました。いろいろな問題も自分が努力すれば解決できると思っていました。あまり深く人生の意味など考えたこともありませんでした。人生いろいろ、浮き沈み、それが人生だと……。 元気で楽しく好きなことをして生きていました。しかし、夫婦の問題が起こってから、自分の力では、努力ではどうにもならない問題でした。 人の心は変えられない……そこから苦しみが始まったと思いました。なぜこんな苦しいことがわが身に起こるのか……と。
4	初めてお会いした時に聞いたお話の文言、それは「今苦しんでいる人は、あなたが間違っています」でした。何が間違っているのか？ わからないまま 34 年が経ちました。何が間違っていたのか……そして何の為に生まれたのか？ やっとやっとこれからそれをしっかり自問自答してと思う今日この頃です。 セミナーは数多く参加していますが、この学びについて何一つわからないまま時間が過ぎてしまいました。先生が伝えてくださっていたことの意味がやっとやっと少しだけ頭に心に入ってくるようになりました。苦しい人生だと思っていましたが……すごい学びに集っていることを感じます。 苦しかったからこの学びに繋がりました。無駄にしないで死ぬまで一筋と行きたいものです。まだまだ肉の中におぼれていますが、何とかそこから一歩抜け出していこうと思っています。うれしいです。この学びに出会えたこと本当にうれしいです。心をしっかり見る、心を中へ向ける。常に田池留吉を思う！ 頑張ります。

1985 年（昭和 60 年）頃に出会われた大北知衣子さん

1	今から 30 年以上前、S さんのお宅の 2 階で開かれた勉強会に、初めて参加させていただきました。
2	子供の病気がきっかけです。
3	自分を振り返ることもなく、ただ私の凄まじい怒りのエネルギー、破壊のエネルギーを振りまく日々でした。
4	田池先生に出会うことがなければ、我が家は私の出すエネルギーによって、確実に崩壊していたことでしょう。母親の反省、そして自分の心を見るということを伝えていただいて、ほんの少しでも実行してきたことは、本当に凄いことでした。ただただありがとうございましたしかありません。学び始めの頃、セミナーの現象の時間に壇上で田池先生と言葉を交わしているときにかけてくださった言葉もこの上なくやさしかったけど、その時伝わってきた思いのやさしさ、あたたかさに衝撃を受けました。ああ、私はこの思いを知っていた、だけど長い長い間忘れ去っていた、この学びの本質はこれだ、とそのとき心で感じたと思います。

1985 年（昭和 60 年）頃に出会われた岡田忠さん

1	田池先生との出会いは昭和 60 年頃、大阪市内で先生の講演会に参加した時だったと思います。それ以前から、「つれあい」がこの学びを行っており、田池先生のことは知っていましたが、あまり学びに興味がなかった。
2	「つれあい」があまりにも熱心にこの学びをしていたので、「変な宗教」にかぶれているのではないかと、様子見を兼ねて田池先生の講演会に参加した。
3	田池先生（この学び）に出会う前の自分は、極めて一般的な日本人？ でした。あまり信心深い方ではありませんが、正月の初詣、彼岸やお盆の墓参り、旅行等で訪れる神社仏閣に手を合わせ健康や家内安全等を祈っていた。勿論、お葬式も荘厳なものとして参列していた。 人生の目標としては、現役時代はそこそこの地位に就きたいと思い、また子どもができた時は家族の幸せを求めたものです。仕事での地位はそれなりの努力（挫折もあったが）によりそこそこの地位に就くことができた。また、家族も大過なく過ごしており、今は幸せだと思います。

4	田池先生の初めの頃のお話で「自分の外に神はいない。自分の中に神（本当の自分）がいる」を聞き、他力で肉どっぷりの自分にとっては「目から鱗が落ちる」の感じでした。それまで当然行っていた、初詣や墓参りはもとより、神社仏閣に手を合わせることもしなくなりました。お葬式についても極力避けていますが、立場上やむを得ず参列する場合は極めて事務的に参列しています。また、身内の葬儀についても故人のお別れ会として極めて簡素に行ってきました（親戚からはこんなんでいいのかの声もあったが……）。今は夫婦 2 人で田池先生（この学び）に出会ったことを本当に喜んでいます。

1985 年（昭和 60 年）8 月頃に出会われた近藤徳子さん

1	O さんのお宅の勉強会に参加して、初めて田池先生に出会わさせてもらいました。1985 年か、1986 年かの 8 月 17 日か 18 日かです。
2	嫁いでから、色々なことが起こり（病人が出たりとか）、その時に嫁ぎ先に何か因縁があるのかと思ったりもしました。この結婚は失敗だったのではないかとも思い始め、いつも、イライラしている私がいました。心の拠りどころを見つけたくて、何がいいのか分からないし、そんな時に、同じ仕事仲間がこの学びのことを話しているのが耳に入ってきて、すぐに、田池先生という人に会いたいと思いました。
3	いつも自分が一番でした。本当に好き勝手に生きていました。我儘気ままで、親を下に見て、それなのに、困ったときは親を頼り、どうしようもなかったと思います。自由気ままに自分勝手に生きていた。幸せになりたい思いはとても強かった。でも、幸せは外からくると思っていたから、何もかもが違っていたんですね。
4	嬉しかった。何がどう変わったかは分かりませんが、心に感じる体験を通して色々なことがありました。文章にまとめられないですが、これしかないの思いに自分を吸引させて、今も学ばせていただいています。

1985 年（昭和 60 年）春頃に出会われた西前忠久さん

1	母親は生長の家〜 GLA と、母なりに真実を求めて首を突っ込んでいましたが、いつも長男の私を引き連れて参加していました。結局は、どれも違うということになり、じゃあ一体何が本物で何が偽物なのか……と母が鬱々としていたところへ、親戚の荒木さんから「南大阪に本物の先生がいるらしい！」との情報が飛び込んできました。まず母親が話を聞きに行き、「多分今度は本物だ、だからあんたも会いに行きなさい」と言われましたが、「宗教はもう嫌だ！」と拒絶。でも母は何としても会わせたかったみたいで、「髪型がお父さんと一緒で親しみがあるからおいで」と。まぁ、そこまで言うのなら一回だけ行ってみようかな……。こうして昭和 60 年（1985 年）の春、二十歳の時に母親に連れられて、大宝の田池先生のご自宅で初めて先生と会いました。
2	母親に誘われて集う。この頃は大学三回生。特に何か大きな出来事があったという訳ではないが、その前後に幾つか出来事が……。 〇当時、自分は右寄りの活動をしていたが、1983 年9月1日に大韓航空機撃墜事件があり、抗議のためソ連の領事館に突入。そのことがきっかけで何が正しいのかそうでないのかが分からなくなり、政治活動の母体だった生長の家をやめた。 〇親の夫婦喧嘩が激しく、離婚はもう時間の問題だなと感じていた。自分はどっちの親に付いて行くのかな？ 〇大学生活が、自分が思っていたような超専門的な所がなく、無駄に日々を過ごしているとずっと思っていた。また将来への不安も大きかった。 〇大学三回生の夏休み。野球部の合宿に主将として鉢伏高原へ出発する直前に、田池先生から伝言で「これからいろんなことが起こって来ますよ」と、母づてに聞かされた。実際合宿が始まると…… 1、自分の投げた牽制球が走者の眼鏡に当たり粉々に、あわや失明の危機／2、数百キロある発電機を軽トラで搬送中、上り坂でそれが逆走。発電機を支える数名が荷台から跳ね飛ばされ、一名が脚を挟まれ宙ぶら状態のまま走行。奇跡的に軽傷で済む／3、グラウンドのコンデション不良のため、別のグラウンドに車数台で移動中、ジムニーが突如暴走。そのままグラウンドの土手に激突、乗り上げ横転。煙が出るも火災は免れる。乗車していた二人はなんと無事／4、もう合宿どころではなく、反省会後大学へ戻り、解散後、疲労困憊で意識が飛んで倒れる。……そういえば田池先生、いろいろ起こるって言ってたな！ 「これのこと？！　当たったじゃん！」と、田池先生に一目置くと同時に、学びに興味を持つきっかけとなった。 〇田池先生から「何か大変な出来事が起こったりした時は、私を思うようにしなさい」と、これも母づてに聞かされた。22 歳の夏、ヤクザに絡まれ、相手がドスを抜こうとして大ピンチ。「田池先生！」と心で何度か呼んでみた。と、相手が急に醒めたようになり、脅し文句を残して去って行った。驚いた！

3	○小さい頃からずっと両親に「勉強しなさい！　勉強していい大学へ行き、きちんとした会社に就職し、世の中の役に立つ立派な人間になりなさい！」と言われ続けて育った。「世の中の役に立つ」は共感したが、他に興味や、やりたいこともあったし、会社員は絶対に嫌だと思っていた。それが人間の一生なのか？？と素朴な疑問があった。 ○仏壇に毎日手を合わせる。お供えをするのは自分の仕事。 先祖供養、祖先に敬意を表することは人間として最も大事だと、基本だと教えられ育った。年寄りを大事にする、社会的弱者を支える、人助けは素晴らしい。究極の人助けは、自分が人の生き方とは何かをまず知り、それを人に伝えること……とか思っていた。 ○ 16、7 歳くらいから、どういう訳か何か得体のしれない自信が漲りはじめた。闘いのエネルギーが湧いて出て来るような、そんな感覚だった。自分がこれは！と思うものへのアプローチは徹底的だった。その実績がまた自信となり、どんどん己が偉くなっていった。努力すれば望みは必ず叶う！と信じていた。基本的にこの生き方でやって来た。 ○今思えば、これまでの人生では人間関係が一番難しく、一番苦しいことだった。
4	正直なところ、よく分かりません。

山之口全さん　田池留吉先生　小林荘一さん（1974 年 GLA 時代）

田池先生のクラスではありませんが、市岡高校での授業風景です。

ＧＬＡ時代の盟友・小林荘一さんや山之口全さんも、やがて田池先生の下に集うようになった。上の写真は、そんな小林荘一さんの絵手紙（1991 年）

Mother and Reflections on Mother

Do you understand what kind of entity "mother" is? Do you understand the importance of commencing this study with reflections and meditation about "mother"? "Mother" is the core of this study. It is the launching point to understanding your true existence. It is the first step that must be taken in order to comprehend an iota of the truth.

It is only through this corporeal world, through the human experience of having a mother, that you can access the truth about your existence and warmth. I want you to think seriously about your mother, and why you have a mother.

Mother's warmth is the essential energy that we are. It is the energy of existence and is our essential nature. Please everyone, I want you to return to this essential nature. Can you feel this warmth that permeates everything?

Right now you may not remember, but I want to tell you what mother's warmth is: it is undying love, warmth, and positive energy. It is always embracing and forgiving you, and always willing to do anything for you. It is the warmth which sacrifices anything to make you comfortable. It would do anything to protect you, and that is the warmth we truly are. This is the warmth within your heart. This warmth is always surrounding your heart and is the warmth that is your heart. Finding your warmth within - this true energy - will save your darkness, your suffering and sadness, and will enable you to return to your true heart of warmth.

We have these physical bodies on this earth, so that we may have the experience of being in a womb and being born unto a mother. For those 40 weeks we can experience this, and our consciousness may recall this consciousness of mother. This is the easiest way to come to know the truth. Understanding the vibrations and energy of this existence can only be begun by mother's reflection. Once you cross the entry point through understanding mother's warmth and can connect with it in your heart, then it will be quick for you to understand your real truth and your real existence.

I don't mean to say that your physical mother is perfect in every way, or that she didn't do unkind things to you, but the essence of her heart is one of warm embrace. It has always been reaching out to you. Can you understand how a mother

feels about her children? You would know that there is such love and warmth that embraces you. You need to look beyond the physical ways she treated you and look past the hurtful things she might have said to you. If you look within the deepest part of your heart, you know your mother is always accepting you. In this physical life, she may not know how to show it, but her heart is a warm embrace.

In addition, through this present mother you can access the loving embrace of the tens of thousands of mothers that you have had. True warmth is resonated through your current mother. She may have beat you, been harsh with you, may have said 'no' one too many times, but underneath has always been a heart caring and embracing you, accepting you for everything. No matter what her physical presence says, her heart is always caring for you. Can you feel the energy of love surrounding you? Can you look past all the misdeeds and feel that mother's consciousness is always surrounding you? This is what you learn from mother and from the many mothers you have had. Mother's warmth stretches its arms out surrounding and embracing you.

If you cannot recall your mother's warmth, this study will be meaningless to you. If you do not feel mother's warmth, it will be impossible to understand the consciousness of **Tomekichi Taike**. Also, it will be impossible for you to understand the journey of consciousness.

Finding the warmth: Reflection

Firstly and lastly, I ask you to reflect on your mother. Mother is the key. Reflection on "mother" is the easiest and quickest way for you to understand the truth. The act of reflecting is just as it sounds. It is an exercise of thinking deeply on some issue or questions. As a beginner to this study, it is good to keep a journal of some sort addressing questions of mother. The physical act of writing, in a stream of consciousness fashion, will help one focus and explore the topic of mother. It is helpful to write answers off the top of your head rather than analyzing the questions and formulating a coherent and beautiful answer. I also admit that writing about your mother a few times will not lead you to the answers right away. But like physical exercise, if you make it a habit and do a little everyday, you will see results. Reflection is the same. If you do a little reflection everyday, day after day, I know you will come to find the answers you have been seeking for. The truth will appear to you. **("Our Essential Nature")**

第３回霊性開発会日程

４月２５日（土）

13:00 ～ 13:10　研修の案内

13;10 ～ 14:40　講話　「霊性開発と人生」

15:00 ～ 15:50　Ａ組　神の子の道の学習　　Ｂ、Ｃ、Ｄ組　個人指導

16:00 ～ 16:50　Ｂ組　〃　　Ａ、Ｃ、Ｄ組　〃

18:00 ～　夕食　※　入浴時間　16:50 ～ 19:00

19:00 ～ 19:50　Ｃ組　神の子の道の学習　　Ａ、Ｂ、Ｄ組　個人指導

20:00 ～ 20:50　Ｄ組　〃　　Ａ、Ｂ、Ｃ組　〃

21:00 ～ 22:00　全体　霊的体験、反省と調和の実践体験の発表

22:00 ～　自由時間・就寝

４月２６日（日）

～ 7:30　起床・自由時間、朝食

8:30 ～ 9:50　反省と瞑想

10:00 ～ 11:00　質疑応答

11:10 ～ 12:00　感謝と祈り、交霊

12:10 ～ 12:30　感想「霊性開発会に参加して」

霊性開発と人生

1　人間はどのような目的または使命を持ってこの地上界に生まれて来たか。

⑴　魂の浄化と霊性の開発。

⑵　神意の具現。

2　霊性を開発するとはどういうことか。

⑴　神の下に帰る。

⑵　愛の放射塔となる。

3　霊性を開発する為には、絶えず、神に自分の心を向けておることが必要である。

⑴　肉の思いを捨て、肉の囚われから己を解放する。

⑵　神の光の中にある自分に気付き、神に愛され生かされている幸せを喜び感謝する。

⑶　神に近づき、神と一つになり、神の心を自分の心としてゆくように心掛ける。

4　霊性を開発して真の自己に出会えることが最大の喜びであり幸せである。

⑴　人間は神の子、みんな平等である。

⑵　我は光、我は愛、我は法、我は道なり。

⑶　偽我なる心を取り除き、真我なる心を知った時本当の幸せを感じ、真実の安らぎを得ることが出来る。

この時期は、「反省研修会」以外にも「霊性開発会」のような勉強会も開かれていました。

第2章　反省研修会、はじまる!!

1986 年（昭和 61 年）
5 月 6 日〜7 日《第 1 回反省研修会／富田林簡保センター》
6 月 10 日〜 11 日《一泊の反省研修会》
9 月 24 日〜 25 日《一泊の反省研修会／東京の S さん宅》
9 月 29 日〜 30 日《第 12 回反省研修会／富田林簡保センター》
10 月 13 日〜 14 日《第 13 回反省研修会》
10 月 21 日〜 22 日《第 14 回反省研修会》
10 月 23 日〜 24 日《第 15 回反省研修会／富田林簡保センター》
11 月 11 日〜 12 日《第 16 回反省研修会》
11 月 17 日〜 18 日《第 17 回反省研修会／富田林簡保センター》
11 月 15 日〜 21 日／三原山噴火、溶岩が流出し溶岩湖が出現。
11 月 26 日〜 27 日《第 18 回反省研修会》
11 月 29 日〜 30 日《第 19 回反省研修会》
12 月 17 日〜 18 日《第 20 回反省研修会》
12 月 29 日〜 30 日《第 21 回反省研修会／有馬簡保センター》

1987 年（昭和 62 年）
1 月 7 日《富田林市の O さん宅で日帰り反省研修会》
1 月 23 日〜 24 日《第 22 回反省研修会／東京青年文化会館》
1 月 31 日〜 2 月 1 日《第 23 回反省研修会／富田林簡保センター》
2 月 11 日〜 12 日《第 24 回反省研修会／有馬簡保センター》
2 月 28 日〜 3 月 1 日《第 1 回霊性開発会》
3 月 7 日〜 8 日《第 25 回反省研修会／滋賀県青年会館》
3 月 8 日／日向灘地震　死者1、負傷6、354 戸損傷。
3 月 20 日〜 21 日《第 2 回霊性開発会／富田林簡保センター》
3 月 31 日〜 4 月 1 日《第 26 回反省研修会／富田林簡保センター》
4 月 18 日〜 19 日《第 27 回反省研修会／有馬簡保管センター》
4 月 21 日〜 22 日《第 28 回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
4 月 25 日〜 26 日《第 3 回霊性開発会／富田林簡保センター》
4 月 30 日〜 5 月 1 日《第 29 回反省研修会／富田林簡保センター》
5 月 5 日〜 6 日《第 30 回反省研修会／有馬簡保センター》
5 月 19 日〜 20 日《第 31 回反省研修会／滋賀県立青少年会館》
5 月 23 日〜 24 日《第 32 回反省研修会／富田林簡保センター》
5 月 28 日〜 29 日《第 33 回反省研修会　／熱海富士屋ホテル》
6 月 12 日〜 13 日《第 34 回反省研修会／富田林簡保センター》
6 月 20 日〜 21 日《第 35 回反省研修会／富田林簡保センター》
6 月 23 日〜 24 日《第 36 回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
7 月 11 日〜 12 日《第 37 回反省研修会／滋賀県立青少年会館》
7 月 17 日／石原裕次郎さん、肝臓がんで逝去
7 月 19 日〜 20 日《第 38 回反省研修会／有馬簡保センター》
7 月 24 日〜 25 日《第 39 回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
7 月 28 日〜 29 日《第 40 回反省研修会／富田林簡保センター》

8月14日～15日《第41回反省研修会／京都堀川会館》
この頃、チャネラーの方からアルバート・ロックフェラーと250年後のアメリカの意識が出はじめる。
8月22日～23日《九州福岡で反省研修会》
8月25日～26日《第42回反省研修会 ／熱海富士屋ホテル》
8月29日～30日《第43回反省研修会／京都堀川会館》
9月3日～4日《第44回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
9月11日～12日《第45回反省研修会／京都堀川会館》
9月19日～20日《第46回反省研修会　／富田林簡保センター》
9月25日～26日《第47回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
10月2日～3日《第48回反省研修会／京都堀川会館》
10月12日～13日《第49回反省研修会／京都堀川会館》
10月19日／ニューヨーク市場大暴落"暗黒の月曜日"
10月20日～21日《第50回反省研修会／富田林簡保センター》
10月26日～27日《第51回反省研修会／京都堀川会館》
11月4日～5日《第52回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
11月22日～24日《第53回反省研修会／花巻温泉台泉館（2泊）》
12月10日～11日《第54回反省研修会／富田林簡保センター》
12月12日～13日《第55回反省研修会／東京青年文化会館》
12月17日／千葉東方沖地震　死者5、負傷123
12月26日～27日《第56回反省研修会（男性）／京都堀川会館》
12月28日～29日《第57回反省研修会／富田林簡保センター》

1988年（昭和63年）
1月9日～10日《第58回反省研修会／かんぽーる京都》
1月23日～24日《第59回反省研修会／東京青年文化会館》
1月30日～31日《第60回反省研修会／富田林簡保センター》
2月9日《大阪府羽曳野市のMさん宅で勉強会》
2月10日～11日《第61回反省研修会／京都堀川会館》
2月20日～21日《第62回反省研修会／白浜温泉ホテル千畳》
2月26日～27日《第63回反省研修会／東京ゆうぽうと》
3月5日～6日《第64回反省研修会／富田林簡保センター》
3月12日～13日《第65回反省研修会／東京全社連会館》
3月13日／青函トンネルが開通し、青函連絡船が幕を閉じる。
3月20日～22日《第66回反省研修会／花巻温泉松雲閣（2泊）》
4月1日～2日《第67回反省研修会／京都堀川会館》
4月16日～17日《第68回反省研修会／東京全社連会館》
4月23日～24日《第69回反省研修会／山中温泉ホテル百華苑》
5月7日～8日《第70回反省研修会／東京全社連会館》
5月13日～14日《第71回反省研修会／京都堀川会館》
5月21日～22日《第72回反省研修会／富田林簡保センター》
5月22日《大阪市の伊藤多美子さん宅で勉強会》
5月27日～29日《第73回反省研修会／白浜ホテル千畳（2泊）》
6月11日～12日《第74回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
6月18日～19日《第75回反省研修会／かんぽーる京都》
6月25日～26日《第76回反省研修会／東京全社連会館》
7月2日～3日《第77回反省研修会／北九州簡保養センター》
7月9日～10日《第78回反省研修会／かんぽーる京都》
7月15日～17日《第79回反省研修会／白浜ホテル千畳（2泊）》
7月29日～30日《第80回反省研修会／東京ゆうぽうと》
8月4日～5日《第81回反省研修会／京都堀川会館》
8月13日～15日《第82回反省研修会／花巻温泉松雲閣（2泊）》
8月20日～21日《第83回反省研修会／東京青年文化会館》
8月26日～28日《第84回反省研修会／白浜ホテル千畳（2泊）》

第１回反省研修会

田池先生が、1986 年３月に依願退職され、念願だった反省を中心にした一泊の「反省研修会」がスタートしました。

第１回は、大阪府富田林市にある「富田林簡易保険保養センター」で、その年の５月６日（火）～５月７日（水）に開かれました。

編者である私も、この時、初めて一泊の研修会に参加させていただき、その時の模様を次のように記録しております。

富田林簡易保険保養センター「かんぽの宿・富田林」

私が初めて宿泊セミナーに参加したのは、田池先生とお会いして、半月ほど経(た)った5月の反省研修会の時です。

ゴールデンウィークが終わってすぐの一泊研修会でしたので、休暇が取れるかどうか心配でしたが、それもこちらが気にしているだけのことで、こちらさえその気になりさえすれば、まわりの状況は自然とそれに合わせて動いてくれるようです。ゴールデンウィークを含め五連休になる訳ですが、誰に反対されることもなく、また嫌味(いやみ)を言われることもなく、休暇中は仕事さえ遠慮してくれるかのように、何の問題も起こりませんでした。田池先生の言われるように、自分が神に向かって歩き出しさえすれば、邪魔しているように見えることも、向こうのほうから道を開けてくれるようです。

一番邪魔をしているのは、ほかならぬ自分だったのかもしれません。

もちろん、その時は分かりませんでした。しかし、今思い返すと、その通りなのです。ちゃんとその通りになっているのです。進むも進まないも、周りが決めるのではなく、自分が決めるのです。周りが邪魔して進めないように見えても、結局は自分だったのだと思います。この原稿を書きながら、

各部屋に分かれて母親の反省

そのことをつくづくと感じさせていただいております。

話がだいぶ横道にそれてしまいました。さてこの日の反省研修会ですが、富田林にある簡易保険センターで行われました。初めての一泊研修ですので、幾分緊張しながら、一番前の席で時の来るのを待っておりました。会場は二十畳近い和室で、正面に田池先生の座る一人掛けのソファーとテーブルが用意され、その席を囲むように座布団（ざぶとん）が敷かれてあります。やがて、田池先生が席に着かれ、皆が揃（そろ）われるのを待って、まずは1泊2日のスケジュールについて説明を始められました。

その後、先生の講話が2時間ほどあり、続いて反省の仕方についてお話しされ、いよいよ各部屋に分かれて反省が始まります。

一部屋におよそ4、５人が入りました。ある人は窓際（まどぎわ）のソファーを、ある人はテレビ台を机代わりにして、それぞれ自分の場所を決めて、ノートを開き、母親の反省を始めます。その日によって自分でテーマを決め、母親にしてもらったこと、母親を困らせたこと、母親にしてあげたことなど、母親について思い出せる限り書き出していくのです。先生はよく言われます。

「母親を見るのではありません。母親に接している時の自分を見ていくのです。どんな心でお母さんを見ていたのか、その心を見ていくのです」と。

反省は３回にわたって行われました。一回目が3時半頃から5時頃まで、二回目は夕食が終わって7時頃から9時頃まで、そして質疑応答の時間があり、翌朝、朝食後8時半から10時までが三回目の反省です。その後、田池先生のお話があり、今回の反省研修会のまとめとなります。

こうして１泊２日の反省研修会は終わる訳ですが、この間、現象による学習も、質疑応答の時間や田池先生のお話の中で行われ、様々な方法で自分を見ていく機会が与えられました。（『光のなかへ』）

あなたは「心」であり、心を見るということは、あなたを見る、見つめることだということ。

真実を知っていくには、心を見る作業が必要不可欠だということを、念頭に置いてください。

心を見るというのは日常のあなたの生活の中で、あなたが今何を思い、どんな思いを出しているかを、その都度、確認していくという作業です。

あなたが語り、行動する背景には、あなたの思いがあるのです。何を語り、何をしたかを重視するのではなく、その時のあなた自身の思いを自分の心の中で追っていく作業が、心を見るということです。

例えば、あなたが人に何かを言われたとしましょう。あなたにとってそれが嫌なことであっても、いいことであっても、その相手の口を通して語られた言葉によって、あなたの心に何か動きがあります。いいことを聞かされたときは喜んでいたのに、同じ人から嫌なことを言われたら悲しくなったり、怒ったり、落ち込んだりしませんか。

それは一体どういうことなのでしょうか。相手の言葉や態度、あるいは、目の前の出来事で、自分の心が明るくなったり、暗く沈んでいったり、恐怖や疑い、憎悪（ぞうお）の念を膨らませていったり、とにかく、心はいつもいつも動いています。その動く心を丹念に辿（たど）っていくと、私達はずっと相手の言葉や態度によって色々な思いを発してきたことが分かるはずです。

そして、嬉しいとか、苦しいとか、つらい、悲しい、寂しい等々を繰（く）り返しながら時を過ごしてきた、言うなれば、私はそのような様々な思いとともにある、色々なことを思っている私がここにいる、ということが見えてくると思います。

心を見ていくと、悲しんだり、落ち込んだり、相手を罵（ののし）ったり、そしてまた、殺したいほど憎（にく）んだりする自分、相手を思い通りに動かそうとする自分が、はっきりと見えてきます。

さらに心を見ていくと、相手がこう言ったから、こんな態度を示したから、こんな出来事に出くわしたから、様々な思いが自分の中に出てくると思ってきたけれども、本当はそうではないのかもしれないと思えてくるかもしれません。

なぜならば、相手が何も言わなくても、何もしなくても、自分の心は、絶（た）えず動いていると感じるからです。また、同じような場面に出会っても、そこから感じる思いも、出している思いも、その時その時で違っているし、相手によっても違ってくると気付きます。

それでは、その思いはどこから出てくるのか、なぜ出てくるのか、なぜ心はいつもいつもこんなに忙しく動いているのだろう

か、心を見ていく習慣の中で、きっと色々なことが疑問として浮かび上がり、また、色々な気付きもあると思います。

こうして日々、日常生活の中で動く心を見つめていくことも大切ですが、あなたの心がストレートに出る相手は、何と言ってもあなたを生んでくれた母親なのです。

あなたを生んでくれたお母さんには、あなたの思いがストレートに出てきます。あなたはあなたを生んでくれたお母さんを、今現在どう思われていますか。「お母さん」とあなたが心の中で呼んだとき、あなたの心に上がってくる思いはどんな思いでしょうか。

それを正直に、ありのままにノートに書き綴(つづ)る作業から、まず始めてみてください。自分を偽(いつわ)ることなく、飾ることなく思いを綴っていくことが大切です。

生まれて育ててもらった過程の中でお母さんに使ってきた心、長じて一社会人、あるいは、一家庭人となって母親に接したときに出てくる心、年老いていく母親に対して使っていく心、どんな時もあなたのお母さんはその肉を通し、あなたの心にある怒り、恨(うら)み、呪(のろ)い、妬(ねた)み、恐怖、寂しさ、悔しさ等々、様々な思いを引き出してくれているのです。

それがお母さんという存在です。それは、あなたを生み育ててくれたお母さんという存在を遥(はる)かに超えたもの、本当のお母さん、意識のお母さんという存在です。そして、その作業を重ねることによって、あなたを生んでくれた母親の思いというものに、あなたは触れていきます。

「お母さん、ありがとうございます。お母さん、私を生んでくださって本当にありがとうございます」、この思いが、あなたの心からふつふつと沸(わ)き起こってくるのです。それが本当の人間の心だからです。それが本当のあなた自身だからです。

心を見るということは、あなたの中にあるたくさんの思いに気付くということです。

あなたの周りに存在する人達、あなたの周りで起こる出来事、それらによってあなたの中にある思いが引き出されていきます。その思いこそが、あなた自身なのです。あなたの心の中にあるから、その思いが引き出されてくるのです。すなわち、母親を通し、また、人と出会うことにより、そして、様々な出来事に出会うことにより、実は、あなたはあなた自身と出会っているのです。そういうことが心を見る作業を通し、自分の心で分かってきます。

（「意識の流れ」より）

Please read forward while keeping in mind that you are your "heart," that reflecting on your heart means to reflect on yourself, to look deeply within yourself, and that in order to know the truth, practice on reflecting on your heart is essential.

To reflect on your heart is to work to acknowledge what you are thinking right now, and what kind of thoughts you are emitting at every moment in your daily life. Your thoughts are behind every action and every word you speak. Rather than putting the importance on what you spoke or what you did, reflecting on your heart is to observe your own thoughts that arise during those words and actions.

I will give you some more detailed examples. For instance, let's assume someone said something to you. Whether those words were pleasant or unpleasant, the words that were spoken by that person make your heart move. You feel happy when you hear something nice; on the other hand, don't you feel sad, angry, or depressed when the same person tells you things that you do not want to hear? What does this mean? Your heart is moving constantly; it becomes bright, feels depressed, or becomes filled with thoughts of fear, doubt, or hatred depending on another person's words and actions, or by events that one observes. If we carefully trace the movement of our hearts, we realize that we have been emitting various thoughts in reaction to the others' words or actions. We have repeatedly spent time feeling happy, agonized, distressed, sad, or lonely. In short, I think you will be able to see that you coexist with those various thoughts, or you exist here thinking many things. As you start to reflect on your heart, you will clearly see the existence of many selves inside you, ones that feel sad, depressed, resentful of others, or one that has so much hate that it wants to kill, or who wants to have control over others.

Your previous thought may have been that your attitude, emotions, and various thoughts are the direct response of another person's words, actions, or events that you experienced. However, by reflecting on your heart further, you may think otherwise, realizing that your heart is moving constantly even if the other person does not say or do anything. You may also recognize that your feelings or thoughts produced from experiences in similar situations can be different

each and every time, and can also differ dependent on the people involved.

As you practice reflecting on your heart, I think that you will likely come up with many questions like “where do these thoughts come from, why do they arise, why does my heart continue to move so frequently?” You will also learn a lot about your heart.

It is important to practice looking at your moving heart everyday, yet I would like to mention that the person whom your heart moves towards the most is your mother who gave you birth. Your thoughts come up straightforwardly toward your mother. How do you currently feel toward your mother who gave you birth? What kind of thoughts come up when you call out “Mother” in your heart? Please start to write them down honestly in a notebook. It is important to write without disguising yourself or decorating your thoughts.

Please write down the thoughts you had of your mother over the time she raised you since your birth; the thoughts you had toward her after you became an adult or after becoming married and starting your own family; or the thoughts you have towards your aging mother. Your mother draws out many kinds of thoughts such as anger, hatred, resentment, jealousy, fear, loneliness, chagrin, etc. through her physical body. That is the true meaning of the existence of your mother. It is beyond the existence of your physical mother who gave you birth; it is the existence of your true mother, mother’s consciousness. As you continue to practice writing down your thoughts of your mother, you will someday touch the core in the heart of your mother who gave you birth.

“Thank you, mother. Thank you very much for giving me birth.” Those thoughts will come up constantly from your heart; because it is the true nature of the human heart, because it is your true self.

Reflecting on your heart means that you will recognize various thoughts within you. Your thoughts are drawn out by the people you associate with and the events that happen around you. Those thoughts are you, your own self. They are drawn out because you have already possessed them in your heart. In other words, you are meeting yourself through your mother, by meeting people and experiencing many things. You will come to realize it in your heart by practicing to reflect on your heart.

("The Flow of Consiousness")

1990年8月24日〜28日　北海道定山渓での第156回反省研修会

心を見る作業の中心柱は「母親の反省」と「他力信仰の反省」です。他力の神々に救いを、パワーを求めてきた心そのままを、あなたは今世の母親に使ってきたのです。それは二つ並行して反省を進めていけば分かります。母親に使ってきた心と、他力の神々を求め続けてきた心は、その根っこが同じなのです。

1986年11月15日 三原山噴火

肉のお母さんがどうとか、あなたが生まれてきた環境がどうとかではありません。

あなたはその母親を選び、その環境を自ら設定して、この世に肉を持ってこられたのです。全部、自分がお膳立てした道筋です。その中で真実に目覚めるというか、本当の世界と出会っていく計画を、ご自分で立ててこられたのです。今、あなたがどんなに苦しい状況の中に肉を持っていても、それらはみんな自分で選んできたものなのです。だから、誰を恨むこともいらない、誰と比較することもいらないということです。あなたは、比較競争、呪いと恨みの中で存在してきたあなた自身を、本当は自由にしてやりたいと思ってきたはずです。しかし、その手立てが分からなかっただけなのです。

どうぞ、真っ直ぐに自分の心を見ていってください。自分の心の声を、叫びを聞いていってください。そして、苦しんでいるのが本当の自分ではなく、私は喜びであったと気付いていけるように、様々なシナリオを自分に書いてきたのだということを、その心で分かってください。

そのことが自分の心で分かってこない限り、今世もまたあなたの人生は失敗です。たとえ、どんなに富を築き、名声を得ようとも、あなたの人生は失敗なのです。

自分は何を間違ってきたのか、なぜ間違ってきたのかということを心で気付けなければ、地獄から生まれてきて地獄に帰っていくあなたの転生は、これからも永遠に続いていくことでしょう。

どうぞ、あなた自身、目を覚ましてください。欲にまみれたあなた自身の心を見ていってください。

そのために素直になって、何も持たなかった赤ちゃんの頃のあなたを思い出していってください。

（『意識の流れ』より）

The main pillars of reflecting on your heart are "Reflections on Mother" and "Reflections on having sought outer powers or religions/idolatry." You have the heart that seeks salvation and power from Gods as an outer power, and you are also using the same heart in this lifetime toward your mother. You will realize this when you practice both reflections together. The heart that you have continually sought Gods as the outer power, and the heart which you have been using towards your mother, are both derived from one same root.

Those feelings were not created dependent on how your physical mother acted or the kind of surroundings you were born with. You chose your physical mother, and set your surroundings yourself before you were born into your physical body. You prepared everything on your life path before birth. You planned to come to meet the true world; in other words, to awake to the truth through the life path that you set. No matter how severe your physical self-situation, it was all chosen by you yourself. Thus, you need not blame anyone nor compare yourself to others. In fact, deep in your heart, you are likely wishing to free yourself from life of living in competition with other, from comparing, resenting, and grudge. Only, you did not know how to become free.

Please earnestly reflect on your heart. Please listen to the voice and cry from within your heart. Please come to realize in your heart that you have written various scenarios for yourself in order to realize that your suffering is not your true Self, and that you are joy itself.

Unless you realize it in your heart, your present life will be a failure. No matter how rich or famous you become, your life is a failure. If you cannot realize with your heart what kind of mistakes you have been making or why you made those mistakes, you will forever repeat the cycle of your reincarnations of rising from hell and returning to hell.

Please awake yourself. Please reflect on your heart that is plastered with greed.

To do so, please be honest to yourself and remember the time when you were a baby, when you did not have anything.

("The Flow of Consiousness")

他力のエネルギーとは一体何だと思いますか。

神、仏、宇宙のパワーが好きだという人はもちろんですが、それらを敬遠する人も、実は、心の中に神、仏、宇宙のパワーといった他力のエネルギーを充満させているのです。私達人間には、遠い昔から、そういった他力のエネルギーを貪欲に求めてきたという歴史があるんです。

考えてみてください。日常的に、拝んだり祭ったり、祈ったりということがない人であっても、心の拠り所、心の支えとして何かを持っていませんか。

昨今は、日本の国でも、宗教の世界が関係する事件なども起こっています。そういう影響からか、神や仏や、宇宙のパワー、そして、宗教と言うと、敬遠したり、警戒したり、胡散臭そうにしたりする風潮にあるかもしれませんが、実は、そういうものは、日常生活と密着している部分がかなりあります。心の拠り所、心の支え、あるいは、慰め、癒し、そういうものとともに、日々の生活があるように思います。それらが、自然に生活の中に溶け込んでいるのではないでしょうか。あまりにも、生活に密着しているので、そういうことは、宗教だとは思っていないかもしれません。例えば、音楽などもそれに属すると思います。

また、生まれついた土地柄、場所においては、拝んだり祭ったり、祈ったりすることが、日常的になっているという人達においては、それを生活習慣としてとらえて、宗教だという感覚はないかもしれません。

どちらにしましても、人はみんな宗教の世界、いわゆる他力のエネルギーを心に秘めてきました。限りない転生の中で、他力のエネルギーを蓄えてきたのです。その人に自覚があるかないかだけであって、みんな神、仏の世界を求めて、転生を繰り返してきたことは、事実です。

にもかかわらず、宗教の好きな人、興味がある人、反対に嫌う人が、実際にあるのはどうしてでしょうか。

確かに、神、神の子、意識の世界、波動の世界という表現は、どうしても非日常的なものに感じる人は多いでしょう。

目に見えない世界、心で感じる世界というのは、大抵の人達は、二の足を踏むのではないでしょうか。一般的に、後ずさりするような感じを持たれる傾向にあるのではないでしょうか。神や仏や宇宙のパワーを好む人も多いけれども、宗教の世界を、即座に敬遠される人も、また、多いかと思うのです。

私自身も、この学びのことを、耳で聞いていただけの時は、宗教だと思ってきました。だから、足を踏み入れることを拒絶

してきたと言ってもいいと思います。拒絶するということは、それだけ神や仏や諸々のパワーを、過去において求めてきたからだったと、私は自分を振り返っています。

今現在の学びでは、意識の世界とか、波動の世界とか、そういうふうな表現になっているので、まだ入りやすいかもしれませんが、学びの最初の頃は、神とか神の子という表現をしていましたので、自分の中で距離があったことは確かでした。

ところで、宗教の世界に、のめり込む人、何らかの関心を示す人よりも、反対に無関心な人、あるいは無神論者だとする人のほうが、他力のエネルギーが弱いのかと言えば、必ずしもそうではないと思います。「宗教とは無縁だ。私はそのような世界に入りたくない」と頑(かたく)なに拒絶する心から、実際は、祈りのエネルギーが流れ出している、流れ続けているのです。

本当は、そういう人達こそ、日々の生活から、少し距離を置いて、自分を振り返る時間を持たれたらいいのではないかと思います。

案外、なぜ拒絶してきたかということを、心で感じてこられたら、今度は逆に、どんどん真実の方向へ、自分を誘っていかれるかもしれません。

ただ、私達は、それぞれに、仕事、家事、子育て、学業、趣味、医者通い等々、日々の生活に追われています。その中で、自分の生活パターンを変えることは、なかなか難しいです。慌ただしく過ぎ去っていく時間の中で、束(つか)の間の安らぎや幸せを求めていくことに明け暮れる毎日だと思います。

第一、自分を振り返るという意味が分からないと思います。だから、たとえ、振り返ってみても、生まれてから今日までです。それで、何とか帳尻(ちょうじり)を合わせていこうとします。自分が求め、そして、自分の中に蓄えてきた他力のエネルギーをそのままにして、帳尻を合わすことなどできないけれど、染(し)み付いてしまっているから、何とか、その瞬間瞬間を生きていこうとすることに、一生懸命なのだと思います。

今現在、占(うらな)いや呪(のろ)いや、その他、精神世界について興味がある人、神の存在を信じ一生懸命祈りを捧(ささ)げている人、いいえ、そういうものはどうでもよく、ただ金、金の生活に忙しい人、人様々ですが、その区別なく、誰もがみんな、他力のエネルギーの中に沈んでいると言っていいと思います。

そのエネルギーを、本来の喜びのエネルギー、パワーに変えていくことが、私達のこれからしていくべき仕事です。染み付いてしまったエネルギーを、どのように変えていくのか、大きな課題を残しています。

（「意識の転回」より）

What do you think are these energies of reliance? Those who love the power of gods, Buddha, or space, or even those who avoid them - really are filling their hearts with these energies. We humans have a long history of greedily seeking those energies.

Ask yourself this question. Even those who don't worship or pray daily, do they have something to support or rely on in their hearts? These days, there are scary incidents related to religion, even in Japan. Because of this, people often deny and are cautious or suspicious about gods, Buddha, the power of space, or religion. If you have something to support or rely upon in your heart, regardless of material or immaterial, this in itself is religion. In fact, these things are usually a part of our daily lives in many cases. We spend everyday life together with these things to support, strengthen our heart and comfort, relieve us. They blend in with our daily lives naturally. As they are too familiar in our lives, we may not think this is religion. Music, for example, would be this case, depending on the direction of your heart. If you believe you are healed by music, this thought could be connected with the energy of reliance. Of course, it's not just music. Unless you look inside your heart the desire and the obsession with pursuing something outside of yourself, you can't see the reality that you are filling your heart with the energies of reliance. It is not just something that comforts and calms you down. Is there a desire to pursue power in music rooted in your heart?

Also, for those born in a place where worship and prayer are part of living customs, they may not think of this as a religion but a lifestyle. Whatever the case, people keep the world of religion, the energy of reliance inside their hearts. This is no wonder as we have been living without knowing our true selves. We humans had been piling up energies of reliance in a massive number of reincarnations. Regardless of whether you realize it or not, it is true that we have been pursuing the world of gods, Buddha, and power every time we reincarnated. Despite the fact, why are there people who love or pay attention to religion, but some people hate or ignore it? An expression such as god, child of god, the world of consciousness, and vibrations sound uncommon for many people.

Most people hesitate to get into the invisible or spiritual world. Usually, people tend to shy away from this world. Many people love gods, Buddha, and the power of space, but at the same time,

many people reject instantly or avoid the world of religion.

As for myself, I also assumed that this study was religion when I only heard about it. I can say I rejected to be involved because of this. There was rejection within myself because I had pursued power from gods, Buddha, and many others in the past. When I reflect on my study, now I understand.

The words "the world of consciousness" and "the world of vibrations" are now used in the present study, so it might be easier to accept, but "god" and "child of god "were used when I started studying. So, it is true there was a distance I placed within myself.

By the way, do people who are not interested in religion or don't believe in god's existence have fewer energies of reliance than those interested in or obsessed with religion? Well, that's not always correct. "I have nothing to do with the religion. I never want to get involved with that kind of world" - even from the heart that rejects religion like this, the energy of prayer is flowing from their heart. In fact, there are people whose hearts are actually sensitive in these cases. People like this should take a step back from their daily lives and have a chance to reflect. Once they feel within their heart why they reject the religion, they may invite themselves to the invisible world, to the direction toward the truth in a true sense.

We are always very busy with work, household chores, parenting, schoolwork, hobbies, nursing care, etc. every day. It is difficult to change our lifestyle patterns. We may spend our time looking for temporary comfort and happiness while time passing by so quickly.

It is difficult for you to comprehend what looking back on yourself means to begin with. Therefore, even if you reflect, it's only from your birth to the present. You try to make coherent of your life only with this. You leave out the energy of reliance stored within you. You know you can't balance this out, but these energies of reliance are too wrapped up in so many layers. You can only amount to live in the moment to moment.

Nowadays, some people are interested in spiritual power, such as fortunetelling and incantation. Some people believe in gods or Buddha and worship them. Another don't care anything, but just being busy making money. These people may seem different, but nonetheless, all are sunk in the depth of the energy of reliance.

Our mission from now on is to change the energies to the original energy of the power of joy. How can we change the energies of reliance filled in our hearts? This big problem is yet to be solved.

(“The Turnaround in Consciousness”)

1988 年 5 月 27 日〜 29 日　第 73 回反省研修会

白浜温泉 ホテル千畳

1990 年 1 月 26 日～ 28 日／第 140 回反省研修会／白浜温泉　ホテル千畳

「かんぽの宿富田林」周辺

かんぽの宿 有馬

大阪府教育会館

かんぽの宿 富田林

京都堀川会館

熱海富士屋ホテル周辺

熱海富士屋ホテルでの反省研修会

熱海富士屋ホテルでの田池先生の講話

第150回反省研修会の1日目（1990年5月6日）

最初に一番大切なこと、ここで一番学ばなければならないことは何かというと、「人間は意識、心である」ということです。これを「学んでいただきたい、学んでまいりましょう」というのが、この学びであり、この研修会の目的であるわけです。なかなかそのようには理解ができないです。肉が自分だという思い癖が非常に強いから、やはり肉中心の思い、生活になってくるわけです。いうなればサタンに支配され、サタンを表わす生活、そういう文明・文化というものを、我々人類は打ち立ててきた、築いてきたということを、一つお気づきいただきたいのです。人間は霊である、意識であるということが一番大事なことだと、一つ、ご理解いただきたい。

……で、皆さん方は「肉が自分だと、目に見えないものなんか信用できないし信頼できない」と言いながら、たとえばお家で仏壇に向かって、亡くなったお父さんとか、お母さんとか、あるいは子供さんとか、お爺ちゃん、お婆ちゃんにですね、語りかけている人が多いんじゃないですか。あるいは、「どうぞお爺ちゃん、孫を守ってやってください」とか言っているんじゃないですか。それで、その人は本当に、そのお爺ちゃんなりお婆ちゃんなりを信じているかというと、「いや信じていません」と言う。じゃあ信じていないのに、なぜそんなことをするんですかと言うと、「みんながやっているから」「ずーっと以前からやっているから」と言う、まあ惰性ですね。そういう方が案外多いんじゃないかと思います。

あるいは幽霊なんか信じないと言いながら、幽霊の話を聞くのが怖いとかですね、何か幽霊が出そうだとか、不安とか恐怖心に駆られることも、度々あるんじゃないかと思います。

こういう霊的な体験・経験は大なり小なり、皆さんお持ちだと思います。お持ちだけれども、それを積極的に認めていこうという理解は、なかなか難しいようです。やはり自分の頭で理解できないものは、この五官で捉えることのできないものは認めていきたくないという思いが非常に強いということを、まず最初に考えていただきたいと思います。

あなた方に「意識の世界を信じなさい、これが本当のものですよ」と、どれほどに申し伝えましても、あなた方は「見えない、聞こえないから……」と言うのです。あなたが受け入れようとしなくても、「これが事実だからこれしかないのですよ」と、言うよりほかに方法がないのです。

いくらあなた方が「そんなもの認めません」と言っても、これが事実なんです。これが真実なんです。真実である以上、こ

れを理解していかねばいけないし受け入れていかねばならないということです。そうしないと、本当の人生、本当の人間を生きることができないのです。

どれほどに人類は間違ったものを信じ、それが真実の世界だとしてきたことでしょうか。今、これらの間違いを一掃(いっそう)させるために、私、田池が、あなた方の前に現れているのです。これもどれほどに言わせていただいても分からないことです。しかし、そうだと信じていただかなければ出発できないのです。

この学びを進めていくについてですね、「まず、そうだ」と信じてかかっていかなかったら、この学びは進められない。はじめから「そんなもの、信じない」ということであれば、いくら皆さんが研修会に参加され学びを進めていかれても、本当のことを理解する、つかむことは困難であるということです。

人類がどんな歴史をつくってきたかということを、皆さん、本当に知っていただきたいのです。案外、皆さん、知らないです。人類は進歩している、進化していると思っているんですね。この妄想(もうそう)から、この迷いから、早く目覚めていかなくてはならないということですが、これはなかなか難しいことだと、私はよく分かっています。

ですから、最近、皆さまに「宇宙からのメッセージ、ＵＦＯからのメッセージを受けてください、あるいは宇宙、あるいはＵＦＯに意識を向けてください」と、ここ一月半ほど前から皆さんにお伝えしております。そして、皆さん方が、ＵＦＯあるいは宇宙と接触することによって、人類は真なるものを求め、学んでいくことになっていくという風になってまいります。

あなたが心を調和し、一つ一つ自分の醜(みにく)い心を修正していった時に、心から感じることなのです。いくら形を整えても、いくら言葉を並べても、分かっていただけない世界なのです。あなた方の心で感じていただくしか方法はないのです。

だから先ほど申しましたようなことは、心を調和して、自分の醜い心を修正していかなかったら、私の話は理解できないということです。頭で理解はできません。心で理解しますから、それを理解できない心になっている、それを理解できる心に、皆さん方が修正していただきたいと、こういうことです。

では、どういう心を修正するのかと、そういうことを学んできているわけです。

どなたでも感じることはできます。現に先ほども申しましたように、ＵＦＯにしても、宇宙からのメッセージにしても、あるいはこれからの未来の意識、これから300年間の意識、あるいは四次元、五次元、六次元の意識等、霊道者を通してたくさん伝えてきているわけです。

これを全部、プリントにして皆さんにお伝えすることはできませんが、**これを本にして、「エルランティの光出版」から皆さまのほうにお届けするという運びになってくると思います**。

学びの仲間の皆さんに次の 4 項目についてアンケートをお願いしました。

「1. 田池先生に出会われたのはいつ？」、「2. この学びに集われた動機は？」、「3. 田池先生（この学び）に出会う前の自分の人生について」、「4. 田池先生（この学び）に出会って何が変わりましたか？」

1986 年（昭和 61 年）3 月頃に出会われた岡林ふさ子さん

1	昭和６1年３月
2	当時身体の具合が悪くどこの病院に行っても原因が分からず、他力丸出しで出来ることなら先生に治してもらいたかった。
3	いつも自分が正しくて自分の思いをまわりに押し付けているのだけど、なぜか空回りで、何かあるといつも人のせいにしていたと思う。
4	「自分の心をみる」初めて聞く言葉でした。人のせいにしていては何も変わらない、相手を変えるのではなく自分が変わる。相手の言動だけでなくいつも自分の思いを確認し認める。すごい学びだと思いました。難しいけど楽に生きていけると思いました。

1986 年（昭和 61 年） 9月 15 日に出会われた斉田和広さん

1	1986 年9月15日
2	不安な思いを何とかしてほしいと思いました。
3	何をやってもうまくいかないので、他の宗教に入信したり、精神世界の本をたくさん読みましたが、なにも変わらず、人間関係で苦しいことが続きました。 また、肉の自分を素晴らしくしたいといつも思っていました。
4	肉の出来事に一喜一憂する思いや、自分の面目を気にすることが少なくなってきました。

1986 年（昭和 61 年）12 月11日に出会われた山田信江さん

1	1986 年 12 月 11 日
2	自分の出す思いが苦しい、小学生の頃から何でだろうと何故このような思いが出るのかきっと教えてくれる人が、本が、何かがあるだろうと思いつつ、何かを、探しながら生きていた。心から出る思い、表面を繕う思いの自分を嫌いまくってきた。自分が大嫌いだった。先生に出会って、「許せない人を許す学びです」と聞いた時、「探していたのはここだ」と思った。
3	幼い時から身体が弱く、青春を迎えても健康面で厳しい日々を送っていた。いつも死と隣り合わせだった。結婚してからも、実家からずっと飲んでいた薬を送ってもらっていた。ある時、薬を飲まなくてもどこも痛くない。「薬やめよう」と、やめた。そうして自分の出す思いと葛藤しながら、ある時期から勤め始め、十数年たった時、先生と出会った。
4	前向きな思考になりました。

1986年（昭和61年）9月頃？に出会われた関谷敬子さん

1	昭和61年、田池先生が東京で学びのお話をされると聞き、参加した時です。
2	以前から学びをしていた友人から田池先生のことや、学びに関する資料をもらっていましたが、最初は余り気乗りがしませんでした。 しかし、父親の突然の死がきっかけで、死んだらどうなるのだろうという疑問が出て、お会いしたことのない田池先生に手紙を出しました。 田池先生からお返事をいただき、東京で学びの機会があると知り、田池先生という方に会ってみたいと思いました。
3	子供の頃から本当の幸せってどんなだろうと思っていました。家族が仲良くすることが幸せなのか、それとも大人になってから思う幸せはちがうのか。きっと大人になったら分かると思っていました。しかし、大人になったら益々本当の幸せがわからなかった。欲しい物を手にいれても好きな人と一緒になれても、それでも心の中で何か虚しさがふっと出てくる。心を満たすものを欲していました。
4	母親に対する思いが変わったことがうれしいです。 母の反省を通して、私は正しい、私は間違っていない。母を恐怖し、母を見下げ、心を閉ざしてきました。そんな母に甘えることなんて出来なかった。 母に使った思いを見ていくうちに、己の偉さと傲慢さがどれほど母を見下げてきたか素直でない自分の姿が見えてきました。うれしかったです。 いま母を思うと母の懐に素直に入っていける、なんでも言える、甘えられる、母の肉はもうありませんが、そんな思いです。 心を見る、学んで初めて知ったことです。すごいことでした。

1986年（昭和61年）頃に出会われた宇野直子さん

1	小学3年生のころです。その日は、近所の家で田池先生が来られて勉強会が開かれる日でした。 土曜日だったと思いますが、学校から帰る途中、家の近くで田池先生にばったりと会い、先生を指さして、「田池先生や〜！！」と叫んだのを覚えています。 先生はびっくりした顔をされて、「あんた、どこの子や？」と聞き返してくれました。記憶にある中では、それが初めての出会いです。
2	親が学びをしていたから。当時、中学校のクラスが大嫌いだったから。
3	まだ、中2だったけど、自分は「比較的いい人間」だと本気で思っていました。家庭にそれほど不満はなかったけれど、同じクラスの人間が大嫌いでした。自分は正しい、間違っているのはあいつらだと、見下していました。自分の殻の中に閉じこもっていたと思います。
4	闇出し現象の時、自分の出すブラックのエネルギーに振り回されて、本当にどうしようもない愚かさに、「よくこんなんで、自分はいい人間だと本気で思っていたな。どれだけ自分を知らないんや」と、心の底から思いました。その時に初めて、自分は真っ暗闇、ブラックもブラック、大闇だと心で感じさせていただきました。

1986年（昭和61年）頃に出会われた柳生三千子さん

1	33年ぐらい前
2	子供のことです。
3	子育てに仕事にとても忙しくて、一体自分は何のために生まれてきたのかと疑問に思い、とても苦しかった。
4	自分の心が少しずつ軽くなってきた。

1986年（昭和61年）頃に出会われた檜木奈美さん

1	高校生のとき（16歳）
2	母が先に学びをしており、勉強会に誘われたことがきっかけで学び始めました。
3	真っ黒でした。苦しくて終わりのない迷路を彷徨っているような感じでした。 いつも心の中に重たい岩のような塊を抱えていた覚えがあります。先生に初めて出会ったときは10代でしたが、生きていくことが本当に苦しかったし、人生が楽しい、うれしいなど一度も思ったことがない状態でした。自殺しようとか死のうと思わなかったのは、どうしても死んでも自分が消える気がしなかったからです。
4	田池先生が、初めて自分から進んで参加した勉強会で（Oさんのお宅でした）、「人は意識である、人は死んでもなくならない、永遠に存在し続けるものである」と明確に伝えてくれたことで、本当に救われました。やっと真実に出会えたと本当にうれしかった。今でもこの感動は忘れられません。この体験があったから、紆余曲折ありながらも30年以上学びを続けられたと思っています。私の宝物です。

1986年（昭和61年）頃に出会われた中務敬子さん

1	昭和61年、18歳の時、近所の人に誘われて大阪の（誰かわからない）個人のお宅で話をされる時に行きました。
2	幼稚園（キリスト教系）、神社、寺などいろいろしたが、自分の思う通りの結果が得られず、もっと力のあることはないか（パワー）と探していた時に興味があって行きました。
3	肉の自分が努力して、後足らない分は、宗教（もしくは神、仏など）パワーでかなわないことはないと思っていたのに、かなわないことが多くて、それらのものに力がないのだと思い、何をしたらいいのか、（何を求めたらいいのか）探していました。自分が頂点にいることを望んでいた。
4	出会っていなければ、自分のエネルギーで自分を壊して、周りの人を敬うかのような言葉を言いながら、実は傲慢で、いろいろなものを壊し、自滅（病気か、自死か何かはわからないけど）生きていなかったと思う。自分のエネルギーのすごさの自覚はなかったが、自分のエネルギーは自分でわかっていくものだと思う。

1986年（昭和61年）頃に出会われた宗節子さん

1	昭和61年頃
2	叔母の勧めによりまず母が学び、私も勧められて何となく顔を出してみようかという程度で学びに参加しました。
3	中学生の時に父を亡くし、母ひとり、子ひとりの家庭環境の中で育ったので、我が家の生活を支えるのはこの私という気持ちが強く、とにかく仕事をしてお金を稼がねばの毎日でした。ストレスがどんどん膨らむ一方、金稼ぎの楽しさ、同時に私の会社と我が家（2世帯同居のような構造）での存在感が増してくる心地良さと安堵感もあって、きっとこれが私の人生だろうなと思っていました。
4	先生との最初の出会いはまだセミナーという形がない時で、先生が東京で初めて我が家を会場にしてお話をされた時だったと思います。古い家の玄関の上り場で、先生は床に膝をついて、「田池です」と挨拶をされました。もちろん私も同様にご挨拶をしました。よく覚えています。先生はごく普通の人という印象でした。私は、先生との出会いから約10年間は学びよりも仕事を優先していました。その後の約20年間は熱心にセミナーには参加していますが、学んでいるかというと、？？？マークがつきます。ただ、私の人生観は全く変わりました。それ迄とは全く真逆の人生観です。何がとは一言では言えません。全てです。田池先生に出会えたことは本当に凄いことだったと、今頃になってようやく心に響いてきます。

1986 年（昭和 61 年）頃に出会われた柳澤清香さん

1	13 歳の冬。母に連れられて行った東京都目黒区の K さん宅で行われた勉強会で。
2	母についていったのが最初ですが、高校生のとき、橋本センターの反省研修会で質疑応答の時間というのがあり、そこで質問しました。その時に田池先生が答えてくださいました。その内容は覚えていませんが、そのときものすごく圧倒的な温かい思いが私の中にどっと入ってきて、今思えばそれは田池留吉の波動だったのだと思うのですが、涙が止まらず、その後数時間「ありがとうございます」と「ごめんなさい」が自分の中からとめどなく出てくる、という体験をしました。ただただすごい体験でした。その衝撃がこの学びのスタートだったと思っています。
3	家庭内でもいろいろあり、我慢・不機嫌・短気などなど、子どもらしさがない子どもでした。子どもながらに幸せになりたいけれど、そんな幸せなんてないと思ってました。写真をみてもほとんど笑っていません。この学びに出会っていなかったらきっと今頃は自分で自分の命を絶っていたと思います。
4	言葉にするのは難しいですね。質問の答えになっているかはわかりませんが……。 たくさん心から嬉しいと思える体験をいただきました。その体験の中で、本当のわたしは意識なんだと思えたとき、肉の生活の様々なことが霧が晴れるように小さなことに感じられて、意識ってすごい、と思います。心を見るということを知ったことが、なによりも大きな変化です。

1987 年（昭和 62 年）2 月頃に出会われた黒田ミチルさん

1	昭和６２年２月？ 富田林簡保センターの反省研修会。落ち着きなく、うろうろと彷徨い続け、誰かに一緒に居てもらいたくてなりませんでした。思わず電話した友人が、「意識とかなんとかさっぱりわからないけど、意識の勉強の話を聞きに行く?」と、誘っていただきました。大阪で御近所の勉強仲間が４～５人集まり、勉強していらっしゃる所に案内されました。自分を見失い、それでもしゃんとしなくてはいけないのは仕事の時だけ、と自分の状況を話しながら、私は涙が出てしまっていました。何の勉強かわからないけど、資料をもらったのを家で読んだりしていました。体験文集に田池先生の電話番号が書いてあるのが目に入りました。「兄を救ってください。永遠の地獄に亡くなった兄はいるんです」と、田池先生に訴えていました。 田池先生は、有名な作家を例に挙げ、死後の様子をやさしく、やさしく話してくださいました。「心の中に答えは全部あります」と話してくださいました。 「心を見る学びをしませんか」と誘ってくださいました。セミナー会場では初参加の３、４人のために、「母親の反省」の説明を聞かせていただく時間と空間も特別に用意してくださいました。
2	「嫉妬妄想で苦しい」と、この学びに誘ってくださった友人には話していました。それ以外にも、２年前の兄の死後、夜の暗い部屋が亡くなった兄に繋がり、明るい部屋で夜を過ごしていました。私の背中に冷たく兄を感じることもありました。毎夜のように「死にたい」と夫に言い、かと思えば、「私が眠りにつくまで見ていて確認してほしい」と自分が死ぬのを心配し、恐れ、おののいていました。出産後の不安神経症の体験は「またあんなふうにはなりたくない」と、病気なおしの欲も動機の中にありました。家族にヒステリックにしか対応できないのを何とかしたいとも思っていました。
3	何一つ、「はい」と言えない思いを押し込め、隠し、口を開けばヒステリックなきつい女になっていました。中学時代に外人美人シスターにのぼせあがり、洗礼を受けたものの、窮屈さが耐えきれず、教会と縁を切っていました。狂いたくない、と息を詰めていました。
4	自分の中に、どこまでも広がる温もりの世界があるとは、驚きでした。広がる温もりに、私の中の苦しく息もできないまま固まってしまっていた思いの数々が、少しずつ温もりに帰りたいと、待ち続けていることを知りました。「心の中に答えは全部あります」と、自分を学ぶことを、何度も何度も伝えられました。 肉の思いの強い自分にとっては、やっと「丹田呼吸をして、息を整えましょう」が心に感じ、うれしくて涙が流れる自分を感じます。「０歳の自分を思いましょう」と何回も何回も毎日思いたいと思うだけで、うれしくなります。肉の田池先生の思い出が、「田池留吉に思いを向けましょう」と伝えてくれます。本当の自分と常にともにある、本当の自分に少しずつ向いていこう、帰っていこうと、感じるようにやっとなれた３０年余の学びで出会ったすべてに、私も喜び、うれしい、とともに瞑想に連なれることが、今幸せです。田池先生からどれほど愛されているか、幸せです。

1987 年（昭和 62 年） 3月頃に出会われた軸丸郭子さん

1	昭和６２年３月頃、母妹に勧められ勉強会参加しました。場所は忘れましたが、京都から電車に乗った時、目の前に田池先生ご夫婦が座っておられ、母が田池先生と伝えてくれました。私は先生を見るなり何故か泣き崩れました。先生はぷっと横を向かれたように感じ何と冷たい先生だなんて思ってしまいました。 陽子さんが会場に入る前に階段を上がる時、私のボストンバッグを持って下さいました。
2	眠れなく精神的不安定でした。
3	夫はほとんど出張で　子供３人私が育てるというような状態でした……学校の成績がすべて。出来ない子供は駄目と思い込んでいました。 間違った思いで子育てをしていました……。
4	母に対して、厳しい戦後１人で育てて下さったのに本当に感謝の思いなく自分勝手だったと申し訳なく思いました。 ただ何回か母と一緒にセミナー参加できたこと。うれしく思っています。

1987 年（昭和 62 年）８月に出会われた谷村美智子さん

1	昭和 62 年８月の熱海セミナーです。
2	先輩のようにステキな女性になれるかもしれないとセミナーに参加しました。またセミナーで学んだことを仕事に活かせるかもしれないという思いもありました。
3	苦しくて苦しくて限界でした。自分が望んだ離婚なのに、順風満帆な人生に離婚という汚点を付けさせた前の夫が許せなくて苦しかったです。さらには、この世の幸せを味わい尽くしているのに、心から喜べない楽しめない、孤独虚しさ焦燥感、何か分からないけど何かが違うという心の疼きをいつも感じていました。 学生の頃から家を出たいと思っていました。当時は、こんな田舎、私には相応しくないと思っていました。私に相応しい場所を求め関東で就職しました。ところが思いも寄らず、一人になると思うのはお母さん。それが不思議でした。母親は支配力が強く、子供は親の言うことを聞いて当然と思っていました。そんな母に初めて反抗したのが 24 歳でした。母は私の将来まで決め、嫁ぎ先は実家の近くで家同士の釣り合いの取れた家を望んでいました。相手や私の気持ちはどうでもよく、引っ叩いてでも家柄の良い家に嫁がせようとしました。それが 24 歳でした。そんな親から離れ、清々したはずなのに、呼ぶのはお母さん。大人になりきれず親離れしない自分を情けなく思いましたが、学びを知り、母を呼ぶ、母を思う自分に納得でした。
4	やっと本当のこと、真実に出会えたことから、心が安らいでいることが変わったことです。以前は心に安らぎは全くなく、本当のことを探し求め本を読み漁り区別差別、比較競争の中で右往左往していたけれど、「ここに在る」それだけで喜べるようになりたいと思っていたことが、現実になりつつあります。誰が居ても居なくても、肉があってもなくても、「私は在る」、それも永遠に。凄い、凄すぎる！！ もう一つ変わったことは、マイナスとプラスがハッキリしていたのが、ボヤけてきたことでしょうか。自分に都合良いことをプラスと捉え、都合悪いとマイナスに捉えてきました。「全て良し」の心境は、自分を信じ委ねられるということでしょうか。将来が不安で不安で仕方なかったけれど、伸び代がある将来を楽しみにするところも変わったところです。肉の成長を遂げることが人生と思ってきたことが、まるで間違っていました。心の成長を自分に期待し、自分が信じられること、それも大きな変化です。変わったこと、まだあります。 人の死が悲しいことと思えなくなったことです。泣いてる人が逆に不思議です。肉で会えない寂しさは分かりますが、死を終わりだと思えなくなりました。 さらに大きな変化は、誰が何と言おうと死んでも結婚したくなかった人と結婚してしまったけれど、嫌いだった自分のことを愛おしくなってきたことに伴って、最低と思ってきた夫のこともこんなに大好きだったのかと思えるほどになっていることです。最高の夫でした。夫が先立っても、「パパがいい、パパがいい」と言う私だろうとすでに分かっています。姿形を本当だと信じてきましたが、人間は姿形ではないことを知るために夫との結婚があり、私の心はそれを望みました。人生を賭けてその本当のことを知りたかったのです。結婚しても夫を私の夫と認めることが出来ませんでした。ここに記してやっと夫を夫だと認めている自分を知りうれしく思います。

1987 年（昭和 62 年）頃に出会われた石橋弘子さん

1	42 才でした。
2	姑さんが亡くなってお葬式が終わりやれやれと思ったら、昔からの伝えで人生 50 年私も死ぬまで直ぐやと思ったら、死に対する恐怖と不安な思いで夜遅くまで寝られなくなりました。生まれてきた目的があるはずだと思ったけど誰も知らないし、本当の幸せって何だろうと思った時友達に校長先生しておられた人の話を聞きに行かないと誘われてそれからです。33 年になります。
3	「一番になれないけど一番になること」。戦って戦って負けたくないという思いで生きてきた。「金と力」の中に幸せになれると思って、金、金と、走って走って走って、身も心もクタクタ疲れ果てて、毎日することしたら後はゴロゴロしていました。
4	幸せになれると思い、毎日毎日、仏壇の花の水替えたり、ご飯をお供えしたり、お経をあげたりしていたけど、なくなり、お墓もなくなり、草引きもなくなり、彼岸、盆、正月、バタバタしていたのですが、ゆっくりして愚かなことしてきたなと思います。子供も家はいらないと言うので売却したりして、今はマンション住まい。何も守るものがなくなり楽になりました。今は生きていくのに「シンプルイズベスト」と心も軽くなりました。幸せです。死に対しても以前みたいなことはないです。

1987 年（昭和 62 年）11 月頃に出会われた小原和歌子さん

1	初めて岩手県の花巻市でセミナーがあったとき（1987 年 11 月）にセミナーでお会いしました。
2	初めは親に連れられて、どこかにお出かけできると思って、勉強にはあまり興味もなく参加していました。大人になるにつれて、だんだん自分の心の苦しさ、寂しさを感じ、やはり真実を教えてくれるところはここしかないんだろうなあと思い参加するようになりました。しかし苦しい思いを何とかしてもらいたいという他力の思いで参加していました。
3	自分の思い通りになれば幸せになれると思って、我に従えの思いを出し、戦ってきました。外に幸せがあると信じて求め続けてきました。いろいろなことに興味を持ち、心を向け、エネルギーを使ってきたけれど、今思えばそのどれもが自分の心を満たしてくれるものはなく、どうでもいいことに心を向け、戦ってきたんだなあと思います。
4	この学びに出会ってから、少しずつ心の外に求めるのが弱まってきて、心が軽くなってきたように思います。そして、自分の中に喜びがあるんだ、もう何も外に求めなくていいんだなと少し信じれるようになり、まだ、喜び喜びとまではいかないけど、しみじみうれしいなと思います。以前は目に見えて肉で感じられるものしか信じられませんでしたが、この学びを通して、頭では理解できない世界や、たくさんの自分が心で待っているんだと感じる体験をして、これからは心で感じたものをもっと大切にして生きていこうと思っています。

1987 年（昭和 62 年）頃に出会われた小栗満里子さん

1	３４、５年前ですか……
2	子育てに悩んでいた。
3	母原病……という本を読んで、母親としての自分が間違っていると思ったのですが、どうすればそんな自分を正しい方向へ導いていけるのか……分かりませんでした。色んな思いが交錯し四苦八苦していた自分でした。
4	人間は霊である……から始まる先生のお話は私にはさっぱり分かりませんでした。でも田池先生のお話は聞きたいとの思いは続きました。母の反省の作業を通してがんじがらめだった心が少しずつですが緩んでいくのを感じました。頭では計り知れない意識の世界を辿っていく道を歩み始めました。

1987年（昭和62年）頃？に出会われた増田美耶子さん

1	32～33年前？くらい
2	小さい頃から私は身体が弱く、母はいろいろ他力信仰をしてきました。母に連れられていろいろな所に行きました。最後この学びに出会ったのはお友達の紹介ではじめて自分の意志で来ました。今思えば全く他力信仰で、ただ家族が健康でつつがなく暮らせるようにと。
3	父も祖母も子供たちは勿論、母に従って家族が幸せに暮らせるようにと他力信仰、その他いろいろしてきました。中学3年の頃ふっと良い学校に入っていい結婚をして人生を終えるって虚しいなーと思いました。人生って……と考えていましたが、その後深く考えることもなく平凡な生活を送りました。
4	つつがない肉の生活を送っていても心は満たされなく、淋しかったです。先生に出会って、その頃今のようではなかったので毎日のように陽子さんと3人で出かけては喫茶店でよくお話をして楽しい日々を過ごしました。ただいま思えば勿体無いことをしてきたなーと、他力信仰の続きをしてきたと、土台、基盤が変わることの厳しさを思って今はこの学びに出会って心を見ること、向け先を知ったことがうれしいなーと、ただ淡々と喜んでいます。

1987年（昭和62年）11月頃に出会われた中野知佐子さん

1	多分、小学校の低学年くらいだと思います。母に連れられて、八尾センターの勉強会や熱海セミナーとかに行っていたので。母はこの勉強では古いので、田池先生とも近しい間柄でしたが、私はまだ小さかったのもあってか、直接会話したというのはあまり覚えがありません。でも、小学校の高学年の時にロスのセミナーにも付いて行ったりしてたので、先生と旅行したな～くらいの記憶は残ってます。
2	子供の頃に行っていたのは、ただただ母が泊まりで居なくなるのが寂しくて、ついていっていたのだと思います。行っても、子供部屋で子供同士で遊んでいただけだったので。決して、勉強会に参加しにいっているという感じではなかったです。それから、学生時代にも、何度か来たり来なかったりはしました。セミナーには参加してたし、それなりに学んでるつもりはあったんだろうとは思います。でも、ちゃんと自分から勉強会に参加したい！ と思って申し込んだのは、2014年の3月琵琶湖セミナーでした。理由はやはり肉の生活での躓きでしたが、一番影響を受けたのは兄の存在でした。兄がその何年か前から、母とセミナーへ参加するようになり、私は正直、それを羨ましく思っていて、私も行きたいな～という思いがジワジワと強くなってきてたのです。それまでの兄はセミナーにまさか参加するような人ではなかったし、セミナーに参加するようになって、まるで別人のようになったな～と感じていました。元々優しい兄ではありましたが、何というか、もっと柔らかい印象を受けるようになっていったのです。それで、ムクムクとセミナーへ参加したい思いが強くなっていきました。実際、何年かぶりにセミナー会場へ足を運んで、琵琶湖グランドホテルの階段の下で、ふるさとのピアノが聴こえてきた瞬間に、なんだか懐かしくて涙が止まらなくなったのを今でも強く覚えています。
3	2014年3月琵琶湖セミナーに来る2年ほど前に、肉で大きな出来事がありました。私の中の天変地異だと今では思っています。そこがまさにターニングポイントになりました。それまではそれなりに楽しく過ごし、肉の生活を楽しんでいたのですが、ある時から、飲み会から帰ると何だか虚しい気持ちになったのです。その頃はもう、いつも刺激に飢えてるというか、きっと寂しくて寂しくてたまらなかったのだと思います。どうしようもない寂しさを肉で必死に埋めようとしていました。でも、その寂しさは埋まるどころが増えるばかりでした。しかし、その寂しさがやっと満たされる時期が訪れました。やっと満たされた、とその時の私はとても幸せを感じていました。でも、それも長くは続かなかったのです。続かないどころか、私は想像もしていなかったドン底へと落ちていきました。その時の私は、そこへ自分のすべてのエネルギーを注いでいたので、何にもなくなったのです。まさに無、空虚でした。何もする気もなくなり、日々生きていくのにやっとな感じでした。そこにすべてを依存していたのです。そして、生きる支えがなくなり、ボロボロでした。そこから、しばらくその状態が続き、何をしても立ち直れない状況だったと思います。その時に、「あぁ、肉で幸せになろうとしてもなれないんやな～」と思いました。それがまた学びに繋がる大きな出来事でした。

4	大人になってから、また勉強会に参加するようになって、最初は中途半端さが抜けきれないまま学んでいました。今もまだまだ甘い認識で、自分に厳しくは学べていないと思います。でも、学ぶ前と何が変わったかというと、やはり何かが起こった時に何故起きたのか？？ その時の自分の思いを見る、そこに向けられることを知ったのは大きな違いだと思います。思いの向け先を知ることが出来たのは本当に幸せなことやな〜と、今では兄とよく話しています。相手ではなく自分、外ではなく内へ、思いを向けていくことを、学ばせていただけたのは、本当に千載一遇のチャンスを与えていただいてるんやな〜と。セミナー参加を重ねる度にその思いが強くなりました。今はもう、250 年後の出会いを思うと、本当にうれしくてたまりません。肉では良く分かっていないのかもしれませんが、宇宙を思う時、250 年後の出会いを思う時、飛び上がるほどのうれしさが込み上げてきます。みんな帰ろう、ともに愛へ帰ろうと。うれしいです。ありがとうございます。

1988 年（昭和 63 年）１月に出会われた西浦久仁子さん

1	1988 年1月
2	心の安らぎがほしかった。初めて田池先生のお話を聞いたとき、もっと聞きたいと思った。
3	本を読むのが好きでした。興味のあることは知識を入れ、でも行動にはなかなか移せない頭でっかちな自分でした。
4	頭、知識ではなく心が大切なこと。今まで人の思いを読もうとして、自分の思いを大切にしてこなかった。自分の思いが見えにくかった。素直になるということがわからなかった。本当のやさしさに出会った。

1988 年（昭和 63 年）頃に出会われた朝日めぐみさん

1	小さい頃（弟が生まれていなかったので多分４歳とか５歳ごろ）、母と一緒に八尾センターに行ったことを覚えています。部屋の真ん中に大きな柱があって、その向こうで田池先生が前に立って話されていました。
2	幸せになりたいという思いがとても強かったです。どうすれば幸せになれるのかいつも考えていました。家族、友達、異性、仕事……、結局、私が求めた幸せはどれもうまくいきませんでした。頭打ちになり、生きている意味が分からなくなって、生きている意味がないんじゃないかとまで思うようになり、18 歳の時に母や叔母がやっていたこの学びに行ってみようと思いました。
3	幸せを全部自分の外に求めていました。苦しくて苦しくて仕方がなかったです。その苦しさを、どんな手を使ってもなんとかしたかったけれど、なんとかすることも誤魔化すこともできませんでした。 幸せになるために自分が持っている最大限のパワーを使いました。誰かが苦しんでいる姿を見たくなかったから、家族や友達など周りの人がみんなが幸せになれる方法をいつも考えていました。そのパワーはアマテラスのパワーだったと今思っています。
4	田池先生に出会った後も、苦しい自分は変わりませんでした。本に書いてあることは私にとって異次元のことでした。異次元のことなのに、その話を聞きにセミナーに行っている自分という存在に対しても不思議に思っていました。「田池先生は何者なんだろう」とセミナーに行くたびに考えていました。田池先生には何の利益もないのに、なぜ、月２回も宿泊セミナーを開催しているのかが私には分かりませんでした。そんなことを思いながら、この学び以外に私の探す答えは見つかりませんでした。 そう思いながらも、何度もセミナーに足を運ぶうちに、ある時「この本に書いてあること、田池先生の話されていることが本当に本当のことだったら」と思い、この学びを真剣にやってみようと思いました。やるだけやってみて、ダメだったらその時考えようと思いました。 学びに出会って、自分にとっての人生、生きていく方向が変わったと思います。方向を教えてもらったことはすごいことだと思います。

Idolatry and Reflections on Idolatry

Humans for so long thought this body was the only truth that they created many powers to pray and worship to. Somewhere along the way, we lost faith in ourselves and lost the belief and knowledge that we can change ourselves. Our priority was this physical existence and it became increasingly important to make this life wonderful somehow. Maybe increasing our wealth or status, or some such thing, would bring happiness? So, we began to look outside of our hearts for answers.

We have been seeking for powers outside the individual for salvation, for material benefit, and for physical satisfaction. We thought if we prayed to these entities that somehow we would and could be satisfied. We very easily gave up the belief that we could change our suffering hearts and ourselves. By giving up this belief in ourselves, we began the continuing cycle of worship. It became natural for us to create a deity, of salvation, of money, of power, to "look" to for help in our lives. We were never satisfied at looking within ourselves for the answers to our struggles. We never wanted to change our dark hearts because it seemed that the easiest way out from our suffering was to look to these false gods and energies to ease that suffering and increase our physical satisfaction with life.

Mankind created religions because they were suffering. There was pain and darkness and they needed someone to turn to. So, we created gods to pray to, worship, and idolize to try to save ourselves and alleviate the pain and emptiness in our hearts. We gave up belief in ourselves. Our history indicates that we have never really believed in this true consciousness of warmth. Therefore, we have created many false gods and energies in our hearts that supposedly could save our suffering selves. The fact is: No one can save your suffering self, except yourself.

We denied the fact that we could heal ourselves and return to warmth. We thought we had to create these other religions, powers, gods, to take away our suffering. We gave them tokens, empowered them so they could bring us happiness and truth, and alleviate our pain. This is why we created so many religions.

We willingly believed in something other than our true selves. We abandoned the idea that happiness is found within. We didn't know we had the ability to save our own selves. If we had known what

we were capable of, i.e. able to save and embrace our own suffering selves, we would have saved ourselves long, long ago and returned to mother's consciousness.

Once you believe that something other than yourself can bring you happiness, you will never understand the truth of mother's warmth. Do you understand?

I say to you that you will never have true satisfaction in your heart and your life unless you believe in your warmth, the consciousness of **Tomekichi Taike**. Unless you believe in these vibrations of warmth, unless you meet your true consciousness, you will never be truly satisfied or happy.

Obviously, idolatry is the worshipful feelings you have had toward any deity or energy, such as Allah, Buddha, Yahweh, Jesus Christ, etc.. There are also more abstract forms of worship people have to: money, power, psychic ability, etc.. For this part of reflection, you need to decipher and identify the worshipful feelings you have been using presently.

The thoughts you are using presently are also thoughts you have used in your past. By looking at these worshipful selves, you will see how many false gods and energies you have worshipped. These are obstacles in your way of understanding the truth. You must realize that you have been controlled by these energies. Once you realize in your heart that you have been controlled by these energies you will be one step close to understanding your true warmth.

"Reflections on idolatry" is something everyone must do, whether you have embraced a religion in this lifetime or not. You have had so many "lives" where you have worshipped many gods and other powers. Idolatry doesn't only extend to god or gods, like I have said before; it is also your worshipful thoughts toward money, power, authority, fame, intelligence, etc.. These are all things that mankind has treated with reverence. We have placed these items on a pedestal, hoping to attain happiness and satisfaction with this material life.

Everyone has much worshipful energy in his or her hearts. Please acknowledge this energy so that you may accept it and move forward in this study. I wait here patiently, asking you to look at these hearts diligently, without haste. I know that once you break through this impediment you will come to know the true warmth in your heart. I am waiting for this.

("Our Essential Nature")

第３章　反省研修会、海外へ！！

1988 年（昭和 63 年）

９月２日～８日《第 85 回反省研修会（第１回神理をまなぶ会アメリカツアー）／ロサンゼルス　ホリデイイン・トーランス》
９月 17 日～ 18 日《第 86 回反省研修会／東京全社連会館》
10 月２日～３日《第 87 回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
10 月 15 日～ 16 日《第 88 回反省研修会／東京青年文化会館》
10 月 26 日～ 27 日《第 89 回反省研修会／京都堀川会館》
11 月４日～６日《第 90 回反省研修会／箱根仙石原 ササ尾山荘》
11 月 13 日～ 14 日《第 91 回反省研修会／東京ゆうぽうと》
11 月 25 日～ 27 日《第 92 回反省研修会／白浜温泉ホテル千畳》
12 月３日～４日《第 93 回反省研修会／東京全社連会館》
12 月 10 日～ 11 日《第 94 回反省研修会／かんぽーる京都》
12 月 17 日～ 18 日《第 95 回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
12 月 29 日～ 30 日《第 96 回反省研修会男子会／熱海富士屋ホテル》
※この年、大阪は近鉄八尾駅前に「神の子の道大阪研修センター」東京は、ＪＲ横浜線橋本駅前に「神の子の道東京研修センター」が、それぞれオープンする。

1989 年（昭和 64 年、平成元年）

１月７日　昭和天皇、崩御。翌１月８日「平成」に改元。
１月７日～８日《第 97 回反省研修会／京都堀川会館》
１月 16 日～ 17 日《第 98 回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
１月 28 日～ 29 日《第 99 回反省研修会／東京青年文化会館》
２月３日～９日《第 100 回反省研修会／かんぽーる京都》
２月 11 日～ 12 日《第 101 回反省研修会／東京研修センター》
２月 24 日　昭和天皇の大喪の礼挙行。
２月 25 日～ 26 日《第 102 回反省研修会／東京研修センター》
３月４日～５日《第 103 回反省研修会／京都堀川会館》
３月 11 日～ 12 日《第 104 回反省研修会／東京研修センター》
３月 19 日～ 21 日《第 105 回反省研修会／花巻温泉・松雲閣》
３月 24 日～４月６日《第 106 回反省研修会（神理を学ぶ会第２回アメリカツアー）／ロサンゼルス＆シカゴ》
４月８日～９日《第 107 回反省研修会／東京研修センター》
４月 15 日～ 16 日《第 108 回反省研修会／京都堀川会館》
４月 22 日～ 23 日《第 109 回反省研修会／東京研修センター》
４月 29 日～ 30 日《第 110 回反省研修会／大阪研修センター》
５月６日～７日《第 111 回反省研修会／東京研修センター》
５月 13 日～ 14 日《第 112 回反省研修会／いこいの村いむた池》
５月 20 日～ 21 日《第 113 回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
５月 27 日～ 28 日《第 114 回反省研修会／大阪研修センター》

1988 年当時のホリデイイン・トーレンス

6 月 3 日～ 4 日《第 115 回反省研修会／東京研修センター》
6 月 4 日　天安門事件
6 月 7 日～ 8 日《第 116 回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
6 月 10 日～ 11 日《第 117 回反省研修会／大阪研修センター》
6 月 24 日～ 25 日《第 118 回反省研修会／東京研修センター》
6 月 30 日～7 月 2 日《第 119 回反省研修会／白浜温泉ホテル千畳》
7 月頃　東京旧家の墓地供養が田池先生の指導で実施。
7 月 6 日～7 日《第 120 回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
7 月 8 日～ 9 日《第 121 回反省研修会／東京研修センター》
7 月 9 日　伊豆東方沖で地震
7 月 13 日　伊豆半島沖で海丘が爆発噴火
7 月 17 日～ 20 日《第 122 回反省研修会（韓国で初のセミナー）
／ソウル　ホテルロッテ》
7 月 29 日～ 30 日《第 123 回反省研修会／東京研修センター》
8 月 5 日～ 6 日《第 124 回反省研修会／大阪研修センター》
8 月 19 日～ 20 日《第 125 回反省研修会／東京研修センター》
9 月 9 日～ 24 日《第 126 ～ 128 回反省研修会（第 3 回神理をまなぶ会アメリカツアー）／ロサンゼルス＆シカゴ》
9 月 30 日～ 10 月 1 日《第 129 回反省研修会／東京研修センター》

Holiday Inn
ロサンゼルス反省研修ツァー参加記念
1988年 9 月 2 日～ 8 日

◇ 第１回 ロサンゼルス反省研修会での田池先生の第一声です！◇

神は確実に存在しております。そして、私たちは、その神の子であります。
神の子ということは、私たちは、その神の一部であるということであります。
神の一部であるということは、本質的において、神と同じであるということです。
我々の中に神がおられるということであります。
さらに、神の子であるということは、一つであるということです。
一つであるということは、我々は平等であるということであります。
我々は、すべて平等であるということであります。そして、自由であるということであります。

第８５回反省研修会日程

会場　ロサンゼルス　ホリデーイン・トーランス

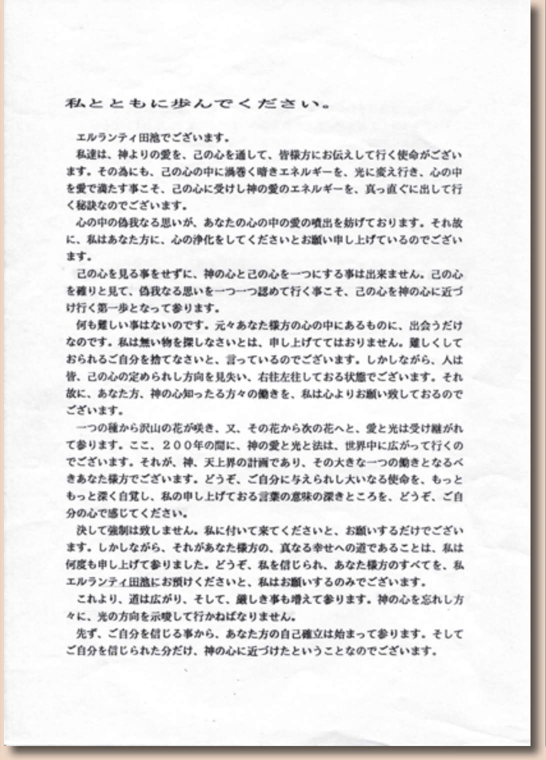
９月３日（土）

13:00 ～ 13:10	研修の案内
13:10 ～ 14:10	講話　「神の子の道（1）　意識と肉体」
14:20 ～ 15:20	質疑応答
15:40 ～ 17:00	瞑想
18:00 ～	夕食
19:30 ～ 20:30	講話　「神の子の道（2）　自分の心を見る」
21:00 ～ 22:00	反省　〔　　　　　〕について
22:00 ～	自由時間・就寝

９月４日（日）

7:30 ～	朝食
9:00 ～ 9:30	講話　「私とともに歩んでください。」
9:40 ～ 10:40	瞑想と反省
11:00 ～ 12:00	反省　〔　　　　　〕について
12:30 ～	昼食
13:30 ～ 14:30	質疑応答
14:40 ～ 15:40	瞑想と反省
16:00 ～ 17:00	反省　〔　　　　　〕について
18:00 ～	夕食（レセプション）
20:00 ～ 21:00	反省　〔　　　　　〕について
21:20 ～ 21:50	天上界からの言葉
22:00 ～	自由時間・就寝

プリント　「神の子の道」「真の幸せへの門出」「現象　意識について」
「私とともに歩んでください。」



私とともに歩んでください。

エルランティ田池でございます。

私達は、神よりの愛を、己の心を通して、皆様方にお伝えして行く使命がございます。その為にも、己の心の中に渦巻く暗きエネルギーを、光に変え行き、心の中を愛で満たす事こそ、己の心に受けし神の愛のエネルギーを、真っ直ぐに出して行く秘訣なのでございます。

心の中の偽我なる思いが、あなたの心の中の愛の噴出を妨げております。それ故に、私はあなた方に、心の浄化をしてくださいとお願い申し上げているのでございます。

己の心を見る事をせずに、神の心と己の心を一つにする事は出来ません。己の心を確りと見て、偽我なる思いを一つ一つ認めて行く事こそ、己の心を神の心に近づけ行く第一歩となって参ります。

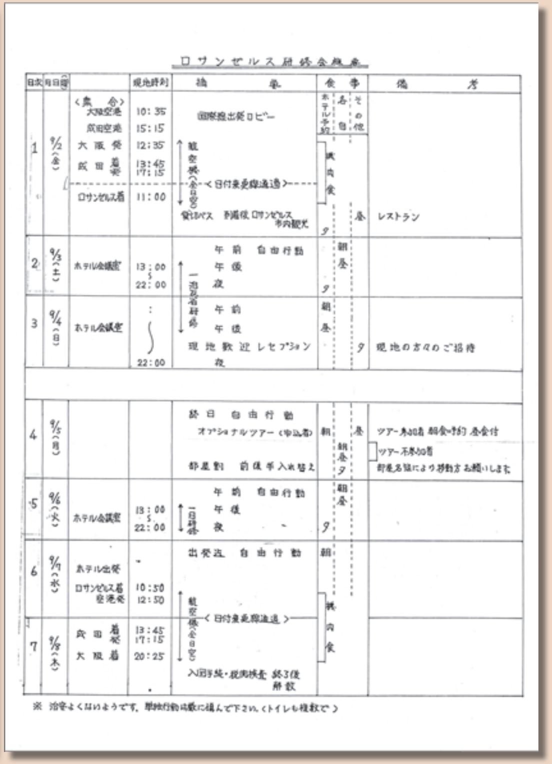
何も難しい事はないのです。元々あなた様方の心の中にあるものに、出会うだけなのです。私は無い物を探しなさいとは、申し上げてはおりません。難しくしておられるご自分を捨てなさいと、言っているのでございます。しかしながら、人は皆、己の心の定められし方向を見失い、右往左往しておる状態でございます。それ故に、あなた方、神の心知ったる方々の働きを、私は心よりお願い致しておるのでございます。

一つの種から沢山の花が咲き、又、その花から次の花へと、愛と光は受け継がれて参ります。ここ、２００年の間に、神の愛と光と法は、世界中に広がって行くのでございます。それが、神、天上界の計画であり、その大きな一つの働きとなるべきあなた様方でございます。どうぞ、ご自分に与えられし大いなる使命を、もっともっと深く自覚し、私の申し上げておる言葉の意味の深きところを、どうぞ、ご自分の心で感じてください。

決して強制は致しません。私に付いて来てくださいと、お願いするだけでございます。しかしながら、それがあなた様方の、真なる幸せへの道であることは、私は何度も申し上げて参りました。どうぞ、私を信じられ、あなた様方のすべてを、私エルランティ田池にお預けくださいと、私はお願いするのみでございます。

これより、道は広がり、そして、厳しき事も増えて参ります。神の心を忘れし方々に、光の方向を示唆して行かねばなりません。

先ず、ご自分を信じる事から、あなた方の自己確立は始まって参ります。そしてご自分を信じられた分だけ、神の心に近づけたということなのでございます。



ロサンゼルス研修会概要

日次	月日(曜)		現地時刻	摘要	食事	備考
1	9/2(金)	〈集合〉大阪空港 成田空港 大阪発 成田着・発 ロサンゼルス着	10:35 15:15 12:35 13:45 17:15 11:00	国際線出発ロビー 航空機(全日空) 〈日付変更線通過〉 貸切バス 到着後ロサンゼルス市内観光	機内食 昼 夕	レストラン
2	9/3(土)	ホテル会議室	13:00〜22:00	午前 自由行動 午後 夜	朝 昼 夕	
3	9/4(日)	ホテル会議室	〜22:00	午前 午後 現地歓迎レセプション 夜	朝 昼 夕	現地の方々のご招待
4	9/5(月)			終日 自由行動 オプショナルツアー(申込者) 部屋割 前後半入れ替え	朝 昼 朝 昼 夕	ツアー参加者 朝食[illegible] 昼食付 ツアー不参加者 部屋番号により移動方お願いします
5	9/6(火)	ホテル会議室	13:00〜22:00	午前 自由行動 午後 夜	朝 昼 夕	
6	9/7(水)	ホテル出発 ロサンゼルス着 空港発	10:30 12:50	出発迄 自由行動 航空機(全日空) 〈日付変更線通過〉	朝 機内食	
7	9/8(木)	成田着・発 大阪着	13:45 17:15 20:25	入国手続・税関検査 終了後 解散		

※ 治安よくないようです。単独行動は厳に慎んで下さい。(トイレも複数で)

第１回ロサンゼルス反省研修会での日程と講話資料の一部／右はツアー全体の日程表

1988 年 9 月 2 日に初めてのアメリカセミナーがロサンゼルスで開催されました。
……と思うや、翌 1989 年の3月には第2回がロサンゼルスとシカゴで、さらに 9 月には第3回が、同じくロサンゼルスとシカゴで開催されるに至ったのです。この一連のロサンゼルスでのセミナーが、当時、14 歳だった一人の少女の心にある衝撃を与えました。
やがて、その衝撃が『Our Essential Nature(意識の旅路)』という本となりました。

私はジェニー・ライです。この学びにもう２０年以上関わっています。最初、田池氏にロサンゼルスで出会ったのは、私が 14、5 歳の頃でした。田池氏の「お話し会」に参加し、帰宅した母を覚えています。母は転生、意識とは何かを説明してくれました。それに興味がわき、もっと知りたいと思いました。というのも、私はそんな若い頃から気分が滅入(めい)っていて自殺願望がありました。人生に生きている価値を見出せず、苦しみの底でさ迷っているように感じていました。私の心はいつも満たされることなく、悲しくてさみしくて、いつもいつも自分の存在理由を問い続けていました。しかし、田池氏のお話では、永遠の意識、そして温もりが私たちの真の存在だと語られていました。

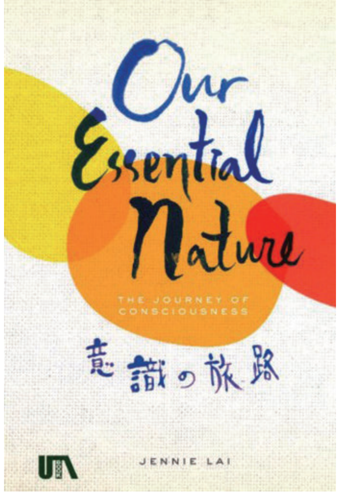
興味をそそられた私は、自分でその講演会に参加してみようと思いました。初めて田池氏に出会ったとき、心の中に衝撃的な温もりを感じたのを覚えています。それまで全く感じたこともない温かさに包まれたのです。田池氏にすごくひかれていきました。

とても若かったので、疑いさえもしませんでした。若いうちは心のままに従うという智恵をみんな持っています。私はそうしました。ただ求めていきました。その頃は日本語を全く話せなかったので、田池氏の講話は母に通訳してもらいました。田池氏は、母親、そして母親の反省の大切さ、反省をすれば自分の心の中に何かを感じてくるという話をされていました。何も失うものはない、すべて自分のためになると感じ、やってみることにしました。そして日記をつけはじめました。その日記は、人生そして母親についての反省でうめられました。大きな分厚(ぶあつ)いノート１０冊を書き終えた頃から、私は少しずつ心に何かを感じはじめました。無視できないような感覚が心に湧いてくるのです。突然涙が出てきたり、衝撃的な温もりを感じたり、そしてもっと重要なのは、日々の生活に満足感を覚えるようになったことです。ですから私は日記を書き続け、瞑想をし、できる限り日本での講演会に出席しました。

Our Essential Nature

My name is Jennie Lai. I have been involved in this study for more than 20 years. When I first met Mr. Taike in Los Angeles, I was quite young maybe 14 or 15. I remember my mother coming home from one of these "talks" by Mr. Taike. She explained to me the concept of reincarnation and consciousness. I was intrigued and wanted to know more because even at such a young age, I felt depressed and suicidal. I couldn't understand why life was worth living and felt I was wallowing in the depths of my suffering. I always felt dissatisfied, sad, and lonely in my heart, constantly questioning the reasons for my existence. However, the talks of Mr. Taike spoke of an eternal consciousness and that warmth was our true existence.

With my interest piqued, I decided to attend one of these lectures myself. I remember feeling a shock of warmth in my heart the first time Mr. Taike and I met. I felt something very different and warm surrounding me. I remember feeling very drawn to Mr. Taike.



Being so young, it wasn't difficult not to question. When you are young, you have the wisdom to just pursue what tugs at your heart. That is what I did, I just pursued. My mother translated Mr. Taike's lectures because I didn't speak an ounce of Japanese at the time. He spoke of mother, and the importance of reflecting on mother and that after doing this you would feel something within yourself. I felt that I had nothing to lose and everything to gain, so I gave it a go and began to keep a journal. This journal was filled with reflections on life and on Mother. After writing in about 10 yellow legal pads, I slowly began to feel something in my heart. The feelings arising in my heart were something that I could not ignore. I would spontaneously weep and feel shocks of warmth and more importantly, more contentment in my physical life. So I kept writing in my journal, doing meditation, and attending talks in Japan when I could.

ロスセミナーに集った人たちの声

では、アメリカでの「反省研修会」開催の発端(ほったん)について、当時、お世話いただいた方々からお話を承りましたので、その一部をご紹介させていただきます。

浅尾宣子さん菅三輪子さん姉妹

浅尾さんは、妹の菅さんがロサンゼルスに暮らしておられますが、その妹さんから田池先生のことを教えられたと言います。

といっても、当時は、妹さんが日本で開かれている「反省研修会」につながっているとか、参加されていたとか、田池先生をよく知っておられるとか、そんなことは一切なかったと言いますから、何とも奇妙なお話です。

ロサンゼルスには日系の方が多く住んでおられますが、当時は、インターネットも今のように普及していませんでした。日本では、ワープロが普及しはじめた頃のことです。日系の方は、日本語の書籍に飢(う)え、紀伊國屋書店や旭屋書店の店頭に日本語の新刊書が並ぶのを心待ちにしていたと言います。そんな新刊書の中でも、日本宗教 —— GLA や PL 教団あるいは創価学会等の書籍は、宗教のグローバル化の波に乗ってアメリカ国内に広がっていきました。祖国日本を離れて、日本語への渇望(かつぼう)と、ある種の寂しさが、これら日本宗教がアメリカの日系人社会に定着していった背景にはあるようです。

そんな裏話はさておき、菅さんの場合は、日系新聞で高橋信次さんの 10 回忌セミナーを知り、参加したい旨を GLA に電話したところ迎えに来てくれた人が、やはりロスでＧＬＡに参加していた牧村さんご夫妻でした。

ところが牧村さんの奥さんが、なんと田池先生の教え子だったのです。

後の話になりますが、牧村さんは、ＧＬＡの教えが「肉基盤の教え」にとどまっ

ており、田池先生の説(と)く「意識の世界」こそが本物と感じＧＬＡを離れるようになりました。

そして、田池先生が反省研修会で話されている内容のカセットテープを、菅さんにもプレゼントしたというのです。

こうして菅さんは、まだ見ぬ田池先生とつながったという次第ですが、そこで菅さん、日本にいるお姉さんの浅尾さんに田池先生に電話することを勧(すす)めます。

浅尾さんが脚が悪いことを知り、それを霊障ととらえ、田池先生と会うことで状

況が改善すると思われたからでした。

それが 1986 年の９月から年末にかけての一連の流れでした。

日本では、田池先生が、この年の３月に府立高校の校長職を辞され、本格的に「意識の世界」の真実を説きはじめておられる頃のことです。

浅尾さんは、妹さんが気遣ってくれる思いがうれしく、その思いに引っ張られて田池先生のご自宅に電話したと言います。

しかし浅尾さんは、「田池先生の言われることはチンプンカンプンで分からなかった」とも言います。

田池先生は、翌 1987 年の１月７日、富田林市の大城さん宅で１日だけの勉強会があるからと、浅尾さんに参加するように誘われました。

このことを浅尾さんから知らされたロスの菅さんは、お姉さんに「霊障だから、行けないよう邪魔が入るはず。あきらめず何が何でも、その集まりに参加するように」と発破をかける有様。この菅さんの勢いが、日本の浅尾さんと田池先生とをつなぎ、ロサンゼルスでのセミナー開催へとつながっていくことになるのです。

さて、反省研修会に参加するようになった浅尾さんに、田池先生が、「アメリカに本当のことを伝えていきたい」と、その胸中を吐露されたのです。

ここへ至る詳しい経緯は省略しますが、浅尾さんのご主人浅尾丑松さんも、某高校の校長先生をされており、修学旅行等の手配で旅行社ともつながりがあるということで、ロサンゼルスの妹さんとも打合せしながら、第１回ロサンゼルス研修会が着々と計画されていきました。

この一年前、あるチャネラーの方が、250 年後のアメリカで「意識の世界」の真実を説き、次元移行推進の原動力となるアルバート・ロックフェラーの意識を受けられたのです。

1987 年、京都の堀川会館で開かれる「反省研修会」へ参加する道中のことだったと言います。ただ資料がなく、この年、堀川会館で開かれた反省研修会は、８月、９月、10 月（上旬、中旬、下旬の３回）、さらに 12 月と、計５回が開かれており、特定をすることはできませんが……。

このことを聞いた当時は、世界的な大富豪ロックフェラー家の名が出たことで、何か現実離れしたおとぎ話のような感覚

で捉えていましたが、ロックフェラー家と日本との深いつながりを知る今となっては、何か遠い世界のことでなく、意識の面ばかりか、現実面でもすごくリアルなものを感じております。

それはさておき、第１回ロサンゼルスセミナーは、ホリデイイン・トーランスで、1988 年９月３日（土）から９月４日（日）までの一泊反省研修と、９月６日（火）の一日研修の計３日間が行われました。日本からの参加者は名簿が手元にないため、正確な数字は不明ですが、第２回、第３回の参加者人数から考えて 90 名余が参加したと思われます。これに現地参加者 22 名が加わりました。現地参加者の名簿は残されており、これを見る限り、この時参加された現地参加者の中で 10 名近い方が、今も学びに集われています。

そんな現地参加者で、今も学びに集われている大河内さんの思いを聞いてください。

大河内径子さんの思い

主人の仕事の都合で渡米し、ロスに在住していました。

1988 年９月に開催されたロスのホリデイインのセミナーが田池留吉との初めての出会いでした。当時私は 36 才。

セミナールームで先生の講話を聞きました。今まで友人から借りたテープを通して聞いていた先生の生の声。

みんなで瞑想が始まって間もなく、先生は椅子に座っている私の前に立ったようでした。目をちらっと開けて見たら私の足と先生の足が見えました。

「はい、目を閉じて……」

言われた通りに従いましたが、心は反発していました。

先生の手の平は私の額の辺りに翳されていたようです。

「そんなことして何になるんだ！」

私は猛反発しました。

しばらくして、なんとなく安心している自分を感じてたいたら、思いがけずに涙が出ました。その直後の講話で

「涙が出た人は、それは……感じているんですよ」とか、なんとかおっしゃったのを聞いて、「私は素晴らしい」と、誇る思いを膨らませていました。

あの日から 32 年経った今、感じることは、田池留吉に初めてお会いしたその瞬間がすべての答えだったということです。

「私たち人間は肉ではありません。本当の姿は意識であって永遠に存在するものです。私はあなた、あなたは私、ひとつ。」

このメッセージしかないと伝えてくれて

いたのでした。
　目を閉じて……私たち宇宙はひとつ
　次元移行のための出会いであり、この一点がすべてでした。
　大河内径子さんが32年前を振り返って、ロスの体験を書いてくださいました。ところが、この本の編集中、この大河内さんが、第1回ロス反省研修会参加直後に書かれたものが見つかったのです。
　瞑想に入っていけない苛立（いらだ）ち。ところが、悟りたいという欲を棄（す）てようとした途端、喜びが噴き上がってくるような瞑想へとチェンジしていく……その様子が大変興味深く書かれておりました。その一部を紹介させていただきます。
　真綿に包まれているあたたかさとでも言いましょうか。口を開けていることさえ忘れてしまう心地良さ。手の存在も足の存在もどこかに行ってしまったよう。暖かくて、温かくて……。いつまでもこうしていたい温かさ、柔らかさ、心地良さ……。喜び……幸せ……歓喜。
　1988年の9月3日からロスに於（お）いて研修会を開いていただき、先生はじめ皆々様、本当にありがとうございました。
　私は、1987年の9月末から、神の子の道に関することを牧村さんから教えていただき、彼女に励まされ、休みながらも少しずつ道を歩んでおります。
　その牧村さんが、田池先生一行が来るのを心待ちに待つ喜びを、会う度に語るのですが、私は何か他人事のように思えてなりませんでした。
　そして、セミナー参加の第一日目、田池先生の話が始まりました。
「ああ、この話は、いつもテープで聞い

ホリデイイン・トーランスからの眺め

ている。退屈だな。」

先生の話も心の中に入ってこないのです。ただ一つ、真剣に聞けた言葉、それは、「最後には、この研修会に出てよかったなと思われて、帰っていただけると思います」という言葉でした。

「ほんとにそうなのかしら。でも、田池先生があれだけ力を込めておっしゃるのだから確かだろう。よし頑張ってみよう。」

こんな調子で臨んでいたのです。

第１回目の瞑想。前もってどんな様子か聞いていたとはいえ、はっきり言って大変驚きました。「エルランティー」と心の中で幾度も呼んでみるのですが、聞こえてくるのは人の声だけ。

「誰がどうした。私がなんだの……。」

気がついたら、耳を澄ませて聞いているのです。ああ、こんなことではいけない……。なんと長い時間だったでしょう。

こうして第２回目、第３回目、第４回目の瞑想と続き、「また瞑想の時間がきた。いやだな。苦しい思いはしたくないし……。みんな神の子、恥ずかしいという心を捨てて楽にしよう」と思うのですが、しかし私は、まだ第三の人。

その日一日、どうして瞑想できないのだろうか。集中力が足りないのだろうかと、頭の中でいろいろ考えあぐねていました。

次の日の休憩時間に、佐藤博子さんに、瞑想時における私の心の状態をご相談しましたところ、次のように言われました。

「あなたには、早く悟りたいという欲がありますよ。早く悟りたいというのは欲ですよ。欲を捨てて、すべてを託す気持ちにならないと無理ですね。」

「すべてを託す……。」

幾度も聞いたことのある言葉ですが、これほど心から感じ取れたことはありませんでした。

そして、第５回目の瞑想。悟りたいという欲を捨て、神にすべてを託し、神に心を開こうと心から思いました。

楽に、楽に、楽に……と、瞑想を始めました。やがて、身体も心も、真綿をもっと柔らかくしたような温かな物に包まれている気持ちになり、首から下は自分の物という感覚がなくなりました。その内、口を開けている感覚もなくなり、幸せで幸せで、いつまでもこの温もりの中で過ごしたいと願う自分になっておりました。

今回、研修会に出席できてほんとうに良かったです。牧村さんが研修会を楽しみに待つ気持ちが、とてもよく分かるようになりました。

このような愛を、幸せを、説いてくださった田池先生に心から感謝をすると共に、この勉強をすることに、深い愛と理解を示してくださった夫の魂に、心から感謝をしております。

皆様、ありがとうございました。

私はこの先、人を、地球を心から愛する自分に気付くよう、自分に敷かれたレールの上に身を任せ、弛まず焦らず努力を続けてまいります。

そして、この章の冒頭に紹介しましたジェニーのお母さんキム・ワンさんもまた、第１

回ロサンゼルス反省研修会に参加し、以来、この学びにつながっておられます。

そんなキム・ワンさんが、 4つの質問に答えてくれました。

1. 田池先生に出会われたのはいつ?

When was the first time you met Mr. Taike?

I met Mr. Taike for the first time in September of 1988 at the Holiday Inn seminar in Torrance, California. I had listened to some dubbed tapes of the lectures he had in Japan before I met him.

私は1988年9月にカリフォルニア州トーランスで開催されたホリデイインでのセミナーで初めて田池氏に会いました。彼に会う前に、彼が日本で行った講義のダビングされたテープをいくつか聞いていました。

2. この学びに集われた動機は?

What was your purpose of this study?

I had been suffering with back pain for a while before and heard through my friend that maybe Mr. Taike could help me relieve the pain in my back if I went to the seminar.

しばらく背中の痛みに悩まされていたのですが、セミナーに行ったら、田池さんが痛みをやわらげてくれるのではないかと友達から聞いていました。

After I was introduced to Mr. Taike at the very first seminar I attended, he asked me where I had pain and proceeded to put his hand on my back. He then told me that it would take a while for my back to get better and that if I wanted to be fully pain free I would have to follow this study. That day I felt that my back was a little better.

初めてのセミナーで田池さんに紹介された後、どこが痛いのかと聞かれ、背中に手を当ててくれました。それから彼は、痛みが完全に良くなるのにはしばらく時間がかかるだろう、「でも、これを機会に自分の心と向き合っていきなさい」と私に言われました。この日、腰痛が少し良くなったと感じました。

So I first came to this study because of my back pain. Later, I continued with this study because I had problems with my daughter. Through junior high, my daughter was a very bright and mellow child. She was very energetic and happy, but somewhere around the start of high school. She became very depressed and sad. That was probably the time she became interested in Mr. Taike's lectures. I didn't know what to do with her or where to go for help. After Mr. Taike met her, he said that he could help her. So, I continued on with the study for her sake.

最初、私は背中の痛みのためにこの学びに集いました。その後、娘に問題がおこったので、この学びを続けることになりました。中学生の頃、娘はとても利発で大人びた子供でした。彼女はとても元気で幸

せでしたが、高校の始め頃、彼女は落ち込み悲しむことが多くなりました。

田池さんの講演に興味を持ったのはその時だったと思います。私は彼女をどうするか、どこに助けを求めるべきかわかりませんでした。田池さんは彼女に会った後、彼女を助けることができると言ってくれ、私は彼女のためにも、この学びを続けようと思いました。

3．田池先生に出会う前の自分の人生について書いてみてください。

How were you trying to find happiness before meeting Mr. Taike? How much effort did you put into it?

When I immigrated to the United States, I only sought out one thing: I wanted to have a happy home life. In the early 1970s, everyone struggled as an immigrant in America, I only prayed for healthy kids who could eventually go to good schools and become more settled in America.

アメリカに移住したとき、私が目指したのは一つ。幸せな家庭生活を送ることでした。1970 年代初頭、アメリカでは誰もが移民として苦労していました。私は、子供たちが健康で、最終的には良い学校に通い、アメリカに定住できるようになることだけを願いました。

I attended a Christian University in Korea and I thought going to church was part of what life was about and that you just did it. I did not particularly feel that going to the church would help with anything related to my home life but I tried because everyone around me was going.

私は、韓国のクリスチャン大学に通っていましたが、教会に行くことは生活の一部で、ごく自然な事でした。教会に行くことが私の家庭生活に役立つとは特に感じませんでしたが、周りの人が行っているので、同じようにやっているといった感じでした。

4. 田池先生に出会って何が変わりましたか？

After meeting this study what has changed?

For a long time, maybe 20 years, I didn't really want to do this study. Being a foreigner, I always felt I was an outsider at these seminars. Initially, I felt compelled to attend for my daughter, to be her translator, because she spoke no Japanese at the time. However, after listening to Mr. Taike many times, I finally felt like this study was not something only for my daughter, it was something important for me.

長い間、おそらく 20 年の間、私はこの学びを本当にやりたいとは思いませんでした。セミナーでは外国人なので、いつも自分は部外者だと感じていました。最初の頃、娘はまだ日本語を話せなかったので、翻訳者として出席せざるを得ないと感じていました。

しかし、田池さんの話を何度も聞いているうちに、ようやく、この学びは娘だけのものではなく、私にとっても大切なものだと感じるようになりました。

I am not a great reader of Japanese. I can read, but slowly and not without some difficulty. I think just being an outsider and not Japanese made me feel like I didn't belong. But after a while I believed that I needed to do this study for me, regardless of where I came from. I began to realize that this message of Mr. Taike was beyond race and countries. Also, I realized that the way I thought about myself and how I thought about life was very restricted.

私は日本語がうまく読めません。ゆっくりと読むことは出来ますが、それでも難しさはあります。部外者であることと日本人でないことが、私がここに居る必要がないような気がしたのだと思います。でも、しばらくして、私がどこの国の人間かに関係なく、自分のためにこの学びをする必要があると信じるようになりました。この田池さんのメッセージは、人種や国を超えていることに気づきました。また、自分の考え方や人生観が非常に限られていることに気づいたのです。

Over the past many years, I think my way of thinking and how I think about my life has really changed. I am trying to understand my dark energy and know my sole purpose is to change my darkness to love. I know I still have much tariki and Amaterus energy, but I try to observe my heart everyday, I try to return those energies to love. I have a lot of knowledge in my head, and I continually practice embracing my dark energy, but it is difficult.

過去何年にもわたって、私の考え方や人生に対する考え方は本当に変わったと思います。私は自分のダークエネルギーを理解しようとしています。私の唯一の目的は自分の闇を愛に変えることだと知っています。私はまだ他力とアマテラスのエネルギーがたくさんあることを知っていますが、私は毎日、自分の心を見るようにつとめ、それらのエネルギーを愛に戻そうとしています。私は頭の中で、たくさんの知識を持っていて、ダークエネルギーを受け入れる練習を続けていますが、それは本当に難しいことです。

◇

キム・ワンさんの娘・ジェニーについては、冒頭にもすでに紹介していますが、彼女が反省研修会に集うのは、このあと第２回のロサンゼルス研修会のことになります。ただ、田池先生との出会いは、この第1回の反省研修会が開催されたとき、田池先生はじめ、参加者の方々がワンさんのご自宅を訪問し、そこで勉強会を開かせていただくことになりました。このとき、ジェニーは部屋に引きこもっていたようですが、まさに、このときが田池先生との最初の出会いになります。

そのジェニーについても、４つの問いかけに答えてくれていますので、お母さんのワンさんと並べて紹介させていただきます。

1. 田池先生に出会われたのはいつ？

I must have first met Mr. Taike In 1988 or 1989. I was probably about 15 or 16 when he first came to my house in Torrance for an impromptu seminar. Actually I don't remember much except that there were a lot of people from Japan at the house and it was intimidating.

1988 年か 1989 年に田池さんに初めて会ったに違いありません。彼がトーランスの私の家に臨時のセミナーのために最初に来たのはおそらく 15 歳か 16 歳くらいでした。実は、家には日本からの人がたくさん来ていて、怖かった以外はあまり覚えていません。

The second time I met him is much more clear in my memory. I was 16 at this time. We met at the Holiday Inn in Torrance, California in 1989. I remember it clearly. It was a school day and my mother promised that she would take me to this "seminar" so that I could see what it was about. I was really excited to go and was looking forward to it all day. Imagine my disappointment when I got home and realized that she had gone with Mrs. Suga without me.

２度目に彼に会った時のことは、私の記憶の中ではるかにはっきりしています。この時、私は 16 歳でした。私たちは 1989 年にカリフォルニア州トーランスのホリデイインで会いました。はっきりと覚えています。学校の日だったので、学校が終わってから、母は私をこの「セミナー」に連れて行って、それが何であるかを見せると約束しました。私は行くことに本当に興奮していて、一日中それを楽しみにしていました。ところが、私が家に帰ってみると、母は私を残し、菅さんと一緒に行ってしまっていたのです。このことに気づいたときの私の

初めてチャネリングを受けるジェニー

失望を想像してみてください。

I was frustrated and angry. I was disappointed in my mother for breaking her promise to me. So, I decided to set out and get myself to the Holiday Inn in Torrance as quickly as I could. Surprisingly, I knew the bus route to get to the hotel and though it took me some time to get there, I eventually did get there.

私は怒りを覚えました。母が私との約束を破ったことに失望しました。それで私は、一人で、できるだけ早くトーランスのホリデイインに行くことにしました。驚いたことに、私は、ホテルに行くためのバス

のルートを知っていて、そこに着くのに少し時間がかかりましたが、最終的に、ホテルに着くことができたのです。

I remember storming into the seminar hall, eyes set on my mom. I was like a hawk and eventually found her near the front, and I was so angry and upset with her. I was crying. I calmed down a bit and just sat next to her while listening to her translate what Mr. Taike was saying. At this time, I did not understand any Japanese at all so I had no idea what was said beyond what my mom translated. What I do remember that very first time, actually listening to Mr. Taike's lecture, was feeling very warm, almost hot. I remember feeling like I was under a heat lamp and sweating profusely. At that time I chalked it up to being very angry.

お母さんの目をしっかり見据えて、セミナーホールに突入したのを覚えています。私は鷹(たか)のように、彼女の正面近くまで行きました。私は、とても彼女に腹を立てて泣いてさえいました。少し落ち着いてから、母の横に座り、田池さんが言っていることを翻訳してもらいました。私は、この時は日本語が全くわからなかったので、母が訳してくれた以上には、何が言われているのかわかりませんでした。でも、田池さんの講演を聞いた時は、とても暖かく、暑くさえ感じたのを覚えています。

ヒートランプの下にいて、汗をかいていたような気がしたのを覚えています。 その時、私は、それを自分が非常に怒っているせいだと思いました。

(The interesting thing here is that back in the day in Torrance there weren't a whole lot of people living there and most people had their own cars. So bus transportation was sporadic and unpredictable at best. The buses had schedules but they never stuck to the schedules, so you really had no idea when the buses were coming. You simply had to wait and hope that the right bus would come.

トーランス独自のバス（トーランストランジット）
乗り場も分かりにくく時間どおりに来てくれません

I still find this strange. Of all the things I knew, I had known for a few years how to get to the Holiday Inn in Torrance because it was very close to the Del Amo Shopping Mall. When I was young, this was the only place to "hang out." I figured out how to use the bus system when I was in junior high and would sometimes take the bus to the mall. It took a very long time and two buses to get there, but I managed.)

（ここで興味深いのは、当時は、トーランスに住んでいる人は少なく、しかも、ほ

とんどの人が自分の車を持っていたため、バスの交通手段は、便数も少なく予測不可能でした。バスにはスケジュールがありましたが、バスがいつ来るのか全くわからず、ただ待って、正しいバスが来ることを期待するだけでした。

さらに奇妙なことに、私はトーランスのホリデイインに行く方法を数年前から知っていたのです。それはデルアモ・ショッピングモールに非常に近いからです。私が若い頃、ここが「たむろ」する唯一の場所でしたから、中学生の時にバスの使い方を考えて、時々バスでモールまで行っていたのです。そんなわけで、とても長い時間とバスを一回乗り換えながらも、何とかセミナー会場に辿り着きました。）

２．この学びに集われた動機は？

When I first came to this study, it was a very sad and depressing time in my life. Since a young age, I think I always had a lot of questions about life's purpose and what I was meant to do while being on this earth. And at this particular moment in my life a combination of this question and this sadness led me to wanting to know more about this study. I had I went to a private Christian school while in elementary and later attended a Roman Catholic church with my parents, but none of these endeavors seemed to yield any internal satisfaction for me. I started to question this "Christian" god and wanted to hear other ideas.

私が最初にこの学びに集ったとき、それは私の人生の中で非常に悲しくて憂鬱（ゆううつ）な時期でした。幼い頃から、人生の目的や、この地球にいる間に何をするつもりだったのか、いつもたくさんの疑問があったと思います。そして、私の人生のこの特定の瞬間に、この疑問と悲しみの組み合わせにより、私はこの学びについて、もっと知りたいと思うようになりました。私は小学校の時に私立のキリスト教学校に通い、後に両親と一緒にローマカトリック教会に通っていましたが、これらの努力のどれもが私に内面的な満足をもたらさなかったようです。私はこの「クリスチャン」の神に疑問を持ち始め、他の考えを聞きたかったのです。

About this time, my mom started to tell me about the stories she heard from listening to Mr. Taike's lectures. There we're ideas that were interesting to me, like reincarnation, and the ever eternal consciousness.

この頃、母は田池さんの講義を聞いてきたことを話してくれました。生まれ変わりや永遠の意識など、私にとって興味深いものでした。

３．田池先生に出会う前の自分の人生について書いてみてください。

This is an interesting question…I just knew that up until this point, this going to church business was not for me. I started to become interested in mystical powers,

fortune telling, the supernatural, the paranormal, and UFOs. I would go to the library and check out a lot of books about these topics and just read.

これは興味深い質問です……この時点で、私は、教会に行くことは向いていないことを知りました。むしろ神秘的な力や占い、超自然的なもの、超常現象、そしてUFOに興味を持ち始めました。私は図書館に通い、これらのトピックに関するたくさんの本をチェックし読んでいました。

At this time, I thought that I had to change my social situation and thought that would make me happier. So, I disconnected myself from all the friends I had from junior high and tried to start fresh and make a bunch of new friends… but eventually I realized that I still wasn't happy or satisfied.

この時期、私は自分を取り巻く人間関係を変えよう、それが私を幸せにするだろうと思いました。そこで、中学生の友達とは一線を画し、新たに、たくさんの新しい友達を作ろうとしましたが、やがて、それにも満足できない自分に気づきました。

4. 田池先生に出会い何が変わりましたか？

I think my vision for what life should be like has changed. It is not about the here and now. It's not only about this physical life. I recognize now how long I have suffered inside my consciousness because I couldn't return my heart to happiness and joy. I also realize that I am the creator of my own suffering and sadness and accept that fact. I realize that I am on a path on this journey of consciousness, to hopefully return myself to warmth and joy.

人生はどうあるべきかという私のビジョンが変わったと思います。今現在ということではありません。今の人生だけに当てはまるのではありません。心を幸せと喜びに戻すことができなかったために、意識の中でどれだけ苦しんできたかがわかりました。また、私は自分で苦しみや悲しみをつくりだしていたことを知り、その事実を受け入れるようになりました。この意識の旅で、温かさと喜びに自分自身を戻すために、自分が道を進んでいることが分かってきました。

Physically, I feel much happier and satisfied in my everyday life. I find that I don't get too hung up on trivial matters. I can let things go much more easily and "accept" the circumstances and embrace different situations. I feel that I can find something to learn in most situations and that makes me feel happier and more satisfied.

肉的には、私の毎日の生活はずっと幸せで満足するものになりました。些細（ささい）な事柄にあまりとらわれないようになりました。私は物事をはるかに簡単に進め、さまざまな状況を受け入れることができます。すべての状況が、心を学ぶための教材だと感じており、それによって、私はより幸せで満足していると感じています。

ロサンゼルス国際空港に到着

海外セミナーをお世話くださった浅尾丑松さん

感極まり服のままジャグジーへ飛び込んだ人たち

次に、初めてのロサンゼルス反省研修会に現地から参加した４名の方々の体験を紹介させていただきます。中にはジェニーと同じように完全に日本語の通じないご夫婦もおられ、言葉で理解しようと思うのをやめた途端に、「堰が切れたように何かを感じはじめました」という興味深い感想を述べておられます。また瞑想は静かなものと思われたアメリカの方々が体験する闇出し瞑想。これに抵抗する思いを出しながらも、次第に順応し、自分の闇と向かい合う様子も語られています。

◎ ロス在住の初参加の女性の思い

この９月に、ロサンゼルスで開かれた田池先生のミーティングに参加する機会を与えてくださったことに感謝します。Ｔさんが、東京から手紙と電話で、このすばらしいセミナーのことを知らせてくださいました。

田池先生とチャネラーの人たちが、人々の意識を出す様子を見ていましたが、なかなか信じにくいことでした。しかしあの夜、田池先生やその他の方たちが、私をヘルプしてくださったときにはよく分かり、嫌な気持ちはなくなりました。皆様が私のために時間を割き（さ）ヘルプしてくださったことには、本当に感謝しています。

私は、自分の悪い状態に気付いてはいませんでした。私の状況に対するＭさんとＫさんの対応が、私をハッピーにし、もう孤独ではないという気持ちにしてくれました。

その日以来、私は更に反省にトライし、自分がなぜそのような行動をとるのか、特に自分が否定的な行動をとる理由が分かってきました。

私は子供の頃のこと、父母との関係を思い出すようトライしています。でも、それは難しいことです。本当はしたくないことです。このことに関しては私は怠（なま）け者だと思います。困ったことが起きたときには、子供の頃のことを思い出し、同じようなパターンを繰（く）り返しているだろうかと見ています。

一度、瞑想に参加しましたが気に入りませんでした。とてもうるさ過ぎました。私の耳はとても敏感で、周囲のうるさい音は好みません。２月にまた、田池先生が来られるなら、また参加したいと思います。講演にも、チャネラーたちとの研修会にも参加したいと思います。（でも、もう瞑想は嫌です。）

この文章を読み返してみると、私の感謝の気持ちを充分表わせてないように思います。だからもう一度、私の人生にすばらしい衝撃を与えてくださってありがとうと言わせてください。私はもっと勉強して、どのような社会にも適応できる人間に、そして、周囲の人たちに役立つような人間になりたいと思います。

◎ シカゴから初参加されたご夫婦
（ご主人）の思い

初めにロスでセミナーがあると聞いたとき、ぜひ参加しなくてはと思いました。財政的に心配でしたが行けると確信があったのです。そして必要な金、飛行機代は友人から、ホテル代は会社でオーバータイムの給料で家族全員いけるようになりました。

それが、神が私たち夫婦に与えられた物であり必らずロスへ行かなくてはいけないのだなあと思いました。ロスでの最初の数日間は何を期待してよいやら、何が起こっているのかわからずとまどいました。瞑想中に人々が叫んだりいろんなことをしているのが分かりませんでした。子供たちにふりまわされ、落ち着かずにいました。

そこで夫婦交代で子供たちの世話をしはじめたところ、少しずつ安らぎ始めました。

初めは先生の言葉一つひとつを理解しようと思っていたのですが、一旦、心で感じはじめると堰が切れたように何かが伝わってくるのを感じました。

会合の後、反省してみますと母の愛をこばんだこと、妻に批判的だったことが分かりました。瞑想中（セミナーで）に光が波のように降りかかってきて、とても安らぎました。

会合に来たみんなからたくさんの愛を感じました。皆様とても親切で協力的でした。皆様がとても他人とは思えず家族のように思えたのです。私の手をさわってくれたとき温かさを、私の目を見つめられたとき愛を感じました。

皆様といよいよ別れなくてはいけないとき、とても悲しくさびしい思いをしました。皆様がホテルから去り一人になったとき、心が空っぽになった感じでした。

録音したテープを聞いていますと幸せを感じ気持がよくなります。ありがとうございました。

◎ シカゴから初参加されたご夫婦
（奥さん）の思い

ロスへ行く前に大きな希望を持って、とても自分を変えようと思っていました。そして反省をし、いくつかの点も気づきました。つまらないことに気を付け神に信がなかったと思いました。できるだけの準備をしたつもりでした。

ロスへ着いたとき、大きな期待がありました。子供たちといっしょに家から遠く離れて、今まで長い間、関心を持っていたことに関して今まで会ったことのない人たちに会うのですから。

この「神の子」という考え方は私たち夫婦の結婚生活にとって大きな出来事でした。今まで知識でわかっていることを現実に経験する楽しみがありました。

会合の初めは友人が訳してくれましたので自分は良かったのですが、その友人は訳すのに忙しく会合に来た価値がないような感じでした。瞑想中、みんながとても騒がしいのでなかなか集中できませんでした。しかし、会合が進むにつれて段々と安らぎを感じました。

でも反省はできませんでした。そして何

か多くの時間と努力を要したように思いました。

12 階で夕食中、子供たちは楽しくしていましたのでくつろいで日本からの皆様と楽しく過ごせました。神に関心ある人たちですので自由に会話できたらもっと良いのにと思いました。いずれそうなるでしょう。

菅さんの家では意識を出していただきました。非常に軽く幸せでした。しかし悲しい思いが心から出てきました。集まってきた皆様は、たいへん親しみやすく家族のように見えました。この人たちが自分の家の周りに住んで、そして励ましてくれたらいいなあと思いました。

シカゴに帰ってみますと皆様がとても恋しいです。皆様とコミュニケートしたいのですが、通訳がいつも必要なのでむずかしいです。振り返ってみると神への信がでてきたようですし、自分が変ってきたと思います。そして、心の反省ができるようになりました。一つ重要なことに気づかせてもらいましたのは、長男のことです。次男が 2 年前に生まれて以来、子供 2 人の面倒をみるのが大変で、長男に心からの愛を与えていなかったことでした。自分の心の本当の部分が感じられるようになりました。長男に心を向けはじめて以来、長男は笑い顔をとりもどし明るく幸せな子になってきたようです。

そして私自身も、心の向上があったことを認めつつあります。

◎ シカゴ在住の渡辺秀雄さん

LA 研修会に参加させていただき、とてもすばらしい体験をさせていただきありがとうございました。

この研修会のことを知ったのは、かなり前のことですが、この日が来るのを楽しみにしていました。

今年になってから何とかお母さんの反省をしようとしているのですが中々できないでいました。9 月までに少しでも反省できるようにと思っていました。ところが反省に入っても、少しもお母さんの顔が出てきません。何でできないのだろうと思っていました。こうなれば 9 月に先生が来たら先生に何とかお願いしようと思ってました。

また、この研修会に何とか妻も一緒に行かれたらと思っていました。とかく妻とはこの学びについて争(あらそ)うことが多く、一緒に参加できれば彼女もこの学びについてもっと理解して、私のことも分かってくれるだろうと思い、そのためにも何とか一緒に行かなくてはと思いを巡らしていました。

LA には日本の品物を買うという理由もあり、妻と一緒に行くことになりました。

第 1 日目、田池先生の講話、質疑応答があり瞑想の時間になりました。瞑想は初めてですが、こんな「すごいもの」とは思っていませんでした。先生が瞑想について「3 つのグループに分かれるでしょう。第 1 のグループは、心安らぎ、喜び、神を賛美する人たち。第 2 のグループは、大きな声を出したり、餓悔する人、わめく人たち。第 3 のグループは、第 1、第 2 のグループの人たちの声を聞いたりして、みんなを

おかしいと思う人たちです」と説明してくださいました。

私はどのグループかなと思いながら目を閉じました。

そうすると会場のあちこちから大きな声を出す人、歌う人、後のほうからは体を激しく動かしているであろう人たちの気配がしてきました。自分は一向にそうなりません。「先生の言うことを疑う気はありませんが、こんなにうるさくてよく瞑想ができるもんですね」「ああ、自分は第３のグループなのかな」と、がっかりしていました。

一方では、「みんなは日本で、もう何回も瞑想をやってきたからこうなっているのだ、自分は今日初めてだからこうならなくてあたり前」などとも思っていました。

しばらくして先生らしい人がそばに来てくださって祈ってくださいました。その祈りが、自分にしてくださっているのかなと思っている間に、私の頭がすごい力で後に引っぱられて口が大きく開いてしまいました。これが先生の言っている瞑想なのかと思っていると、頭が後に引っぱられているので息が苦しくなり、自分で戻そうとしても首が動かず、痛くて引っぱられるままに後ろにしていました。

頭では「早くこの状態が元に戻ればいいのに」「何とかしてくれないかなー」「すごい瞑想だ」「自分では何にもしていないのにこのすごい力はいったいどこから来たのか」などと思っていました。しばらくして先生の合図があり会場が静かになりました。私の首は中々もとに戻らず、瞑想が終っても首はかなり痛かったです。しかし、胸の内は、その「すごい瞑想」のわりに何かすっきりと静かで不思議でした。

先生が呼んでくださり前に出て意識を出してもらいました。その間、私の心はやはり瞑想のときのように静かで落ち着いていました。

夕食の後、反省の時間がきました。今日こそは、お母さんの反省ができそうだと思って反省に入ったのですが、目を閉じ、大きく息をしていると、あの瞑想になってしまいました。反省、反省と思っていて時間が経(た)ってしまいました。

翌日の瞑想のときは、自分がオーケストラの指揮者のように手を動かして口ずさんでいました。美しい山の頂上にいるように清々しい中で音楽を指揮しているようでした。とても気持ちが良かったです。

今回の研修会、学習会ではすばらしいときを過ごさせていただき、田池先生、日本から来ていただいた皆様、米国内の皆様、ありがとうございました。

この感想文を書いていて、私は妻に対して自分の都合のいい妻になってもらいたいという思いで接していたことに気付かせていただきました。

◎ 仕事でロスにおられた牧村市太郎さん（アメリカで開かれるセミナーではお世話になってばかりでした）

ロスでの研修会の事を思い出すと、今でも胸が熱くなります。すばらしい研修会でした。今迄の人生で、一番楽しかった時

ではなかったか、と思います。この研修会では、すべてのことがうまく運び、驚くことばかりでした。

まず、数年前にシカゴで、ともに学んでいた人たちが、それぞれうまく参加できるようになったことです。９月に帰国となった英国の友人たちがタイミングよくロスに来れたこと、ウィスコンシンよりロスに引っ越してきた友人が研修の１週間前にロスに着いたこと、シカゴの友人Ｎさんに特別収入が入り、Ｒさん夫婦が参加できたこと、また、参加しないと言っていたＮさんの奥さんが行くと言い出したのは、日本の皆様が着かれる日の朝のことでした。

過去の縁を生かしてくださり、これらの人たちを、次々とうまく参加できるようにしてくださった計らいに感動しながら、その日の朝、空港へ向いました。

更に驚いたことに、私を含め、集まった人たちの心が変わったことです。集まった人たちの中には、半信半疑の人たち、この教えに否定的な人たちもおられました。ところが、たった３、４日の間に、この人たちの心が変ってしまいました。

それとともに、「もう自分を飾ることをやめ、心を解放したい、神の光の中に入ってゆきたい」との思いが湧いてきました。

その後、少しずつ心を見つめることを続けています。研修会の第２回目の瞑想の時、気分が悪くなり吐瀉そうになりました。その後、反省をして、自分の心の汚いところを見るたびに吐瀉そうになります。今迄の自分をすべて否定するほどの、神の心との差にショックを受けましたが、今は、その崩れつつある自分を、うれしく思っています。

落ちこんだ時には、あの研修会の感動を思い出し、少しずつ、真なる自分に目覚めてゆきたいと願っています。

◎後にＥＬを立ち上げられる久保夫妻も、ロスでの第１回反省研修会に参加しておられました。ご主人の声です。

ロサンゼルスに行くことを決めたのは４月16日の一泊研修会（全社連）に初めて

参加させていただいた日でした。

私たち夫婦はロサンゼルスに行くことの重大さを知らず、参加申込んだことが今となって「よかった」と思っております。

グランドキャニオンの見学も前の晩に行くことを中止し、田池先生と一緒に行動させていただきました。

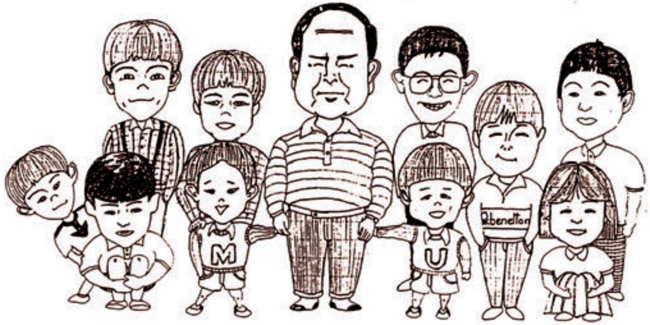
外国の方が素直に自分を表現している姿を見て、やはりアメリカから法が広がって行くのかと痛感させられました。

研修２日目の9月4日の研修会が終了してからも喜びが会場いっぱいに広がり、感謝、感謝という状態になり、その時、チャネリングで佐藤博子さんより、「己高しの自分を捨てなさい」「ここに集まっている人々は選ばれているのではなく、ただ民の僕となり働きなさい」「良心に従って行動しなさい」と、３つの言葉をいただきました。

１週間もあっという間に過ぎ、神の存在の信を強く感じて帰国いたしました。

朝から夜遅くまで研修会をしていただき、田池先生、ありがとうございました。

まだまだ何もわかっておりませんが、心だけが神の子の方向に向いております。



◎ **野川京子さんの思い**

私が学び始めたころ、田池先生は「この法は東へ、アメリカに流れるんです」と、よくおっしゃっていました。「そうなんだ」と思っても、私には何もわかりませんでした。それから、しばらくして、ロサンゼルスで初めてセミナーが開催されることになりました。私は喜んで参加させていただきました。

ロサンゼルスに向けて飛び発つ飛行機の中で、ああ、田池先生の言われていたことが本当にこうして形になっていくんだ、私はこの現実に、ただただ感無量でした。何も分っていないのに、ロスに向けて飛行機が飛び立つその瞬間、うれし涙が溢れて仕方ありませんでした。本当にこれは忘れられないうれしい心の体験です。

1989年1月、昭和が終わりました！

―昭和天皇とロックフェラー3世―

1989（平成元）年1月8日、63年間続いた昭和という時代が幕を閉じました。当時、編者は政府刊行物の大阪サービスステーションで官報公告係の仕事をしていたのですが、その日は、日曜の休みを返上して、終日、事務所で待機していました。

元号を改める閣議決定がなされたら、まず官報に発表されるのですが、その号外の到着を待っていたのです。

聞くところによると「改元」を告げる官報の印刷は1時間20分で完了したといいます。その1ページだけの官報が、まずファックスで送られてきます。それを拡大し、四つ橋筋に面した掲示板に貼り出さないといけないのです。

掲示板に「官報号外」を貼りながら、「昭和が終わったんだなあ」って、しみじみ思いました。

この前日、1989（昭和64）年1月7日午前6時33分、昭和天皇が、吹上御所で亡くなられました。本当は、天皇なんだから崩御（ほうぎょ）されたって言うべきでしょうが、ニコニコ手を振っている姿が好きで、崩御なんていうと、何か遠い人のように感じてしまいます。

いつだったか昭和天皇の御製だという歌を見たことがあります。

戦をとどめえざりし　くちをしさ
　　　ななそぢになる　今もなほおもふ

毎日新聞

特別号外

天皇陛下　崩御

激動の昭和終わる

87歳、十二指腸がんで

7日午前6時33分

ご在位、最長の62年

天皇陛下は七日午前六時三十三分、皇居・吹上御所で崩御されたと、宮内庁が同日午前七時五十五分発表した。八十七歳八カ月のご生涯だった。不幸な戦争をはさみ、激動と平和の「昭和」は終わりを告げ、皇太子明仁（あきひと）親王殿下が皇位を継承、即位された。政府は「昭和」に代わる新元号を、急ぎ協議するとともに葬儀の日程、様式などについて宮内庁など関係省庁と検討を始めた。

お元気だったころの天皇陛下

宮内庁発表文

新天皇ご即位

新天皇陛下

心血を注いだ「ジャパン・ソサエティ」に昭和天皇を迎えるロックフェラー３世夫妻

昭和天皇・皇后を私邸に招いたロックフェラー３世夫妻。中央は通訳の真崎秀樹さん

その歌のことを知って以来、昭和天皇が大好きになりました。

編者がかつて勤めていた「かんぽう」は肥後橋交差点の南側にあって、昭和天皇が来阪される時は、必ずこの交差点を通ることになります。その都度、警察官がたくさん出て、周辺の交差点から沿道に配置され物々しいことこの上ありません。ビルの窓が開いていたりすると、たちまち飛んできて「早く閉めるように」と促される始末です。僕も野次馬根性が強いものですから、仕事ほったらかしで交差点で昭和天皇のお乗りになる車を待ったことがあります。その僕の前を車の後部座席に座られた昭和天皇が通り過ぎていかれました。その時、窓を大きく開け、乗り出すようにして手を振っている昭和天皇と、一瞬、目が合いました。その瞬間、心なしか口元がニッコリしたように感じられたのです。物々しい警備とは、あまりにもちぐはぐなあたたかい笑顔でした。

昭和天皇の大喪の礼は、国の儀式として、その年の２月 24 日、新宿御苑で執り行われました。

（何を隠そう、２月 24 日は、編者の誕生日でもあるのです。）

こうして昭和が終わり平成になりますが、これと前後して、この学びにも大きな変化が訪れます。

そのことに触れる前に、昭和天皇の初訪米と、僕以上に昭和天皇を慕ったアメリカ人一族のことを紹介させてください。

ジョン・D・ロックフェラーに代表されるアメリカの財閥ロックフェラー家の人たちです。（250 年後に起こることは、今の時代にも、

その萌芽を見つけられるはずです。以下は、その探索結果です。）

ロックフェラー一族の日本への関心は、ロックフェラー３世の代になって顕在化します。それ以前は、日本美術に対する関心であったり、初代ロックフェラーのように、日本への関心をひた隠しにしていたりでしたが、日本の敗戦がきっかけとなり、経済面でも、文化面でも、堰を切ったように日本復興の後押しが始まります。

日本の戦後復興は、アメリカに負うところが大きいのですが、その背後にロックフェラー３世の大きな影響があることを人は見落としがちです。昭和天皇が、戦後、はじめてアメリカを訪問することになりましたが、その時のことを、昭和天皇の通訳だった真崎秀樹さんが次のように語っています。

> アメリカご訪問というのは、陛下が非常に望まれたことであったと思うんです。日本はアメリカと戦って負けて、負けたあと、アメリカの援助をたくさん受けたことは間違いないんです。
>
> あの戦後のつらい時期に、ほんとにアメリカは助けてくれたし、日本のものを無理してでも買ってくれて、日本の貿易を立て直してやろうという、親切な気持ちはたくさんあったし、いろいろなものをくれました。陛下はそういう点は非常に几帳面な方ですから、何とかして、自分が直接アメリカ国民に礼を言わなければいけないという気持ちは持っておられたと思うんです。
>
> だから、ヨーロッパにいらっしゃる途中で、アンカレジにちょっ

昭和天皇が宿泊されたウィリアムズバーグ・イン（上）とキャピトル（下）

と寄られただけだけれども、ニクソン大統領に対するあいさつで、「戦後、アメリカは惜しみなく日本を援助してくれたということを、よく心に思い浮かべます」という意味のことを言っておられますね。その点は、ニューヨーク・タイムズなんかも報道しています。だから、このアメリカご訪問というのは、自分の初志を達した、思いを遂(と)げたという気持ちがおありになったと思うんです。

そういった昭和天皇の、「アメリカ」という思いの中には、ロックフェラー３世（ジョン・D・ロックフェラー）のことも深々と根ざしていたように思われます。

昭和天皇が、アメリカへ行かれた際に詠(よ)まれた歌の中に、次のようなものがあります。

秋めけるウィリアムズバーグの町にして
古きむかしをしぬびつるかも

日本をよくしる人と語り合う
けふのもてなし心にしみぬ

ウィリアムズバーグというのは、アメリカに造られたイギリスの植民地ヴァージニアの首府でしたが、ロックフェラー２世の時代には、歴史の中に埋没し忘れ去られていました。それをロックフェラー２世が専門家を集め発掘(はっくつ)調査を行い、1770 年までに建てられた 500 棟の建造物、街並みをすべて精密に復元し、そればかりか人も住まわせ、当時の日常生活までも再現し、文字通り生きた歴史テーマパークとしてしまったのです。

昭和天皇は、ワシントン入りする前に、このウィリアムズバーグで宿泊し時差調整されたのです。

その時のことを、真崎さんは次のように語られています。

ウィリアムズバーグというのは、ロックフェラーが金を出して、アメリカの植民地時代の町並みをそのまま再現しています。日本でいえば、昔の奈良とか京都とかを、金をかけて、どこかにそのまま再現しているようなものです。今の明治村なんていうちゃちなものじゃないんですよ。非常にきれいな町です。

お着きになったその日の午後は、何も、公式の日程はないんです。すぐ近所で、歩いていってもいいくらい近く、もちろん自動車で行かれたんですけれども、バセットハウスという、ロックフェラーが買った古い立派な庭園のついた家がある。そこを陛下が散歩をなさって、ほんとに気楽で、楽しそうでした。

前に陛下が、皇太子としてヨーロッパに行かれたときに、「それまでの生活がかごの鳥みたいだった」ということを言っておられますね。（中略）それがバセットハウスでは、非常に自由な

気持ちになって散歩をされたと思うんです。

大きなカシか何かの木の下にベンチがありました。アメリカ側の接待役でコーダスという儀典次長が、非常によく務めて接待してくれたんです。これはもちろんコーダス儀典次長の冗談でしょう。だから、うそかほんとかわかりはしないけれども、「ロックフェラーはここのベンチに腰かけて、それで金もうけを考えたんです」と言うんです。

ロックフェラー３世の広大な邸内

そうしたら、両陛下とも、「じゃあ、腰かけてみよう」と言っておかけになったわけです。私も遠くから見ていて、「僕も腰かけてみたいな」と言ったんですよ。そうしたら、皇后陛下のご通訳をしていた須山達夫大使（元トルコ大使）の夫人節子さんが、「真崎も腰かけたいと言っております」と大きな声で言うものだから、陛下が「来い、来い」とおっしゃって、私も腰かけました。その後、いっこう金はもうからないんですけれどもね。そういうふうに、バセットハウスでは非常に気楽なひとときでしたね。

すべての行動に時間の制限があるというだけでも大変だと思うんですよ。生物学の研究だって、何だって、みんな時間、時間ですね。外国のある要人の夫人なんて、時間を無視して、みんな迷惑したというけれども、日本の皇室は実によく時間を守られますね。それだけでも窮屈であろうと思うんです。

それから、すべての人に公平でなければならないということで、言葉遣いにも非常に注意しなければならないでしょう。だれにも彼にも、同じあいさつをされるのはおかしいように思うかもしれないけれども、それが一番公平なやり方なんですよね。あれをやってはいかん、これをやってはいかんというふうないろいろな制約がある。

ことに新憲法になったら、陛下には、ほんとに内輪ならいいけれども、公になることについては言論も行動の自由もないようなものです。だから、ああいうふうに、広々とした芝生や大きな木の下を散歩なさるということは、だれも、あれこれ言うものはないという雰囲気が非常によかったんじゃないですか。

夕方には、もちろん夕食がありますけれども、いつものように「もう時間ですから、お帰りください」と言う者はだれもいなかった。午後はもう何も公式の行事はないんです。ただバセットハウスをお散歩になるというだけのことでした。

（『側近通訳 25 年　昭和天皇の思い出』真崎秀樹）

マンハッタンの国際連合本部ビル近くにある「ジャパン・ソサエティ」

そして２首目の歌「日本をよくしる人と語り合う けふのもてなし心にしみぬ」の「日本をよくしる人」というのがロックフェラー３世のことなのです。

ロックフェラー３世が初来日したのは1929年（昭和４年）10月に開かれた「太平洋問題調査会・京都大会」に参加するためでした。ロックフェラー財団がこの調査会を助成していた関係もあって、アメリカ代表団の一人マクドナルドの秘書としての役割で参加したようです。

ところで、ロックフェラー家の日本への関心は、ジュニアと呼ばれたロックフェラー２世のときに本格化します。

ロックフェラー２世が日本を訪れたのは、1921年（大正10年）10月のことでしたが、このときは主に叔母の影響で日本美術への関心からでした。ところがこの３年後、関東大震災が起こるや、彼は赤十字社を通じ20万ドルを寄付するばかりか、東京大学図書館再建のため150万ドルを寄付し、さらに日本国内に公衆衛生技術院を養成する施設の必要性を説き、施設設立の資金の全額をロックフェラー財団から寄付させています。

その総額は実に350万ドルを超えたということです。

関東大震災を機に、ロックフェラー家の日本への傾倒が始まります。そして、「ミスター・ジャパン」と渾名された彼の長男ロックフェラー３世の時代になって、この勢いにさらに拍車がかかることになるのです。

ロックフェラー３世が、戦前に「太平洋問題調査会・京都大会」に参加するために来日したことについては既に触れましたが、このとき、貴族院議員・樺山愛輔伯爵の計らいで、ロックフェラー３世は、はじめて昭和天皇と出会うこととなるのです。

樺山伯爵が計らって天皇の秋の園遊会に、ロックフェラーを招待したのです。出席者が大勢で天皇と言葉を交わす機会はありませんでしたが、遠くから天皇の姿を眺めながら、樺山伯爵と娘の正子さんらと美しい御苑を散策することができたと言います。そ

れが、日本の皇室とロックフェラー家との最初の接点でした。

このことから、ジョン（ロックフェラー３世）は、日本の社会や文化に強い興味を持つようになったようです。それは、横浜港からプレジデント・ピアース号に乗船して日本を離れる前日の日記の内容から明らかです。ジョンは、日本の印象について以下の四点を挙げ、次のように記しています。

> 第一は、着物姿の女性の美しさだ。なぜか分からないが、着物を着た日本女性の姿に強く惹かれる。第二は日本庭園の美しさだ。旅行中に日本の名園と言われるいくつもの庭園を見たが、そのいくつかは、驚嘆するほど完全な美そのものである。第三は、どこへ行っても人々も街も清潔なことだ。そして第四は、日本人の礼儀正しさと親切さだ。我々一行は、行く先々で友好的なもてなしを受けた。それは、私がロックフェラー家の人間であることを知っている人々も、我々一行についてなにも知らない人々も変わりなかった。

時は移り 1945 年８月、日本はポツダム宣言を受託し、第二次大戦は終息することとなりました。

そして大戦に敗れた日本の復興にロックフェラー３世のなりふり構わぬ援助が開始されます。それは経済面での援助にとどまらず、日米間の文化交流にもおよび、日本国内には「日本図書館学

東京都港区六本木にある公益財団法人「国際文化会館」

校」や「国際文化会館」（東京麻布）の創設、アメリカ国内には日本のことをよく知ってもらおうと「ジャパン・ソサエティ」（ニューヨーク）が創設されることとなります。

この国際文化会館の創設のため、ロックフェラー３世が、再度日本を訪問しました。

ジャパン・ソサエティ会長に就任したジョン（ロックフェラー３世）は、文化センター構想実現へ向けた東京の動きを応援するため 1952 年４月半ばに来日し、ほぼ1ヶ月間滞在しています。そして5月2日には、夫妻で天皇に拝謁する機会が与えられたのです。「血のメーデー事件」の翌朝でした。しかしジョンの日記には、皇居前広場で発生したデモ隊と警官隊が流血衝突したこの大事件に

ポカンティコ・ヒルズにあるロックフェラーの私邸

ついては、「共産主義者の煽動によるものでデモ参加者の数はそれほど多くはなかったようだ」としか記されていません。おそらくは天皇に拝謁できたことで心が高ぶり、凄惨な現場と目と鼻の先にある帝国ホテルに滞在していながら事件を冷静に観察分析する余裕を失ったのでしょう。

樺山愛輔伯爵に伴われて天皇の園遊会に招かれたときから23年の歳月が経っていましたが、これ以降、ロックフェラー家と日本皇室とのつながりは、戦後日米関係のなかで特筆に値するほど深化していくことになります。

そして、こうした積み重ねにより日本皇室とロックフェラー家のつながりが頂点に達するのは、1975年の（昭和）天皇の公式訪米においてのことなのです。

ロックフェラー3世はジャパン・ソサエティ理事長として両陛下をジャパン・ハウスに迎えて歓迎式典とレセプションを行いますが、その公式行事に先立ってポカンティコ・ヒルズの私邸フィールドウッド・ファームに招いてごく内輪の午餐会も開いています。

大自然の中でゆっくりくつろげるひとときをもっていただこうと配慮したからでした。

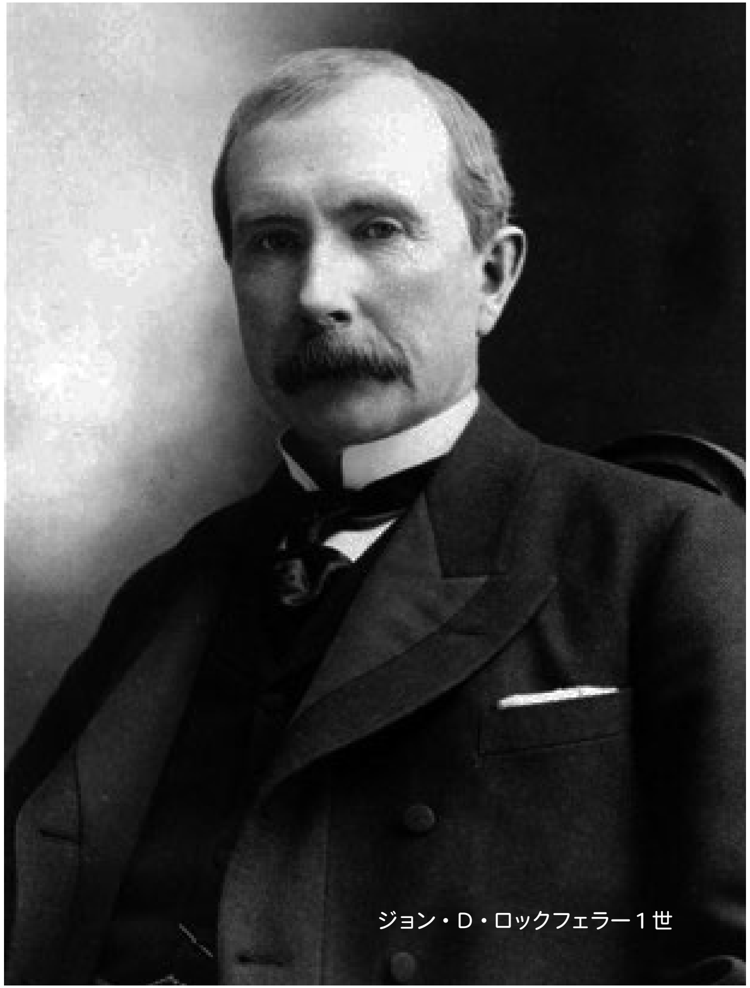
その時のことを昭和天皇が詠まれた歌が先に紹介した「秋めけるウィリアムズバーグの町にして古きむかしをしぬびつるかも」と「日本をよくしる人と語り合うけふのもてなし心にしみぬ」の2首なのです。

随分、ロックフェラーと日本のかかわりについて長々と紹介しましたが、それというのも、日本が、これから起こる天変地異で消滅したとして、そこで重要な動きをするのがロックフェラー一族だと感じるからです。ここまでは歴史的事実を踏まえた話ですが、ここから先は、それら事実を踏まえて感じる編者の妄想とでも思ってください。

日本の消滅は、日本文化をアメリカに残そうというロックフェラーの思いに支えられ、ニューヨーク公共図書館内に、日本関係

資料室もしくは日本館の創設へと動いていくでしょう。
　そのなかに『意識の流れ』をはじめとするＵＴＡ関係図書が含まれるよう、それを目指してＵＴＡブックは動こうとしています。

　現実の話に戻りますが、ロックフェラー一族の中には、第３世代、第４世代の中から、ロックフェラーの名前に反抗する気風が起こってきます。なかにはロックフェラーという名前も相続権も放棄し「自給自足」の生活に走った女性もいれば、「自分とは何者か」と、自分探しの旅で消息を絶った男性もいます。
　同じように「自分は何のために生まれてきたのか」という衝動に突き動かされ、宗教や哲学に走った人たち。
　彼らは「ロックフェラー家の人間として生きることは、黒人とかユダヤ人とか書いたカードを首にぶら下げて生きることと同じだった」と、ロックフェラーという呪縛から逃れようともがきます。
　これは250年後の話でなく、今、ロックフェラー家の中で起こっていることです。しかし、それも若いころの衝動で、歳を経るにつれ、彼らもロックフェラー家の伝統の中へ回帰していくか、そうでない者も、哲学や宗教の中に逃げ道を見出している現状です。
　このように現実面からみても、250年後に向けてのシナリオは用意されているように感じる次第です。
　このことを踏まえ、では、話を昭和天皇のお亡くなりになる前後のことへと戻してまいりましょう。


ジョン・D・ロックフェラー１世

大阪研修センターに集った仲間。田池先生（左端）、板倉さん（右端）、久保さん（中央）の姿も見える。

1988年12月、「神の子の道研修センター」オープン！

前後しますが、昭和も終わろうとする1988年の12月、大阪と東京に「神の子の道研修センター」がオープンしました。

大阪研修センターは近鉄八尾駅前に、東京研修センターは、ＪＲ横浜線橋本駅前に、「みなさんの学びの場に」と、板倉さんご夫妻、久保さんご夫妻が、それぞれ私費で提供してくださったものです。

板倉さんご一家は、大阪研修センターの開設が一段落されると、ご家族でロサンゼルスへ移動され、ロスでのお住まいの準備にかかられました。

そして決まったのが、ロス郊外にあるトーランスのパロス・ヴェルデスというところです。これ以降、ロスでセミナーが開かれるときは、この板倉さんのお住まいが田池先生の宿泊先となりました。

このパロス・ヴェルデスは太平洋に面した閑静な住宅地で、沖合は回遊するクジラの通り道にもなっており、お住まいからは、ザトウクジラの姿も遠望できたといいます。

編者は、残念ながら板倉邸をご訪問する機会はなかったのですが、後日、ホエール・ウォッチングの船に乗り、海からパロス・ヴェルデスの住宅地を望見したことがあります。

それはさておき、その辺の事情を、板倉さんご家族の書かれたもの、さらには、大阪研修センターに勤め、訪問者の世話をしてくれた田中さんの思い出話からたどっていきたいと思います。

現在はパロス・ヴェルデスに「ホエール・ウォッチングセンター」ができ、近隣のウォッチャーたちで賑わっている。

◎ 板倉順子さんの今の思い

田池先生とは、病院経営をしていた叔母が最初に出会いを頂き、そのご縁で夫が待望の出会いを手にし、しばらくして姑、そして家内の私にも出会いを叶えてくれた次第です。

夫は生前より、自分がコレだと感じたものは惜しみなく皆に与えたいとする思いの強い人でしたが、これも夫の本当の優しさだったと振り返っています。

そして家族全員で日本、ロス、シカゴ、ニュージャージー、ニューヨークと、セミ

板倉家のダルメシアン

ナーに参加する日々となりました。

そんな中、夫はこの学びの素晴らしさは元よりですが、田池先生が無償で学びに取り組まれる姿勢に強く心を打たれ、その志を受け継ぎ八尾センターの無償提供を決意したようでした。

そして工事に入ってからも看板の位置等に至る細やかな田池先生の指示をいただける中で、夫婦でセンターの下駄箱の有りようを相談しながら出来上がった八尾センターでした。

オープン日に合わせて先生主催のセミナーを開催してもらい、あまりのうれしさに来訪者の皆さんにセミナー終了後に赤飯を持ち帰っていただいたのが昨日のことのように思い出されます。

その後八尾センターの使い方を巡り「第一の危機」が起こり、我が家に先生をお招きして相談や対策を講じ問題解決の運びとなり、その後には「第二の危機」も起こり、この時には、田池先生は明確に関係者や私たちも含め、皆に厳しく間違いを正されていました。

そうこうしているうちに八尾センターをお任せできる方々の出現で、私たちは渡米する運びとなりました。

1989 年から数十年間、異国で快適な生活ができたのはWさんファミリーや米国在住の皆さん方のご協力のお陰でした。

本当に感謝しかありません。本当にありがとうございました。

89 年からは発刊された本を頼りにアメリカの我が家に訪れてくださった方も多くおられました。米国在住のある方などは、田池先生のお人柄や魅力を「風呂敷包みに包んで持ち帰りたいです」とまで表現されるほどで、何処に来られても先生は人気者でした。愛犬の勇ましいダルメシアンさえもが初対面の先生をお腹を出しての大歓迎ぶりでした。

田池先生と一面識のある方なら誰しもが受ける何とも言い難い感情を抱かせる存在でした。

こうして米国在住の方たちと共に学び始

めました。当時は米国在住の人の学びの場や回数も少なかったこともあり、夫は日本からチャネラーを招いてセミナーの場を増やすことに努めましたが、時期尚早だったのかもしれませんが、熱い肉の思いが強すぎて意識の前に出しゃばっていたのだったとも思えます。どうかお許し下さい。

ロスやニュージャージーでのホリデイインセミナー終了後には、ニュージャージー宅で先生夫妻に檜風呂に入っていただいたことも懐かしく思い出されます。

また、ロス宅では私が玄関のドアに蹴りを入れていた現場を目撃され、気配を感じた私だったけれどその弁明も許されることもなく先生は無言のまま自室へ戻られました。この出来事が早朝だったために一緒した朝食もままならず苦い一日となりました。

あの頃からエネルギーの凄さに気付けていなかった私でした。また、娘のハイスクールの卒業セレモニーにもご夫妻で一緒してくださったりと多くの楽しかった肉の思い出は満載なれど、意識の成長が今一

トーランスのパロス・ヴェルデスにあった板倉邸

つといったところが現状です。

しかし一つだけ変えていただいたことは、夫と共に介護生活を無事に済ませ、この5月に見送れたことが何よりのことでした。田池留吉と、今世、出会いをいただかなかったなら到底全うできなかったことでしょう。本当に本当に家族をはじめ、「ふるさと苑」や、すべての方々に心から感謝です。本当にありがとうございました。

肉の世界には上には上があるのですが当時は箱入り嫁で我儘、気儘、そのままの私だったから、すべてが当然のことばかりで感謝も謙虚さも持ち合わせてはおらず肉の塊、つまり破壊の塊だった私の存

在があっただけです。

さぞかし、このエネルギーで周りを辛（つら）く切なくさせていたかと今だったら気付けます。自分のことしか見えていない貧しい心が皆を不幸にしてゆく不本意さを実感しています。本物、偽物（にせもの）の自分の確認、確信を進めるためにも一日も早い肉からの脱却を目指します。

これが最後になりますことを願い、私たち家族との出会いの実状を送らせてもらいます。

先生は、肉はホント「吉本」だったので板倉ファミリーにとっては本当に楽しい朝食、昼食、ディナーのひと時でした。

◎ 板倉さんの長女・康子さんの思い

自分にとっては、セミナーや田池先生が日常の中に入り込みすぎていて、いつからどうだったとかがとても曖昧（あいまい）で、ありがたみを感じていない自分がある。

先生がロスに滞在されているときも、「私の身長が伸びるか」と占い師に自分の未来を教えてもらうような感覚だった。

田池先生が次男の秀行さんをロスに連れてこられたときがあった。その後、セミナーに参加することになる秀行さんに「一番最初に会ったのは私だ」とする自分の中の特別意識に火が付いたように思う。そして、もともと持っている権力、地位への欲の思いも沸（わ）き起こった。この人を手に入れれば、何か自分の得になるのでは？という思いがあった。

その頃には自分の中で、田池先生を何か力のある人と認識していたようだ。

ロスに先生が来られなくなり、もう学びは日本で行われることになったと聞いたときはなんか少し複雑な気分だったように思う。「取り残されたの？」「もう先生来ないってどういうこと？」

どこかで楽しみにしていた自分もいたようだ。確かに学びの初期の頃はディズニーランドに行ったり、グランドキャニオンに行ったりと観光もあったので、あまり学びをしていなくても十分楽しめていたように思う。

田池先生が父に家の前の海を見ながら「この海のように広い広い心」と思って瞑想しいやと言っていたことを思い出す。

その風景を自分の瞑想中も思い出すことがある。

熱海のセミナーで何人かでお酒を飲みに行ったとき、先生に「なんでお酒を飲もうと思ったのか」を自分に聞くようにと言われたことがあった。お酒飲んで楽しいのに、なんでお酒飲むのか自分に聞かなあかんって面倒な学びやなぁと思ったことがある。

帰国後に職場の人間関係に疲れたこともあり、セミナー参加するようになった。

行っても先生は講話で「鞭声粛粛（べんせいしゅくしゅく）……」とか訳のわからないことを言っていたので、体は行くけど後ろの荷物置き場でかばんを枕に寝ていた。

セミナーに行くと、もう私の知っているおじいちゃんの田池先生ではなく、なん

パロス・ヴェルデスの海（上は板倉邸から見た海。下は海側から見たパロス・ヴェルデスの住宅地）

ロサンゼルス、パロス・ヴェルデスの板倉邸で田池先生ご夫妻との食事風景

か距離感を感じるようになっていた。それだけ学ぶ人数が多くなり組織化したってことなんだろうが、やっぱり特別感がくすぶり、先生の近くに行きたいけど行けない自分だった。

セミナーの前泊も、「先生が泊まるところよりも、もっと素敵なところを探して泊まってやる」と、なんか変なほうに力を入れている自分がいた。

落ち込んで、会いたくないと思っているときに限って、お風呂に向かう大きな集団の中にいる田池先生に出会う。白内障で目が見えていないんだろうけど、すっごく気まずく、「こんな惨めな姿見られたくない」と、また自己嫌悪に落ちていく。

会社が倒産したときだったか、その前だったか、先生が家に訪ねてきてくれたことがあった。私は会いたくなくて自分の部屋に閉じこもっていた。

帰国後、父が谷町4丁目の国立病院に入院した時も、先生はお見舞いに来てくれた。ちょうどその頃父は「死にたい。死にたい。自分は敗残兵だ」と言っていた。

肉体細胞に思いを向けだしたときに、父の足先に壊疽が出た。他力とわかりながらも先生の家に父を連れて行ったこともあった。

やっぱり根底に「肉で優しくしてほしい」という思いが強い自分だ。

◎ 板倉さんの次男・充宏さんの思い

アメリカのセミナーは子供だったため、参加はしていませんが、当時のことを思い出すきっかけと思い書いてみました。

アメリカでは、両親が田池先生のお世

話をしていたため、先生とはセミナー後一緒に遊んでもらったりしました。会える時はうれしかったし、先生のことは大好きでしたが、勉強しても全く変わらぬ両親は、ケンカも酷くなっていきました。

「自分はなぜこの環境に居るのか？」

「なぜこの親から生まれてきたのか」を恨み、呪いました。

子供ながらに「セミナーへは絶対行かない」と決めました。

アメリカから帰国後、結婚し長男が生まれました。その頃から少しずつ色んなものを無くし絶望の日々……。

10 年ほど出口が分からず彷徨い苦しみ続け、仕事も辞めました。

退職した次の日に琵琶湖セミナーだったため、妻から「琵琶湖に癒されに行ってきたら」と言われ、癒されに行きました。でも行っただけでセミナーへは参加しませんでした。

大宝に引っ越しすることになり田池先生に報告を兼ねて挨拶に行きました。

田池先生は、私と長男を家に招き入れ「大宝に来たということは勉強しに来たんだよね！ みっちゃん、勉強するんだよね！」と尋ねられ、自分自身は勉強する気は無いものの「違う」とも言えず、「ハイ」と言ってしまいましたが、その時の先生の顔が今でも忘れられません。

その後、2015 年 4 月の池田セミナーで初めてセミナーに参加させていただき、田池先生にワンポイントを教えてもらいました。私にとってはあまりにも大きな課題で、全然、勉強は進んではいませんが、今は子供の頃遊んでくれていた兄さんたちの下で働かせてもらい、仕事も、学びも、色々とお手本にさせてもらっています。

今では大宝に来て、学びにつながったことに感謝しています。

田池先生、ありがとうございました。

ロサンゼルス反省研修会（ホリデイイン・トーランス）で、うれしそうな板倉直明さん

板倉さん一家のセミナーに向ける思いを聞いていただきましたが、学びを続けている者にとって、大阪研修センター、東京研修センターは、何にも代えがたい思い出深い場所となっていきました。

大阪研修センターができた時、板倉さんが配られた紅白の「上用まんじゅう」— あの味が忘れられない — と言えば嘘になりますが、大事に持って帰った思い出は今でも鮮明に覚えております。

では次に、そんな研修センターを支えてくれた人たちの思いを聞いてください。

大阪研修センターでセミナーの準備

◎ 田中和宏さんの思い

私が「神の子の道研修センター」のお世話をするようになったきっかけは、腰を痛め色んなことをして彷徨（さまよ）っていた時のことです。

伯母が通っていた鍼灸院の人に紹介され「神理を学ぶ会」の勉強会に参加し、初めて田池先生にお会いしました。

その時に初めて現象を出してもらいましたが、その時は腰に蛇（へび）が巻き付いているという現象でした。後になって、それが蛇と思っている自殺した人の思いだということを知りました。

それから宿泊を伴（ともな）う反省研修会に参加している時に板倉さんと同室になりました。それがきっかけで、腰痛のため無職だった私に仕事を提供してくれることとなったのです。最初は違う仕事をする予定だったのですが、板倉さんの内なる思いから、板倉ビルの空いている部屋を改造して「神の子の道研修センター」（以下、八尾センターと記述）にすることとなり、そのお世話をしてほしいと言われて二つ返事でお引き受けした次第です。

八尾センターでは、1泊2日の反省研修会や勉強会をさせていただきました。隔週の水曜日に反省研修会に参加できない方のためにビデオ会を催（もよお）したりもしました。そして研修会や資料をまとめるために、北摂の方や白桃園の方、色々の方が八尾センターにボランティアに来てくださいました。ありがたかったです。

ただお世話する方の中には、わがままを言ってくる人も結構いました。たとえばセミナーの10日前になるとキャンセルが次から次へと入り、その度に宿泊担当している人に連絡し名簿等を直したりと……それが、大体いつも同じような人だから怒りを覚えることもありました。

先生にそれを相談したら「あなたの怒りの心を見せてくれているから、太平洋の海の水スプーンの一杯の心を」と、教えてもらいましたが、残念ながら分からなかったです。

八尾センターでの宿泊セミナーをご存じの方が、よく「あの時は楽しかった」と言われますが、セミナー前日までバタバタして、ホテルの確保、手配、部屋割り、センターで泊られる方の布団や朝食の手配、セミナー資料を印刷しまとめて配る手配等々、今でこそ懐かしく思いますが、やはり苦しかったです。

社会人として、今から思えば失格でした。

八尾センターにいた時は、心を見るということから程遠い所にいたように思います。肉肉のなかで仕事をしていました。

そんな中でも、うれしいと思えるのは、来る人ごとに「八尾センターで、皆と会え、しゃべれ、ビデオを見られて楽しい」と言ってくれたことです。

赤ちゃんとか、幼い子供が、自由にのびのびと遊んで笑っているのを見る時、本当にうれしかったです。

「神の子の道研修センター」、ここが僕のスタート地点でした。

本当に、ありがとうございました。

アメリカの仲間も、関西の大人や子供たちも、大阪研修センターが懐かしい忘れられない場所になりました。

次にご紹介するのは、大学でマナーの講座を持たれる素敵な女性の方ですが、この学びにつながるや、今までの生活を清算され、「神の子の道東京研修センター」に住みこまれ、心のケアーをお手伝いするという道を選ばれました。

◎ 塚越広子さんの思い

ここ橋本の研修センター３階に引越してから４ヶ月が経(た)ちました。私の生活は１８０度変化したと言えるかもしれません。

引越して来ることには何の抵抗も感じなかった私でしたが、これ程、私自身を変えていただくための場所だとは想像もしていませんでした。

実は、センターへ来るに当たって、きっと私の成すべき役割があるに違いない、私がしなければ……と気負(きお)っていたのです。人の上に立って華やかに自分を表わすことに喜びを感じていた私にとって、センターの仕事は思いの外(ほか)、細かくて目立たないことの連続でした。

東京研修センターで田池先生とお鍋の集まり

独り暮しをしていた頃にはやらなくて済んだことも、ここでは必要になってきました。慣れないことがたくさんあります。今までは気ままに自分の時間を使っていましたが、ここには次々と人が訪ねて来ます。それは楽しいことなのですが、何とか自分のペースを守りたいという気持で一杯になってしまいました。その上、プライベートな時間の区切りがなく、私の裏の顔も表の顔も区別している暇がないのです。

とうとう、もう逃げられない場所で、私は自分をさらけ出すことをさせていただいていると感じたのです。多くの人々の中で自分の心が見えます。今までは外で仕事をしていて、少々嫌なことがあったとして

も自宅に帰り、独りになれば気が休まりました。なぜならば、独りでいれば鏡を見ることがありませんから、自分の心を見ることがないのでいつも自分が正しいと思っていられたのです。

　センターでいろいろな方々に会うことによって自分が見えます。そしてもう何処にも逃げていくことができず、我が身を繕（つくろ）っていられなくなりました。

　私に一番必要な学びでした。悪い面は隠し、素晴らしい面だけを何とか見ていただきたいと思って繕って生きてきた私の生活は不可能となりました。

　私が橋本へ来ることができたのは、何か立派なことをするためではなく、私を変えていただくための導きであったのですね。

　ある日、プリントの印刷をしていました。その時、自分独りのためだけではないことをしているという喜びを感じたのです。

　センターは自分の勉強の場としてあるばかりでなく、たくさんの方々の場所でもあるのです。その仕事をさせていただくことがとてもうれしく思えました。

　そう言えば、今までの私はすべて自分のためだけにやってきました。他人に迷惑をかけず、お世話にもならず、自分でやってきたという自負がありました。心の奥に「助けてもらわなくても自分だけでやっていける」という気持が根付いていました。精神的にも、物質的にも、独りで生きてゆけるという思いできました。ですから当然、何でもが自分のためにやっていることばかりだったのです。

「私は自分勝手でした」という思いと共に、周囲の方々が居てくださることに感謝したい思いで一杯です。

　私の心の修正は、ようやくここ橋本の地で始まりました。

東京研修センターに集まった方々。大阪研修センターの板倉さん一家の顔も見える。

東京研修センターに集まった子供たち（たまたまオーストラリアからホームステイしている子も混じっている）

イラストや挿絵を担当してくれた石橋章子さんが描いてくれた画ですが、当時、使われる機会がなかったので、ここに紹介させていただきます。

◇ 第２回ロサンゼルス反省研修会に集った人たちの声 ◇

1989 年３月 24 日から４月６日にかけて、神理を学ぶ会第２回アメリカツアーが開催されました。今回はロサンゼルス以外に、４月１日２日とシカゴでも反省研修会が開かれました。ロサンゼルスでの反省研修会では、先に紹介しましたロサンゼルス在住の菅さんが、日系新聞「羅府新報」にセミナー開催の告知を出していただき、これをご覧になってこられた方も多く、その中には、今も学び続けている方もおられますが、この第２回では日本の方も含め、ユニークな顔ぶれが並ぶこととなり、このツアーの中で、出版社（エルランティの光出版）発足の話も芽吹くことになりました。

Smith-Corona の手動式英文タイプライター

◎ ロサンゼルス在住のメイ青山さん

ロサンゼルス在住のメイ青山さんも、日系の新聞「羅府新報（らふしんぽう）」の告知広告を見て参加された一人ですが、なぜか告知文の「神理をまなぶ会」の「神理」という言葉から目が離せなくなったと言います。

メイ青山さんとは、ZOOM を使ってお話をお聞きしましたので、そのあらましをここに紹介させていただきます。

彼女は、まだ 20 代の頃は東京におられ、府中と立川の米軍基地で英文タイピストとして働いていたと言います。今はもう、かなりのお歳だと思うのに、当時使われていたタイプライターも「手動式の Smith-Corona」だと教えてくれるばかりか、何年に何があったかという記憶の確かさは驚くばかりです。

メイ青山さんは、お母さんが亡くなられたのを期に、お姉さんやお友達がいるアメリカのフロリダ州に渡られました。

渡米後、手に職を付けようと、美容師の免許を取り、２年間は美容師として生計を立てておられましたが、ロサンゼルスの紀伊國屋書店で「ＰＬ教団」の出版物を知り、ＰＬに入会し、会員となったうえで、今度はＰＬが運営する貿易会社で事務仕事をするようになったと言います。

宗教の裏側はどんなだろうという好奇心も手伝っての入社でしたが、「こんなものか」と思いつつ、14 年間、勤務したということです。そして、1989 年の３月、「羅府新報」の「神理をまなぶ会」の告知で、この学びと出会うこととなるのです。

研修会の日程も詳しく告知されていましたので、火曜日が休暇ということもあって、その日、会場のホリデイインを訪れました。セミナーの中で、ある方が「お母さんの意識」を希望された時、自分は母親に対し特に強い思いもないのに、なぜか泣けて泣けてしょうがなかったと言います。

交通の便のこともあって、その日は帰らざるを得なかったのですが、この学びのことが気になり、ロス在住の牧村さんのこ

とを紹介してもらいましたが、しばらくして、また学びのことが気になりだし、牧村さんに電話してみることにしました。

電話口にはご主人が出られ、ご主人の口から、その年(1989年)の12月、マリエッタで４回目のセミナーがあることを教えられました。セミナーに参加されたメイ青山さんは、12月末にはＰＬの仕事を辞(や)めることとなりました。彼女は言います。

「この学びを知ったとき、本当にびっくりしたんですよ。これなんだ、これが本当のことなんだ。絶対にこの道は外(はず)せないと思ったんです。」

翌年、友人がラスベガスで、日本食のレストランをはじめ、その事務仕事を手伝うためラスベガスに移られました。このラスベガスで６年間働き、1996年にこの仕事も辞め、翌年から日本でのセミナーにもよく参加するようになったと言います。

それまでは、トーランスの板倉さん宅でのミニセミナーにもよく参加されていたということです。

1989年３月31日　ホリデイイン・トーランス

次にご紹介するのは、シカゴ在住のアメリカ人女性のTWさんの感想です。反発しながらも、次第に意識の世界を受け入れていく過程が率直(そっちょく)に書かれています。またホテルを離れての研修会の様子も、手に取るように分かり、興味深い一文です。

今は、学びから離れておられるようですが、またズームでもつながるようになるのでは、と思いますし、でなくても250年後にはご一緒できるのでは、そんなことを感じさせる素敵な女性です。

◎ 私の心の変化

私の頭脳を使ってこれを書くことはとてもむずかしいです。長い間、私の頭は田池先生と教えを拒否してきましたが、今は少し受け入れるようになってきています。

私は夫と共に、3月のロス・セミナーに参加しました。全体として日本から来てくださった人たちに会えたことが楽しかったし、その多くの人たちに、とても親密感をおぼえました。日本語を毎日聞くことが楽しかったし、日本語の勉強にとても役立ちました。

私はロスを訪ねることがうれしかった。ロスの友達に会うこと、ショッピング、天気など、バケーションとして、また夫と一緒にどこかに行くことも楽しかった。こんな理由でロスに行きましたが、セミナーではあまり感じることができませんでした。いつもですとセミナーの後、私の内が少し明るく、温かく感じるのですが……。

私はまだ、神や田池先生などを信じて良いものかと、強く相容れないものを感じていました。

そして、私たちはシカゴ・セミナーに参加しました。私は田池先生はじめ、みな様が私たちのホームタウンに来てくださったことがとてもうれしかったのです。

最初の夜、私はあまり居心地が良くありませんでした。なぜならNさんの連れてきた人たちが、私のことを田池先生の生徒のように思っている様子だったからです。それに私は反発していました。

私はお茶をくばったりして忙しくしてリラックスしてきました。その夜の最後の方ではとてもリラックスしました。

現象の最中、私はとても温かく落ちついていました。私の心はその心地よさを受け入れていましたが、頭のほうではまだ田池先生を拒絶していました。その一方で胸に平和を感じておりました。

土曜日、先生がとても基本的な講話をされました。それが同時通訳されたことがとてもうれしかったです。理解していくのが簡単でした。そして私たちの質問に答えてくださいました。

私は、田池先生が「自分の話すことは現象を通して証明します」と言い続けていることに同意できませんでした。私は、「現象は、もしかするとごまかし、あるいは心霊能力か何かの誤用かもしれない」と思っていました。

私はそれが何の証明になるのかと思っていました。証明とは科学的に立証でき、反復できるものです。どうして「何々さん

は過去世であなたのお母さんです」とか、「あの世で私たちはみな知り合っていた」とか、「だれかはイエスの生まれ変わり」などと立証できるのですか。

私はイエスなど信じていません。おとぎ話のようで信じられません。いくつかの現象は、長くてつまりませんでした。だれかの質問はまったくばかげていました。参加した何人かは、サーカスにでもいるように講話の最中ポテトチップスを食べながら大声で話していました。私にはＮさんの友達の一人（私と同じように疑っているようでした）が、現象の後、前よりもっとやわらかく落ち付いてきたように見えました。

私は前に出てチャネリングをしてもらいました。現象の後、私は良い気持ちは感じませんでした。メッセージでは、生まれる予定の子供は「夫と私が夫婦として調和されることを待っている」とのことでした。私には理解できません。私たちは、かなり調和していると思っていました。私には「田池先生の言うことを聞かないと子供ができないですよ」と脅かされているように感じました。私は以前にもまして田池先生と「神の子の道」に対して反発を感じました。私はみじめでした。その夜、家で私はとても怒り、ひどくみじめに振る舞い、泣き、私の癇癪（かんしゃく）で夫を怖がらせました。（私は、その夜のことをとても恥ずかしく思ってます。）

その夜、私は夫に「明日、前に出て２人の意識を出してもらおう」と思っていることを話しました。

日曜日、私はまだすべてのことに対して心の変化は感じていませんでした。私は不満で不幸せでした。５時ごろ、私たちは近くの日本料理店にすばらしい夕食に行きました。食事の後、セミナーにもどりましたら、妹の夫のＤさんがホテルで待っていました。私は彼に来るように誘いまし

たが、来るとは思ってませんでした。

　セミナーの会場にもどりました。田池先生は夫と私に現象のため前に出て来るようにと言われました。現象が始まり、霊道者の口から出る言葉は、まさに私達２人の様子でした。しかし、私はとてもすばらしい感覚をおぼえました。リラックスした温かい感じ、それは私の胸に集中され、そこから放射されているようでした。

　終わると、私はとても良い気持ちでした。とても平和で心の底から夫に対して愛いっぱいになりました。頭ではまだ完全に確信していませんが、私の中に何かが起ったことは気付きました。

　田池先生は次に、私の義兄弟であるＤさんの現象をしました。現象の間、Ｄさんは、多くの暗い意識に肉体的に憑依されました。私はＤさんを良く知っており、彼はこの現象ということはまったく知らないし、演ずるような人ではありませんでしたから、彼に起っていることは本当のことのはずです。私は彼に起っていることが怖かったです。また、彼をかわいそうとも思いました。彼の現象の後、私はとても圧倒されました。「これらの不思議な出来事は本当かしら?」　私はとても奇妙に思いました。

　夫と私との現象、それにＤさんのものでも強く影響されました。

　私はそこにいるみんなに対して、とても温かい思いを感じました。そこにいる特定の人に対する嫌悪はもうまったくなくなっていました。私は、その日にみんなで共有したものにとても動かされました。

　次の日、私は自分が変化しているのに気付きました。私の頭は静かになり、心によって動いていました。私の心は大きく、温かくなり、愛で満たされました。私は心で自分と宇宙のすべてのものとの関係が分かりました。私はすべての生き物、たぶん生き物でないものとも同じであることが分かりました。

　私は、人間の「信じられないほどの無知」に気付き始めました。その日、私はもし避けられるなら、どんなものに対しても傷付けたくないと思いました。私は、環境を保全するよう、私の惑星を害しないようにと、私は、地球とその上のすべてのものに愛と感謝を感じました。私は、自分とすべてのものに対しての関わりを感じました。また私は、誰に対しても嫌悪しなくなっている自分に気付きました。

　私は他人に対して不快な感じを持ったなら、その自分の心を見ていこうと気付きました。今までの私より、今の私はもっと幸せです。そして夫や私の家族に対してもっと愛を感じています。

　私はもう、田池先生や先生の教えに対して反対する気持ちはありません。（いくつかのことに関してはとても信じられない私ではありますが……。）

　私の頭はまだ疑っていますが、私の心は、神の存在を受け入れています。私の心はほとんどの時、静かでいます。このままでしばらく行ってみます。そしてどうなるか見てみます。

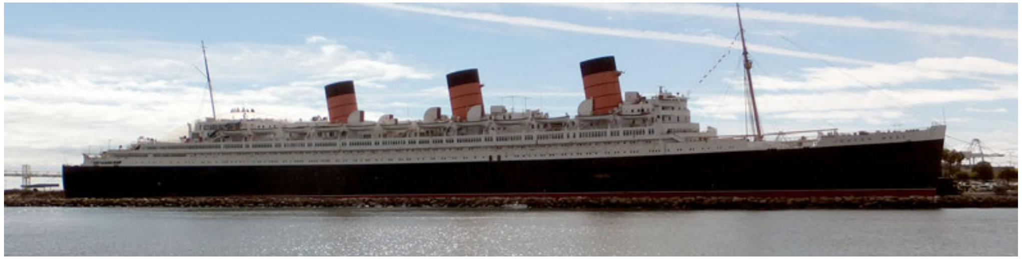
　私は、変わりました。

以下は、渡米した板倉さんに代わって大阪研修センターをお世話された満尾徳二さんの手記です。
満尾徳二さんは、鹿児島出身の見るからに「ぼっけもん（頑固者とか怖いもの知らず）」という感じの人で、表面こそ厳ついのですが、内面は情にもろい人情家といったタイプの方で、弱音など吐いているのを聞いたことのない方でした。それだけに、この満尾さんのシカゴ体験手記は、意外というか、面白いというか、読んでいて笑いながら涙が出てくる、そんな体験でした。
満尾さん、ありがとうございました。

◎シカゴセミナーに参加した満尾徳二さん

1989年3月28日のことです。妻と孫と3人でロスに初めてセミナーに行ったときのことです。ロスのセミナーが終わり、妻と孫たちは日本に帰り、私は残ってシカゴに向かうことになっておりました。一人になって自由にシカゴに行ってこようと思っていたのに、先に帰る2人をホテルの前で見送っていると、思いがけず寂しくなり泣けて涙が止まらなくなったのです。
そのときのことを反省ノートから書かせていただきます。
悪かった、俺が悪かった。自分の偽我を棚に上げて、お前の悪い点だけが目につき責めてばかりだった。肉ばかり見ていて本当に済まなかった。俺が悪かったばかりに苦しめてきた。これからは共に共に仲良く暮そう。俺も一層勉強して、真我の

ロングビーチに繋留された船舶博物館「ザ・クインメリー号」（左端が満尾さん）



世界を求めていくから、どうか今までの仕打ちは許してくれ。何もかも、俺が間違っていた。許してくれ、許してくれ。今日からは真の愛に目覚めるように努める。

愛とは好きだとか、惚れたではなかった。お前に対する偽我の念を捨てることだった。俺が間違っていたばかりに、お前はもちろん、周囲の人にも迷惑をかけたことを反省する。済まんことをしたなあ。長い付き合いだったなあと、心から本当の愛が足りなかったことを詫びるとともに、これからは今までの悪の償いをして、真の愛に目覚めることを誓うよ。

田池先生ご夫妻（前列）と満尾さんご夫妻（後列）

このことは単なるホームシックと思っていたのですが、抑えても、抑えても、涙はどうにもなりませんでした。年甲斐もなく、妻や孫が恋しくて、そして寂しくて、２人が帰ってからは、気が抜けたような思いで部屋に帰ったのですが、途中会った人が、「満尾さんどうしたんですか?」と問いかけてくれましたので、余程、様子が変だったのでしょうね。部屋のベランダで、遠く日本のほうを眺めながら、「今頃どうしているんだろうなあ」「えーい、どうにでもなれ」と、入り口をしっかり締め、誰も入ってこないようにして、腹の底から大声で外に向かって

「保子、俺一人置いてなぜ帰ったんや、なんで俺一人シカゴに行くようにしたんだ」と、声を限りに叫びました。

ベッドに顔を伏せたり、もがいたり、立ったり座ったり、老いた男一人が、身の置きどころもなく泣きじゃくりました。よくある飛び降り自殺ってこんな思いだろうなあと、遠い日本へ飛んでいる飛行機を思い

ながら、部屋の中でやるせないときを過ごしました。

何度も何度も「俺が悪かった。俺が悪かった。間違っていた」と、一人、部屋で口ずさんでいました。妻が、「サタンや、クドーラや」と何度も言われながら、黙々と研修会に通っているのを見て、私は馬鹿にしていましたが、それも間違っていたと部屋の中で一人うなっていました。よーし、今度妻に会ったら、誰が見ておろうが、皆の前で手をついて俺が間違っていたと心から謝ろうと、ひそかに心に誓ったのです。

でも空港で迎えにきた妻の顔を見ても、とてもそんなことができるものではありませんでした。いつもの偉ぶりの私に返り、何もなかったような私に戻り、また己をいっぱい出したのは言うまでもありません。

当時、このことを先生や誰かにお話ししたところ、「よかったねえ」とみんなから言われましたが、私は何がいいのか、ちっとも分かりませんでした。でも帰ってから、このことや、みんなの言葉を思い出してみると、ああ、これが現象か、神の愛かと分かった次第です。

神はこのように、ときには耐えきれない苦しみを、ときには心の中に涙を誘う、やさしい、そして厳しい、苦しい気付きと反省の教材を絶え間なく下さっているのだということを感謝いたしておりますと、当時の反省ノートに書いております。

今、そのときを思い、そして心を見るとき、まだこの学びに入って何も分からないと思っていたときに、既に心はよく理解していたのだなあと、遅々として進まない現在の自分の姿を見て、田池留吉に本当に済みませんという心が、ひしひしと湧いてきます。

ロングビーチに繋留された船舶博物館「ザ・クインメリー号」艦橋にて

以下は、ロサンゼルスセミナーに参加された方々の感想です。寄せていただいた体験を順不同で掲載させていただいておりますが、年代順に掲載するよりもランダムに掲載することで、ロサンゼルスでのセミナーの全体像が浮かび上がってくるように感じるからです。なお年代的には、第２巻に入るものも、ここに掲載させていただいております。

◎久米真路さんのアメリカセミナー

私が唯一参加させていただいたアメリカでのセミナーが、1996年の６月、ホリデイインで開催されたセミナーでした。

当時私は、中学の同級生からの誘いでアメリカでのビジネスを始めたところでした。その前の年に初めてセミナーに参加し、ちょうど仕事でロサンゼルスにいる間にセミナーが開催されるとあって、私は喜んでアメリカ最後のセミナーに参加させていただいたのでした。

当時のセミナーはチャネリングの時間が必ずあり、私もチャネリングを受けた記憶があります。ただその内容は残念ながら全く覚えておらず、田池先生の講話の内容も「通訳がありますのでゆっくりしゃべりますね」と言われたのにもかかわらず、田池先生は講話にすごく熱が入って、すごく早口になっていたことなどが思い出されるくらいです。後は、ある現地の女性の参加者にお会いした際、初対面なのにずっと前からの知り合いのようにしか思えず、あまりにその思いが強くて打ち消せなかったので、つい手紙を書いて渡してしまうという、今なら顔から火が出るくらい恥ずかしいことをやってしまったことが思い出されます。

あとは、会場の案内板に「EL Rante Seminar」と金文字で書かれていたことを今でもはっきりと覚えています。その文字を見た時、「250年後もこの”EL Rante”という名前が残り続けて、アルバートの目に留まることになるのだろうか?」と、そんなことを考えていました。

私は当時から、アルバートはどうやってこの学びのことを思い出すのだろうか？　とそのことがとても気になって仕方がありませんでした。なので、そんなことを思っていたのでしょう。当時も書籍は出版されていましたが、まだ本格的な英語版の書籍はなかったと思います。ですが、この学びをアルバートに引き継(つ)ぐためには、書籍の英語化が絶対必要なんじゃないかと、そんな思いを今でもずっと変わらず持っています。

当時の私は、この学びに対する肉の知識もおぼつかない状態でしたが、不思議とアメリカには若い頃から思いが向いていました。

最初のアメリカ旅行が89年の夏で、完全な観光旅行でしたがロサンゼルスとラスベガスに、91年には留学でボストンに、92年～93年にはサンディエゴ、バンクーバーでした。そして95年からロサンゼルスで仕事をするようになり、最後のアメリカセミナーにも参加させていただく機会に恵まれたのでした。

そのセミナーの後で起きた、自分にとっ

ての小さなハプニングが忘れられません。

セミナーの全日程を終えた後、私はロサンゼルスから500km北にある、シーサイドという小さな街に戻る予定でした。

仕事でロサンゼルスに来た際は必ず立ち寄っていた「ふるさと」というガーデナの日本食料理店で、その日も夜ご飯を食べていたところに、思いがけず田池先生のご一行が来店されたのでした。私はその場で直立不動になり、大変緊張していました。

当時はまだ田池先生と会話するなど思いもよらないことでしたが、先生はとてもリラックスした様子でしたので、自分の食事を済ませた後、「これから500kmほど北の自宅に戻ります」と、田池先生に報告できたことだけで相当にうれしいことで、気分も最高でした。

まだ20代半(なか)ばだった当時のことが懐(なつ)かしく思い出されます。

◆ 今後のアメリカでの展開について

「この学びを引き継(つ)いでください。アメリカに関係した人に共通のことは、アルバートにこの学びを引き継ぐということです。もうすでにアメリカの図書館に書籍が置かれています。その流れを引き継いでくださいということです。250年後はもう目の前です。意識の世界ではすでに展開されていることですが、意識の世界が、形の世界に現れてくるまでには、あと250年の時間が必要ということだけです。」

私の中には、この学びに出会った当初から変わらない思いがあり、その思いと一致するのが「アルバートへの引継ぎ」です。心が肉肉なのでその次元にとどまっているだけなのかもしれませんが、私の中の思いが変わらない以上、それはどうしようもないことです。

これからは書籍とネットの両面で、アルバートへの引継ぎが必ず実現されていくこと、UTA-BOOKが今も存在している大きな意味の一つが、それではないかと感じています。その一助を担(にな)うことができるのであれば、私は残りの人生を、そこに捧(ささ)げたいという思いがあります。一笑(いっしょう)に付(ふ)されることかもしれませんが、正直な思いなので、この際なので書かせていただきました。

◎安江幸代さんのアメリカセミナー

いつ頃のセミナーだったかも忘れていたアメリカセミナー。仕事をしていて長期の休みがとれないということもあったが、元々なぜかアメリカは好きではなかったので一度だけ参加した。250年後に生まれる地を見てみたいという興味だけがあった。当時いただいた写真の中に1枚だけ日付けが記されていた。今から25年前、1995年6月2日、場所はロスで浜辺のような感じの所に見えるが定かではない。写真の私はポケットに手を入れて確かにここを歩いたという記憶はあるので、日本に居たという過去世ってこんな感じで心に伝わってくるのかなと思った。

セミナーに関しては心に響いたものもなく、せっかくアメリカまで来たのにチャネリングは日本にいた時と何ら変わらないと感じて、つまらないと思っていた。今か

ら思うとその程度の学び方だったのでその時の思いも反省に結びつかなかったし勿体（もったい）ないと思った。ただ肉持つ最終の転生がアメリカだということだけは、あの時も信じていたのが不思議だった。

アメリカは横断歩道がやたら長くて信号が変わりそうで途中でいつも必死で走って渡っていたことや、ホリデイインの花壇にひっくり返って花を壊滅（かいめつ）状態にしてしまったのにホテルの方は気にしなくていいと優しく言ってくれたこと、ホテルのバスルームには水が流れる排水溝がなくて、おしゃべりしている間に湯船から外に溢れてセミナー仲間に助けを求めて大騒ぎした事件などが今は懐かしく笑える。

アメリカには行くだけで良かったのだと思える。体感するだけで私の目的は果たされた、そんな思いが湧いてくる。

このセミナーから帰宅後に「私はユダヤ系アメリカ人、先祖はユダヤ人。財を利用して生き延びた。今は政治的には表舞台に立たないが、私が生まれる頃にはいよいよその姿を現していくだろう。この差別の激しい地になぜ誕生するのか、それはすなわちアルバートに出会うということだ」と強烈なコメントを自（みずか）らの心が語りだした。あたかも現実のように鮮明に心に響くことに唖然（あぜん）となりながら一方では、こんなもん嘘に決まっている、なんかまがい物を食らったに違いない。ただこのストーリーを替えたい、どうしてなのか定かではないが恐ろしいことに巻き込まれそうで嫌だと思っていた。

今は、もうストーリーは何でもいい。ただ250年後に生まれてこれるということが幸せなだけだ。大嫌いだったアメリカがとても身近に感じる今、日本が懐かしくさえ思える。興味本位で行ったアメリカセミナーは、ある意味奇跡だったのかもしれない。アルバートと出会う現実が間もなく起こる、そう伝えてくれていたのかもしれない。

◎ 水本佳典さんのアメリカセミナー

アメリカのセミナーには、2回参加させていただきました。

1回目は第2回のカリフォルニアトーランスのセミナーだったと思います。2回目は最後のカリフォルニアのセミナーに参加したと思います。

海外セミナーは単純に海外に行く最初の経験だったので好奇心もあり、また時間もあったので、参加させてもらいました。

自分の心を見るこの勉強は、日本でもできるという思いもあったし、実際参加してみて、特別すごい経験ができたわけでもありませんでした。

しかし、先生はその頃も「この学びはやがてアメリカに行く」と言っておられたので、その一環で、こういったセミナーをされるのだなぁと思って参加しました。

Holiday Innの中で、会議室のような部屋を借りて、40～50名の参加者で行われたと思います。大体1週間の日程だったので、ゆったりとした時間を持たせてもらいました。気候も暖かくカラッとした湿度でとても過ごしやすかったです。

自由時間にはショッピングモールに行ったり、現地の食事も美味しくて、楽しかったです。とてもいい思い出だったなぁと思って、海外セミナーに思いを向けてみると、うれしい思いが出てきて、これは思い出ではない、今の話だ、というなにかそんな感じが伝わってきました。アメリカセミナーに思いをむけてみて、先生のおっしゃる「過去も、未来も、今の中にある」ということを少し感じさせていただきました。

◎ 牧華江さんにとってのアメリカセミナー

私は最後の 1996 年 6 月のロサンゼルスセミナーに参加しました。その当時、私は大学生だったので比較的時間に自由があり、最後のアメリカセミナーということもあって、思い切って参加してみました。今思えば、あの時の私は一番セミナーが楽しくてうれしくて……という時期だったのではないかと思います。反省して、自分の思いをさらけ出していけることがうれしくて、田池先生もちょこちょこと声をかけてくれたりしていたこともあり、ただただ純粋にセミナーが好きでした。ただ、当時は自分の心の深いところを感じるまではできずにいました。反省といっても自分の苦しい思いを吐き出してスッキリしたというくらいのものでした。それでも自分の心を抑えつけてきた自分にとっては、何とも言えない解放感で反省文を田池先生によく送らせてもらっていたように思います。

ロサンゼルスのセミナーもとても楽しく時間が過ぎました。セミナーの時間は外国の人たちもいて、一緒にお勉強できるのが新鮮でした。自由時間には近くのストロベリータルトがおいしいお店に行ったり、ショッピングセンターで買い物したりできる時間もあって、観光気分のところも多々ありました。今思い返すと、アメリカセミナーは私にとっては、パーッと明るい空気が流れていたように感じます。

UTA ブックさんのこの企画のおかげで、すっかり忘れてしまっていたこの学びに対する 24 年前の無邪気(むじゃき)さを思い出せてよかったなと思いました。今は結果を出せてないとかで自分を小さくしてしまうところもあるけれど、昔の思いを掘り起こしながらその当時の自分とともに心を広げていけたらいいなと思います。

今は、どんな思いが出てきても、「こんな心をずっと使ってきたんだから、苦しくて当たり前やったな」と心で納得できるようにもなれたし、それでも自分が本当の自分に気付けるようにずっとずっと自分の中で待ち続けてくれていることも信じられるようになれたことが嬉しいです。私はずっと自分に訴え続けてきたんだと思います。苦しさも喜びも何もかも、全部全部自分に聞いてほしかったのに、肉が自分だと思って肉を認めてもらえることが喜びだと思い込んで外に外に心を向けてきた。それでも必死になって気付いてほしいと、私に向かって叫び続けてくれていた。そんな自分の声を真摯(しんし)に受け止めていきたいと、また強く思いました。自分には自分がいてくれた、不思議な感覚です。

あるご姉妹 にとってのアメリカセミナー

— 中島夕美子さん、檜木奈美さん —

◎ 中島夕美子さんにとってのアメリカ

第２回のロサンゼルスセミナーに参加しました。母と姉の３人で参加しました。初めての海外への飛行機搭乗、現地での文化的な違いに緊張ととまどいの連続でした。セミナーは中ぐらいの会議室で机と椅子がずらっと並んでいて、日本と同じ形式で田池先生の講話とチャネラーによるチャネリングだったと記憶しています。JTBの添乗員の方もセミナーに参加され、チャネリングを受けていたような気がします。正直、まだ高校生になったばかりの私は物見遊山でセミナーに参加していました。

特に印象に残ったのは、ある日の夕食でした。グリルしたチキンが丸ごと一羽、一人ずつのお皿にドンと置かれていました。それが何十皿とあるのです。これぞアメリカ！ と度肝を抜かれた記憶があります。

セミナーが終わると、オプショナルツアーを用意していただいてました。私たち親子は、セスナ飛行でのグランドキャニオン見学を選択しました。セスナの揺れにひどく酔って、機中から景色を見るどころではありませんでした。しかし、降り立ったポイントでの壮大なパノラマは凄かった。ただただ圧倒されました。大袈裟な表現になりますが、暗かった自分の胸の内にサーっと風が吹き抜けた感じでした。

ロサンゼルスセミナーに参加した翌年、今度はニュージャージーセミナーにも参加させてただきました。こちらはセミナーの様子は全く覚えておらず、ウォール街を歩いたことや、NYの街で姉や友と買い物したこと、観光バスで親切なお兄さんが（最

オプショナルツアーで観光したグランドキャニオン

近になって梶谷さんだったと判明）案内してくれたこと、シルビアさんのお店で食べたソウルフードがとても美味しかったことはしっかり覚えています。うろ覚えですが、週末に久保さんの家でセミナーをするために、若い人たちが集まってポスターを作った気がします。２回目のアメリカ滞在は、少し慣れてきたせいかアッという間に過ぎた１週間でした。いずれにしても、高校生の私にはアメリカセミナーは刺激的で楽しい観光であって、学びとは程遠いものでした。

ロサンゼルスセミナーで訪れたグランドキャニオンの影響でアメリカに興味を持った私は、初めて渡米した 10 年後、社会人になってから偶然にもグランドキャニオンの麓の大学に１年間留学しました。どちらかと言えば、私にとってアメリカセミナーは今の学びよりもそこへ繋がっています。アメリカに滞在した１年間は、本当に色んな思いが沸き上がりました。日本で生活していては分からない、気づかない思いがいっぱい出てきました。正直、今となっては、あれほどまでになんでアメリカに行きたかったのか分かりません。必死でした。それはこれから徐々に反省を通して、解明していきたいと思っています。

◎ 檜木奈美さんのアメリカセミナー

私がアメリカセミナーに参加したのは学び始めて間もなく、確か 1989 年の３月のロスセミナーだったと思う。確かまだ 19 歳だった。

初めて降り立つ異国の地。空港からホテルへの移動。何もかもがとても新鮮だった。ロスの空はとても広くて抜けるような青空で、アメリカはとにかく何もかもが大きかった。

アメリカロサンゼルスのセミナーを皮切りに、シカゴ、ニューヨークと何度かアメリカセミナーに参加する機会をいただいた。正直、アメリカセミナーに参加した当時は若く、セミナーというよりは旅行気分で参加していた。

アメリカセミナーの意味なんて、考えてもわからないけれど、自分が何のためにアメリカに行ったのかと振り返ると、私は過去、250 年後の未来、そして今世のちょっと先の未来の自分に会いに行ったのだと思う。

最初のロスのセミナーでは観光もあり、私は母と妹とグランドキャニオンツアーに参加した。グランドキャニオンは、中学生だった頃からいつか行ってみたいと思っていた場所だったが、思いがけず最初に訪れる地となった。小型のセスナに乗り、渓谷の合間をぬって飛行しながらのツアー。限られた時間であったが、雄大なグランドキャニオンの一端を垣間見ることができた。このとき、確か IMAX だったと思うが、大画面でコロラド川の川下りのバーチャル体験もした記憶があり、とても楽しい思い出である。

グランドキャニオンには、これまで３度も訪問する機会に恵まれた。この地の豊かな自然や大地、広大な渓谷、乾いた砂

や綺麗な石、夜空一杯に広がるこぼれるような無数の星々、朝靄の中で森の木立の奥に見えたエルクの影、何もかもがとても懐（なつ）かしかった。私にとってグランドキャニオンは、今でも大好きな場所である。

きっと、ネイティブアメリカンとしてアメリカ大陸に生きた自分に何度も会いに行ったのだろう。

その後、ニュージャージーのセミナーに参加したときも、私はまたまたネイティブアメリカンだった自分に遭遇する機会があった。セミナーの学びの友数人とハドソン川のほとりの自然保護地区を散歩していた時のこと。その地がかつてネイティブアメリカンの居住地だったとの看板があり、学びの友と「私達はみんなネイティブアメリカンで、かつてここに暮らしていたんだね。」と話したことを覚えている。その時はああ、そうなのかとぼんやり思った程度だったけれど、今はそうだったと納得である。

話は前後するが、ロスのセミナーの参加の翌年に、私はシカゴで開催されたセミナーにも参加した。このシカゴセミナー参加が私にとっては、今後の進路を決める上での大きなターニングポイントとなった。シカゴを訪れた時、これまた何とも言えない懐かしい気持ちになり、またこの土地に戻ってきたい！ と強く感じた。最初は漠然（ばくぜん）とした思いだったが、日増しにその思いは強くなり、私はアメリカ、イリノイ州の大学に留学することにした。大学はシカゴではなかったが、同じ州内の大都会であるシカゴには観光やなんやと何度も訪れた。

ちなみに私が卒業した大学のマスコット（アメリカの各大学にはゆるキャラならぬ、マスコットキャラがある）はなんと「Chief」と呼ばれるネイティブアメリカンの酋長（しゅうちょう）だった！ すっかり忘れていたが、今回アメリカセミナーの感想を書くにあたってあれこれ思い出していたら、急にマスコットのことが浮かんできた。なんで酋長がマスコットなの、とずっと思っていたが、なんのことはない自分のことを指していたのだった。今回、全部が一つに繋がってビックリである。

シカゴは私にとってとても縁の深い土地だったようで、職場の多くの取引先がシカゴを中心とした中西部にあり、仕事でも何度かこの地を訪れることとなった。大学卒業直後に4ヶ月程インターンとして勤務した先は、ロサンゼルス郡のお隣にあるオレンジ郡にあり、セミナーで訪れた土地、土地は私に行き先を示してくれた矢印のようであった。

そして私の矢印の最終目的地は、やはりアメリカ、ニューヨークである。

ここはなんと言っても250年後の未来の自分が待つ土地。

今世、学びの友と一緒に、または一人で何度もハドソン川からマンハッタンを眺（なが）めた。

アメリカセミナーの続きは、250年後、またみんなと共にニューヨークで。

あるご夫妻 にとってのアメリカセミナー

― 野添訓さん、信子さんご夫妻 ―

まず、最初に私たち家族がアメリカに住んでいた時期について。

実際に住んだ期間は、1985 年 10 月より 1989 年の 11 月末まで約4年です。

1985 年～ 1987 年 2 月までが、マサチューセッツ州のボストン地区、そして

1987 年～ 1989 年 11 月末までが、カリフォルニア州ロサンゼルス、住んでいたのはトーランス市でした。

伊丹空港にて、アメリカの貨物専用航空会社で約 13 年、航空機運航業務を担当した後、アメリカ転勤は希望して行ったのでした。

1985 年5月には、転勤が決定し同日よりアメリカ本社所属の営業駐在員となりました。転勤のための準備に入っていた頃、8月 12 日に、あの「日航機御巣鷹山墜落事故」が発生し、伊丹空港では安全部会などにも出席していたので、他社とはいえ事故は大変ショックでした。

事故機は、その前に伊丹空港で尻もち事故を起こし、長い間国際貨物ビルの会社事務所の前に駐機していたので、毎日見ながら仕事をしていました。こういった経過を経てアメリカへと向かったのです。

最初の赴任地はボストンという、学びとは繋がりようのない都市だったのですが、後で考えると、日本を発った時に既にベクトルはロスセミナーへと向かっていたのだなと感じています。

今回のお知らせで、改めて気づいてびっくりしたのが、最初の宿泊セミナー（湯の山温泉）が 1985 年 8 月 17 日 18 日であったことです。この時期は、ボストンへの引っ越しのため、日本ーボストン間を行き来していた頃でした。

勿論、まだセミナーの存在は全く知らなかった頃です。そんな時期に、私たち家族は、全く方向違いのボストンに行くことになっていたのです。

会社との契約は、ボストンで 5 年の契約だったのですが、会社が経営難に陥り、ボストンでも現地セールスは何人もレイオフ（人員整理）になり、その煽りを受けて私には本社のあるロサンゼルス転勤が要請されました。

一度は、ジョージア州アトランタ行の話もあったのですが、結局はロスへ行くことになりました。

本来は、契約はボストン地区なので、勝手に転勤はさせられないことになっていましたが、何しろ会社の存続がかかっている時期でしたので、個人の契約は 2 の次の状態でした。

ようやく私も家族もボストンに慣れてペースを掴んできた時期でしたから、私は強く抵抗しました。会社に対して「契約違反」を主張し、まずはボストン継続を第 1

希望としました。次に、どうしても転勤させるなら、一旦、日本に帰国を希望すると言いました。

ですが、会社は「ロスがダメなら会社を辞(や)めるしかない」と言ってきました。

そんな風に、ロス転勤にはかなり強硬(きょうこう)に抵抗した経緯がありました。

これも、後で考えると意味のあることでした。

1987年の2月、厳寒のボストンを家族とともに飛び立ち、ロスへ赴任しました。

引越し荷物がトラックで到着するまで約2週間、トーランスのホリデイインに滞在しました。そしてホテル近くのアパートに入居しました。

こうして、最初日本から出発する時は予定にもなかったロサンゼルス南部のトーランスに住むことになったのでした。

このトーランスは、ビーチにも近いので割と過ごしやすく、日本人駐在員も多く住んでいました。

トーランスに住んで1年半を過ぎた頃に、Sさんを通じて、家内の信子が牧村清子さんと知り合うことになったのです。

そして牧村清子さんから、学びを知ることになったのです。

信子は熱心に牧村さんのお宅を訪問するようになっていました。

私は、日本人でエホバの信者の人たちが家を訪問して来ることもありましたが、全く関心がなかったので、断る理由として「神は私の中にいる」と言って帰ってもらっていました。

当時、アメリカでは新興宗教団体が大勢で集団自殺したりしていたので、妻の信子には、変な宗教にはくれぐれも気を付けるように言っていました。

私には、日系人の叔母がロス市内にいて、従兄妹3名は日系3世でした。

この家族は、叔母がロスの創価学会に入信していたので、全員学会員でした。

ただ、叔母から創価学会をすすめられたことはなく、親戚つき合いはうまくいっていました。私自身は宗教は嫌いで、特に幼い頃より仏教（お寺）が怖くて嫌いでした。

ここから学びに集うまでの経過は、妻の信子から話してもらいます。

野添信子です。

私は、子供のバレエ教室の送迎の件でSさんと会うことになり、1988年の10月にSさん宅に行くことになりました。

行くなり初対面のお二人の間で悩み相談が始まっていて、場違いなところに来てしまったと思いながらも、前夜ちょっとしたことで眠れなかったこともあり、私の話も聞いてもらいました。

「そういったことはその人の問題、そのことで眠れなかったのはあなたの問題だ」と言われ、何？ こんな井戸端会議初めてだとビックリしました。

夫も含め、人は必ず私の思いに同意してくれて、それで終わりでした。

心のモヤモヤは取れないままでした。

知りたくなりました。「なんのお勉強ですか？　早起きなら私はできませんが」と尋ねました。

アメリカに行く前に住んでいた豊中で、ある団体の人に勧誘され、良いお話だと思ったのですが、早起きが条件で、早起きは苦手だと断ったことがありました。

お母さんの反省です。神はあなたの中にあって、あなたは許されています。

お母さんの反省は、母のことは好きだと思っていたので軽く聞き流していました。この私を許す？　そんな神がいるのかということと、悩んで眠れなかったのはあなたの問題と言われたことで、一体何のお勉強なのか知りたいと夢中になりました。

形では、家族と憧れのアメリカ滞在という夢がかなっていながら、何をやっても満足できず、楽しめない自分が嫌で、心がささくれ立っていく自分が嫌で、心が叫んだ時がありました。

誰か、何でもいいから教えて！　と。そんなタイミングでした。

夫に知らせたい、神は自分の中にいる。

あなたと同じことを言っている人がいるとワクワクしながら夫に話しました。

牧村さんは、その日、何を話したのか全然覚えていないと言っておられましたが、私にはとても端的なメッセージでした。「ついこの前先生が来てたのに」と、とても残念がっておられましたが、私には全く先生の存在は響かなく、何か、ただただワクワクしていました。

田池先生が、初めてアメリカに来られた、ひと月後に学びに出会えたのでした。

それからひと月に何回だったかは忘れましたが、午後３時頃、日本時間の朝８時頃に、牧村さん宅で田池先生との電話でのお勉強会に参加しました。

1989 年３月のホリデイインでのセミナーの前に、ワンさん宅でお勉強会があり、初めて田池先生に会いました。ビデオの先生だと違和感なくすぅっと受け入れられてよかったと思いました。

娘の帰宅時間のため、中座し車を運転しながら、底の底から訳も分らずうれしくて雄たけびを上げたのを今でも何度も思い出し、それが今に繋がっています。

プールサイドで記念写真を撮りました。

私より年配の人が多い団体の中の自分は、何か不自然で居心地が悪く感じていました。

前回、ホリデイインのプールにうれしくて飛び込んだという恐ろしい話を聞いていたのですが、ワンさん宅のプールサイドに並んだ時、前に並ばれている先輩の方々の中に居る自分がうれしくて、今日は飛び込まないのですかと聞いていました。

「今日は、ないない」と笑って返されちょっと残念でした。

セミナー前後にもう一度ワンさん宅でお勉強会があり、用意していただいた焼肉弁当を食べながら、「夫が意識を出して欲しいと言ってます」とお願いすると田池先生に「よいのか？　今夜から喧嘩になるで？」と。

その時は何を言ってるんですか、なんて思って笑っていましたが、実に深かった。正にその通り。あの日から今に至るです。

私の想像とは真逆の夫の意識で、「これはおかしい」と言われるだろうと思いましたが、帰宅してテープを聞いた夫は、真なる自分だと言い、集団自殺する団体かどうか確認しにいくと言ってホリデイインのセミナー参加することになり、田池先生に出会いました。

野添訓です。

はじめてのセミナーに、「どんなおっさんか見てやろう」と参加しました。

宗教なら、必ず矛盾（むじゅん）した事を言うはずだと、田池先生の話に集中しました。

ところが、先生の話にはまったく「矛盾」がありませんでした。

そして、今まで自分が「考えても、答えは見つからない」と思っていたことに、実に明快な回答をされました。

正に、もつれた糸がほどけるように。

初めての体験でした。

これが、最初に田池先生と出会った時の印象でした。

その後５月になって、私はいよいよ独立するために会社を辞（や）めました。

それより少し前に、近くのビジネスパークで事務所を借りました。

すでに在職中から、色んなものを日本に輸出していました。仕事は順調にスタートしたように見えました。

会社を辞めたので、VISA を更新する必要がありました。そのために、弁護士に申請用のレターや資料の集め方を教えてもらい、いよいよ、一旦日本に帰り、日本のアメリカ領事館で申請することになりました。８月に帰国して、領事館に行き申請しましたが、即刻（そっこく）却下されてしまいました。

私は、必死に食い下がり、「何か不備があれば訂正追加をする」と言いました。

しかし担当官は、「何も必要ない、私に認めるかどうかの権限があるのだ」と。

そして、会社で取得していた VISA はその場で無効のスタンプが押されました。

私は、目の前が真っ暗になりました。

弁護士は、「これで大丈夫だ」と言っていたのに、なぜ？ そんな思いが頭の中で堂々巡りしていました。

両親や兄弟たちが、一時帰国した私たち家族を温泉施設に連れていってくれました。そこで私は、とても温泉を楽しむ気持ちにはなれず、悶々（もんもん）とした気持ちでいました。そして、家内に「田池先生に相談してみよう」と言いました。

温泉から、田池先生に電話をしました。

田池先生に、「先生、どうすればいいですか？ アメリカに残るべきか、日本に帰ってくるべきか？」と尋ねました。

先生は、「奥さんと電話を代わりなさい」と言われ、家内が先生と話しました。

「この学びは、右に行け、左に行け、というような学びではないことは分かりますね」と言われたそうです。

家内は、「はい、分かります。でも、分からないんです」と言いました。

田池先生は､「誰かチャネラーの人を知っていますか?」と尋ねられました。

唯一、ロスセミナーで知り合い、電話番号をもらった、蓮沼さんという女性を挙げました。

先生が蓮沼さんに連絡をしてくださり、たまたま羽曳野市から近い温泉だったので、蓮沼さんは私の意識を受けて、それをカセットに録音して近くのバス停までバイクに乗って届けてくださいました。

内容は､「私は、せっかくアメリカに来たのに、錦の旗もなく日本に帰るわけにはいかないのです。こんなみじめな形で帰ることはできないのです」でした。

全くその通りでした。

結局、それを鮮明にしていただいたことが、かえって帰国を決断することとなりました。仕事も、それまでのような受注は減っていきました。

日本は、バブル崩壊でした。

「Japan as No.1」は、所詮は砂上の楼閣にすぎませんでした。

アメリカに戻り、弁護士は「日本は厳しすぎる、トロントに行けばもっと簡単に取得できる。8000ドルくらいで可能だ」と言いましたが、それも保証の限りではなく、もう8000ドルを投資する余力も気力もありませんでした。

思えば、4年前に「独立」を志してアメリカ永住を目的に日本を出て、向かった先がボストン。そのボストンを僅か1年半余で去ることになり、ロスへ。

ロス行を徹底的に抵抗した挙句のロス赴任。ここで、正に予定通りの田池先生との出会い。間髪を入れず、仕事と滞在の行き詰まり。

まさに、意識の流れは予定通り進行していたのです。

9月に､ホリデイインでの第2回セミナーに参加しました。

2ヶ月後には日本帰国が決まっていました。そして、2ヶ月後にロスの空港から家族全員で日本に向けて飛び立ちました。

「無念」の思いは当然あり、家族にすまない気持ちも一杯でした。

この短期間にアメリカの地で田池先生のセミナーと出会ったのは、意識の流れとは言え、自分にとっては奇蹟のような感じがします。

でも、当然スタートにも未だ立っていたとは言えませんでした。

帰国後、1991年に新しい会社に入り、アメリカ出張を自分で企画して行くことになりました。

その直前に、私の母が癌を患っていることが判明し、余命3ヶ月を宣告されていました。

私は、アメリカ出張をニューヨークのセミナーに合わせて企画しました。

6月、久々のニューヨークに降り立ちました。Lowerマンハッタンにある、シルビアレストランでのセミナーは、ひたすら母親の反省となりました。

以上が、田池先生との出会いとアメリカセミナーに関することです。

71歳を越えてきた現在、この時期にま

たこうした「アメリカセミナーと田池先生」を振り返るチャンスをいただいたのも、本当に意味があることだなぁと感じています。ありがとうございました。

野添信子です。

９月のロスセミナーの後、空港に田池先生と陽子さんを見送りに行きました。

その時、スーツを着た外人集団に出会いました。一人が私の所に来て、今から日本に行くのだと意気揚々として話しかけてきました。横におられた田池先生は、私ではなくあんたのところに行くんやなとボソリとつぶやかれました。そしてモルモン教の経典？ を田池先生に手渡そうとした時、田池先生は「結構です」と……。

それは私の語彙では伝えられない何ともスキっと爽やかに断られました。こんな爽やかな断り方は初めてだと思いました。

とても印象に残りました。ここでもまた、この学びは大丈夫だと思えたのでした。

横を見るとＷさんはその経典を手にされていました。どうしよう？ 捨てようか、ふたりで田池先生とは全く違うどよんとし

た思いでゴミ箱に入っていくのを見届けていました。

板倉さん宅でのミニセミナーの休憩時間に田池先生に言われました。

「このご夫婦、仲良く見えて、さあ、いかがでしょうね?」

「やめてください!」と先生の口を手で塞ごうとしました。

その時は本当に何も分かっていませんでした。一生涯をかけて心を見るための大事なワンポイントメッセージでした。

そして、日本に帰ってきました。

あの頃、「これから学びは、東に、ニューヨークに」と言われていたのに、私は真逆の西に向かい日本に帰国しました。そして、辛く苦しく、厳しい現象が始まりました。

私はどうしてアメリカで学びと出会うことになったのだろうと思うことはありましたが、それより、どうしてアメリカに住み続けることができず、日本なのだろうと後悔の方が先にたちました。今回、機会を頂き、改めて、向き合ってみました。

田池留吉に思いを向けてみました。

あの日、田池先生に出会えたあの日、喜びの雄たけびをあげた私が伝えます。予定通りでした。「はい」と、田池留吉と出会えた私は約束をしました。

「日本に、母の元に帰り心を見ていきます」と。待っています。

そうでした。私は肉で幸せになってみせるの思いがとても強く、貪欲、強欲です。そのエネルギーがバブル期、アメリカンドリーム、シンデレラストーリーが健在だったあの時代のアメリカに肉を運んだのでした。ただそれだけのことでした。何を自負し栄光を掲げてきたのだろう。地獄の奥底の底から必死の思いで田池留吉との出会いを果たし、肉で幸せを求めることがどれ程の苦しみであり、冷たく愚かなことであるのかを知るために、そのことを通して意識の転回をせんがために、私は日本に向かいました。

この 30 年が地獄の苦しみであったこともよかったのです。「セミナーと共にありました」と思えることがうれしいです。

「思えなかった。私は苦しい」と、周りの大切な存在にあたり、戦ってきました。

このことすら、必要で大事なことであったと思えます。

母と妹とセミナーに集えた時、田池先生が「帰ってきて良かったやろう?」とうれしそうに問いかけてくださいましたが、その時は、心はまだ NO でした。

「待っています」

待っていてくれている田池留吉と自分を感じることができます。逆行ではなく予定通り未来に向かっています。過去からの地獄の底の底の自分たち総出で向かいます。ニューヨークへ向かいます。

帰っていきます。

この機会をありがとうございました。

先祖供養から自己供養へ

第２回ロサンゼルス反省研修会も終わり、その年の夏にかかろうという頃、学びの友の依頼で、東京で旧家の墓地の供養が行われました。この頃は、先祖供養とか、亡くなった方の供養とかがまだ説かれている頃でしたが、学びが進むに伴い、すべてが「自己供養」の方向へ収斂していきます。

これまでに書いてきましたように、人生の目的はこの自己供養ということにあります。自己供養とはもちろん、造語です。自分を自分で供養する、すなわち、地獄に沈み込んで苦しみ喘いでいる自分に本当のことを伝え、ともに喜びの自分に帰っていこうとする作業です。

言うまでもなく、この作業をするには、まず自分の実態を心で知り、感じていくことから始めていかなければなりません。

自分の実態とは、自分の意識の世界ということです。そのために心を見るということを伝えてきました。心を見せてくれる教材は、あなたの周りには、たくさんたくさん用意されています。それらのものを通して、間違ってきた自分、苦しんできた自分と出会っていくのが肉を持つ時間、いわゆる肉の人生だということも伝えてきました。

そして、その間違い続け、苦しみ続けてきた自分だけが自分であるのかというとそうではなく、本当の自分がちゃんと心に存在することも伝えてきました。

本当のあなたは、その心に真のパワーを持つ喜びの存在です。限りない温もりと優しさを心から放出できる存在なのです。

それを押し止めて、そんな自分を捨て去って、無知とエゴと欲の中を生き続けて、真っ黒なエネルギーを垂（た）れ流したまま、この宇宙に存在し続けてきた、それがあなた自身の今の実態です。

そのあなた自身は、今もなお苦しみの底に沈み、彷徨（さまよ）い、救いを求めているのです。その自分を救っていく道を、ただひたすら歩いていくことが自己供養の道です。

自分を救っていくのは自分にしかできないことなのです。

だから、それをしていくために私達は今、肉という形を持っているのです。しかし、私達は肉を持ってくる、つまり、生まれてくる本当の意味が分からないまま、知らないまま成長していき、肉を楽しませ、喜ばせるという肉の喜びと幸せのみを求めていく人生を繰（く）り返していきます。

その結果が今、自分に返っているだけのことです。もちろん、今世だけの結果ではなく、遥（はる）か遠い過去よりの結果が、あなたの心の中に、真っ黒に凝（こ）り固まったヘドロのような思いとなって、蓄積（ちくせき）されています。そのひとつひとつを、どうぞ、あなたの心の中から解（と）き放（はな）してください、温もりへ喜びへ返してください、というのが自己供養です。

（『意識の流れ』より）

There is an unfamiliar word "self-salvation" here. As I have written up until now, the purpose of our life is self-salvation. "Self-salvation" is a "coined" word, of course. It is to save your own self, to convey truth to yourself who has been suffering and sunk into hell, and to work on returning back to the joy altogether.

Needless to say, that in order to do this work, you have to know and feel the state of your heart first. The state of your heart means, world of your own consciousness. That is the reason I am telling you about reflecting on your heart. There are so many teaching materials to reflect your heart around you. I have conveyed also that your life with the physical body is to realize why you suffered or what is your wrong-doing through these helpful materials. And also, I am conveying that there is your true Self that exists beside the you who has been suffering and doing wrong.

Your true Self is joy and has true power in your heart. You are an existence who can spread unlimited warmth and gentleness from your heart. You have been stopping and throwing that part of yourself away. At present, your substance is letting out dark energy and has existed with ignorance, egoism, and greed in the Universe. Even now, that part of you has existed in the bottom of agony and wondering and searching for help within yourself. To continue helping yourself is the way of self-salvation.

You are the only one who can save yourself. That is why we have our physical body now. But, when we have our physical body, we repeat to seek only physical happiness and joy to satisfy physical pleasure without knowing the true meaning of being born. The result of your choice has returned to you now, that is all. Not only this lifetime's choice, but also the result from past lives that accumulated in your heart as thoughts of solid black coagulated sludge. Please set each one free, one at a time, from your heart, to the joy and warmth, which is self-salvation.

(**"The Flow of Consciousness"**)

◇ 葬送儀礼と向き合った人たちの声 ◇

人間の本質が「心」であることを知らずに死んだ方は今も肉体がなくなったことに気付いていません。なぜなら「思い」はそのまま生き続けているのです。供養とはその方に真実を伝えることです。お経を読んだり、戒名を付けたり、お墓を造ることではありません。真実とは肉体がなくなったこと、そして、人間の本質は「意識」であることを話すのです。意識の世界は嘘がつけません。死んだら終わりだと思っている人が、いくら死んだ人に、肉体はなくなったと話しても通じないのです。供養は、まずあなた自身が自分の本質に気付き「意識の世界」に目覚めることです。

「意識の世界」に目覚めたなら、愛が流れるのです。その温かい愛の思いは迷っている魂に気付きを与えます。つまり「供養」とは言葉ではなく、愛を流すことなのです。

当時、この学びで説かれていた「死者の供養」とか、「先祖供養」とかは、おおよそ、こういうことであったと思います。「葬式をしてはいけない」「葬式に出てはいけない」という学びではないのですが、この学びに真剣に向かい合った人たちは、ここで家族や知人の葬儀に対し、どう対処するかという問題に突き当たりました。

◎大塚長衛さんの場合

1月23日からのチャネリング講習会に出席の予定の所、当日の朝6時に伝言があり、「○○さんが今朝3時に亡くなりましたので、お手伝いに来てほしい」とのこと……お付き合いだから仕方がない、セミナー欠席の連絡をとり、2日目の夜、セミナーに出席しました。

いろいろ心が動きましたが、よし、どのくらいできるか、自分なりにそれらを教材にして自分の心を見てみよう……仕事をしてみようと思ったとき、心から何か温もりが出てくる感じでした。

まず亡くなった方に（5〜6時間経過）……もう一人のあなたが存在するでしょう。右手なり、左手なりつねってみてください。あなた、肉を離れた……帰ってみましょう、母親に思いを向けてみましょう。温もりを探してみてください。この場で一緒に私もそうします……歌手の森進一さんが歌った、「おふくろさん」で号泣したときの思いがよみがえってきました。

○○さん、如何ですか……微かに光なり明るさを見つけましたか。微かにでも見つけたら、ともに、その思いを忘れないで少しでも広げていくようにしていきましょう……というような……とは言えないが、その状態を持続していけるような自分に気が付くと……それは喜びであり、感謝であるような状態が、比較的長く続いたようでした。

習慣になされている、いろいろな儀式のための手順に基づく作業を手伝いながら、時々、私の感じた温もり等を再現できるかと吟味してみると、それなりに続くような感じでした。こういうとき（葬儀の準備）には、割合に一服の時間が多いので、その合い間にふっと、心を神に合わせる、お母さんを思うということをやってみると、これはなんだ、結構いけるじゃないかと

……悪い癖が出てくるのかと……また心を見てみるというようなことを繰り返していました。

そうこうしているうちに、読経が始まるというようなときには、まあ、いいじゃないか、自分なりに瞑想をやってみようと思ってやっているうちに、段々心が広がっていくというのか……すべてを受け入れましょう、すべてが愛しいというのか、包み込むような心になった状態でした。よく田池先生がおっしゃる「神と自分」とは、こんなことを言うのかなあと思ったりしていました。

さかのぼって1月16日の夜の10時頃でしょうか。帰宅して、ふっと空を見上げたら、月は三日月だったか、星空が異様に冴えわたっている感じで、いつもとは違うなあと思いながら床につきました。夢の中でしょうか、何か問答をやっている感じで、そのうちに「弥陀の誓願不思議」ってなあに……というようなことから、私がにやっと笑って神の愛、温もり、光等をそのようにとらえていたの……？ と、やっているうちに以心伝心というのか、分かったというような感じで眠ったと思います。

時間がどれくらい経ったか分かりませんが、地震ということになりました。気が付いてどうするかと、心を見たのか、苦しくはない……神に心を向けたのかどうか、そのまま起きずに少なくとも心は喜びに満たされていたような気がします。

家族は外に飛び出したようですが、その後、テレビで阪神淡路大震災の発生を知らされました。（後略）

以下の２件の事例は、編者がかつて「葬式革命」という出版物のために、心の学びをする友人２名に協力を依頼し取材させてただいたものです。

この学びをする方が、葬儀や供養ということを、どうとらえていたかがよくわかりますので転載させていただきました。

◎滋賀県長浜の宇野敏一さんの場合

宇野さんは、４年前にお父さんを亡くされました。宇野さんは知り合いの葬儀店に連絡を取り、会場だけを貸してほしい旨を連絡し、家族だけで送ろうとしましたが、お父さんがこの地域で指導的な立場にあったため、役場から情報が流れ、県会議員をはじめ市長や多くの名士が参列する大がかりな葬儀となってしまいました。

ただ参列者の多くが驚いたのは、そこには読経をあげる僧侶も存在せず、焼香もなく、線香の一本さえもあがっていなかったことです。

ところで、この地区は因習や地縁関係が根深く残っているところであり、しかも宇野さんもお父さんも、この地区の指導的な立場にあり、檀那寺とも親しく、代々、檀家としても代表的な立場にあったといいます。お寺との関係ばかりでなく、この地区では行事といえば神事を指すほど、神社や氏神との関わりも強く、氏子としての役割も強かったといいます。

話は前後しますが、こんな環境の中、宇野さんのお父さんが直腸ガンの手術で入院することとなりました。ところが開腹してみると思ったより状態がひどく、このまま手術を続ければ、老齢ということもあり生命の保証もできない。手術を中止するか、このまま続けるか、５分以内に回答をほしいということになったのです。立ち会っていた宇野さん、相談する相手もなくすべての判断が自分にかかっているという状況に追いつめられてしまった。しかもゆっくり考える時間などない、５分以内に答えを出さなければならない。

この頃、宇野さんは「人間の意識」ということについて学んでおり、本当に伝わるのは、「言葉」や「態度」でなくその人の「思い」だということを教えられていた。口で「あなたはいい人だ」と言っても、心で「この野郎！」と思っていれば、「この野郎！」という思いがエネルギーとして働く。その場はだませても、このエネルギーが働くため、結局はうまくいかないし、相手も表面上はだませても、実は本人が気づかないだけで本音が伝わっているのだと……。要は、自分が変わらないかぎり、いくら宗教に頼っても自分も人も決して救われることがないということを分かり始めた頃であった。

思いあまった宇野さん、このことを思いだし、「意識は伝わるんだ」と自分に言い聞かせ、必死の思いでお父さんの心の中に話しかけた。

「親父、どうしたらいい。手術を続けるほうがいいのか？ 中止したほうがいいのか?」

そのとき、宇野さんの心の中に「手術を続けてくれ」というお父さんの思いがハッキリと響いてきたという。宇野さん、半信半疑ながらも、その思いを信じ、医師に「手術を続けてほしい」旨を意思表示した。

やがて手術も無事終わって、お父さんの意識が回復したとき、

「不思議な体験をしたよ。おまえが俺に手術をするべきかどうか話しかけてくるんだ。」

宇野さんは声に出して話しかけたわけでもないし、しかもお父さんは麻酔をかけられて手術室に入っていた。このことを話すと、「おまえが常々言っていたのはこういうことだったのか、おまえのやってる学びはほんものだ」と、あっさり脱帽したというのだ。

これからが、このお父さんの偉いところだ。病状がある程度快復すると、宇野さんと二人して檀那寺へと挨拶に出かけた。

「息子が常々、人は意識だと言っている。俺も病院で不思議な体験をし納得した。人は己の心を見つめ己自身が変わっていかないかぎり、寺に頼っても、経文に頼っても人は成仏することはできないことを知った。分かった以上、寺の檀家であることはやめたいと思う。理解してほしい。こんな訳だから、葬儀のときも、あんたが僧侶として出席することは控えてもらいたい。俺との長年の付き合いで顔を出してくれるというのであれば、背広にネクタイで出席してほしい。袈裟や数珠などは不要である。」

二人は、この後「長年、お世話になった」と礼を述べると、寺を後にした。

この後一年して、お父さんは亡くなった。肺気腫やその他の病気を併発しボロボロの状態であったという。死を悟られたのか、死ぬ一週間前、咳き込みながらも十分近く、自分の最後の思いをテープレコーダーに録音された。

「自分はこれまで自分の信じたことをやってきたが、その結果が果たして良かったのか、今、疑問に思っている。本当のことに早く気づけたのに、それをないがしろにし、今まできてしまい、人生を無駄にしてしまったことを後悔している……」

宇野さんの奥さんが、たまたま録音されているその姿を目撃されたが、録音し終えると、しばらくはその場で泣いておられたという。

やがて宇野さんのお父さんは亡くなり、今回の葬儀となった。

集まった人たちは、僧侶もおらず、焼香もなく、線香の一本もあがっていない葬儀会場に面食らったが、静かに童謡の流れる会場に、やがて録音された最後のメッセージが流れはじめた。

咳き込み、時に涙ぐみながら語る故人の声に感動しない人はなかった。

集まった人たちは、葬儀が終わると、「葬儀もこれからは変わっていきますなぁ」「重苦しい読経よりさわやかでよかったですよ」「本当に気持ちのいい葬式でしたなぁ」と口々に語られていた。

その弔問客の中に、檀那寺の住職も背広姿で参列していたという。

この話にはまだ続きがある。この地域ではありえない、この一風変わった葬儀の後、非難の声が起こると思いきや、追随する人が出てきたのだ。この地縁関係の結びつきの深い地域でも、確実に因習に縛られたくないという思いが広がっており、宇野さんの行動に触発される人が今も続いているという。

ところで、この葬儀にかかった費用、お父さんの立場上、密葬にできなかったこともあってかなりな出費になってしまった。それでも80万円程度であったという。

以下に掲載するのは、宇野さんのお父さんがテープレコーダーに残されたという最後のメッセージである。息子さんの許可を得てここに掲載させていただくことにした。

本日は私のお別れの会に当たり、皆様方にはご多忙中わざわざお出でいただき本当にありがたく、はなはだ高席からではありますが、あつくあつく御礼を申し上げます。

私の生前中は、皆様方には一方ならぬお世話になり、これに対するご恩返しもできずに人生を終わっていくことを、ひたすら残念に存じております。何とぞお許しをいただきたいと存じます。

私の人生80年を振り返りますと、いったい私は80年間なにをしてきたんだろうと自問自答するとき、やってきたことすべてが幻であったとしか言いようがございません。80年と申しますと、日数にして2

万9200日、時間にして70万800時間、億という数字から見ますれば、本当に瞬きしている間、ほんの瞬間に過ぎ去ったと思います。時計の針の一秒一秒の積み重ねが80年間で25億2288万秒となりますが、その一秒一秒の大切さを、今更（声が詰まる）、「死」を直前にして知らされました。

1年は8万7600時間です。どうか、皆様、おのおのの年齢から割り出し、残りの時間を大切に悔いの残らぬよう、ご活躍あらんことを願うものでございます。

私は60歳を過ぎてから、人生が本当に幸せな一日一日が送れたのではないかと思います。

家庭においては、子供らに親らしいことは何もしてやれなかったのに、本当にみんなが「爺ちゃん、体の調子はどうや」と言って体をさすったり、また「栄養をとらなあかん」と言って嫁が料理をつくってくれたり、兄弟みんな日曜日に寄って、部屋の掃除をしたり、本当に至れり尽くせりに面倒を見てくれ、私ほど幸せ者はなかったと、一人、部屋から子供らのほうを向いて手を合わせておりました。

なお老人会の皆様には、ゲートボールをはじめ、旅行、ぼちぼち広場、忘年会、新年会と、老人同士で語らい、忘れることのできない老後生活をさせていただいたことに対し、お礼と感謝を申し上げます。今後はお体をお厭いになり、楽しい老後の人生をお過ごしになることをお祈り申し上げます。

いろいろと申し上げたいことは多々ございますが、言い尽くすことはできません。

最後に、本当にお集まりいただきました皆様方の、本日お集まりいただきました皆様方のご健康とご多幸をお祈り申し上げつつ、お礼の言葉と最後のお別れの言葉に換えさせていただきます。どうも、ありがとうございました。それでは皆さん、さようなら、さようなら、皆さんの健康を祈ってます。さようなら、（泣きながら）どうかお幸せに、さようなら。さようなら……。

◎大阪府・津野博さんの場合

津野さんは、二度の喪主体験をされました。最初はお母さんの時、二度目はお父さんの時だといいます。

もともと実家が神道であり、祝い事はおろか葬儀に至るまですべて神道で行ってきたそうです。大阪へ引っ越しされてからも、お母さんの葬儀の時は神道で行いました。

編者自身モノ知らずで、今まで神道の葬儀があるということを知らなかったものですから、好奇心も手伝って、神道での葬式がどういうものか訊いてみました。

仏式では霊前での焼香が必ずありますが、神道のお葬式では焼香は行わないといいます。神式のお通夜・葬儀・法事では玉串奉奠といって、玉串と呼ばれる葉のついた枝を神前に供えるというのです。

まず両手で玉串を受け取り、根元が向こうを向くよう時計回りに持ち替えてまわし、お供えをします。次に二度、頭を下げ、音を立てないようにやはり二度柏手を

打ち、最後にもう一度、頭を下げるのです。
ただ大阪では、神主さんに頼むとき、結婚式や誕生などの祝い事は歓迎されますが、葬儀の依頼は結構いやがられたといいます。
二度目のお父さんのときは、最初と事情が違っていました。この間、津野さんは、田池先生との出会いから真剣に人生を考える機会を持つようになりました。「苦しいときの神頼み」という言葉がありますが、真剣に自分自身を見ようとしたとき、苦しみの原因がどこにあるかも見ようとせず、ただ何かに頼ろう、すがろう、うまくいかないときは世間が悪い、周りが悪いと犯人探しをしてきた、そんな自分に嫌気(いやけ)がさしたというのです。そうなると儀式という形だけが残った宗教にも嫌気がさしてきました。と同時に、そんな宗教に向けてきた自分の心にも嫌気がさしたといいます。自分を変えようとすることなく、何とか自分に都合の悪いことだけを、祈って、すがって、なくしてもらおうとする。そんな自分の心を変えたいと思ったというのです。
そう思った津野さん、早速、町内会にも断りを入れ、一切の宗教的行事に関わり合いたくないと宣言されました。大阪でも都市部はいいのですが、田舎へ行くとまだまだ閉鎖的で、こんなことを言い出した日には、周りがどんな目で見るか分かったものではありません。どんなにか勇気がいっただろうと思いますが、意外と周りはすんなりと受け入れてくれたようです。
と言いますのは、津野さんを取材するとき、お住まいが分からず、付近の方に「津野さんのおうちを教えてください」と道を訊いたのですが、「ああ津野さんの家なら……」と、親切に親しみを込めて教えていただきました。とても周りから白い目で見られている、そんな雰囲気ではなかったのです。
そんなわけで、お父さんの時は、神主さんも、お坊さんも呼ばず、互助会に頼んで家族だけで送ることになったと言います。
お父さんの場合、急であった。長い闘病生活の末に病院で亡くなったというのでなく、自宅で、ある朝、起きてみたら亡くなっていたという。全くの急死でした。
早朝のため、主治医とも連絡が取れず、とりあえず119番に連絡し救急車がかけつけることとなりました。
救急車からは、人工呼吸するよう指示が出ます。津野さん、「死んでいるのになぁ」と思いながらも電話からの指示通り、お父さんの口に息を吹き込み人工呼吸を行いました。
やがて救急車が到着し、しばらくして警察も到着しました。119番に連絡したとき、消防から警察へも連絡が行くのだそうです。津野さんの場合は、この後、かかりつけの医師とも連絡が取れ、医師が警察に事情を説明したうえで死亡診断書を発行してもらい一件落着となりましたが、普段から健康でかかりつけの医師もなく、急死ということになると、たとえ老衰死であっても、警察医による検屍・解剖ということにもなりかねません。

津野さんは、お父さんが普段から「葬儀に要らぬ金は使わず、身内だけで送ってほしい」と言っていたこともあり、ご本人の宗教的な葬儀はしたくないという思いもあって、互助会に連絡を取り、僧侶も葬儀も必要がないことを意思表示されました。

お母さんの葬儀の時、納棺に際してちょっとしたハプニングが起こりました。納棺に当たって、普段、お母さんの訪問看護をしてくれていた方が「死に化粧」を施してくれ、やさしいいい顔になったとみんなで喜んでいたが、業者の方が、料金の内だと思ったのかどうか、その上からまた「死に化粧」を施してしまったというのです。

結果、やさしい顔が怒ったような顔になってしまったそうです。

これに懲り、お父さんのときは、特に「死に化粧」もすることはなく、納棺した後は、互助会のホールに移送し身内だけで通夜をすることになりました。

翌朝、斎場に移して火葬に付しましたが、このときは朝一番だったせいか静かで落ち着いて送ることができたといいます。というのも、最初のお母さんのときは、午後からの火葬となり、数が多く火葬も競争状態となりました。各宗派の僧侶や宗教者が、それぞれのお経や祈りを、他に負けまいと大声を上げて競い合うものですから、静かで落ち着いた雰囲気などほど遠く、ただうるさくて慌ただしいだけのものとなってしまったといいます。

こうなると、お経はありがたいというより、うるさいだけの騒音でしかないでしょう。

それはさておき、家族だけの葬送、全部で18万円だったといいます。

入棺体験用にアマゾンで購入した「折りたたみ式棺桶」。 今はUTAブックの応接室に飾っていますが、編者の死後は利用してもらおうと思っています。

1989年7月 初の韓国セミナー

7月17日（月）金浦空港着　18日〜19日（学習会）　7月20日（木）大阪・東京着

神理をまなぶ会韓国ツアー　1989年7月17日〜20日 ソウル・ホテルロッテ
大阪空港38名、成田空港17名、計55名が日本から参加

学びの仲間の皆さんに次の 4 項目についてアンケートをお願いしました。

「1. 田池先生に出会われたのはいつ?」、「2. この学びに集われた動機は?」、「3. 田池先生(この学び)に出会う前の自分の人生について」、「4. 田池先生(この学び)に出会って何が変わりましたか?」

1989 年(平成元年)頃に出会われた浜部英美子さん

1	30 年前この学びをやっている方が犬を飼われるに当たり、その前に田池先生に見せて欲しいと頼まれ、丁度その折に京都の堀川会館でセミナーがあり、その会場で、お会いしました。その時に、田池先生が一言「あなたのお名前は?」だけでした。 このころの私は、学びの存在を知ってはいましたが全然関心がありませんでした。 唯、犬を飼う方から、この学びで、チャネラーが出された意識、これを印刷された紙をホッチキスで止めるお手伝いを頼まれて、これを淡々としていました。
2	この犬を飼われた方に良く思われたいという不純な思いです。
3	幼少の頃より、目に見えない世界が自分の中にある? という思いが、漠然として存在していました。「8 歳のころ、川で、それも急流の中で、九死に一生を得る体験をした後から……」この学びに出会うまで、不思議な事、理屈にあわない事、常識にあわない事を沢山体験してきていたので、この学びの話を聞いても、飛びつく思いは出てきませんでしたが、唯、唯、素直に頷く、聞く自分がありました。
4	よう、やっと、この学びに繋がり、学び始めました。この時、ものすごく嬉しい!! という思いが噴き出してきたのを昨日の出来事のように覚えています。絶対忘れることありません。真実の世界の事を伝えて下さり 60 年前の出来事「命、人間形成?」が実証され、確認し、確信するも、己偉い、聳え立つエネルギーの思いが噴出してき、「こんな学び、してられるかあっ!」と……。ここに意識即現象、現象即意識です。リュウマチです。肉体細胞の愛、愛です。嬉しかったです。これも昨日の出来事のように思います。ここから今に至ります。千載一遇のチャンスを無駄にせず、この道一本、歩んで参ります。有難うございました。有難うしかありません。

1989 年(平成元年)頃に出会われた森岡茂子さん

1	30 年位前の事ですが、橋本に研修センターがあった頃、セミナーのビデオを鑑賞する会がありました。友達と一緒にセンターに向かうため、橋本駅の改札を出た時に田池先生に偶然おあいしたのが初めてだったと記憶しています。 初めて会った人なのに懐かしい様な嬉しい様な気持ちになったのが、不思議だなと思った事を覚えています。
2	夫の父が肺がんになりなんとか治って欲しいという欲の思いで学び始めました。義父の病院に毎日の様に通っていましたら、肺がんが完治して、義父の主治医も驚いていました。義父が完治したことで、この学びを真剣にやっていこうと思いました。
3	この学びに出会う前は、肉体の環境が全て整っている事が、幸福な事だと思っていました。幸福になるために、肉体細胞の事など何も考えず、頑張っていく事が良いことだと思っていました。
4	幸福にして欲しい、幸せになりたいと思い、肉の幸せを求めました。その思いが苦しく、間違っていた事に気付きました。 この学び、田池先生に出会えて本当に良かったと思っています。

1989 年(平成元年)頃に出会われた市川明子さん

1	30 年ほど前の、熱海の南明ホテルで行われたセミナーでお会いしたのが初めてだったのではないかと思います。

2	夫婦の関係で悩んでいた。
3	幸せになるために一生懸命でした。とにかく一生懸命でした。結婚をし、幸せな家庭を築きたかった。それが幸せだと思っていた。優しくて、立派で素晴らしい夫、子供、舅姑、みんなが愛し合い、助け合いながら、そんな絆の深い家庭を築きたかった。そして地位も名誉も財産もと、もっともっともっとと求め、そしてそれらがいつまでも続いていくようにと他力・他力・他力・これさえしていれば大丈夫と思っていました。 しかし、努力は報われませんでした。全く自分の思い通りとはいきませんでした。私が幸せになれないのは夫のせいだと、夫を責め裁き、何とか夫を自分の思い通りにできるようにともっともっともっと強力な他力はないかと探し求めました。そんな時にこの学びに出会いました。
4	学びに出会い、長い長い本当に長い時間掛かりましたが、自分が求めてきたものが間違っていたことに気付きました。自分を肉と信じ、肉の幸せと喜びを求めていくことがどれほどの苦しみを作り上げていくことだったのか、そしてそれがどれほどのブラックを流し続けていたことか、自分が向いている方向が全く違っていたことを教えていただき、今はその方向を変えていくことに、この肉の時間を活用していくという本来の人生の目的に出会い、とても難しく大変な道やけれど、以前のような虚しさ、そして人を責めたり裁いたりという苦しい思いが激減し、自分自身がとても楽になりました。

1989 年（平成元年）3 月に出会われた野添信子さん

1	第 2 回ロサンゼルスセミナーの前々日 ワンさん宅。田池先生に出会った帰りの車の中でうわぁーと、熱く心が叫びました。今でも忘れません。未だ愚か過ぎる肉を今もその内なる自分が先導してくれていると思っています。
2	知人との些細な事でよく眠れなかったと愚痴った私に「眠れなかったのはあなたの問題」と一言くれたのがその日初めて出会った学びの友でした。何これ?こんな井戸端会議初めて！ こんなにスッキリした納得出来たアドバイスは生まれて初めてでした。何なんですか？ 何をすれば良いのですか？ 知りたい！ 教えてと夢中になりました。即、その夜夫に伝えました。第 1 回ロサンゼルスセミナーのひと月後だったそうです。 今思うとひと月遅れではあったけれど、よくぞ感じて繋がってくれたと安堵の思いと感謝の思いでいっぱいです。
3	・人生の目標 計画：絶対に幸せになる。 ・どうなれば幸せだと思っていたか：信頼出来る愛し愛される家族とお金に恵まれ、豊かに暮らす。根無し草ではなく大地にしっかり根を張りアメリカン・ドリームを手に入れる。 ・その為の努力：私はその為のアンテナを張り環境を整える。夫と子供の才能に私のパワーを注入して手に入れる。 ・その努力は報われましたか？：全く報われなかった。形は手に届きかけていたのに私の心は今幸せでしょうと何度言い聞かせても何一つ満足が出来ず出来ない自分をコントロールしたかった。何をどうすれば良いのか？ 誰か何でも良いから何か教えてーと叫んだ。そして間も無くこの学びを伝えてもらった。 ・挫折？失敗？：肉に幸せはないと知った事でアメリカで手に入れそうになってた物は田池先生との出会いから家族以外は失ったけれど……挫折感、失敗の意識は無いです。ないなぁ。
4	幸せを追い求める道は失う恐怖とあーすればこーすれば良かったのにと選択の後悔と愚痴ばかりの守る、闘いと怒りのエネルギーのみに翻弄される自分でしかなかった。そのどうしょうもない私が気づくと……挫折感も無く。失敗とも思ってない。 末路は哀れの形が見え隠れする今世終盤に入りながらも、ひとつひとつが自分に用意してきた意識の転回、本当の自分に出会う為の必死な大事な今と力強く思い直せる自分がいます。まだまだ出てくる愚かな心の叫びにもふっと共に共に。帰ろうと語れる自分がいます。 肉でも唯一無二の真実に辿り着けた。これほどの安堵はありません。辿り着かせた自分を裏切ることなく繋いでいこうと力強く思える今の私がいます。

1989 年（平成元年）頃に出会われた緒方和子さん

1	初めて会ったのは平成元年（家族の件で）。学びは平成 2 年から正式に。
2	父の末期癌。
3	とにかく必死でした。虚しさ悲しさ、何をしても満たされなかった。一応外目には認められた風に見えたかも知れません。でも外見とは裏腹に、自分が必死に成れば成るほど私の中の虚しさは膨らみました。
4	田池先生の講話はこれ迄の自分の価値観と真逆なのでサッパリ理解出来なかった。でもとにかく理屈抜きに田池先生のセミナーに集いたい、話を聞きたい、一回たりとも欠席したくない。それ程田池先生のセミナーは私の心を掴みました。セミナーとなると嬉しくて形振り構わず参加しました。それまでに味わったことの無い嬉しさでした。これまで間違って間違って生きてきた。その気付きや修正が如何に困難か痛感しています。でもそれはこれ迄のような虚しさで無く、嬉しくて有難い思いでいます。

1990 年（平成 2 年）に出会われた河副弥栄子さん

1	1990 年八尾です。 初めての宿泊セミナーは道後温泉でのセミナーです。その時、チャネリングをしていただきました。壇上から降りる私の後ろ姿に、先生は「ああもした、こうもしたと自分を責めなくていいんですよ。もう、許されているんですから、そういう自分を許していくんですよ」と言われました。この人、私の苦しみを分かってくれてはる、張りつめていた心に、初めて受け入れられている喜びで涙があふれ出ました。その時ここしかないと思いました。
2	幸せになるためにパワーを求めました。
3	嫁姑の確執など、真面目に努力し頑張っても何一つ報われませんでした。 なにが、どうしたらと常に思っていました。 形を整える事に一生懸命でした。
4	子供の頃から、「こんなつまらん私、なぜ生まれてきたのか」とず〜っと疑問でした。 形を整えても心の中は吐き出せない思いが一杯積りに積もっていました。する事と心の中の違いに自分を責めてきました。 この学びで隠さなくていい闇だしが始まりました。うれしかった。どんどん出る凄まじいエネルギーを出す度、先生は「皆さんもご同様ですよ、其れでいいよ」と凄まじいエネルギーと共に暴れ狂う私に、やさしくそう言ってくださいました。 涙と鼻水トイレに駆け込んでの闇だしでした。供養なんて程遠かったけれど出せることがうれしかったです。こんなに自由になれる場所はありませんでした。 私は間違ったことはしていない、一生懸命生きてきたと思ってきたけれど、そのエネルギーはこれだったのかと自分の凄まじさに驚きました。 いくら幸せを願っても叶うはずはないと、今までの人生の結果に納得しました。 心は外にばかり向いていたけれど、中に中に向けようと思えること、内なる田池留吉に針を合わせようと思えること、荒れ狂う愛しい自分と共に２５０年に向かおうとしていること、ありがとう、ありがとうだけです。

1990 年（平成 2 年）に出会われた三ツ矢千代子さん

1	平成２年。 主人に今まで、色んな事やってきたけど、これが本当だと思うと、主人に誘われ八尾センターに連れて行ってもらった。そこで田池先生にお会いしました。 （長男のことで悩んでいた時、本屋さんで桐生敏明著『光のなかへ』の本を見つけ、さっそくセミナーに参加した後誘ってくれました）

2	長男が閉じこもってしまいました。どうにかして世間一般の人のようになってほしいと思いました。 何も言わなくなった長男の意識をチャネラーが出してくれました。その内容が私が思っていた通りだった。この場は何という場所だとびっくりしました。 意識が聞けた事だった。
3	父母が立派でなく、心を小さくしていました。（今思うと大事にしっかりと愛情をもって何不自由なく育ててくれていました） 認めてもらいたいと思って、見下げられたくなくて、それにはお金や身分が一番と思い、金金の人生、もっともっとの欲いっぱいの人生を送ってきました。 子供たちにも認めてもらうためには肉的に立派にならなくてはと勉強をしなさいと育ててきました。 一生懸命に祈れば必ず神は助けてくださると神の存在をなんとなく信じていました。私は誰に誘われたわけでないのに自分一人で何かに向かって拝んでいました。 子供に閉じ籠りの現象が出て、それからはいいといわれるありとあらゆる神さん参りが始まりました。ある時お金も沢山要求された所に通っていた時長男の状態がだんだんと悪くなってきた。その時におかしいと、こんなことをしてたら……。 田池先生に、「この学びに出会ってなかったらあんたたちは全部お金を使ってしまっただろう」と。
4	ありとあらゆる神さんにお金をささげても何一つ良くならないとき、田池先生に巡り合い、これしかないと思いました。しかし真剣に学びをしてと思っていても、肉が強い、他力の思いが強い私は何一つ変わってないかもしれないが、本当の学びに出会ってうれしいです。人生も軽く生きられています。生きる道があること。 よかったです。

1990 年（平成 2 年）5 月に出会われた三ツ矢照雄さん

1	平成 2 年 5 月頃、熱海のニュー富士屋ホテルのセミナーで。
2	子供が家に閉じこもっていたので、それをどうにかしたかったから。 『光のなかへ』の本を読んで、田池先生の話を聞きたいと思って、電話すると、熱海でセミナーがある、田池先生がもうじき亡くなるかもしれない、と聞いて、それでは是非そのセミナーに参加したいと思いました。（あとで、「もうじき亡くなるかもしれない」というのは、何かのチャネリングで出てきただけだと聞きました。）
3	子供のことを思うと、どうすればいいのか、よく分からなかった。自分は、何か、生き方が間違ってきたのではないか、と思っていました。 自分はどう生きていくべきなのか、本当は何を目指して生きていくべきなのか、模索していたが、よく分からなかった。
4	最初のセミナーの講話のあと、同室の人（井上英哲さん）と風呂へ行くと、先生が一人で入っておられて、同室の人が、自分は何度も話をしてもらっているので、あなたは先生に何でも聞いて話をしてもらったらいいよ、と言ってくれたので、勇気を出して先生に話しかけました。すると、先生は、自分の思っていたの（教祖）とはまるで違って、少しも偉ぶることなく、私達と同じ目線で、いろんな子供と親の事例を上げながら、とつとつと話をしてくれました。これこそ本当の学びだと思い、家へ帰って妻に話すと、妻も、それなら私も行きたいと言って、次からずっと一緒にセミナーに参加してきました。ただ、意識の転回、本当の瞑想の段階には至っていません。本当に難しい学びだと思いますが、覚悟を決めてやっていくほかありません。 この学びに出会ってどう変わったかというと、私は、本当に人生で自分の目指すべきものが分かったように思っています。

1990 年（平成 2 年）頃に出会われた春山隆恵さん

1	34 歳のころ、今からほぼ２９年前です。
2	今世は普通の家庭で、幸せだったけれど、結婚しても形は何不自由なかったけれど、寂しく空しかった。そして原因不明の病気にもなって、その理由が知りたいけれど、宗教は違うと思っていて、知人に勧められて集ってみた。

3	きっと敏感で、周りの人の心ばかりを推し量っていたと思う。恐怖、不安、不信、空しく、間違うことが怖くて、自分を縛り続け、形の世界にどっぷりと生きてきた挙句、病気になった。その原因をどうしても結婚したからと、自分も相手も責めていた。悲しく暗かった。その分虚勢を張り、形を整えることに明け暮れていた。けれど、こんな自分がこのままでいいわけがないとずっと思っていて、しばらくして学びに誘われた。
4	自分が真っ黒だと思えなかった。己が偉いことも、間違っていることも、肉の自分がふんぞり返っていたことを認められなかった。そのことが苦しいとは思えなかった。自分中心、心が外に向くと苦しいと感じ始めた。けれど、ほんの少しでも、間違っていたのは自分だと、それがどれほどの時間間違い続けていたかという事に思いをはせることが、ほんの少しできる今がどんなに幸せかと、そう心底思えること。

1990 年（平成 2 年）頃に出会われた安江幸代さん

1	１９９０年ごろ
2	子供の問題
3	一言で言うならば、絶望の靴を履いて歩いていた人生だった。親を恨み、環境を呪い、自分自身を殺しながらの苦しくて辛いばかりの日々を過ごしていた。 自分に自信もなければ信じるものもない。裏切る人間ばかりに出会っていると思っていた。幸せになろうとかなりたいとか、そんな考えもなくだから努力もせず最初から自分を捨てていた。自分では死ねないけれど早く死んでしまいたいと思っていた。運命、宿命と思い込み、がんじがらめで惰性で生きてきた。
4	田池先生の講話に心惹かれ共鳴するものを感じた。「人間は意識だ」と教えてもらってから直ぐには信じられなかったけれど頷けることばかりで、絶望の人生が実はそうではなく自分の思い次第で変われるということが大きな方向転換となった。また本当の幸せは肉では得られない、これが幼い頃から絶望しかなかった私にとって一番感動したことだった。初めて幸せになりたいと思った。きっとなれるとも思った。死ぬことばかり考えてきたけれど、生きていこう、と思えたことが奇跡だった。 肉は色々ある、これからも勿論ある、でも怖くない。楽に生きていく術を教わったから安心している。田池先生と出会う前は絶望しかなかったのに、今は未来がある。もっと先もあることが信じられる。幸せ者だと心から思えるようになった。

1990 年（平成 2 年）頃に出会われた金銅優子さん

1	40 歳ごろ
2	肉的には何も悩みもなかったけど、心に空しさを感じていました。 そんな時マコちゃん家で、田池先生がお話をされると誘われて行ったのが最初でした。多分「愛」について話されたと記憶しています。 その時自分の中から「私が求めていたのはこれだった」とはっきりと聞こえ、このお勉強したいと思いました。
3	20 歳位の時自分の運命て決まっているのだろうか、又人間て、どんな生き方をすればいいのか等を本を読んだりして模索していて、その内結婚、出産、子育てに忙しく商売もしていたのであっという間に時間が過ぎ去った感じでした。そしてほっと一息付けた時自分の中の空しさに気づき始めました。
4	人生の目的、自分は何のため生まれてきたのか、知ったので自分の生き方が定まったと、物事のとらえ方が、少しずつ意識として見れるようになったと思います。 気持も楽になったし囚われが少しずつですが薄れてきたように思う。嬉しいです。

1990 年（平成 2 年）に出会われた白木敏子さん

1	平田さんが大垣の菊水という旅館へ田池先生をお招きし、講話をして頂いた時。平成 2 年。

2	育児休暇中にエホバの証人を説く人が自宅を訪ね、動物と共存する世界の絵を見せてくれた。その世界を心につかんだが、この世に宗教が沢山ある。本当にこれを信じていいのか迷っていた時、平田さんにエルランティの光の本を頂きこの学びに参加していった。
3	仕事をして、お金を稼ぎ、子供を立派に育てる事が幸せの道だと思っていた。 この学びに出会い、これだと思い２人目出産で仕事を辞めたが、年２回程の参加が続く。なかなか意識の転回は進まず、そんな中、子供にお金が必要になり、最終的に保育士の仕事に戻る。46 歳で子供をおんぶ、抱っこの仕事で年数を重ねた結果、手足のしびれ、頸椎と腰椎の椎間板ヘルニアになり仕事を辞め今に至る。やっと、やっと真剣にこの学びに向き合う環境を自分に用意できた事が嬉しい。しかし、今、もっと健康な状態で向き合いたかった思いと調子が良いと肉に心が向くもどかしさを感じる日々を過ごしている。
4	やっと、やっと知りたかった事に出会えたという喜びを感じられる事。

1990 年（平成２年）夏に出会われた菅原智子さん

1	1990 夏の北海道セミナーが最初。その時は、直接話をしたりはなかったように思う。しばらくして仙台のセミナーあり、その時は地元の人や新しい人など先生の周りに集まる人に、夜遅くまで熱く話をしてくれた。ＬＡでの少人数のセミナーの時は、Ｉ宅にて、１週間近くも普通の暮らし？ といったようなゆったりした時間が流れていた。意識を先生に送った方がよいと言われ、先生に手紙で数か月送り続け、「これからはエルに送りなさい」との手紙が届き、その田池先生直筆の自分宛の封筒を今も宝物のようにしている。子供が生まれてからは、新幹線のホームなどで、毎回手を振ってくれた。離婚の報告もメールで、その時だけ返信メールが届いた。離婚間際の時、一度だけ電話し、３０分位泣きっぱなしだった。直接話したのはそれくらい、あとはセミナーだけだった。セミナーでも自分から話しかけたりする方ではないので、直接話は少なかったように思うが、２０代で出会い、人生の半分以上セミナーとともに生きてきた。地方だし、電話も自分宛でもらった事もなく、このテーマに、自分は関係ないと思ってきたが、打ってみると涙があふれてくる。最後の有馬セミナーに参加し、先生の種水を持たせてもらった。私なりに沢山の思い出があるではないか！ ３０代の子育ての頃は、家でずっとセミナーの音声を聞いており、それこそ田池先生の声を毎日毎日聞いていた。肉での時間は少ないが、私の人生に最大にかかわった人であることは、間違いない。
2	好き勝手に思いのままに生きていたが、何かしっくりこなかった。したいことし、ある程度思い通りになったものの、この先は？ 何か行き詰まった感じがしていた。寂しいから、友人や異性と過ごしても、虚しさは失せる事がなかった。何か自分を変えてくれるものや、人生の目的が分からない不安感のようなものを感じてた。本当の事を探したいと思い、求めるが、宗教はおかしな内容でのめりこめるものがなかった。チャネリングも流行りはじめていたが、パワー関連のイベントは高額すぎた。そうしたときに「光の流れ」が届いた。イエスの思いなど、教会よりしっくりくる内容で、セミナー参加費も手頃であったため、旅行気分でセミナーに参加した。
3	自分の思う通りにできる（選べ）好きなように生きる事が幸せと思っていた。思い通りになる事が幸せだった。努力すれば、ある程度形になり、うまくいかなくなれば、環境を変える等で、ある程度、思い通りになっていたように思う。すごいエネルギーで生きてきた。周りや足元、人の痛みみたいなものを思う余裕はなかった。自分勝手だった。２０代後半、はっきりとつまずいたわけではないが、何となく不調和を感じ始め、これからどうすべきか？ 等を考えるようになっていた。
4	自分のエネルギーを知った。そしてまた自分の本当のエネルギーも知った。母のぬくもりなどくそくらえの自分に、ずっとずっとあるよ、あるよと、淡々と何度も何度も根気強く、指し示してくれた。自分の心は自暴自棄になり果て、心の底からくそったれしか出てこなかった。今はその自分がとてつもなく愛しい。 30 ～ 40 代、学びをしながら、ずっと苦しかった。苦しい自分を引っさげてセミナーに集ってきた。ここ最近はだいぶ楽になったように思う。何をすべきか、人生の目的等を知り、自分の為に生きることができる今世は、本当に幸せだ～！！

1990 年（平成２年）３月に出会われた小林力弥さん

1	平成２年３月１７日　神奈川県相模原市の橋本センターでのセミナーで。

2	夫婦喧嘩を止めたかった。 怒りだしたら止められない自分を止めたかった。 何をやってもうまくいかなかった。 人間の本当の生きる道を知りたかった。
3	力こそすべて。武力知力体力経済力を兼ね備え、行く手を阻むものは叩きのめす。そのために自分を鍛え、自分を向上させていく。自分を向上させることこそが人生だと思って生きてきました。しかし、力こそすべてとする生き方をしていては、夫婦喧嘩はとまらず、やがては家庭崩壊していくのではないかと、心身ともにボロボロでした。心身ともにボロボロになり、初めて、人間の本当の生き方を探すようになりました。
4	自分の生き方がまったく間違っていたことを教えてくださいましたので、自分の生き方が全く変わりました。 何が本当の生き方であるかが分かりました。 何が正しくて何が間違っていることなのかが分かりました。 田池先生だけが怒りの止め方を教えてくれました。 母親の温もりを感じていった時に荒れ狂う怒り、悲しみは収まっていくと教えてくれました。 母親の反省、心を見つめ、本当の自分に帰っていく事こそが人生だと教えてくれました。 つまり、人間の生まれてきた目的が分かりました。

1990 年（平成 2 年）頃に出会われた平里恵さん

1	母が持ち帰ったセミナー（チャネリング）資料や冊子を読んで学びに触れた（1990 年前後）。最初は誘われるまま、その後は自分の意思で何度かセミナーに参加した。セミナーや現象以外で個人的に直接、話したことがあるのは、母が亡くなった年のセミナー（2000 年）で、母が残した「母親の反省ノート」はどうしたらいいのか、質問させて頂いた。
2	「自分で自分を救う」学びだったから。苦しい自分を何とかしたかった。自分を幸せにしたかった。
3	ただただ空しかった。努力して、努力して、学業などは成果があったけれど、だからといって、それが何になると思っていた。どんな人生であっても、結局、最終的には、ただ死んでいく。この学びの言葉で言えば、「何の為に生まれたのか？」と思っていたのだろう。けれど、その回答は無く、ただただ空しかった。人生の意味が分からなかった。
4	嬉しかった。人生の意味を教えてもらって、ホッとした。本当にホッとしたのを覚えている。人生の目的ができて、分かって嬉しかった。無気力だったけれど、急に意欲が復活した。

1990 年（平成 2 年）に出会われた宇野誉郎さん

1	1990 年熱海セミナー
2	どう生きていくのが良いのか、悩む思いがあったため。
3	自分の能力を高めたり、特別な力を身に付けたりすることが大切だという思いが強く、様々な書籍を読んだりトレーニングをしたりしていた。
4	何とも言えない温かい感じがして、これは本物だと子供心ながら感じ、その思いがずっと心の中にあり、自分自身に道を示してきたと思います。

1990 年（平成２年）３月に出会われた小林栄子さん

1	1990 年３月 17 日
2	人生いかに生きるべきか？ 本当の愛とは何か？ 人はなぜ生まれて、死んでいくのか？ 本当のことを知りたい！ これらの疑問がいつも心の中から湧いてきてしかたがありませんでした。 そして、本当のことを教えてくれる本がきっとあるはずだという思いで、毎日仕事帰りに本屋に寄るのが日課になっていました。いつものように宗教、精神世界、哲学等のコーナーのところを行ったり来たりして、本を手にとってパラパラとめくりこれも違う、これも違う、という日が続いたある日、精神世界のコーナーの所である１冊の本が光って見えました。見ると『アトランティスの悲劇』と書いてありました。本を開けたら、「天変地異は神の愛」という箇所が目に飛び込んできました。これだーーー !! と思いました。その時の衝撃は今も忘れません。すぐに夫に凄い本があるよ！！ って。そして、同じ出版社の本を３冊買いその日のうちに徹夜で読みました。そして翌日 EL に電話をしたら、２日後にセンターでセミナーがあるということでしたので参加しました。
3	私は子供の頃から肉的には恵まれていたと思います。何不自由なく家族に愛され、友達にも恵まれていました。にもかかわらず、いつも心の中がさみしくてさみしくて、空しくて仕方がありませんでした。 結婚しても子供ができても、この心の寂しさと空しさは埋められませんでした。音楽を聴いても本を読んでもどんなに楽しいことをしても、やがて心の中にわいてくる思いはさみしい、空しいという心の満たされない飢餓感でした。この空しさを埋めてくれるのは神しかいないと思いました。家族ぐるみでお付き合いしていた仲良し家族がクリスチャンでした。私も教会に行きたいと思い一緒に連れていってもらいました。だけど儀式のようなことばかりで私の心は相変わらず満たされず、数回行ったもののやがていかなくなりました。それから数年後、勤めていた会社の女の子に勧められてある新興宗教にいきました。しかし、それもやはり違うと思いやめました。そして、それからしばらくして意識の本に出会い田池先生に出会い、今があります。もし田池先生に出会えていなかったらと思うと恐ろしいです。
4	この学びに出会い田池先生に出会ってからの自分を振り返ってみると、自分が思っていた自分という思いが想像だにしない自分だったということでした。まず第一にお母さんの子宮の中で喜びに包まれ光輝いていたということでした。なのに生まれたらそんなことは消し飛んで何と今度はお母さんを捨てた！ 自分は正しい、素晴らしいと思っていたのにまるで逆で、自分の心は腐っていたと思いました。さらに腐っていた自分を心で感じて懺悔懺悔の喜び大爆発なんて、とてもとても信じられないほどの衝撃でした。肉では説明のつかないことばかりでした。そして、私の体験したことを先生がみんな分かっていて共に喜んでくれるのでした。自分の闇を出すと喜んでくれる。肉とはまるで次元の違う喜びの数々を母の反省を通して感じさせていただきました。そして、毎回セミナーに参加し、本や冊子、プリントを読んだりしているうちに、気が付いたらあんなにも空しくて寂しくてやりきれなかった心の中が満たされていました。 セミナーに参加し始めて数年が過ぎたころから、セミナーではチャネリング中心だったものから闇だし現象という時間が中心になっていきました。 自分の出してきた思い、つまり過去世、現在、未来を今の肉を持ちながら波動の勉強（闇を出し、その闇が喜びに変わる）をするというような（見る波動）というかまったく異次元の勉強に移行していきました。毎回毎回、汗と涙と喜びでぐしょぐしょになりながら本当に本当に喜びに満たされた多くの時間と空間を、田池先生と共に過ごすことができたということは、とてもとても言葉では言い尽くせない私の宝物です。苦しみはなかった。すべてが喜びだった。闇は喜びだった。もし田池先生に出会わなかったら今の私はありません。学びの友すべての方々に心から感謝です。思うは田池留吉一筋でいきます。田池先生、皆様本当にありがとうございました。

1990 年（平成２年）２月に出会われた藤田厚子さん

1	1990 年の２月の大阪センターで初めて田池先生のお話を聞くことができました。私もまだ３０代中頃でした。
2	肉の動機は、先にこの学びをしていた友の勧めとチャネラーという言葉にひかれてです。 苦しいという事に気づいていない私は特に家庭の問題もありませんでした。

3	完全に外に向いておりました。 喜びも苦しみも皆自分の外にあると思っていました。 それを手に入れようと凄まじい心のままに生きてきました。
4	この３０年何度か田池先生に声を掛けていただきました。 ある時はセミナー会場に向かって歩いていたら。後ろから歩いてこられてすれ違いざまに、「この人な気力、体力、財力、みな持ってるで」って。私が一番私に足りないと思っているものばかりなのでおどろきと、田池先生がこんな私のことも気に掛けてくれていることに嬉しさをかんじました。 またある時は、「あんた住んでる所どこや？」「東大阪です」。東大阪は大阪府東大阪市やでと言われました。 このどちらも、田池先生は「あんたの心は狭い。もっと広い心があんたの心やでと、言ってくれていたのです。 心を見ないと狭い世界の中にいることさえわかりませんでした。 田池先生は自分の心でわかる学びです、自分の心でしかわからない学びですと言っておられたことが今になってやっと少し、心で感じています。 すべてが外に向いていた心が中に向き始めた今世です。 田池先生と出会わなければ本当のお母さんの思いにも出会えなかった。 田池先生ありがとう。 そしてこんな自分ありがとうです。

1992 年（平成４年）に出会われた砂川タカエさん

1	1992 年ころ　箱根セミナーで
2	本を読んで、小さい時の自分が大事にしていた思いに出会えるかもしれないと思ったから。
3	結婚して、思うように生きていけると思っていたのに、全く逆で、今まで親に教えられたり、その他学んできた自分の生き方が全然通用しないと気が付いた。 どうしていいかわからなかった。とても荒れていたと思う。
4	自分のことは自分でせよ。肉のことも含め、そうしようと思うようになった。

1993 年（平成 5 年）に出会われた安西志保美さん

1	1993 年４月の熱海セミナーの時。
2	死に対する恐怖を何とか解決したかった。
3	とにかく人に認められたい気持ちが強く、自分の得意分野で力を表すことをやっていた。
4	人生の目的を知った。お母さんの温もりをこの心に蘇らせることが、自分の生まれてきた目的だと知り、一生かけてこれをやっていけばいいのだという思いになったこと。

1995 年（平成 2 年）3 月に出会われた西前智子さん

1	1995 年の春頃かな？と思うのですが、八尾のセンターで初めて田池先生の顔を見ました。その日、数時間のお勉強だったように思います。そして、その年の７月？の静岡、舘山寺のセミナーに初めて参加しました。
2	最初はチャネリングという事を母から聞いて興味を持った。なぜ、チャネリングかというと、当時、母親と交際相手の人の知り合いで、チャネラーの人がいた。その人が、はっきりとは憶えてないのですが、自分がチャネリングをした人で、なんかスッキリしない心が晴れて、夫婦？の関係が上手くいっているというのを聞いた。私は付き合っていた人と不仲になったことで、苦しくなったり、相手の言うことがわからなくなったりしていた時だったので、チャネリングをしてもらうことで心の苦しみを取りたい、そんな思いだったと思う。占いのような思いもあったように思う。やっていくのか別れるのか、どちらの方が自分にとって幸せになれるか知りたい。それと、小さい頃から、自分の中にずっと苦しい思いがあったので、それを解決したい。この学びをすることで、心を見ることで、心の苦しみを解決して幸せになりたい、が理由。
3	私は小さい頃から苦しかった。うちの家には仏壇等もなく、取り立てて宗教はしていなかった。それが、私が中学生のいつ頃からか、以前以上に両親の仲が悪くなり、父の商売の取引先の奥さんに、父が生長の家を勧められたのが始まりで、母の他力信仰、精神世界、パワーが家の中に入って来た。私は 19 歳の時、あることがきっかけで、ずっと拒否していた生長の家の勉強をするようになった。そして、私も精神世界やパワーの本を読みあさった。苦しい心が足かせとなり、なかなか自分の思う人生を歩めなかった。友達が大学に行ったり、活動的にしているのを目の当たりにして、私は劣等感を感じていた。そして、20 代半ばの頃、ようやく自分がやっていこうと思える仕事が決まった。その仕事を一生の仕事にしよう！本当のプロを目指そう！そう思っていた時、この学びに出会った。ちょうど、セミナーでは５・３・２が言われている頃で、私はこの仕事をしながら勉強をすることが難しいなと思っていた。そして、田池先生がこの仕事のことを何回か講話で良くないみたいなことを言われるのを聞いて、辞める決心をした頃、夫と出逢った。 私の人生は田池先生に出会うまで、とても苦しい人生だった。
4	一番大きなことは、死にたいと思わなくなったこと。

◎ 小濱章夫さんの場合

　1990 年 12 月の下呂温泉セミナーが最初のセミナー参加でしたので、今年は 30 年目になります。３日目のセミナー時間も終了し、帰りの電車を水明館１階のロビーで参加者の皆さんと一緒に待っているときに思い切って田池先生に話しかけることが出来ました。

「次元移行はどのように行うのですか?」と尋ねたことを記憶しています。田池先生は初参加の私の唐突な質問に丁寧にそして熱心にお答えいただいたという印象が残っていますが、私自身は緊張していたせいか、その内容をはっきりとは今でも思い出せません。

　初参加のセミナーの内容は分かったようでよく分からないものでしたが、布教・グッズ販売といったいわゆる宗教ビジネスではない内容でしたので、この勉強は信用できるかもしれないと思いました。これ以降現在までセミナーに参加し続けてきました。もちろん当初は半信半疑の部分は大いにありました。その後のセミナーの講話も「100％信用して良いものなのか」と吟味しながら聞いているところはありました。

　家族や仕事上の問題でストレスを強く感じていましたので、「何のために人生はあるのだろうか」と常に自分の生き方に疑問を持って生活していました。

　その頃は３０代半ばで仕事が忙しく、先生の「仕事は誠心誠意努めなさい」という言葉を自分勝手な解釈をして苦心していましたので、かなりハードな日常でした。そのような毎日の中でセミナーの期間は、一泊二日の参加も多かったのですが、日常生活と隔離されたゆったりできる穏やかな時間でした。講話中に寝てしまうことも良くあり、いつも同じような内容に思えた講話が子守歌のように聞こえることもありました。同じように居眠りをしている人は多く、先生は分かっていたけど、あえて何も言われなかったと今では思います。

　最初に質問してから 15 年くらいは直接話しをする機会はほとんどありませんでした。すぐに聞くのではなく自力でどうにか《出来ている》状態にしたいと思っていました。

　私にとって先生は恐れ多くて話などとても出来ない、もっと勉強が進んで《段階》が上がらなければ無理だ失礼だと思っていました。

　2000 年１月に大きな出来事があり、どうなるのか、この勉強とも離れることになるのかと一時は思いましたが、数ヶ月で何事もなかったように周囲は回っていきました。「これをきっかけとしなさいよ」という出来事だったのだろうと今では思いますが、その後も変わりばえはせず、勉強しているようでしていないような、中だるみの状態でした。

　ＵＴＡ会セミナーに名前が変わり、いわゆる《闇出し》現象を行うようになって、少し私の取り組み方も変わってきたと思います。世間の常識とは全く異なる《秘密》の知識を習得するのではなく、思いを変える勉強なのだと知識としてようやく分かってきました。

　なぜか先生の言葉が非常に強く感じられるようになりました。やさしさというより怖さを感じるようになりましたので、お風呂で先生の周囲に大きな輪が出来ても、私を含め数人の人は近づけないで遠巻きにしているという状態でした。

　自分の思う通りにならない、理解できないものには近づけないという思いだったのだろうか、あるいは触らぬ神に祟(たた)りなしという思いだったのかわかりません。

　どちらにしても私の勉強はまだまだ進ん

でいませんでした。折角の機会を活かす行動を取れなかったのは残念だったなと今では思います。田池留吉の世界が自分の知っている世界と、どうも違うような気がする、理解できないという思いの現れだったのかも知れません。

この頃は田池留吉の瞑想をしても緊張して寒気を感じ手足が冷たくなるばかりでした。自分が選んで取り入れた、世間の常識として当然と思った世界を手放すことができなかったからだろうと思います。

2010 年9月頃に先生から直接手紙を頂きました。私だけではなく多くの人に送られたようですが、やはり皆の勉強の進捗が先生の思い通りに捗っていないと思われてのことだと思いました。そこは分かるのですが、どこがどうというところが分かりませんでした。

2014 年頃から少人数セミナーに参加させていただく機会が増えました。まだまだ聞いている、知識を求めているという状態でした。

2015 年 12 月に「ＵＴＡの輪セミナー」が始まる前後に仕事の定年が間近になって勤務時間が短くなり、ゆっくりした時間をようやく持てるようになりました。それまでは時間がなくて読めなかった勉強の本も集中して読むことができ、瞑想の時間も取れて一日の時間の使い方が自由に出来るようになり、世間の常識に触れる時間が減ったせいもあるのでしょうか、停滞していた学びが少し動き始めたような気がしました。

田池先生がよく言われた「可能であれば早く仕事を引退しなさい」ということはこういうことだったんだなと理解できました。

田池留吉の世界は世間の常識とかけ離れた世界です。「赤信号は止まれ、青信号で進め」を適度にストレスを生まない程度に守るのは良いけれど、それに囚われていてはこの勉強にはマイナスになる世界です。田池先生が常々言われていた言葉が何となく分かるようになりました。

世間の常識をいくら追求しても真実は闇の中です。

当初、田池先生の指導は、手取り足取りではないことが不思議であり、不満でした。なぜ、もっと分かるように指導してくれないのだろうかと疑問に思っていました。

しかし、苦しみは自らが作った世界が原因だと気づかなければ、自らが自らを苦しめているのだと確信できなければ、自らの世界を変えることができないということだと分かってきました。遠回りのように見えるけど、案外近道だったのかも知れないと思いました。

田池先生は、近くは東京オリンピックや日本列島の将来のこと、遠くは 300 年後の地球の行く末などの《予言》も沢山残してくれました。これらの内容の一部は自分でも分かるというか、そうならざるを得ないだろうと頭では納得しているところもあります。まだまだ頭に頼っているなと確認しています。これらも勉強を推進する糧にしないさいよということだと思います。

世界は今でも不安定で多くの人々が右往左往してる中で、上辺（うわべ）だけでも安定していてこの勉強が最もやりやすい時期だと思われる日本に存在し得たことは奇蹟なのかも知れません。

この勉強をしたことで人生の究極の目標が分かり、最近は何か心が少し軽くなった気がします。

宇宙の根源は、いつまでも変わることなく存在します。私たち人間の思いの中の奥の片隅には元々存在しています。それを確認することは大きな喜びであり、それ以上のもの・ことはないのです。それをこ

の３次元の世界で確認しなさいよと田池先生が言われているような気がします。

田池先生、ありがとうございました。

また 250 年後にお会い出来るようにしたいです。

私自身の死後と来世のことは具体的には確信はありませんが、今世の残された時間は焦らず、弛まず、コツコツと、肉体生命の消えるその時まで、勉強を続けていきます。知識を得ることではなく、思いを変えていく本当の努力をしていきます。

ありがとうしかありません。

◎ 水島美恵子さんの場合

1990 年６月、義妹のわけのわからない度重なる誘いに義理を果たすため、いやいや研修会に赴きました。「他力信仰」と決めつけていたので、絶対だまされるかという構えでした。でもそれは全く違っていました。先生は初めから子供たちが駆けずり回る中に、背広姿で黙って椅子に腰かけておられました。司会者かと思いきや、その方が、もうすぐ死んでしまう神の意識を持った先生？ というこで、セミナーが淡々と始まりました。首を横に振る思いで出席したのに何一つ振れなかった。それどころか「皆さん平等の意味が分かってますか?」の問いかけに、先生の口から出た「みんなお母さんのお腹から生まれたというのが平等なんです」を耳にした途端、心がはじけました。

肢体不自由で歩くことも話すこともできない２歳上の姉が 41 歳で亡くなるまで、その姉のことで両親は「姉より先に自分たちは死ねない」と、祈り願い、大金をはたいたり、あの噴火した御岳山の冬山にも登り、生きているうちに姉の墓標を三の池に立てなさいと言われれば、普段仲の良いと言えない両親が、足並みそろえて山詣でをしていました。

そんな、だまされている両親を横目に、自分にできることは何か、人間は嘘をつくから信用ならない、ならば誰にも負けない私にできること、それが祈りでした。それはそれは凄まじい勢いで手当たり次第に祈りまくっていました。

この私に何ができるというんだ、この世は不公平、不平等、姉のことだって、人は平気で「過去の因縁」という言葉を発するだけだった。姉の苦しむ様を目の当たりにして、時には発作を止めるのに、母と二人で泣きながらお布団にしばりつけ、馬乗りになって母と手を抑え、やっと鎮静剤の注射を医者にしてもらう状況でした。

でも、それはほんの２、30 分のこと、夜通しわめく姉が落ち着くまで、３、４日かかり、どこまで神は姉を苦しめるのだ……生きてる中で、あんなに苦しんだ姉が死んだ後まで苦しんでいる話を先生がされたとき、何一つ学びが分かっていないのに霊道の時間に手が上がり、椅子に座りました。

詳しい話もしないまま、「はい、お姉さんに心を向けて」の一言に、姉を思った瞬間「恨んでます、恨んでます、何もかも、親も兄妹も、みんなみんな口先だけ、代わってやれるものなら代わってやりたい……そんなウソを聞けるかあ！！！……」凄まじい慟哭でした。でもそれを聞いていて、私はなぜかうれしくて、これを姉はずっとずっと言いたかったんだと号泣していた時、「はい、お姉さんといわれる方、私のほうに心を向けて……」先生の一言に姉の懺悔が始まりました。

その瞬間、座っていた私は何とも言えない温もりに包まれていました。

本当にうれしかった。これで姉は本当に

供養されたんだ。……まったく学びの根本が分かっていない思いだけど、これが私が学ぼうと決断した時でした。

（この学びに集った動機は）

この学びに集った動機は「姉の供養」……でも、この動機は全くでたらめでした。30年近く学ばせていただいて動機の反省をするたびに、真っ黒な思いを抱え持ってきた私が学ぶように本当の自分に誘われてたことを痛感します。

姉思いの妹が一番姉を嫌っていた。

チャネラーになりたくて己を掲げ、負けるものかの思いが満載、「外」対「自分」で、人からどう思われるか、心を見るのは二の次、三の次 …… 看板だけ変えて学んでいました。

（他人事でした）……何よりも、最後に先生に言われた「あんたな、そういう学びをしたらあかんて言うてるやろ」です。

目が悪かった私は、目に良い薬を作りたい一心で容器をもって先生に「この水にあと何を加えたらいいのか?」を聞きに行ったとき、先生に「私の中は、良い目薬を作ってほしい思いだ」と言われたのです。

そんな自覚のない私は、分けがわからずのままでしたが、学びに出会って「先生はすごいパワーの持ち主」……何度も反省したと思ったけど、ここへきてもこの心は変わっていなかったのだ。とすると、この30年近く明後日（あさって）の方向を向いたままの学びをしてた。これが誤魔化せない、れっきとした思いです。

（学びに出会う前の自分の人生について）

田池先生に出会う前は、なぜ生まれてきたのか、なぜこの環境なのか、このまま朽ち果てていく自分が哀れでならなかった。この思いがずっと根底にあるから、何か目新しいことをしてもむなしくて、本当に彷徨（さまよ）っている思いでした。

（学びに出会って何が変わりましたか?）

学んできて本当に穏やかな自分に出会います。もちろん闇は面白いように、こんなことにも煙を吐くのかと自覚できる時と、のど元過ぎれば熱さを忘れ、同じことを体験して、「あああ、またこの現象でしばらく眠れない、肉の思いがうじゃうじゃ出てきて、瞑想もどっしりとできない日々を体験するのか」と思いつつ、「私の仕事」……田池留吉、アルバートに心を向けているうちにスーッと通り過ぎていく。

自分が苦しみを入れ込む様が分かるのも学びをして初めて実感できる。合言葉……「250年後の出会い」を遂行できるように日々を田池留吉に向けるだけです。

みんなが「田池留吉に向ける」が、「それはアマテラスに向けてる」と言われたと耳して、「さもありなん」だけど、ほんの一瞬感じた温もりは、誰が何と言おうと私のもの、それを信じて、アマテラスとともに歩む思いです。

熱海での反省研修会修了後、次の研修会までの合間を縫っての箱根旅行

HAKONE
箱根

第４章　反省研修会からエルランティの光セミナーへ

― 第１次出版期／「神理をまなぶ会」ニューヨークへ／ 反省研修会の終了 ―

1989 年（平成元年）

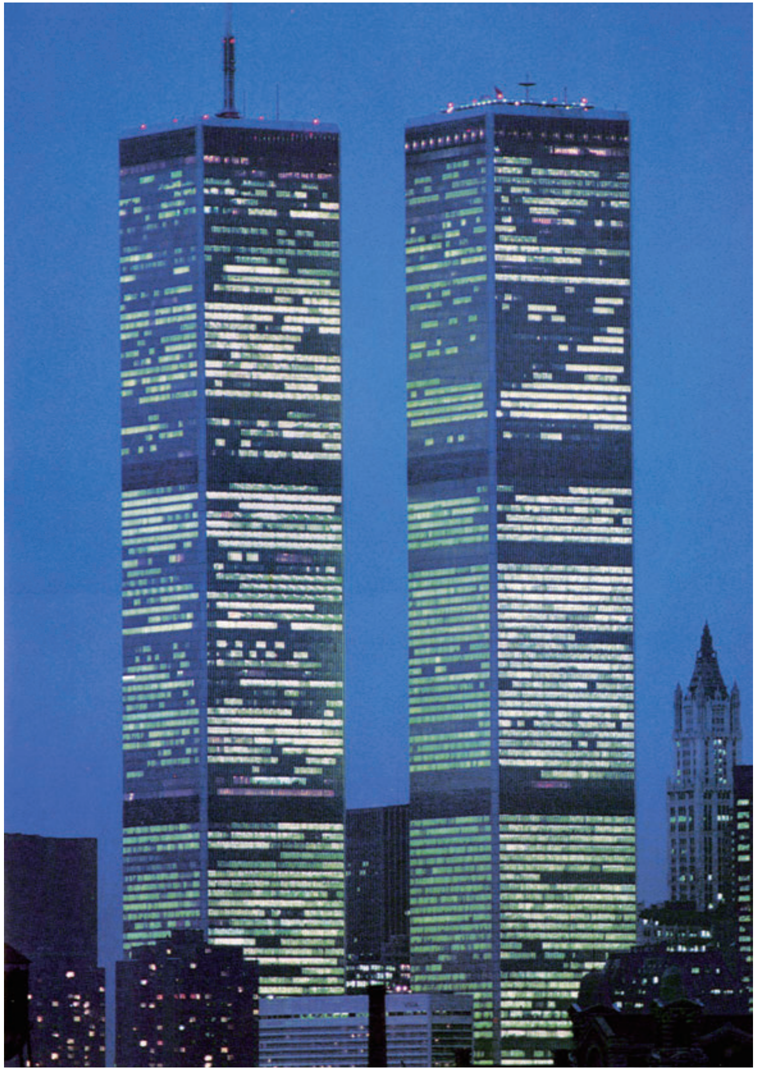
10 月 7 日～ 8 日《第 130 回反省研修会／大阪研修センター》
10 月 27 日～ 29 日《第 131 回反省研修会／いこいの村いむた池》
11 月 7 日～ 8 日《第 132 回反省研修会／ソウル ホテルロッテ》
11 月 9 日　ベルリンの壁崩壊
11 月 19 日～ 20 日《第 133 回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
11 月 24 日～ 26 日《第 134 回反省研修会／白浜温泉　ホテル千畳》
12 月 1 日　株式会社エル設立／東京都町田市
12 月 2 日～ 3 日《第 135 回反省研修会／東京研修センター》
12 月 16 日～ 17 日《第 136 回反省研修会／大阪研修センター》
12 月 23 日～ 31 日《第 137 回反省研修会（第 4 回アメリカセミナー）
ロサンゼルス　ホリデイイン・トーランス、マリエッタ》

1990 年（平成 2 年）

1 月 13 日～ 14 日《第 138 回反省研修会／大阪研修センター》
1 月 20 日～ 21 日《第 139 回反省研修会／東京研修センター》
1 月 26 日～ 28 日《第 140 回反省研修会／白浜温泉　ホテル千畳》
2 月 3 日～ 4 日《第 141 回反省研修会／大阪研修センター》
2 月 11 日～ 12 日《第 142 回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
2 月 24 日～ 26 日《第 143 回反省研修会／いこいの村いむた池》
3 月 3 日～ 4 日《第 144 回反省研修会／東京研修センター》
3 月 10 日～ 11 日《第 145 回反省研修会／大阪研修センター》
3 月 17 日《1 日反省研修会／東京研修センター》
3 月 18 日～ 19 日《第 146 回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
3 月 30 日～ 4 月 1 日
《第 147 回反省研修会／修成建設専門学校青垣研修センター》
4 月 7 日～ 17 日《第 148 回反省研修会（第 5 回アメリカセミナー）
4 月 8 日～ 9 日はマリエッタで／4 月 12 日は板倉さん宅で
4 月 14 日～ 15 日はホテル・ホリデイインでセミナー》
4 月 29 日～ 5 月 1 日
《第 149 回反省研修会／修成建設専門学校青垣研修センター》
5 月 6 日～ 7 日《第 150 回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
5 月 19 日～ 20 日《第 151 回反省研修会／大阪研修センター》
6 月 3 日～ 4 日《第 152 回反省研修会／相模原　(株) 中島建設》
6 月 16 日～ 17 日《第 153 回反省研修会／大阪研修センター》
大阪センターでの一泊二日のセミナーは今夏が最後
6 月 25 日～ 7 月 21 日
《第 1 回ＮＹセミナー　NY シルビアレストラン・NJ 久保邸》
6 月 27 日～ 7 月 2 日　梅雨前線豪雨　一連の豪雨により、全国で
死者 32 人負傷者 109 人、床上浸水 10,186 棟。

ハーレムのシルビアレストランで　田池先生と子供たち

7月29日〜31日《第154回反省研修会／道後国際ホテル大和屋》
8月4日〜5日《札幌での反省研修会／チサンホテル札幌（現在は名称が変わっている）このセミナーはこの後8月下旬に初めて北海道で開かれたセミナーに先駆けて開かれたと聞いています。
8月7日〜8日《第155回反省研修会／熱海富士屋ホテル》
8月19日《大阪一日学習会／大阪研修センター》
8月24日〜28日
《第156回反省研修会／北海道　定山渓ホテル・洞爺パークホテル・洞爺プリンスホテル湖畔亭》
9月2日〜3日《第157回反省研修会／熱海　暖海荘》
9月4日《瞑想会／東京研修センター》
9月7日　大阪・東京に「心の相談室」開設
9月14日〜10月10日《第2回NYセミナー NY、NJ 久保邸》
このセミナーで反省研修会は終了し、エルがセミナーを主催するようになります（エルランティの光セミナー発足　第1回は沖縄、鹿児島セミナー）。


この頃はワールドトレードセンターも健在でした！

話が前後し、いきなりニューヨークでの話になりますが、この章の冒頭にも紹介しました『意識の流れ』からの一文「心を見る」ということが、アメリカセミナーの中でも繰り返し繰り返し語られる重要なテーマになると思います。

以下の一文は、これも少し先の１９９１年８月１９日、ニューヨークはワーウィックホテルで田池先生が話された講話の一部ですが「心を見る」ということについて語られています。また併せて紹介させていただく１９９１年６月１５日、ハーレムのシルビアレストランでの田池先生の講話は、意識の「地動説」について語られており、ニューヨークでセミナーを開く目的にも触れています。

◎ ワーウィックホテルでの講話の抜粋

この学びは「心を見る」ということが初めであって、「心を見る」ということで終わるんです。本当は、終わることはないんですけども、という意味はもう心を見ることに尽きるということなんです。

頭では分からないということを初めからもうしっかり割り切るというのか、そのようなつもりでいかなかったら前へは進めないんです。頭を使っている間は前へは進めないということです。初めてとか、新しい方は頭を使いまして、色々、色々その疑問というか、分からないことがいっぱいありますので、頭を使われると思いますが、ある程度進まれたら、頭を使わないということが前へ進む、と言って、頭を使わないで心を見なかったら、これまた駄目ですから、心を見るということです。

どうして心を見るのかというのですが、皆さん色々思っていると思うんです。

例えば、嬉しいとか、悲しいとか、つらいとか、寂しいとか、あの人は嫌だとか、なぜあの人はあんなことをするんだろう、言うんだろう、と相手を責め裁(さば)いておりますね。あるいは、あの人はいやらしい人だね、あんな人と付き合って、あの人馬鹿ね、と色々思っているでしょう。

その思っているというのは「思い」なんです。その「思い」が「心」なんです。それが心、その心を見るんです。色々思っているでしょ。その思っているのを見るというのが、「心を見る」っていうことなんです。あるいは幸せだ、あるいは自分は神の中で生かされて幸せだなという思いがパアーッと出るでしょう。頭で考えてないですよ、パアーッと出てくるでしょう。その思いがあなたの心なんです。

昔のことですが、「心をどうして見るんですか」と、私はそう聞かれて、はっとしたことがあります。この人、心を見たことないのかなと思うんです。

しょっちゅう心を出しているんでしょう。悲しいと言っているんだから、悲しいという心を使っているんでしょう。悲しいと思っているんだから、それが心なんです。

心というものはどんなものなのかということが知りたいんです。どんな形をしているかと……。してないんです。悲しいというそれが心なんです。暗いと思えば暗いんですよ。暗くても素晴らしいなあと思えば、その暗い部屋は素晴らしい部屋なん

ですよ。空が広いなあと思えば、広いと思っているんですよ、その広い心があるから広いなあと思えるんですよ。空が広いなあという思いがあることを教えてくれているんですよ。だから､時には空を見なさい、広いなあと。それは自分の中に広いなあという思いがあるということですよ。

だから自然を見ることによって、ああ自然は楽しいなあ、美しいなあと思えば、美しいなあという思いを皆さんは出しているわけです。

いつもいつもお金のことを計算している人は、お金がもっと欲しいなあと、なぜ、あの人はけちなことをするんだろうかとか、あの人にだまされたとか、もう信頼できないとか、今度はこちらがだましてもっと稼いでやろうとか、そういうことを思っているんですよ。

そういうことばかりの思いを持っている人が、そういう思いがどういうものなのかを見はったら分かるでしょう。

もう神も何もないではないですか。だから、そういうことをね、まあ思うのもやむをえない面もあるんですね、この肉の生活をする以上は。しかし、それはできるだけ少なくして、そして神を思う時間、思う回数をできるだけ多くしていきなさいということなんです。

（1991年8月19日収録）

◎ **シルビアレストランでの講話の抜粋**

少なくとも意識の世界では取り引きは成り立たないんです。お分かりでしょう。意識の世界では取り引きは成り立たないですよ。なぜなら意識の世界は愛ですから取り引きが成り立たない。

だから言い換えれば取り引きが成り立つ時は欲です。だから欲でこの意識の世界、神の世界、宗教の世界に、皆さんが頭を突っ込むか、心を突っ込むか、それは知らないけれども、それはもう取り引きですから、サタン、サタンの世界となってしまいます。そういう世界が、現在、新興宗教とか、既成宗教とか、新宗教とか、新新宗教とか言われているわけです。

「精神世界こそ真の科学である」と最近言い出しておる人がいます。私は昔から言っていますが、やっとこの学びがですね、その人はどうか知りませんよ。やがて、これこそが本当の人類の科学だという時代が来ると思うんです。これこそ科学だという時代が来るんです。それを言ったって一般の人は理解できません。一般の人の科学というのは、このサイエンス科学ですからね。だから、仮説を立てて、それを実験して、その仮説と実験があえば、真理はこうだという、その手法で来る。これを科学的手法というんですよ。だから、そうなったやつは納得するんですよ。

けれど、物理の世界においても、化学の世界においてもですね、どうでしょうか。それは覆（くつがえ）されていくんじゃないですか。あの例の「天動説」と「地動説」。皆さんご存じですね。そうでしょ。昔は天が動いてたんです、「天動説」だから。そこで「地動説」を唱（とな）えたならば、「こいつは気違いだ。こいつは社会を混乱させる者だ」って、チョンチョンってやられたんでしょう。

ところが今はどうですか。今では斬（き）られた方が本当で、斬った方が間違いでしょう。これ皆さん歴史で勉強なさったと思う。

それと同じでありまして、これがまさに、まさに「地動説」なんです。はい。そして、今までの肉体と思うのが「天動説」。今まだ私たちは認められませんでしょう。何だ変なことやってるな。今どき非科学的なことをやってるな……って、フフンと人を見下げて馬鹿扱いしている人が、たくさんたくさんこの地球上に満ち満ちているんです。

まあ、これを特にインテリと言う。インテリゲンチャとかね、知識階級とか、何とかかんとか言ってね、自分たちは上流階級とか言っていますが、それこそ一番馬鹿な集団ですよ。

このアメリカにも、このニューヨークにもたくさんおりますよね。うようよしている。それはもうサタンの巣ですよ。ニューヨークって言うたら。世界一番のサタンの巣がニューヨーク。そこへ、どっと僕らは来ているんですよ。まさに危険窮（きわ）まりない所へ来ているんですよ。

そりゃ意識で分かる人にはこんな凄（すご）い所はないですよ。本当だったら来ないでしょうね。こんな所へ来ませんよ。分からないから皆来るんですよ。ニューヨークというのに憧れてね。肉的にはね。精神世界

では異常世界のこんな所へ来ませんよ。もし、身を守るという意味があれば、もう来ないでしょうね。何かよほどのそろばん勘定でも合わない限りは来ないですよね。

でも、私らは違うでしょう。だから、それでここへ来るということは、それなりの大きな計らいがあると、そういうことですよ。だから何にも恐れることはないんですよ。私は神に心を向けている限り、何も恐れることはないんですよ。分かりますね。それを言ってるわけです。

皆さん、分からないからね、のんきにしておられますが、分かったら凄い世界ですよ、ニューヨークという所は……。

はい、世界の大サタンが全部集合している場所ですよ。こう思ってもいいくらいです。その代わり、また、このニューヨークに、たくさんの宇宙から、たくさんの大きな光がここへ集合するんです。言い換えれば、ニューヨークは、光と闇の決戦場なんです。決戦場と言うと何か戦争みたいだけど、しょせんは光は闇に勝つんです。

闇というものは実体のないものです。人間が作ったもの、影ですから。光は実体があるんです。実存するものですから、だから初めから勝負にならないんです。だから、皆さん方が本当に光を信じておれば、何も恐れることはない。何にも恐れることはない。それを言ってるんです。

ただ向ければいいんです。エルランティ田池を思えばいいんです。

空を見ては、太陽を見ては、風の音を聞いては、水の流れを見ては、鳥のさえずる声を聞いては、一輪の美しい花を見ては、エルランティ田池を思ってください。それが本当の幸せと、平和への道だと言っているんです。

これから300年に向けて、ユートピア実現に向けて、ひとつ、そういう風に自分をつくっていってください。これが自己確立です。自己確立の道です。

（1991年6月15日収録）

※「エルランティの光出版」がスタート　1989年10月『光のなかへ　―本当の自分を求めて―』が発行されました。この本を皮切りに『アトランティスの悲劇』(1990年2月)／『ブッダの教え』(1990年3月)／『人間はどこから来てどこへ行くのか（上）』(1990年5月)／『愛のなかにて』(1990年6月)／『人間はどこから来てどこへ行くのか（下）』(1990年9月)／『エルランティの光』(1990年10月)／『イエスの真実』(1990年10月)／『戦争はまだ終わっていない』(1991年1月)／『夫婦の縁』(1991年6月)／『綾女、ありがとう』(1992年3月)／『宇宙からの愛』(1992年9月)／『男女の意味・差別』(1993年5月)／『アトランティスの浮上』(1993年8月)／『エルランティの愛』(1993年11月)／『エルランティの心　Ⅰ』(1994年11月）と、4年間で16冊の市場流通本を発行し、第一次出版活動の幕を閉じました。

◎ 今だから話せる出版活動のスタート

第３回のロサンゼルス反省研修会のさなか、ロサンゼルスに滞在している田池先生から、編者の自宅に国際電話が入りました。久保徹夫さん、久保明子さんご夫妻から提案があり、東京の町田駅前にご夫妻が運営されている「洗心洞画廊」を出版の事務所代わりに使ったら……という、うれしい申し出があったのです。

そもそもの発端は、編者が勉強会に通うようになって一年近くたった頃でしょうか、田池先生から「本」を書いてみないかという話があったのです。あれだけ反対していた人間が、なぜ、この勉強を始めるようになったのか、一度書いてみたらどうかということでした。

何ヶ月かして原稿ができ、せっかく原稿ができたのだから出版しようという話になり、原稿を何社かの出版社に送りました。

その中の一社「草土文化社」から返事が来ました。初版は印税免除、本が出版された時、著者サイドで全国紙に広告を出してほしいという条件です。厳しくはあるが悪い条件ではなかったので、田池先生とも相談し、出版しようという話になったのです。

ところが土壇場になって、その出版社が降りたいと言ってきました。出版社がこれから力を入れようとしている、ある精神世界がらみの本のシリーズと『光のなかへ』の内容が抵触するのだそうです。出版契約まで交わした後だったので理不尽だとは思いましたが、田池先生から「諍いを起こすことが本意ではないでしょう」と言われ、同時に契約書を破棄するということで決着することになりました。

これからまた出版社を探すのも大変だし、田池先生は「自費出版でやったらどうだ」と言い、先生の教え子の方から、大阪創元社を紹介してもらうことになりました。そして編集部の谷川さんに引き合わされ、ただ自費出版するのではなく、編

集の仕事も教えていただくことになったのです。この時から本が完成するまで、夕刻仕事を終えると、せっせと大阪創元社に通い、自分の本を材料にして編集の「いろは」を教えていただいたのです。

ただ一つ困ったことがありました。

出版費用をどのように捻出するか、という問題です。今なら、それが仕事ですから、安くできるノウハウも身についており、個人出版で本を出される人にも、いろいろアドバイスできる立場にありますが、当時は出版のことなど何も分からない状態でした。

この問題を解決してくれたのが、この学びの先輩であり友人でもある森保之さんです。森さんとは家も近く、職場も近いため、通勤でよく一緒になることがあります。

その日も、森さんと出勤途上の千里中央の駅でバッタリ出くわしたのです。

「今にも飛び込みそうな感じやったで……。」

冗談混じりに森さんが言います。

もちろん、地下鉄に飛び込もうなどと考えていた訳ではありませんが、僕は気になっている出版のことを森さんに話しました。

森さんは、一通りの事情を聞くと、「何や、金のことか」と言いながら、いきなり出版費用の立て替えを申し出てくれたのです。思いもかけないことで、いきなり道が開けたような感じでした。

しかし、次の問題が立ちはだかっていました。この年の9月には「本」が完成してくるというのに、出版流通の目処が立っていないのです。

東京の神田にある「地方小出版社」が流通を受け持ってくれることになったのですが、個人ではなく、やはり出版社として展開したほうがいいというのです。

僕は、今勤めている政府刊行物を辞める決心をし、その報告のため、ロサンゼルスセミナーでアメリカへ出向いている田池先生に電話を入れました。この電話の時、田池先生と一緒に渡米した久保さんご夫妻もその場におられたようなのです。

それからしばらくしてアメリカから電話が返ってきました。

久保徹夫さんは神奈川で製造業を営んでおられますが、奥さんの明子さんもまた、東京の町田で「洗心洞」という画廊を経営されており、この「洗心洞画廊を出版の事務所代わりに使ったらどう」という申し入れだったのです。

最初、「エル出版」の名前で出す予定だったのですが、流通を受け持ってくれる取次のほうから「よく似た名前の出版社が多いので、流通をスムーズにするためにも、どこにもないような出版社名にしたほうが良い」と提案がありました。

その時、田池先生から出た出版社名が「エルランティの光出版」だったのです。

こうして、「エルランティの光出版」の最初の出版物『光のなかへ』が世に出ることになったのです。

出た当初は、紀伊國屋書店系列で週間ベストセラーに取り上げてもらおうと、仲間の方々にお願いして、店を絞り込んでの計画購入。おかげで店頭の「今週のベストセラー」表示に掲げてもらえることとな

り、これを見て本を買われ、セミナーに集われた方も多かったと聞いております。
『光のなかへ』という本自体は、今となっては、内容はともかく、構成も、語り口も、幼く未熟で、本の組み版さえ恥ずかしい次第ですが、それでも2万部近い、ちょっとしたベストセラーになったのです。「エルランティの光出版」で、1万部を超える出版物は、これ以外には『エルランティの光』(1万5千部)が挙(あ)げられるのみです。

これは自慢しているのでなく、流通の仕組みを知らないためにおこる落とし穴だったということを知っていただきたいのです。

日本では返品制度というものがあります。読者に購入をお願いして、ある書店でどんどん売れたとすると、どんどん取次(本の卸)から注文が入って増刷(ぞうさつ)しないと間に合わないという事態がおこってきます。ところが調子にのって増刷していますと、それ以上に返品が返ってくる。当時、書店の数は、日本で3万店舗を超えていました。5千部刷(す)って、流通システムで自動配本された日には、どこへ本が行くものやら、その実態をつかむこともできません。極端に言うと、5000の店舗に1冊ずつ配本されても、初刷り5千部はたちまちなくなり、売れるほどに増刷を繰(く)り返すことになりますが、最初に撒いた5千部は返品で返ってくるという仕組みです。

1万部が売れたとすると、ほぼその倍の部数が印刷されていることになります。

この返品が出版社を圧迫します。倉庫の保管料、返品手数料等々……。
「エルランティの光出版」は、その船出から、この問題を気付かずに抱(かか)えていたことになります。

◎ **田池流出版術**

第3回ロサンゼルスの反省研修会も終わり、我々一家も、住み慣れた大阪の地から神奈川県相模原市へと移ってきました。

いよいよ「エルランティの光出版」の出版活動が開始されるわけです。

田池先生は、「最初の本が出たら、すかさず次の本を出版しないといけない。頭で考えず、チャネラーの出した意識資料、これを切り張り編集して、次から次と本をつくっていきなさい。手を休めてはだめ」というのが、出版社の船出にあたってのアドバイスでした。

あくまでチャネリングを編集する、それが「エルランティの光出版」の編集方針となったのです。内容を批判されても「チャネリングを編集しているだけなのです」と逃げ、討論しないようにともアドバイスされました。

こうして二作目『アトランティスの悲劇』が生まれ、仏教哲学の合田秀行さんも加わって『ブッダの教え』『イエスの真実』と立て続けに本が出されるようになっていったのです。
『光のなかへ』発行後、町田の事務所に読者第一号の方から電話が入りました。

それが、株式会社エルの社員第1号となるSさんだったのです。

◎第２回ソウル反省研修会
第４回ロサンゼルス反省研修会

本の発行から１ヶ月後の、1989 年 11 月７日、第 132 回反省研修会がソウルのロッテホテルで開催されました。韓国で２回目のセミナーですが、このセミナーに『光のなかへ』を読まれたＳさんも、ご主人共々参加されることになったのです。このとき、Ｓさんは、『光のなかへ』の本を持参され、あろうことか「本」の見返しのところに、田池先生のサインを求めるというハプニングが起こりました。

横で見ていてドキッとしましたが、田池先生、差し出されたサインペンを手に取るや、何食わぬ顔でサラサラっと書いてしまわれました。

あの「本」がどうなったのか、気になるところではありますが、それはさておき、このソウルでの反省研修会が終了するや、なんとＳさんご夫妻が、スタッフとして共に働くようになったのです。ご主人は、大手企業のエリートサラリーマンの職を捨てての仲間入りです。

そして、このお二人が、やがて「エルランティの光セミナー」立ち上げの起動力となってくれました。

この時から1年が過ぎ、「月刊エルニュース」が発行されるようになりましたが、その第1号に、「一年間ありがとう」と題して、

Ｓさんが次のような文章を寄せてくれていました。

秋も深まり、皆様いかがお過しでしょうか。あの感動の１冊、『光のなかへ』を手にしたのが、丁度１年前の今頃でした。この１年間は、本当に色々なことを経験させていただき、掛け替えのないものとなりました。

未熟な私を温かく見守ってくださった皆様に心よりの感謝を申し上げます。

そして、いつも支えてくれた主人に、心より「ありがとう」の気持ちでいっぱいです。これからも、どうぞ宜しくお願いします。

そして、１ヶ月後の12月23日から、第137回反省研修会が、ロサンゼルスのホリデイイン・トーランスと、マリエッタ・ホットスプリングの２か所で開催されることになったのです。

このセミナー終了後、空港へ向かうバスの中で、来年から「株式会社エル」が設立され、新たに小野淳一郎さんがスタッフに加わることを知りました。

小野さんは、ＪＲ横浜線の車窓から見える「神の子の道研修センター」の看板に惹かれ、橋本の研修センターに集うようになったといいます。仕事の暇を見つけては研修センターに来られ、コートを着たまま、意識資料を読みふけっている姿が印象的でした。

その彼と、ロスセミナーの帰途、空港へ向かうバスの中で前と後ろの席になり、いきなり「来年からエルで働かせてもらいます。よろしくお願いします」と声をかけられたのです。

小野さんは、その後、「エルニュース（月刊）」が発行されるようになると、これを担当してくれるようになり、「エルランティの光セミナー」が終了するまで、「エルニュース」の面倒を見続けてくれました。

発刊当初は、今までやったことのない編集の仕事や組版の仕事を覚えるのは大変なようで、締め切りが近づくと午前様になるのはざらで、徹夜になることもしばしばでした。

事務所がＪＲ町田駅前にあるものですから、終電の案内ばかりか、始発電車の発車音を耳にすることも度々でした。

今、その「エルニュース」が、当時のセミナーの様子を伝えてくれています。

平成2年11月1日発行（毎月1日発行）　エルランティの光　第１号

エルランティの光

私の愛し子達よ
勇気を持ちなさい。

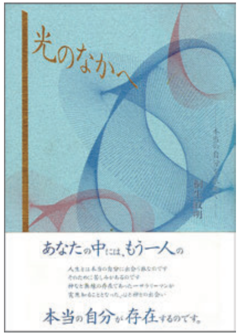
エルランティ田池

愛とは信じることなのです。

時は待ったなしに流れゆきます。

愛は思いです。
愛は波動です。

月刊エルニュース「エルランティの光」第１号



（1989 年 10 月）

（1990 年 2 月）

（1990 年 3 月）

（1990 年 5 月）

（1990 年 6 月）

（1990 年 9 月）

エルランティの光出版５年間の刊行物一覧

では次に、５年の間に発行された「本」の話題をいくつか紹介し、そのあとで、それぞれの本のあらましを紹介しておこうと思います。

まずは、当時お世話になった書店関係者の方の記事を「エルニュース」から転載させていただきます。

◎東京神田・書泉グランデのKさん

書泉グランデは、東京では初めて「エルランティの光出版」のコーナーを作ってくれた書店です。

２階レジそばのよく目立つ柱の四面が書棚になっており、その正面にエルランティの光出版の本が全点数冊ずつ並べられてあります。その棚の下の平台には、当社の最新刊の本を積んでいただけるようになっております。

担当のＫさんは「最初は２、３冊でこのコーナーも少し貧弱でしたが、これだけ出れば随分格好がつきましたね。お客さんもついてきて、よく売れるようになりましたよ。後はどっと売れてくれればね」と、うれしそうに話してくれました。

◎大阪の柳原書店のＨさん

柳原書店といっても、町にある小売り書店ではなく、大阪・京都を中心に関西方面の書店に「エルランティの光出版」の刊行物を卸していただいている取次店（本の卸屋）です。

紀伊国屋書店を除く大阪の主要書店に入り込んでおり、小回りのきく配本で、大阪の書店には人気があります。

この柳原書店・大阪販売部のＨさんが次のように話してくれました。

「エルランティさんの本も、やっと大阪

(1990 年 10 月)

(1990 年 10 月)

(1991 年 1 月)

(1991 年 6 月)

(1992 年 3 月)

(1992 年 9 月)

で定着してきました。紀伊國屋さんとは取引がないのではっきりとは言えませんが、大阪では北よりも、南の方がよく動いています。

エルランティの光出版さんの新刊は、当社では、日販さんや東販さんより、どうしても入荷が遅れ、取り扱う部数では少なくなります。でも、その分、後の補充注文分をこまめに取って稼がせてもらっています」と……。

新刊配本後の補充が重要になっている現在、関西方面だけとはいえ、柳原書店さんのような小回りのきく取次さんの存在は非常にありがたい限りです。

以上、エルニュースの３号、４号から抜粋させていただきましたが、これは発足から１年後の状況で、やっと書店業界からも「エルランティの光出版」が認知されてきたことが感じられます。

そのころから、本の読者から、連絡や感想が出版社に入ってくるようになります。

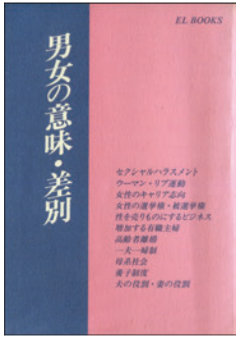
今となっては、そのほとんどが残っていないのですが、読者の感想のいくつかを紹介させていただきます。

◎『戦争はまだ終わっていない』

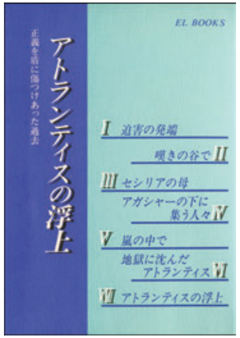
私はこんなにもたくさんの叫び声が載せられた本を、今まで手にしたことはありませんでした。苦しい魂の叫び声です。

私はこれ程たくさんの叫び声を聞かせていただかない限り、後ろを振り向こうともせず、戦争で亡くなられた人々の叫び声に心を向けることも忘れておりました。

今、ニュースで報道されているほとんどが戦争に関してのことです。この時期、この本が出版されたことは、神のはからいであると感じました。読み進める中で、あまりの苦しさに読むことをやめたいと何度も思いました。でも、この本がなぜ、今、出版されたのか、このことを知った以上、しっかりと読ませていただこうと自分に言い聞かせたのです。



（1993 年 5 月）



（1993 年 8 月）

（1993 年 11 月）

（1994 年 11 月）

そして、ふと思ったのです。この本に取り組まれた筆者は、この本を書き進める中でどのように心が変わっていったのかと……。最後の一頁を読み終わった時、私はこの本は勇気と愛の本であると感じました。一人でも多くの人に読んでいただきたいのです。

未知の読者からの手紙ですが、出版に携（たずさ）わっていて良かったと感じさせていただいた手紙でした。

次は、お亡くなりになった学びの友、上田華照さんの手記です。

◎『光のなかへ』を読まれた上田華照さん

京都の書店での立ち読みで、さわやかな感じの本が一冊、この学びの始まりでした。空虚（くうきょ）な概念から躍動（やくどう）する意識の世界への入り口でした。驚きました。ときめきました。

と同時に、いかに心を汚してきたかと落胆（らくたん）しました。肉の思いのものすごさ、心の裏表、底にうごめく強烈なカルマ。でも、「今からだ、今しかない、そして必ず戻っていける、命がけで心を見るなら」と教わりました。心に広がる優しい温もり、それだけを手がかりに、私なりに歩んでいきます。そしていつの日か必ず、この学びの本質がなんであったかということに、目覚めていきたく思っております。

もう一通、心に残った手紙があります。残念ながら現存していませんが、それは1990 年 10 月、『エルランティの光』が発行されるなり、この本を読まれた北海道の中学 3 年生の男子から感想が送られてきました。不思議に感じたこと、驚いたことなど、ショックを受けた様子が伝わってくる内容でした。

何回か手紙でもやり取りしましたが、北海道という離れた地域、しかも未成年ということもあって、ついに彼が学びにつながることはありませんでした。今ならズームという可能性もあったのでしょうが、学びにつながることの難しさを痛感した次第です。

それはさておき、彼の手紙自体は残っていないのですが、あるチャネラーの方に、その子の意識を拾ってもらったものがあります。手紙の内容を踏襲（とうしゅう）していますので、ここにその一部を紹介させていただきます。

◎『エルランティの光』を読んで

教えてほしいのです。僕の心は今、とても求めています。知りたい心がいっぱいに広がっています。あの本を手にして、全然違う別世界のこととは思えなかったんです。僕の心で「これは理解できる。これは感じたことがある。そういうことってあるかも知れない。僕も同じように思ったことがある」と素直に思えたんです。でも反面、「これはどうしてだろう？ この名前はいったいどこから来たのだろう?」、そんな疑問も広がっています。確かに僕はいろんなものを求めています。人間の可能性を秘めた心ということを僕は知っていきたいと思っています。たくさんの書物も読みました。ちょっと目を引くもの、「ちょっとこれは」と感じたもの、僕は手にした本を読みました。でも、はっきりしたことは分からないんです。読み終えた後に残るものは、「だからいったい心ってなんだろう?」と、そんな疑問が湧いてくるんです。どこか抽象的で、具体性のない、何かちょっと分からない。そんな書物ばかりでした。

『エルランティの光』を読んで、僕のこの心で共感する部分がたくさんありました。反面分からない所も出てきました。だから読み終わった後に、僕の心にずっしりと何かを訴えるものがあったんです。誰に聞いていいかも分からずに、僕はこの心を少し聞いてほしい思いと知りたい思いを手紙にたくしました。

毎日、僕はいろいろなことを考え、いろんなことを心で描いています。それは単なる僕の想像かもしれない。でも、違うことだってたくさんあるんです。だってこの心って理解できないことがたくさんあるんです。心でなくても、この世の中には不思議なこともたくさんあると思うんです。僕は何かそれが共通のものであるような気がしてなりません。見えない世界があるということ、それは漠然（ばくぜん）と僕の心でも理解しています。知っていきたいんです。とても強く求めています。

しかし、その方法が分からないんです。

今、僕は学校でたくさん勉強しています。しかし、それは僕の人間として生きていく中で、いったいどれほどの役に立つというのでしょうか。確かに生活するには漢字が読めたり、計算ができたりすることは必要なことかもしれない。でも、すさまじい勢（いきお）いで記憶しなくてはならないことがいっぱいあるんです。僕はお友達ととっても仲良くしたいんです。でも、なかなかそうはいかない。

「あの人にだけは負けたくない」とか、「もっとよい点とらなければ」とか。そんなことで心苦しめている自分もあるんです。もっと皆と仲良く、楽しく毎日を送っていきたいと思っているのに、僕の心にはたくさんのとらわれがある。勉強だってしなければいけないって、そんな時期でもあるんです。何かホッとするような、そんな心の余裕を求めています。

あの本を読んで、たくさんの物にも意識があること知りました。とてもうれしかったり、いとしく思ったりしました。

僕の話を真剣に聞いてくれる人いませんか。心を打ち明けて、心で会話できる友が欲しいのです。
僕の心は求めています。

さて、当時の出版の話題と言えば、やはり、『ブッダの教え』出版記念講演会のことを挙げないわけにはいきません。
残念ながら、著者の合田秀行さんは、現在、事情があって学びには集われていませんが、今も共に学んでいる仲間だと思っています。
学びのことを知りながら、北海道の学生さんのように集えない人、いったん学びに集っていながら、何らかの事情で、今、学びの場に集えない人たち、そんな人たちも、みんな大切な仲間のように感じます。
特に合田さんは、「エルランティの光出版」スタート時点からの盟友とも言うべき存在です。
その合田さんが、この学びにつながった経緯を自ら書かれています。少し長くなりますが、当時のことを知る上で興味深い証言であり、『ブッダの教え』出版記念講演会の内容ともリンクしておりますので、その要約をここに掲載させていただきます。
なお『ブッダの教え』出版記念講演会は、「出版」と「セミナー」がリンクした最初の興味深い試みであり、このような試みは、このあと『意識の流れ』出版記念講演会を待たねばなりませんでした。

◎ 合田秀行さんの証言

幼い頃から、特に大病を煩ったというわけではないのですが、脆弱で、運動神経も鈍く、必然的に内向的性格であった私は、劣等感の塊でした。対照的に、弟は、スポーツ万能で、いろいろなクラブ活動や大会でも活躍していましたし、それでいて、度々オール５を取っているのでした。そうした弟が自慢でもありましたが、自分なりにも違った意味で、認められたい、自分を顕わしたいという欲が膨らみ、その内向的性格と相俟って、中学生の頃から、

文学へ、哲学へ、さらに、宗教へと興味の触手を延ばしていったのです。

何か特殊な分野で認められたいとか、人並み外れた力を身に付けたいという願望が強く働いていたのです。それが、やがて、他力信仰へと進んでいった動機であると思います。

それが顕著になりはじめた高校生時代のことですが、町立の図書館で、桐山靖雄氏の『密教ー超能力の秘密ー』という本に出会いました。以来、『変身の原理』、『念力』などの著書や、桐山氏の主催する会の『メディテーション』という雑誌も買い求めて、読み耽りました。

やがて、親許を離れ、勝手が許される自由の身になったのをいいことに、本格的に他力信仰の道を歩み始めることになりました。先程も触れた現在の阿含宗に入信し桐山氏から直接に宝塔を頂き、千座行を開始したのです。

しかし、教理的にも多くの疑問を感じ、会内部の問題や商売的な運営の仕方に耐えきれず止めるに至りました。

しかし、その後、阿含宗は脱会したものの、まだ他力信仰の本質に気付くことなく、さらに深みへと埋没していきました。一々の具体的名称をあげることは省略しますが、幾つかの会にも入りましたし、著書を通じてどれ程の間違った教えを信じてきたことでしょう。

この頃から、学問の世界に対する憧れも増大してきました。東大名誉教授であるT先生の宗教学概論に感銘を受けたことが、最大の要因でした。先生の主催する坐禅会にも熱心に参加し、幹事を任されるようにもなりました。流れのまま、大学院に進み現在に至っているのですが、大学の４年頃から、体調をくずしてしまいました。所謂、自律神経失調症です。いろいろと検査もしましたし、民間療法的な治療も試みましたが、一向に快方の兆しはありませんでした。メニエール病といわれる強度の眩暈の発作を始め、頭痛、肩凝り、吐き気、神経性の下痢、腰痛など

諸々の症状によって、大学へ行くのがやっとという状態でした。苦痛を紛らわすためにも、ついつい横になってしまい、一日平均12時間以上眠っていました。ある時には、癲癇的な症状に見舞われ、ほんの数秒間でしたが、意識を失い、家族のものには随分心配を掛けました。そのような状態が、今年の初めまで続いていました。

2月のことです。大変お世話になっているK教授から、この会のことを伺い、研修会も熱心に勧めて下さり、2月25・26日の橋本での反省研修会に一緒に参加することになったのです。ところが、K先生は、私に勧めて下さった翌日、脳内出血のために日大病院に入院され、結局、一人で橋本センターへやってきました。正直言って、その時の気持は、せっかくK先生が、誘ってくださったのだからという義理と、霊道者による現象に対する単なる興味でした。

最初の講話が終わってすぐの現象で、早速手を挙げました。当時、疑問を感じ始めていたイギリスのベンジャミン・クレーム氏の意識を出していただきました。説いている内容は、その通りで、英語でも語ってきたことには驚きました。しかし、もう少し具体的な内容を期待していたので、若干の物足りなさを覚えました。

やはり、自分の意識を出してもらうべきだと思いました。率直に田池先生に話ましたら、夜の質疑応答の時の最後のほうで、また出していただき、自分の意識を聞く機会を持てました。もっとひどい内容が出ると思っていましたが、その時は己を表したいという名誉欲に関する部分が集中的に語られました。終わって先生に感想を尋ねられ、躊躇なく「その通りです」と答えていました。

結局、その日は、シティホテルを取っていただき、翌日の成田行きは止めることにしました。神社仏閣に存在するのは、真の神仏ではなく、サタンであるということが私なりに理解できたこともありますが、ぜひ明日も参加したいという気持が強くなっていたのです。田池先生に対する印

司会の塚越広子さん

加藤正武さん、文子さんご夫妻

無事に出版記念講演会を終え関係者一同で記念撮影

象も、今まで接してきた宗教家とは違いました。うまく表現できませんが、父親に対する感情と似ているように思います。いや、父親以上に父親であるような感覚というべきかも知れません。

教理的には、まだまだ疑問も多く、頷(うなず)けない部分もありましたが、田池先生に対しては、心開いていたと思います。勿論(もちろん)、従来の他力信仰で培(つちか)ってきた感覚で、崇拝(すうはい)の対象とする感情も現に働いていましたが、それを変えなければならないことを先生から気付かせていただきました。

翌日、センターを出る時に、お世話いただいた加藤正武さんが言葉を掛けてくださり、手を握ってきたときのことは、本当に忘れられません。なぜか涙が込み上げてきました。

駅までの間も、涙は止まりません。こんなに温かい方々に接したことはありませんでした。このことは終生忘れることはないでしょう。

その直後から、体調にも自信が持て、生活に支障をきたすような不快な症状はなくなってきました。勿論、違った形で体に現れる現象はありますが、以前とは比較になりません。また、そうした現象の原因が分かり、それは、神から遠ざかっていることの信号であるとも思えるようになり、以前のような対処の仕方とはまるで違ってきたのです。

１ヶ月後のロサンゼルスでの研修会にも参加させていただくことができました。

以前の健康状態では、このような海外での研修など夢のようなことなのですが、加藤さん御夫妻が温かく導いてくださった御陰で、何の不安もなく、行程を終えることができました。

心から感謝申し上げます。

久保徹夫さん、明子さんご夫妻

照屋盛永さん（会場前で）

1990年4月7日～4月17日の ロサンゼルス反省研修会に参加しました！

結婚10年目、8人家族大所帯の中で嫁姑（よめしゅうとめ）、夫婦、仕事、育児、様々なことにどんづまり、生きることに疲れていました。子供の学資保険を解約、そのお金でパスポートをとり、10歳、8歳、6歳の子供を連れて参加。アメリカには牧村さん一家がおられるということを頼りに出発しました。夫にはどれだけ頼んでも仕事があるからと一緒に来てはくれませんでした。

いよいよ出発の朝が来て、「空港まで送ったろか」という夫に、私の怒りは頂点に達し、「いらんわ！！」と子供の手をひっぱり家を出ていきました。

結婚して10年、先生とお会いして10年目のことです。

電車とバスを乗り継（つ）いで2時間、やっと空港に着いた途端（とたん）、荷物を持って歩いておられる先生を見つけました。

先生だ！「おはようございます」と寄っていきました。「よう来たな」の言葉を期待したように思います。

先生はこちらを見るなり一言。「どこ行くの？」と言われました。私はポカンと置いてきぼりにあったような感覚になりました。すぐ、今朝の夫とのやりとり、その他一連の自分のとった行動、言葉を思いました。先生は何でもお見通しやな。

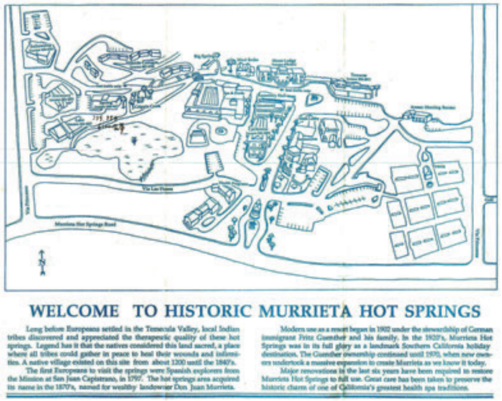
私は一気に気落ちして子供と4人で集合場所まで向かいました。

お世話をしてくださったのは満尾さんご夫婦でした。ご主人には出発前から子連れということもあって色々注意点からパスポートのとり方まで親切に教えていただき、とても心丈夫になりました。ありがとうございました。

マリエッタ・ホットスプリングリゾート

アメリカ、ロサンゼルスに着いてバスでマリエッタに向かいました。途中高速道路に乗りましたが、足場が鉄筋ではなく木を組み合わせたように作ってあったのが驚きました。

マリエッタは温泉施設で、プールもありました。部屋はコテージのようになっていたと思います。部屋の壁紙は見たこともないような艶（つや）やかな色彩でインディアンを思わせるような感じでした。インディアン、インディアン、一緒にきた子供たちもインディアンに見える、そんな思いに駆（か）られま



した。踊りだしたくなるような、歌いだしたくなるような感覚、懐かしい懐かしい思いにふけったことを思い出します。

見渡せばあたり一面芝生のような空と草だけが目の前に広がっていました。風が吹き広い広い空間、うれしかったです。朝から晩まで家事、育児、嫁姑の繰り返しから、おとぎの国に来たかのような自由と安らぎ、安心、そんな中でのセミナー参加でした。

鈴木健司さんが泳げないという話を聞いて、田池先生は「そうやね、怖いね。水が怖いんでしょ」と言われました。「はい」と言われる鈴木さんに、先生は「大丈夫、明日には泳げるよ。原因を取り除けばいいだけや」と言われたように記憶しています。そして次にお会いした時、鈴木健司さんはみんなと一緒にプールに入っておられました。今思えば田池先生の次男さんが参加されていました。

マリエッタで２泊してホリデイインホテルへ移動しました。私は持ってないのですが、みんなでホテルの前で記念撮影をしました。走っている車から手を振ってくれるアメリカの方々を見て、日本ではありえないことだと感じ、うれしさのあまり大きく手を振り返したことを思い出します。

そして次の日は自由行動となっており、本場アメリカのディズニーランドへ行きました。先生から「どこへ行くの?」と聞かれてそのことを伝えると一言「そんなとこ行かんでええのよ」でした。

今思えば本当に先生の言われる通りだとわかるのですが、若かった私は、子供と一緒になって喜んで行きました。お化け屋敷だという部屋で皆が怖がっているのに、英語の解らない私たちはちっとも怖くなくて、「なんだこれ?」という感じでした。

次の日は板倉さん宅での勉強会でした。

きれいな家で庭にはダルメシアンという101匹わんちゃんがいて、噴水があってプールがあって、私には夢のような景色がそこにはありました。

板倉さん、牧村さん、現地でお世話してくださった皆さん、ありがとうございました。

たくさんの方が利用したことでおトイレの水が詰まって大変でした。すべてが良き思い出としてこの胸に詰まっております。目を閉じればあの景色、あの言葉、皆の笑顔が蘇ってまいります。

板倉宅から帰りのバスで少し登りから下りになりかけたとき、その向こうからキラキラとダイヤモンドの輝きのような、見たこともない光輝く一面が見えてきました。別荘地の光と教えてもらった記憶がありますが、本当に見たこともない輝きが空に向かって伸びてるような、そんな風景でした。

マリエッタでは、雄大な自然の中で子どもたちも大はしゃぎでした。

勉強会では先生に呼んでもらって前にも出させていただいたのに、その内容はちっとも覚えていません。「えーんえーん」と子供のように泣いたように思います。持っているものをすべて落として、泣いている、子供のように泣きじゃくっている私だったように思い出します。

勉強会がすべて終わり、先生にお礼を言いに走り寄ったとき、先生はどこを見るでもなく、「いよいよこれからは波動の勉強や……波動は危険が伴うけどな」と、言われました。

こんな夢のような体験を夫婦で参加したかった。これは悔いても悔やみきれない正直な気持ちです。また帰りの飛行機ではあの家に帰りたくない、先生と一緒に帰りたいと思ったのも思い出されます。

あれから30年、90歳になられた義母と主人と3人で暮らしています。お母さんと呼べる人が存在することを喜びながら暮らしています。

私の道はこの道だけです。主人とこの人生学ばせていただきます。金と神を離す、このハードルを飛び続けていきます。

「あまいあまい」と中から聞こえてきます。

「中へ中へ向けるんやで」とふるさとの歌が聞こえてきます。欲たれの私は一杯います。そんな私と学んでいきます。

ありがとう、私。このような機会をくださって、ありがとうございました。

（田中美穂）

ニューヨークレポート vol. 1

1990 年代のニューヨークの街の紹介です。当時、ニューヨークの日本書店には「エルランティの光出版」の本が並べられており、日系の方は、日本語の新刊が並ぶのを心待ちにしておられました。ここで英訳進行中の本のことが書かれていますが、今現在、UTA ブックには『光のなかへ』の英訳のみが残されています。またエルランティの光出版の事務所をグリニッジビレッジに置く話は、話だけで終わっています。

さて、そのニューヨークの中心であるマンハッタンですが、ほぼ東京の山手線内ほどの面積です。

北からおおまかに区切っていくと、100 丁目までがハーレムで、さらに 59 丁目までのセントラルパークをはさんで、その両側がアッパーイーストサイド、アッパーウエストサイドと続きます。さらに 14 丁目までがミッドタウンで、エンパイア・ステート・ビルをはじめとする高層ビルが林立しており、観光の中心地となっています。

このミッドタウンにある紀伊国屋書店、ＯＣＳ、ブックスニッポンの三軒の日本書店にエルランティの光出版の本が置かれています。また、マンハッタンの西側を流れるハドソン川を渡るとニュージャージー州になりますが、そのヤオハンプラザにある紀伊國屋書店にも本を置かせていただいています。読者からの問い合わせも、入ってきています。ミッドタウンのさらに南がダウンタウンで、その中にグリニッジビレッジ、イーストビレッジ、ソーホー、チャイナタウン、リトルイタリーなどと呼ばれるエリアがあります。

現在、エルランティの光出版 (エルランティ・パブリッシング) では、このグリニッジビレッジに事務所を探しています。グリニッジビレッジは、その名の通り、かつては農村だったところですが、1920 年頃から作家や芸術家が住むようになり、ビレッジとしてのカラーが形作られるようになりました。その中心のワシントンスクエアではパフォーマンスが繰(く)り広げられ、若者や観光客で賑わいを見せています。

日本語の本の他に英訳の『神の子の道』やニューヨーク用に編集したパンフレットもこちらの精神世界の書店などに置いてもらっています。『光のなかへ』の翻訳も完了し、こちらの編集者に最終的なチェックをお願いしているところです。『アトランティスの悲劇』、『愛のなかにて』、『エルランティの光』などの翻訳も進行中です。

田池先生がニューヨーク滞在中は、ハドソン川に面したＮＪの久保さんのお宅で一日二回の瞑想会が持たれています。日々表情を変えていくハドソン・リバー、豊かな緑、そして、たくさんの小鳥やリス、時折姿を見せるあらい熊たちが集まって来られる方々の心をなごませてくれます。(合田秀行)

第 1 回ニューヨークセミナー（1990 年 6 月 25 日〜7 月 21 日）

ところで、私はこれから250年後、アメリカのニューヨークというところに生まれてきます。その時の私の名前はアルバートと言います。「えっ、そんなことどうして分かるのですか、そんなこと信じられない」と言われる方も、最初から話を否定しないで、もしかしたら、そんなこともあるかもしれないなあと思いながらで結構です、私の話に耳を傾けてください。

私は今世の自分の仕事をきちんと終えて、この世を去ります。一旦、肉の姿を消します。そして、250年後に私は再び生まれてきます。

その時、私は大きな財力を背景に生まれてきます。その財力をフルに活用して、この真実の道を広めてまいります。もちろん、その時も私の心の中には、それによってさらに名声を得るとか、巨万の富を得るとか、そういう思いなど微塵もないということだけは知っておいてください。

肉的な環境はすべて整えられているところに、私は今世と違い、心が敏感な状態の肉を持って生まれてきます。心に色々なものを感じて、肉的にはどこか憂いを漂わせ、何かを探し求めている青年です。それがある日突然、まさに一瞬の出会いにより私は自分の心を開いていくのです。そのことにより私の生まれてきた意味も、それから成していくことも、すべて一瞬のうちに自分の心に蘇ってきます。すなわち、今世の学習で心の体験を経た私の仲間達の出現により、私もまたこの心にすべてを蘇らせていくのです。その方との劇的な出会いは一瞬のうちに喜びの波動となって、全世界、そして、全宇宙に流れていきます。そうです、全宇宙に流れていくのです。

その時は、今と比較できないほどメディアの分野は進んでいることでしょう。従って、そのメディアを通して全世界に広まっていき、そこで心の窓を開かれる人達もあるでしょう。今よりも、もっと地球環境は変貌を遂げていますが、その中で私達の出会いは用意されています。

これから250年かけて、心で分かった方から流れる喜びの波動は、この地球に留まることなく全宇宙に流れていきます。その波動、そのエネルギーは、すべては喜びの世界であり私達は喜びの存在でしたと、肉を持つ、肉を持たないにかかわらず、大いなる目覚めを全宇宙に促していきます。

その中で私とあなたとの出会いがあるというわけです。

（『意識の流れ』より）

Incidentally, I will be born two hundred fifty years from now in New York, in the United States. My name at that time will be Albert. Even though you may think, "What? Why do you know that? I don't believe it!" please do not deny my story from the beginning, and continue to listen while simply trying to imagine that something like this could happen.

I will leave my present time after completing my life work. My physical body disappears temporarily, and then I will be born again with a different physical body in two hundred fifty years.

At the time, I will be born with a background of huge wealth. I will spread the path of truth fully utilizing that wealth. Please keep in mind here that I will have no intention of getting richer or attaining greater fame by doing so, just as I don't now.

I will be born into a wealthy environment and, unlike myself in my current life, I will be sensitive to the world of consciousness. Feeling many things in my heart, I will be a young man who is seemingly melancholy, in search of something. Then one day suddenly, I will open my heart to the world of consciousness at the moment of an encounter. From this incident, the memory of why I was born and what I should do from then on will come back to my heart in an instant. In other words, from having met people who found the truth in their hearts through this study in this lifetime, I will also remember everything in my heart in the future. That one encounter will instantly transform into vibrations of joy and flow out to the entire world and Universe. Yes, it will flow out to the entire Universe.

During this time, media technology will be greatly advanced, in no comparison to what it is currently. Therefore, through advanced media, the truth will spread rapidly to the entire world and, through it, there will likely be people who will open their hearts to the world of consciousness. It will be a time when the ecological environment has changed drastically from the present. Yet, this will be the setting of where we will meet.

Over the next two hundred fifty years, the vibrations of joy that flow from people who have realized the truth will spread to the entire Universe, not stay only within this Earth. The vibrations and energy will urge a great awakening throughout the entire Universe, regardless of whether one has a physical body or not. It will awaken a realization that everything exists within a world of joy, and that we are an existence of joy.

And our future encounter between you and I will happen within this event.

("The Flow of Consciousness")

ニューヨークレポート vol. 2

1990 年 10 月、第 2 回のＮＹでのセミナー（第 158 回反省研修会にして最後の反省研修会になります）も終了し、参加者一行は日本へと引き上げていきましたが、編者と高橋謙一郎さんは、ＮＪの久保邸に引き続き残留することとなりました。この間、ＮＹでの書店営業やパンフレット配りに日々を過ごしますが、日本では「エルランティの光セミナー」が発足することになり、その第 1 回が、沖縄・鹿児島で開かれておりました。

この日、朝の瞑想が終わるや、僕と牧村さん夫妻、それに高橋さんの 4 人は久保邸を出発、マンハッタンへ向かうバスを待った。やがて道路が西へ大きく曲がる辺りから、バスがゆっくりと顔をのぞかせた。すかさず手をあげてバスを止める。運転手の顔ぶれは大体決まっている。1 ヶ月ほどの間に四人位の運転手しか見かけなかった。この日の運転手は大柄のロバート・ミッチャムを思わせる人物、切符を受け取る時、軽くうなずいてくれる仕草（しぐさ）が実にいい。

左車窓に、ハドソン川とマンハッタンのビルの群れを眺め（なが）ながら、およそ 30 分、バスはリンカーン・トンネルをくぐり、ポートオーソリティーへと到着する。ここから目的のハーレムへは地下鉄を利用するのだ。ところでハーレムに来たのは、ここで『神の子の道』（英訳版）を通行人に配布するためだ。まずは腹ごしらえと、シルビアレストランで昼食を取る。一週間ほど前、合田さんに連れられ、初めてこのレストランに来た。その時、食事を終え店を出たところでシルビアさんとばったり出食わした。合田さんに紹介され握手しようとすると、彼女は「ごみを拾っていて手が汚れているから」と、手の平を隠すように差し出された。その上に重ねるように手を置き握手したのが印象的だった。別れ際（ぎわ）、彼女は私の顔をしみじみと見、一言、心配そうに言われた。「気をつけてね」と……。

腹ごしらえも終わり、アポロ劇場の前辺りへとやってきた。この辺が一番、人通りも多い。路上ではクジャクの羽やら装身具やら、様々な物が売られている。そんな黒人たちにある種の気後れを覚えながらも、精一杯胸を張り、パンフレットの表紙を、通る人たちによく見えるように掲（かか）げて配り出した。パンフレット配りは初めてではない。合田さんとワシントンスクエアーで配ったこともあるし、一人でセントラルパークで配ったこともある。しかし、なかなか受け取ってもらえない。五番街では完全に無視された。それがここハーレムでは、素直に受け取ってくれる。渡し損ねて道に落ちたパンフレットを拾い、顔を上げると、渡そうとした人の後ろに、別の顔がパンフレットを受け取ろうと待っているのだ。

これにはびっくりした。牧村さんなどは手渡した黒人から、逆に「私が神の子だ」と叫ばれたそうだ。ここには少なくとも無関心はない。好奇心ばかりでなく、何か温かなもの、さえ感じる。用意したパンフレットもあっという間になくなってしまった。帰り道、ふと思った。この教えが広まるのは、このハーレムからではないだろうかと……。(桐生敏明)

第2回ニューヨークセミナー（1990 年 9 月 14 日～ 10 月 10 日）
ワールドトレードセンター（ツインタワー）も健在でした。

ニューヨーク・セミナーでの体験

ここには、寄せていただいた「アメリカセミナーが自分にとって何だったのか」、その思いを、ニューヨークセミナーでの体験とともに順不同で掲載させていただきます。年代順に掲載するよりも、ランダムに掲載することで、ニューヨークでのセミナーの全体像が浮かび上がってくるように感じるからです。なお年代的には、第２巻に入るものも、ここに掲載させていただいております。
また、ここには掲載しておりませんが、ある方の寄せていただいた情報では、初めて参加されたアメリカセミナーが、ニューヨーク～シカゴ～ロサンゼルスと、アメリカを横断するセミナーで、ロサンゼルスでは、スーパーの「ヤオハン」で買物されているとき、店の大型テレビに、皇太子徳仁親王と小和田雅子さまの結婚パレードのニュースが流れていたといいます。時代背景が感じられるばかりか、当時の雰囲気を身近に感じさせてもらえるような情報でした。ありがとうございました。

◎谷村美智子さんの場合

1988年、田池先生が見守る中、初めて心を開いた時「アメリカへ行きます」と語っていました。自分で語りながらよく分かりませんでした。またこんなこともありました。琵琶湖セミナー会場入り口辺りで数人と先生を交え談笑中、「あんたとあんたニューヨークへ行くで」と先生に言われ、その言葉が心に残っていました。その後結婚出産。ニューヨークへは「行かなくては」という思いから、1990年長女が10ヵ月の時と、1歳4ヵ月の時に、2回夫と3人で行きました。どんな思いだったのか、この学びはアメリカへという流れがあり、「アメリカへ伝えなきゃ」という使命感と特別意識、選民意識でした。振り返ると傀儡(かいらい)状態がよく分かります。行きの飛行機で黒人の男性乗務員さんに、エルさんから持って行って欲しいと頼まれた資料の一冊を見せ真剣に目を通されたこと、また気になっていた黒人のニューヨーク市長に手紙を書いて送ったことなど、私は伝える仕事をしていると思っていたのです。お恥ずかしい話です。

今回原稿募集の案内を読み、アメリカを思い出した時一番に出てきたのは、謝罪したいという思いでした。お世話になっているお宅のお食事当番を告げられたのに、何も出来ずご迷惑をお掛けしたのです。あり得ないことをしてしまいました。自分が偉過ぎて相談すら出来ませんでした。本当に申し訳ありませんでした。そんな自分をずっと許せずにいました。そんなお粗末(そまつ)な私だから長い間チャネラーを誇れたのです。大バカです。全部が闇だったと言われるまで分からなかったのです。当時、意識を受けることが自分の仕事くらいに思っていたので、ニュージャージーに行ってもカタカタ打つ毎日でした。

アメリカに行ってもそびえ立っている私は苦しかったです。アメリカでの転生を思い出したくなかったのか、「シルビアレストラン」と聞いただけで、拒絶でした。南北戦争、血の海、許せない思いが噴き出し、過去の思いを喜びで受け入れるという状態ではなかったです。

セミナーがニューヨークの北野ホテルでありました。入ってすぐ気分が悪くなり、セミナー開催中、隣の部屋で寝ていました。そのベッドを囲って見守ってくださった仲間たちが居てくださいました。起きられない私に田池先生は何度も「田池留吉に心を向けて」と心の向け先を変える促（うなが）しをしてくださいました。その間も子供の面倒を見てくださる仲間の存在がありました。私は一人ぼっちと思い込んでいましたので、アメリカでの勉強会を振り返ると、皆さんに許され温かく見守られていたことを強く感じ、感謝の思いが涙とともに溢れてきます。温かな中にいました。ありがとうございます。

忘れられない思い出があります。ハドソン川に面したお宅のバルコニーに出た時のことです。先生が「上を見てご覧」と私に言われました。そこには見たこともないものがありました。家の真上に厚い円盤型のそれはそれは大きなモコモコした雲があるのです。空を見渡し他の雲も見ましたが、そこだけです。UFOの飛来（ひらい）かと思いました。先生が何か語られた記憶はないのですが、私たちだけが学んでいるのではありませんと聞こえた気がしました。宇宙からの集結と不思議な雲に驚き、あの光景は今もまぶたに焼き付いています。

今思えば、今世のアメリカでの学びは来世ではないかと思えます。一足先に来世

ニューヨーク港とニュージャージー州をつなぐニューヨーク・ウォーターウェイ

大平佳子さんが 20 歳で再び訪れた時の写真

を体感したのではないかと思えてきます。私はアルバートと出会っていました。今回の振り返りを通して、アルバートとともに歩む思いをさらに強くしました。

こうして打ちながらも辛く悲しい戦争時代の私が喜びで泣いています。思う、心を向けることの凄さをまた確認です。ともに帰ります。

このような機会を本当にありがとうございました。

◎大平佳子さん（谷村美智子さんの娘さん）

生後 10 ヶ月の時と 1 歳 4 ヶ月の時の 2 回、母に連れられて行ったと聞いています。当時のことは覚えていませんが、小さい頃から田池先生の温かい視線やほほえみと一緒に波動を感じていたことは心に覚えています。

写真が少し残っているので見ていると、「うれしいだけだったなぁ」と思います。なぜアメリカセミナーの場にいたのかを思うとき、私の中にある道しるべのようなものが心に響いてきて嬉しい思いが大きくなります。

アメリカセミナーは私の原点でした。来世に向けて確かな目印を心に残して、日本で膨らませてきたエネルギーを見ていく流れの中にあるように感じます。

私はアメリカに再び肉を持つ意識です。私は、あの地をまた思い出します。日常の中のふっとした瞬間、人生において何かとても大事なことを忘れているんじゃないかと、心に上がってくる自分を感じます。

また再びニューヨークの地でアルバートと出会えるその時を、今か今かと、心は待っています。その思いに応えていきたいと思います。

◎ 高橋敬子さんの場合

私が参加したアメリカセミナーは 1993 年 6 月に行われ、ホテルはニュージャージーのホリデイインでした。

セミナーの日程は、このニュージャージーのあと、シカゴとロスでも行われたと思います。私は仕事の都合でニュージャージーのセミナーにだけ参加しました。

1990年8月に初めて田池先生にお会いしましたが、「学び」はそれより何年か前に母の病気をきっかけに叔母が『光のなかへ』という本を送ってくれ、エルニュースという機関紙を購読していました。

我が家は神棚があり、年末には新しいお札を受け取り新年は神棚を拝(おが)むという家庭でしたが、私は全く自分の他力のエネルギーに気が付いていませんでした。

それで、「学び」も知っていて損はないかな～程度の欲とふたり連れでした。

アメリカセミナーに参加しようと思ったのも、多忙な仕事を休む口実に、当時ニューヨークに住んでいた元同僚にも会えるかな～とレクリエーションありきの参加でした。

田池先生にお会いしてから1度だけ地元であったセミナーに参加しただけですので、知り合いもいなくて同室になったAさんとも、初めましての間柄でした。

Aさんは年齢も近く、話しやすく打ち解(と)けるのも難しくありませんでしたし、自分の思いや反省をずいぶんな量、ノートに書いているようで、「えっそんなこと言っていいの」とちょっと引いてしまうような思いなど、飾らずに初対面の私に話すところに、とてもびっくりしました。

Aさんは、少しずつ敏感になってきた状態だったのでしょう、滞在中のほぼ毎晩、私が寝た後バスルームで泣いているのが聞こえてきました。セミナー中も指がこわばったり、泣きじゃくったり、反省をしていない鈍感な私には「これ何？？？？」の連続でした。

母親の反省で「してもらったこと、してもらえなかったこと、してあげたこと」をノートに書くことはしていましたが、自分の素直な思いを書き連(つら)ねることをしていないことに気づかされ、このアメリカセミナーをきっかけに「こんちくしょう」の思いを恐る恐る書くことを始めました。

私は自己流の学びをして、欲で良いとこ取りをしていたのだと気づき、その後、いろいろな機会を経(へ)て自分の肉をセミナーに運ぶようになりました。

Aさんの奇妙とも思える現象の姿は、「助けてください、救ってください」と苦しいのに「それ誰のこと？」と生きてきた私に、「本当の私を知りたい、それがこの学びなのかな？」と思わせてくれたのです。

そして、私は今も学んでいます。

「偶然は何ひとつない」と田池先生が良く言われましたが、あの時、同室がAさんでなかったとしたら、私のアメリカセミナーはニューヨークに行って友人に再会した楽しい旅の思い出で終わったでしょう。

あれから、27年が過ぎました。

あのアメリカセミナーに思いを向けると「懐(なつ)かしい、ありがとう」のひとことです。

250年後につなげるように、残された時間、命をかけて学びを続けていきます。

◎ **黒田ミチルさんの場合**

ニュージャージーセミナーには、今回初めて参加の方があるというグッドニュースもあり、会えるのを皆で楽しみにしていました。

休憩時間だったと思います。階段の踊り場のような場所だったか、ラウンジだったのか……参加者が田池先生の周りで談笑していました。

田池先生が「意識を向けなさい」とチャネリングの勉強を始められたのを思い出します。しばらくチャネリングが進んで、勉強部屋に「場所を移して皆でチャネリングの勉強を続行しましょう」となって、田池先生と一団になっていきました。もうすでにノートを広げて反省をしている仲間がたくさん席についていました。

他のチャネラーの方も呼ばれて、私の意識も出してくださいました。

「マリア信仰の間違い」「夫婦の問題」でした。

小学校を卒業し、アメリカツアーに参加していた息子が、セミナーで前に出て意識を出してもらいました。

みんなも一緒に喜んでくださいました。

「砦を守る祖母とともにいる孫」の意識が出ました。

夫婦の問題だけではなく、子供たちにどんな思いを流しているのか、反省を促されました。一緒にセミナーに参加すると、腹痛を訴える息子です。申し訳ない思いでいっぱいです。

7月27日には東京センターで中学生以上、30歳未満の子供たちだけが参加できるセミナーの時間が、夕方5時から7時まで設けられました。

アメリカのセミナーから繋がる海外の方々、そして日本から春休みだから参加できた子供たち……。

大変なアメリカセミナー、開催してくださり、ありがとうございました。

◎ **水島美恵子さんの場合**

1990年6月に初めて義妹への義理を果たすつもりで参加したセミナーで長年疑問に思っていた「平等」のことを先生が「みんなお母さんから生まれてきた」とはっきりと淡々と話されたとき、肉の私には自覚なく大粒の涙がしたたり落ちました。

今は、この時肉の私でなく意識の私が学びの場にあることに大手を振って喜んでいたとわかります。わけのわからない義妹の誘いに絶対騙されるものかと意気込んでいたものが、ことごとく「いや違うぞ」と横に首を振れないばかりか、心に響くものばかりで3日間続いたセミナーでした。

このセミナーに参加したのがきっかけで、それからというものは「最終列車に間に合ってよかったですね」、時を経て「アメリカに行くと自分の大きな闇に出会える」と、先に学ばれてる方たちに教えられたことを「遅れをとってはなるものか」「早く追いつかねば」と、焦る気持ちを学びに対する熱心な私の姿勢と置き換えて、必死

でセミナー参加してきました。

大闇に出会えたらどうするのかなど考えもせず「大闇って？」と欲先行の思い満載で NY セミナーに初めて参加の前夜、突然、頭をハンマーで殴られた痛みで目が覚め、それから嘔吐と下痢の繰り返し、悪寒が走って震え上がっていました。

でも恐怖はなく、ただひたすらこれは供養されない意識が何かを訴えていると、学びの本筋もまだわからないまま『光のなかへ』という本にある供養のマニュアル通り、「あなたはどなたですか?」から始まり、色々思いを伝えていました。

でも何も信じていないのに伝わるはずがありません。疲れて「明日からのセミナーに一緒に参加してください、お願いです」と懇願するばかり、まったく今思うと滑稽です。それでも当時は真剣でした。

そしてセミナーで意識を出してもらった時、「俺はお前が来るのを待っていた」とインディアンの呪術師 (シャーマン) の思いが語られ、自分の思いが通らなければ、たとえ親であろうと子供であろうと許しを乞うても許さなかった我の思いを心に入れよ……恐ろしい思いが続き、私はこんなひどくない、いいところだってあるはず……これは違う、違うと受け入れられず蹴散らしていました。

反省につなげるその糸口すら見えないまま、修学旅行的な参加で終わっていました。それから何度か NY セミナーに参加させていただきました。その中で 40 数名でハドソン川ほとりにある久保邸で先生の出席されない反省瞑想勉強会の時、久保邸の大きなガラス窓越しに行きかう飛行機や鳥が羽ばたく様を絵画を見ているようにボーッと眺めていると、「間違いだらけだった、私が手を差し伸べていたのではなく、手を差し伸べられていたのは私のほうだった」と思いが涙とともに溢れ、

ＮＪ、エッジウォーターの久保邸から眺めるハドソン川とＮＹ

母を思うと何とも言えない暖かな温もりに包まれているうれしい体験がありました。

その後、ロスのセミナーにも参加して、その都度(つど)色々心に響くものが本当に心を変える思いになるまで 20 年以上かかりました。

今おな、肉基盤で生きてきた己偉いその膨大な残骸(ざんがい)とともに次元移行に向けて歩んでいます。

アメリカセミナーと思うと、肉でも楽しい思い出がたくさんありましたが、やはり NY、NJ、ウエッジウッド、ハドソン川と思い出されると 250 年後の思いにアルバート、アルバート……必ず帰るんだの思いが、　大きく大きく心を占めていきます。

◎ 大槻明子さんの場合

‘88 春、幼い息子の手を引き、単独で New York に渡りました。今思えば、中の思いに突き動かされていたのでしょう。当時行かねばならぬ理由など何一つなかったのですから。

その後 ’92New Jersey Holiday Inn で初めてのセミナーに参加しました。息子と同じ日本語補習校に通う生徒のお母さんが学びのことを教えてくれたのです。何の予備知識も予習もなく訪れた会場は、私には摩訶不思議にしか見えませんでした。セミナーはチャネリング一色。訳もわからずチャネリングを受け、それは当時少しも私の心に響く物ではありませんでした。喜びの自分と出会う学びだと聞かされていたのに、自分のチャネリングを聞いてすっかり落ち込んでしまったのです。当然です。素晴らしい自分など出るはずがありません。帰宅後、連れていってくれた方に丁寧にお断りしましたが、その方は「そうですか」と優しく言われただけでした。

1ヶ月が経(た)ったある日、眠れない夜がありました。ふとその方が録音してくださっていた私のチャネリングのテープを聞こうと思い立ちました。

不思議でした。「これは違う」と心は反発しているのに、涙が止まらないのです。数日後その方に改めてお電話しました。「また機会がありましたら行かせてください」と。

その後何度か New Jersey の久保邸でお勉強会にも参加させていただきました。内容は退屈でセミナービデオで居眠りすることもありましたが、「もう止(や)めよう」とか「来なければ良かった」と思ったことは一度もありませんでした。

当時息子は7歳で、アメリカでは 10 歳以下に一人で留守番をさせると犯罪になるので連れていきましたが、彼が喜んでいたせいというのもありました。

数ヶ月して再び New Jersey でセミナーが開かれました。その時は自分で質問を考えて、チャネリングを希望するというものでした。私は特に何も心に上がってこなかったので「あまり安眠できないです」というような当たり障(さわ)りのないようなことを聞いてみました。

田池先生が「大したことないんでしょ。お薬も飲んでないんでしょ」と聞かれたのが初めての会話です。気さくで優しく同じ目線でお話ししてくださる方というのが感想でしたが、印象は薄かったと思います。

久保さん始め、久保邸に来られる方々はみんな明るくて、楽しく過ごしました。New York マンハッタンの殺伐とした中で、子育てに孤軍奮闘していた私には、ある意味救いだったのでしょう。

半年後にビザの失効が控えていました。心のどこかで、この学びに取り組んでいこうと自分に言い聞かせることで、ビザの更新を待たずに日本に帰国しました。

瞑想で New Jergey に思いを向けると、私が見えます。一度一人でバスに乗って久保邸のお勉強会に行ったことがあります。ハドソン川の畔のバス停へ誰かが車で迎えに来てくれることになっていました。その車を待っている私の後ろ姿が見えるのです。ハドソン川を見つめながら車を待つ私。その私を見ると、ただ愛しくて、

ＮＪ、エッジウォーターの久保邸（右の写真にはハドソン川にかかるワシントンブリッジが見えている）

飛んでいって抱き締めたくなります。

あぁ私は本当に会いたかった。どんなことがあっても田池留吉に出会いたかった。本当のことを知るためには地獄の果てまでも行ってやるというほどの勢いでした。申し分のない環境にあった日本を後に、お金もビザもコネも何も持たずに夢中で飛び込んだ New York。

でも意識は知っていました。成田空港で飛行機が滑走路から飛び立った瞬間、中からマグマのようなエネルギーが嗚咽と共に突き上がり、先に寝入った息子を良いことに、枕に顔を埋めて声を殺して泣きました。悲しい怖い寂しいとは違う、何とも言えない不思議な感覚を今でも覚えています。

この学びに出会えたアメリカの地。マンハッタンから New Jersey へ通ったあの光景、きっと思い出すことでしょう。250 年後の私。やはりハドソン川の畔で誰かを待っているのかもしれません。

瞑想の中でそれが少しずつ明らかになってくるのだと思います。瞑想を楽しんでいきます。

◎ 菅原智子さんの場合

250 年後の集大成の時に、私たちはあの地に肉を再び持ってきます。だから私

たちはあそこに肉を運びたかったんです。250 年後の私にしっかりと伝えたかった。私は自分自身に伝えたかった。このアメリカの地に肉体を運び、この空気の中で伝えたかった。広いアメリカの地で、心をのびのび広げなさいと伝えたかった。

はい、私たちはアメリカ、アメリカの意識です。私たちの国もボロボロ、形は本当に荒れ果てています。ですが、それでも懐（ふところ）大きなアメリカ、崩壊もすべて受け入れ、そして最終の時に、あなた方の肉を受け入れていきます。どうぞ、心の中の喜びをしっかりと大きくしてください。形ではなく、本当に形ではなく、心に宿（やど）る喜びが自分だとしっかりと意識の転回をしてください。それだけが、来世までの課題です。肉をつかめば堕（お）ちていきます。

ああ、だからこそ、そんなアメリカに、すがる肉などどこにもないような環境で肉を持ちます。そんな環境の中だからこそ、意識の転回が促（うなが）されていくんです。懐（なつ）かしい、懐かしい、懐かしい思いを思い出し、崩壊は喜び……と噴き上げていくんです。

私の初めての海外旅行は、アメリカだった。この学びに出会う前のこと。

友人が語学留学しており、「もうすぐ帰るからおいでよ」と誘われ、友人Aのいるサンディエゴ、遠い友人Bのいるサンフランシスコ、友人Cのいるニューヨークへと、それぞれ1週間程度、3週間の初旅行だった。最終週に、ニューヨークへ渡り、うれしさより、どこに行っても苦しくて、そして恐怖な毎日だった。

ハーレムに行きたいと思い、友人同行で、治安がまだよい辺りをうろつき、公園の一角で、初めてほっとしたのを思い出す。あの時の光景をはっきりと覚えていて、このニューヨークの旅で、やっと息ができる！と、思ったのだ。

その後、私はこの学びに出会い、ニューヨーク、ハーレムは、私にとって、来世の感覚なのだろうと感じた。

学びに集ってからの、初めての海外セミナーは、1週間位のロスの板倉邸でのミニセミナーだった。ロスの友人を頼り、といっても初対面の友人？ だから、とんでもない状況であったが、「若いということは、肉を掴（つか）んでいない」ということか！と改めて思う。

毎日、友人の家から、Wさんの車に拾ってもらい、板倉邸まで行き、のんびりとゆったりと贅沢（ぜいたく）な時間を過ごした。日本からは、田池先生と陽子さん、桐生由美子さんが来られていた。現地の人たちや日本からはMちゃん、イギリスのRちゃんも来ていた。

本当にゆったりしていて、時間がゆっくり流れ、そんな贅沢なセミナーの中に身を置き、1週間過ごした。ただただ泣いて泣いて泣いた。この学びに出会った喜び、自分を責めるような思い……心の中から沢山の思いがあふれ、その自分を隠すことなく、のびのびとさらせる場所だった。

先生たち一行は、その後、ニューヨークの久保邸に行った。

その後、2回位は、アメリカセミナー

に参加した。ロスのホリデイイン？ その次は、ニューヨークのホテルマリオット？しっかりとは覚えていない。

ロスは、板倉邸のミニセミナーの後、数回行っており、なじんでいて、いつも空が青くて、カラっとしていて、爽やかだった。

ニューヨークは、いつも心が重く、ロスのようにカラっとはしていなかった。空港から、足に重りをつけて順番を待っている感じ（奴隷）が出てきたり、インディアンで殺された……的な苦しい思いが、曇った空とともにどよんとしていた。セミナーでハーレムに行くことはなかったが、「昔のセミナーでシルビアレストランに行ったんだよ～」と聞いた。私の心の中には、あの初めてのアメリカ旅行での、ハーレムの公園が、曇り空の中の晴れ間のように、いつも繋(つな)がっていた。

アメリカセミナー、また海外旅行の出来事を思い出す時、若かった時の純粋さや、肉を掴んでいない、損得ではなく自分の意識のままに動く大胆さや、学びに出会ったことがどれほどうれしかったか！が、響いてくる。20 代の自分は、それこそ「宇宙」だった。空に向かって、数えきれない宇宙の友よ！ 私がしっかりお母さんのぬくもりを思い出し、伝えるから、待っていて！ と心の中で叫んでいたのだ！

なんだか、知らず知らずに老化し、肉にまみれたと思う。肉の安泰(あんたい)、肉ボケ、感性が鈍(にぶ)い自分になっている。そんな日常に、来世から必死でメッセージが来る。それがアメリカ、ＮＹ。……思いを向けてください。つないでいってください。意識の転回……。ボケて、居眠りしそうな自分に活が入る。ありがとう！！

Sylvia's Restaurant
Queen of Soul Foods

(212) 996-0660
328 Lenox Ave.
Corner 126th St.
New York City 10027

SINCE 1962 True Southern Hospitality

SYLVIA'S STORY

Sylvia and her husband, Herbert, are the proud owners and operators of the famous Sylvia's Restaurant. They have operated their restaurant business for more than 29 years. Their entire family of sons and daughters and grandchildren have helped in making the restaurant a complete success.

Sylvia, a mild-mannered and alert woman from the south, tells her story with the help of her husband who was once a sailor in The United States Navy. Together, they, along with their family and employees, have made Sylvia's Restaurant a success throughout the United States and in certain international regions. Sylvia's is where you can actually meet anyone – a local from the community or a national or international figure.

Sylvia, as a farm girl from the south tells of her father who died when she was only four days old. This left her mother to raise her, and her late sister, Louise, who also owned a restaurant located at 121 Street and Lenox Avenue. Louise's Restaurant today is still operated by her immediate family. Nevertheless, in spite of the odds, Sylvia continued to keep her "eyes on the prize." While she knows how to: plant, weed, crop and sell tobacco - these are jobs which she has done that have strengthened her faith and belief in the old saying, "There is always a better way." Don't be afraid to work hard and like people.

Sylvia came to New York and was employed as a waitress where she worked years of long, hard hours. She later bought the restaurant from the owners. Sylvia along with her husband are successful owners and operators of the famous Sylvia's Restaurant where you can eat Sylvia's home cooking at its very best at affordable prices. Once you have eaten at Sylvia's, you will have ordered more than half of the soul food menu by the year's end. The food is tastefully delicious.

Sylvia thanks Harlem and New Yorkers along with the national and international communities for their continued support in making Sylvia's Restaurant a success.

Love
Sylvia

ハーレムのシルビアレストラン

◎ 柳生三千子さんの場合

アメリカセミナー参加は 1992 年（H4 年） 3月 26 日～4月7日迄、お勉強をしてから生まれてくれた３歳の息子と小学校５年の娘との３人での参加でした。

私にとってはこのお勉強がどのようなお勉強かもよくわからないまま、先に行かれた方の「行って良かった、うれしい」と言う感想を聞いて「いいなぁ、私も行きたいなぁ」という軽い気持ちと、毎日が子育てと仕事が忙しくて現実逃避、少しの間でもこの苦しさから解放されたいという思

いが強かった。

でも心の片隅で、来世生まれるであろうスラム街を、一目、生きている時に見ておきたいという思いが強くありました。今こうして打ち込んでいると涙が溢れてくる。

やはり私はあの時に漠然と感じた思いが、スラム街に生まれるんだという思いが、今また確信として甦ってきます。

あぁ、私はお母さんに生んでもらえるんだという喜びと、「アルバート殺してやる。お前なんか信じるもんか。喜びなんぞくそっくらえ！」と雄叫びをあげている自分。やっとやっと命をかけて探し求めてきたアルバートにやっと逢える喜びがひしひしと伝わってきます。

田池先生がよく「皆さんはただのおっちゃんやおばちゃんではないんですよ。皆さんは壮大な仕事をするために今学んでいるのですよ」と言われていたのを覚えている。

意識の流れ —— 肉は何の取柄もないただのおばちゃん。こんな自分をずっと卑下してきた。今世はこのような肉体を選んできたのだと少しずつ意識の転回ができるようになってきた。分からないながらも続けてきて良かった。

そして忙しいのに、私たちをよくセミナーに参加させてくれたと、改めて主人に、家族に、「ありがとう」の思いがこみ上げてきます。お世話をしてくださった皆様、本当にありがとうございました。

◎ **シリングまち子さんの場合**

初めてこの学びに出会ったとき、次元移行という言葉にひかれた。

田池先生に何にも分からないままに、「肉体と一緒に移行するのですか」と尋ねた。先生は「まあまあ、とりあえず 10 回セミナーに来なさい」と言われた。

2 回目のセミナーはニューヨークでおこなわれた。自分でホテルを予約し、誰も知っている人がいない状態でセミナーに参加した。当時はチャネラーが隣に座り、その人の意識を語るという形式だった。私はそれが自分の闇が暴かれるというような感覚でひどく恐怖を覚えた。

田池先生は、そんな私に声をかけてくださった。「あんた、一人で来ているのか。私の食事を代わりに食べなさい」と。

それでやっと周りの人と話すことができた。自分の番が来て前に出た。その意識を聞くうちに頭がどんどんと下に下がり、顔をあげることができない。

そんな自分が恥ずかしく、みっともなく、消え入りたいような感覚だった。

先生は「顔をあげなさい」と言われた。それは、「そんなあなたでいいのですよ、そのあなたを受け入れていくのですよ」と

教えていただいていたのだと思う。

その時に出してもらった意識は覚えてはいないが、田池先生との会話は今でも鮮明に覚えている。

いつのセミナーかは定かではないが、学びの仲間が、なにも恐れることなく、うれしそうにハーレムを散歩し、黒人の人たちに挨拶し、またその人たちも、うれしそうに挨拶を返していたのが、なんとも不思議な感じだった。

今にしてすでに 250 年後に生きていたのかと思う。

◎ 平松直美さんの場合

今回のアメリカセミナーの投稿を機に、私の中の来世、そして 4 次元移行の思いが一気に噴き上がってきました。もちろん、それ以前より、今世の肉体を持った私の心の中に、すでに来世の意識も、来世生まれ変わることも、4 次元移行も、心の中に感じることはありましたが、その計画が実現できるという喜びが噴き上がってくるのです。こんな機会を与えてもらってうれしいです。

1991 年のＮＹ、ＮＪセミナー、そして 1992 年のＮＹ、ＮＪセミナーに参加しました。それから 30 年近く学んできました。今世、田池先生が命がけで真実を伝えてくれたことを、自分の中で感じ、そして信じて、来世につなぐことが大切だと思いながら、反省を続けています。

<アメリカの地に向けたときに、私が感じたこと>

愛です。私は愛です。ともに、ともに愛をつたえあいましょう。愛は喜び、愛は波動、どこまでも広く、深く、楽しく、喜びが広がっていく。あなたも私も愛です。愛が一つ、愛が大きく、愛は田池留吉の波動であり、アルバートの波動であり、私の波動です。

愛しかありませんでした。肉をもらい、地球に降りてきて、地球人として生きて、間違った方向に心を向けてきた。その道

を修正できることが喜びです。今日をありがとう。あなたと共に、瞑想できることが、今がうれしい。

私は以前、ニューヨークセミナーに参加してとてもうれしかった。愛がアメリカの地にともされたことを知り、この愛の灯がこれから大きくなることを知りました。肉の数では、少人数の人がアメリカセミナーに形をもって参加しましたが、田池留吉は全宇宙にそのことを伝えました。意識の流れが確実に、計画通りに運ぶように、田池留吉は肉体をもって、アメリカの地に降りたのです。アメリカを発端として、全世界に、全宇宙に、愛が伝わります。ア

マテラスを主に信じてきた日本人が、今度はアメリカの地で、多くの宗教が混在するアメリカの地で、それぞれの心に培ってきた他力の神々を離すために、再び肉体をもって、アメリカの地に結集します。様々な人種が坩堝と化した地で、民族を超え、人種を超え、男女の別を超え、形の違いを超えて、心は一つ、本当の私たちは愛というエネルギーだということを信じるために、また信を深めるために、私たちの心は集まるのです。

待ってくれている、アルバートが、母なる宇宙が、流れに乗りなさいと、計画を全うしなさいと、呼びかけてくれている。「はい」と答えることがうれしい。「必ず帰ります」といえる今がうれしい。

◎小笠原超さんの場合

アメリカセミナー関係の資料を見ましたら、私のアメリカセミナー参加は、95 年 5 月 26 日〜 NY、96 年 6 月 1 日〜ロサンゼルス、どちらも最終回でした。

学びの友とハドソン川を眺めて、懐かしい思いがしたのを、いつも思い出します。

NY セミナーの時、田池先生の体調が不良で、参加できない状態でしたが、「私が行かないと、みんなが残念に思うでしょうから」と、無理を推して、お出でいただいたことが一番記憶に残っています。

「アメリカセミナー」　アメリカセミナーは、250 年後、300 年後の次元移行に繋げるために必要でした。アメリカでのセミナー終了は、私の体力的なものもありましたが、来たるべき意識は来たのではないか、そのように思い、終了にしました。

「これからの展開」　次の世代の意識たちが新しいセミナーや展開を通して、更に次の世代に繋げていきます。

「日本の役割」　必然的に、大きな天変地異が起きてきます。日本から、多くの人と共に学びの友もアメリカや世界中に移転することになります。そして 250 年後に向けてそれぞれの地に於いて意識の流れを繋げていきます。

この意識を受けて、感じる思いは、田池先生は学びに、セミナーに命を掛けていました。いかに、自分が間違っている、取り組みが甘い、反省が足りない、それ以前に、命を掛けて、命掛け、一途な思いが足りないのではなく、なかった、その思いでいっぱいです。

◎ 三枝京子さんの場合

あなたにとって、アメリカセミナーは、どんな意味合いをもっていたのでしょうか？

私が初めて行ったセミナーは、NJ で、田池先生のいないセミナーでした。旧久保邸で行われたセミナーで、飛行機の中で、そのことを教えてもらい、早速、行きました。鈴木和子さんにチャネリングしてもらったのを覚えています。ウォーレル直子さんもいました。

初めてなのに、初めてではないような不

思議な時間と空間でした。それで、その後、日本に帰って、初めて、田池先生に会いました。初対面なのに、私の一番知りたかったことをずばりと言われ、びっくりして、うれしくて、1年間、ぶっ通しで、ほぼ全セミナーに出ました。

熱海のセミナーで、塩川さんにあったのも覚えています。が、その1年後、またアメリカに戻ったので、今度は、ロスや、NJのセミナーに出ました。その時は、日本には、通えない時期だったので、とても助かりました。だから、日本にずっと住んでいる人たちとは、その重要性が、全く違うと思います。私にとっては、アメリカセミナーは「なくてはならないもの」でした。

そこで基礎を作ったから、2000年から、年6～7回、アメリカからセミナーに通う決心がつきました。本当によくやってこれたと思います。知り合いが、「お前はミリオネイヤーだ」と言いました。そんなにお金もない中、ミリオネイヤー並みに2国間を通っていました。

それから、20年。

私にとって、アメリカセミナーは、なくてはならない、非常に大事なものでした。あのセミナーがあったから、私は、日本のセミナーに通い続けることができました。

先生、ありがとうございます。

田池留吉に、意識を向け、アメリカセミナーについて、メッセージを受けて下さい。

はい、田池です。私が、アメリカまで肉を運んだのは、何も、目に見えるものたちだけの為ではありませんでした。むしろ、目に見えない存在に対し、種を播きにいったと言っても良いくらいです。250年後にそなえておきたかったのです。250年後は、アメリカです。ニューヨークです。私もまた違う肉を持って現れますが、まず田池留吉の肉を持って、私にはしておかなければならない仕事がありました。

もちろんセミナーは、大切なものでした。でも、セミナーとは違う意味でも、私は、あの地に仕事をしにいって参りました。それは言葉では言い表せない、肉体を持たない存在に対して、私は、コミュニケーションして参りました。

うれしいです。肉の250年は、何か遠いように感じるかもしれません。が、意識の世界では、すぐそこです。

私も、今は肉体を持っていませんが、あなたの心を通して語ることができます。この実体を、感じてみてください。

はい、意識こそが実なる存在だからです。その意識の世界に仕事をしに、アメリカまで行きました。

もちろん、アメリカ在住の方たちの参加も私にとっては、うれしいものでしたが、もっと大きな意味が、私がアメリカに肉を運んだ意味があります。4次元移行への橋渡しを既にあの時点でした、とでも申しましょうか……。意識の流れの中で、アメリカは大きな意味を持っています。

250年後の舞台はNYです。そして、意識の世界には、過去も未来も今という一点に集約されています。私は、田池留

吉の肉を持って、250 年後、アルバートの存在を、あの地に話しかけました。

アメリカは喜びです。私たちは喜びです。４次元移行の旅が、今か今かと待っています。ありがとうございました。

◎ **朝日めぐみさんの場合**

1991 年 3 月にニュージャージー（FortLee）のホリデイインホテルでのセミナーに参加しました。

アメリカセミナーは、行きたいと思って行ったわけではなく、母に連れられて行きました。自分の意思ではないのだから関係ない、偶然行ったという思いがありましたが、今となっては、「私は自分にとって必要だから行った」という思いが出てきます。必要でした。まだ小学生で初めての海外だったので、ポイントポイントで鮮明に覚えています。

観光バスに乗って、エンパイアステートビルに行ったこと。シルビアレストランで夕食を食べたこと（その時はシルビアさんが誰なのか分かりませんでした）。

みんなでホテルの近くの公園に行って、初めて野生のリスを見たこと、そこでインスタントカメラを構えている私に「写真のセンスがあるね」と言ってくれたおじさんがいたこと。ホリデイインの売店に何度も行ってお菓子を買ったこと。プールで泳ぎすぎて貧血を起こしたこと。やんちゃだった板倉充宏さんが風船をホリデイインのホテルの天井に放してしまい、警報器が鳴って大変だったこと。その後、梶谷佳秀さんが子供たちをドライブに連れて行ってくれたこと。

確かに、あのとき、アメリカでセミナーが開催されていました。これからも開催されるかもしれません。もちろん250年後も。

あのとき、「確かに私はニュージャージーにいた」「I am here.」という思いが、今の私、来世の私を繋（つな）いでくれている感じがしています。

シルビアレストランの顔、シルビアさん

朝日めぐみさんの撮ったものではないですが、ワシントン広場の野生のリスさんです。

アメリカ大陸横断自動車旅行

９月２日から８日にかけてロサンゼルスからニューヨークに向けて、自動車旅行を敢行（かんこう）しました。ひたすらＮＹ（正確にはニュージャージーの久保さん宅）を目指して走り続けました。

初日はアリゾナ州のフェニックスが目的地でした。約８時間、660kmを走り何とか到着しました。この町は名前通りフェニックスの木でいっぱいで、とても緑が多く、一番気に入った町です。ここでＮＪの久保さんの御宅に電話を入れ、合田さんの励ましの言葉にとても元気づけられました。

２日目はテキサス州のエルパソです。ニューメキシコ州を通過し、砂漠や荒野（こうや）の中をひたすら一直線に走り続けました。雨が降っている場所が遠くに見えたり、竜巻があちこちに見えたり、アメリカはとてつもなく広い！　この日は711km走りました。

３日目、サンアントニオに向かいました。795kmを走って到着しました。

４日目になると「オーここまで来たか」と、地図を眺（なが）めつつ感動してました。この日はルイジアナ州のニューオーリンズが目的地です。やっとの思いでテキサス州を脱出しました。これまで平均８、９時間走っていましたが、この頃は感覚が麻痺（まひ）してきたのか、もう何時間走ろうが苦痛じゃなくなりました。走行距離999km。

５日目、目指すはジャクソンビルだ。走行距離は807kmでした。

６日目、ワシントンＤＣの手前でストップしました。ここで実家に電話したところ突然父が出て、あまりに久し振りだったのでびっくりしたのですが、何か胸が一杯になり、とてもうれしくなりました。今回父母と離れて暮らしたことで、そのありがたみが良く分かりました。その晩は父や母のことを思いながら眠りました。この日も随分と走ったもので902kmでした。

７日目、最終日です。

ＮＹまで502km。ハイウエイをひた走ってＮＪに辿（たど）り着いたまでは良かったのですが、ここからが長かった。どこがどこやら皆目分からずに、久保さん宅の前の通りに合田さんたちが立っていたにも関わらず、その前を５往復位してました。皆を見付けた時は「ヤッター！」という思いと同時に車がよくここまでもってくれたという感謝の思いが込みあげてきました。故障を繰（く）り返していた車が何のトラブルもなく走ってくれたんです。本当は、最後まで走ってくれるかどうか不安でした。でも、そんなこと心配する必要はなかったんです。なぜなら僕たちは導かれていたからです。ほんとに不思議なくらい何の問題もなく、食事も宿泊も順調でしたし、途中で出会った方々も皆良い人たちばかりでした。こんな体験はもう二度とできないんじゃないかなと思う次第です。

（蓮沼 要（かなめ））

1990年9月14日～10月10日の第2回NY・NJセミナーで反省研修会は終了し、帰国後、「第1回エルランティの光セミナー」が沖縄・鹿児島で開催されることとなります。

前ページで紹介しました、高橋健一郎さんと蓮沼要さんのアメリカ大陸横断自動車旅行、そのゴールが、この第2回ニューヨークセミナーなわけであります。

そのセミナーも無事終了し、田池先生も、日本からの参加者も引き上げたあと、なぜか編者は1ヶ月あまりをニュージャージーの久保邸で過ごすことになります。

主な理由は、日本書店に対する営業活動や、英文パンフレット『神の子の道』を、ニューヨーク市内で配布すること等々であります。これまたどういうわけか、横断旅行をされた高橋健一郎さんも残ってくれることとなりました。

そのことはさておき、ニュージャージーでは、毎夜、牧村ファミリーが訪問してくれ、ともに瞑想する日々。日中はバスでニューヨークへ足を運び、書店回りとパンフレット配り。バスを乗り越して、フォートリーから歩いて帰ったこともあります。

また、エッジウォーターは、ユダヤ系の人たちのコロニーのようになっており、近所の方が訪ねてくれ、強制収容所時代の入れ墨を見せてくれたり、実現はしませんでしたが一緒に瞑想をしようという話があったり、結構、エキサイティングな日々を過ごしていました。

困ったのは、日本との連絡手段。この頃はインターネットどころか、携帯電話もない状態。時差の関係で電話のやり取りもままならないため、やむなくファックスで日本との通信手段を確保しようと、町へ出て中古のファックス機を購入しました。身振り手振りを交えて、何とか中古ファックス機を購入しましたが、これの設置で一苦労。英語の説明書と格闘し、遂に完成。そして、日本からの通信第1号が、これからは株式会社エルが、セミナーを運営するという報告だったのです。

これまではセミナーの主催は、ボランティア有志の人たちが持ち回りのようにして研修会を運営しておりました。

それを以降は、すべてエルが運営するということで、その第1回が、沖縄・鹿児島で1990年10月21日～25日にかけて開催されるという報告だったのです。

こうして「エルランティの光セミナー」が開始されることになったのです。

第1回エルランティの光セミナー
― 沖縄・鹿児島セミナーレポート ―

1990年10月21日～25日／ホテルニュー那覇・霧島キャッスル

エルランティの光出版主催となった第1回目のセミナーが10月21～25日に沖縄・鹿児島で開かれました。双方とも100名以上の出席者がありました。今までと違う点は進行役の司会者がいることと、エルランティの光出版及び各センターからのお知らせと案内の時間が設けられていることです。セミナーだけでなく、出版物や相談室も利用して日々の勉強に役立てていただきたいと思います。

田池先生の講話は発売になったばかりの『エルランティの光』を読みながら進められました。

今回から事前の申込み制となった現象でしたが、現地の方々も積極的に参加されていました。特に印象的だったのが太平洋戦争の沖縄戦で亡くなられた方の意識が出された内容でした。大阪の満尾徳二さんのお兄さんの現象で、初めは苦しいと訴えておられましたが、だんだんと光の方へ向いてゆき、戦争の愚かさと虚しさを私たちに一生懸命語られました。

最後は、神・エルランティ田池に感謝して終りました。

セミナーの最後の天上界からのメッセージで、エルランティ田池から「お帰りの飛行機、あるいは列車の中で、皆様それぞれが『エルランティの光』の中の一つのメッセージでよろしいですから、ゆっくり読み通してください。今回のセミナーで気付いたこと、感じたことがあると思います。それをもう一度反芻しながらよく読んでください。必ず読んでください」とありました。田池先生も「開いたページから必ずエルランティ田池の心が伝わります」とおっしゃっていました。

帰りの東京へ向かう飛行機内では『エルランティの光』があちらこちらで開かれていました。皆、神妙な顔をしていたのが印象的でした。（小野淳一郎）

私の今世の名前は、田池留吉でした。日本人として、男性の肉を持ちました。その肉を使って、私は、私の仕事をしてまいりました。そして、私は、再び、肉を持ちます。

今は、250 年という数字が出ています。名前は、アルバートだと、そして、生まれるところはアメリカだということも出ています。私は、本当はそのようなことは、どうでもいいと思っています。ただ、私が、もう一度肉を持って、今世私がお伝えしてきたことの、一応の完成を見ることは確かです。

言うなれば、三次元最終の時が、250 年後ということです。従って、そこに至る時間は、大変厳しいです。

肉の次元で言えば、大変な時を迎えていきます。すべてが崩壊していきます。

しかし、私は、崩壊が喜びであることを伝え続けました。

肉の生活を脅(おびや)かし、肉の命を危(あや)うくする崩壊の時を経(へ)て、私たちは、いかなる存在かということを、深く、深く考えていく道筋を通っていくのです。私、アルバートは、そのお手伝いをさせていただきます。私は、全宇宙の思いの表れなのです。

250 年後には、もちろん、私も、ひとりの人間として、苦悩の日々を送りますが、時間にすれば、それはほんの一時(いっとき)です。やがて、私は、自分に目覚めゆくのです。

今世の私は、時間を要しました。しかし、私も皆さんと同じように、今世の学習があります。従って、自分に目覚めゆく時間は早く訪れます。さらに、250 年後には、力強い友（フレンド）が、最初から出現してくれています。私はそのフレンドとともに、皆さんの意識の世界に呼びかけてまいります。

今世は、その一端(いったん)をセミナー会場でお見せいたしました。

私たちは、ともにこの真実を伝えるべく、アメリカの地で出会う段取りになっています。

その出会いは、衝撃的なものです。衝撃的な出会いにより、互いが互いの心に通信を交(か)わしてまいります。その通信により、私たちは、ともに自分に目覚めていくのです。

目覚めは速いです。目覚めは敏速に、世界中を駆(か)け巡ります。

そして、より高度で純粋な意識の世界を、ともに学習してまいります。

人間の心の中は、荒れ狂っています。荒(すさ)み切っています。何もかも限界状態なのでしょう。

そのような中に、今世セミナーに集われている大半の人は、また肉を持ってきます。もちろん、その人達の心の中も同じように、疲弊しているのです。

どんなに、財と権力を手に入れても、決して栄華は続かないのです。どんなに、智恵を結集させても、またどんなに、祈りを捧げ、パワーを乞おうとも、崩れていくものは崩れていきます。その体験を経て集ってくる人達の心に、真っ直ぐに訴えかけていくことでしょう。

250年後には、今のようなセミナーがあるわけではありません。しかし、真実が伝わるスピードは速いです。

人から人へ、迅速に伝わっていきます。そのスピードを加速させるものが、世界中に起こってくる天変地異の嵐です。

250年後に肉を持つアルバートが、今このように語るということが、どうも腑に落ちないと思われる人であっても、先に示したような正しい手順で、この学びと取り組んでいかれたなら、そういう疑問は、いつの間にか消えていると思います。ただ、あなた自身が、形となって目の前に現れてきているものだけに、縛られている現実があるだけなのです。どこかで、その縛っているものを緩めることができたなら、あなた自身、今までとは全く違う世界を、あなたの心に感じていかれることを、私は約束します。

ニューヨーク公共図書館

そうなってくれば、本当の喜びとか、本当の幸せとかを感じていかれることだろうと思います。

そして、さらには、あなたのこれからを感じます。限られた時間を越えた、無限の時間の中にあるあなた自身を感じられると思います。それは、何とも言えない至福感を、あなたに伝えてくれるでしょう。

「私は、意識でした。私の本質は喜びでした。私は消えてなくなるものではなく、永遠にある生命です。

長い時を経て、ようやく自分の本質に触れ、自分の本質に深く進んでいく軌道に出会えました。私に『意識の流れ』を伝えてくれた大いなる意識に、心からありがとうです。本当にありがとうございました。」

このような思いが、あなたの心の中からも、ふつふつと湧き起こることを、私は心待ちにしています。（『続 意識の流れ』より）

My name in my current lifetime is Tomekichi Taike. I was born as Japanese and male. With this physical identity, I have been doing my work. And, in the future, I will have another physical identity.

Currently, it is being said that I will be reborn two hundred fifty years from now. My name will be Albert and my birthplace will be in the United States. The truth is, none of this information is very important. However, I am certain that I will be born again into another life, and will have the opportunity to see through the message that I have been spreading in my current lifetime.

In short, our third dimension will end in two hundred fifty years. During this period conditions will be extremely harsh. To explain at the physical level, we are going to have some very difficult times. Everything will fall apart. However, I have always continued to say that to "fall apart" is joy. In a time when our lives are threatened and endangered as the world falls apart, we will start on a path of deep reflection of our true existence. I, Albert, will be assisting with this process. I am a manifestation of all of the souls and thoughts in the entire Universe.

As an individual person, I too will have difficulties in my future life, but the period of difficulty in my life will be short. In time, I will come to a realization about myself. This realization took quite a bit of time in my current life. However, like everyone else in this study, I had my own lessons during this lifetime from which to learn. In my next life, my realization to the truth will be much quicker. I will have a strong friend who will be with me from the very beginning. With this friend, I will call out to the existence of everyone's consciousnesses. I have shown a sample of this during the seminars during my lifetime.

We are set to meet together in America, and to spread the truth. The experience of meeting one another will be impacting. Through this encounter, we will begin to communicate to one another's hearts. Through this communication, we will realize "true" Selves. This realization will happen

quickly. This realization will spread rapidly around the world. And we will learn together of a purer world of consciousness, at a higher level of learning.

People's hearts will be hardened with pain. They will be completely ruined. They will reach a point of limit for everything. And in this environment, most of the people who have attended the seminars in this lifetime will be reborn. Of course, their hearts will be at the point of complete exhaustion as will everyone else's. No matter how wealthy or powerful, the wealth will not last. No matter how high one's level of education or how much one prays for power, what needs to be destroyed will be. The message will call out directly to the hearts of those people gathered together after experiencing these events.

In two hundred fifty years, we will not have seminars as we do now. But, the truth will spread incredibly fast. It will spread from one person to another very quickly. The storms of natural disaster throughout the world will cause the speed to accelerate.

Some may question how an individual named Albert, who will exist in two hundred fifty years, can communicate with us today. But if you follow the steps outlined earlier, those questions should disappear. It is only because presently you are trapped within your physical environment of believing in what you see immediately in front of you. I promise that if you, at some point, are able to loosen the tightly bound trap that you have put yourself into, you will be able to sense in your heart a completely different world and reality than the one in which you currently live. Once this happens, I believe you will begin to be able to feel things such as true joy and true happiness.

And, moreover, you will be able to sense your future. I believe you will become able to see yourself beyond a finite definition of time, as within an infinite span of time. It will give you a feeling of happiness beyond words.

"I am my consciousness. My true Self was joy. I was not an existence that dies and disappears, but a life that exists infinitely. After such a long period of time, I finally met my true form, and found the path that leads deep into finding my true Self. I give thanks from my heart to the many consciousnesses that directed me to 'the flow of consciousness.' I thank you from deep in my heart."

From my heart I look forward for these feelings to come welling up inside your heart.

(**"The Flow of Consciousness 2"**)

学びの仲間の皆さんに次の４項目についてアンケートをお願いしました。

「1. 田池先生に出会われたのはいつ？」、「2. この学びに集われた動機は？」、「3. 田池先生（この学び）に出会う前の自分の人生について」、「4. 田池先生（この学び）に出会って何が変わりましたか？」

2005年（平成17年）９月に出会われた福井英治さん

1	２００５年9月の【意識の流れ・出版記念セミナー（下呂・水明館）】で初めてお目にかかりました。 知人（学びに関わりのない人）が貸してくれた《意識の流れ》を読んで興味が湧き、セミナー参加を申込みました。
2	人生への疑問でしょうか…… サラリーマン人生に嫌気がさし、早期退職をしてゴロゴロ生活をしている時に、この学びに出会いました。
3	４０歳位までは超能力・宇宙パワー等に興味があり色んなことに首を突っ込んできましたが、全てニセモノだと感じ諦めました。その後は精神世界的な方向にも行きましたが、心が満たされるものはありませんでした。 この学びに出会ったときに、これは本物だ、やっと出会えた、もうこれからはさ迷い歩かなくてもいい、という安堵の気持ちが湧いたのを覚えています。
4	この学びをするために生きているのだと思えるようになり、色々と人生が楽になりました。

2005年（平成17年）10月に出会われた福井真由子さん

1	2005年10月 意識の流れ出版記念セミナー
2	今世数々の他力をしてきた私にとって、意識の流れの本の内容は難しく、反発も半端なかった。けれど、ここには私が本当に求めている何かがあるはずだ、と思ったから。
3	神や仏を信じ、祈って縋って色々な物にパワーを求めてきました。
4	神や仏はいない。

2006年（平成18年）に出会われた寺田千恵美さん

1	2006年出版記念セミナー
2	苦しくて、身体の調子も悪くなった。その原因が仕事だと思い、辞めたいと思っているのに辞める決断が出来ないでいた。 自分から、この苦しみを切り離すには、どうしたらよいのかと思いセミナーに参加しました。
3	苦しくて、重たくて、なぜ死ぬんだろう、死んだらどうなるのか？ 死んだ人と、もう一度話をするにはどうしたらよいのか？ 探していた。ずっと一つのことを引きずり、苦しみの中にいた。原因は自分では無く外から来るもの。探していたものが解れば苦しみが無くなると思っていた。

4	重く引きずる感じは無くなった。苦しみの原因や「助けて」と自分の中から聞こえてきていた声が、外の誰かでは無く自分だった。ざわざわした思いが、たくさんの自分だったと教えてもらった。 ずっと探していた答えがあったと思えた。辞めたいと思っていた仕事も、「仕事のコツは、愛のパワーだよ」と田池先生が指を重ねてくれた事が嬉しかった。何か行き詰まると指を重ねてくれたときを思いだし、「あぁ、そうだった」と軌道修正が出来るように思います。

2006 年（平成 18 年）頃に出会われた橋爪あき子さん

1	2006 年 9 月琵琶湖セミナーか、2007 年 9 月琵琶湖セミナー
2	息子の体調不良と、不登校。 私自身の、生きて行く事への、辛さ。 生きて行く意味が、全く解らないと思う思いが、益々、強くなって行く一方でした。
3	取り繕って、なんとか、なんとか生きていました。 息子も、自分も、いっそのこと、崩れてしまって、スッキリして、本当の事が、出てくれば良いと、思いました。 この世で、大切な事が、分からなくなりました。 何か、どうでも良い事に、エネルギーを使っていることが、バカらしく、皆んな皆んな、信じられないと思いました。 生きて行く意味が、分かりませんでした。 なのに、家族まで、作ってしまって、一人なら、死んでも、軽く済むのに、子どもを育てるのが、こんなに辛いとは、知りませんでした。 皆んなが、普通にやってる事が、出来ませんでした。 母に手伝ってもらいたい。だけど、病気で、長男が 3 歳の時に亡くなって、それからが、更にいっそう、寂しい子育て時代が、続きました。 誰にも、解ってもらえない。という思いが、どんどん出てきました。 娘と、母親と、孫の姿が、まともに見られない。目を背けてしまう。 そんな自分が、苦しく、辛かったです。 そして、そんな自分が、そこまで苦しんでる自分が、不思議でした。 何でそこまで苦しんだろうと、思いました。
4	この人に会う為に、今迄の、苦しい事、寂しい事、悔しい事……。 全部、この人に会う為にあったんだと、理解しました。 それが、喜びでした。 何万年、何千万年、何億万年に、一度の出会いだと、 こころの底から、喜びました。 一人で、喜びました。 その、喜びは、今迄、生きてきて、一番の喜びでした。

2007 年（平成 19 年）12 月に出会われた野崎緑さん

1	２００７年１２月の琵琶湖セミナー参加の時
2	２００７年６月に主人が交通事故で亡くなり、友達が『意識の流れ～アルバートとともに』の本を渡してくれてセミナー参加に誘ってくれた。ずっと探し求めていた真実。
3	物心ついた頃に本当のことは目には見えない、目に見える世界は影だという思いがあった。それをずっと探し求めていた。生まれた時から神棚があり家の宗教の天理教を両親がしていたので自然に神様を拝み祭っていた、お願いをしていた。自然科学、哲学、自己啓発といろんな自己を高める書物を読んだ。２６歳のときに新興宗教に出会い自ら信仰をしていった。幸せになりたい、子孫繁栄、家族の幸せが人の道と思いひたすら通って話を聞き実行していた。奉納、奉仕もした。２０年程してふとやめてみようと思いやめた。何も変わらない、得るものがなかった。その間商売を失敗し借金を抱える生活になってしまった。自分を変えたい縋りたかった。やめた後は縋るものがなくなり生きがいのようなものがなくなった。それでも幸せは感じるものと思いがんばってきた。お金に振り回され欲いっぱいだった。主人は優しく私の思いとおりにしてくれた。
4	気がつけば私自身が一番変わった。人を責めなくなった。以前はなんでも人のせい、私は悪くないという思いがあった。真実に出会えた喜び。生きがい、生きる目標、目的ができた。

2007 年（平成 19 年）に出会われた吉岡峰子さん

1	2007 年琵琶湖のセミナー
2	人生が上手くいく方法を知りたかった。自分を高めたかった。
3	自分以外のものから幸せを得ようとしていた。宗教、占い、自己啓発、結婚、お金等。その場でお金がかかっても、リターンを期待した。全て中途半端に終わり、幸せだと思える事もなかった。人生の成功がわからず、何を得たら良いのかもわからず、生きてゆくのが苦しかった。死にたい思いが時々上がってきた。
4	以前は肉のお母さんを嫌って見下していた。最近お母さんを思うと優しさを感じ、涙が出てくる。 マイナスだらけの人生、自分だと思ってきた。少しずつではあるが、自分を好きになってきた。ずっとともに行く仲間だと。

2008 年（平成 20 年）３月に出会われた岩谷龍樹さん

1	2008 年３月に琵琶湖グランドホテルで開かれた「初心者のためのセミナー」で初めてお会いしました。参加したのは、その少し前に塩川さんの著書『ありがとう』を図書館で見つけ、それを読んだのがきっかけでした。
2	当時は、真理は知的には理解できないと感じており、心で分かりたいと思っていたから。
3	大学生の時から、どう生きるべきかずっと答を求め、模索してきました。どうして普通に生きられないのか、と疑問に思うほど、いつもいつも何かに突き動かされてきました。

4	憑き物が落ちたように、求める気持ちがなくなりました。あれから 11 年あまりが過ぎました。「母のお腹の中にいた自分は今も存在し続けている」と学びの本にあります。今では、そういうことを先生に教えていただいて、そうだろうなあと多少でも思えるようになっただけで十分じゃないか、お母さんを思えるだけで、もう十分じゃないかと思えるようになりました。もう、泣きたいくらいに幸せを感じるようになりました。

2008 年（平成 20 年）4 月に出会われた新庄美紀さん

1	平成 20 年 4 月
2	チャネラーになりたかった。
3	自分を素晴らしい自分、富、権力、地位など、人から評価を得られるような人間になろうとひた走っていた。己一番を目指し、あくなき戦いを繰り返してきた。
4	自分に苦しみが降りかかってくることが恐怖で、どうすれば苦しみから逃れられるのか、いつも逃げ回っていました。目に見えないものが外から私に苦しみを与えると信じていました。でも今は苦しみは自分だった、苦しい自分と真向かいになって受け入れていける優しさが自分の中にあることが少しずつ信じられる。そう思えたとき、心が少しずつ広がって、自分が恐怖するものなど外にはなかった。恐怖する心を抱きしめて行くだけでいいんだと、心が軽くなりました。自分の中に静かなゼロ歳の心がある。静かで穏やかでどこまでも広い心。優しい宇宙の中に包まれて存在していた自分。その自分に心を向けられること、信じられること、もう何も怖くない、そんな自分に変わらせてもらいました。苦しかったたくさんの自分を抱きしめられること、たくさんの自分と今という空間を共有できることが嬉しいです。 苦しみは愛。田池先生の言葉にようやく納得できるようになってきました。間違い続けてきた自分がめぐり逢いたかった言葉だと思います。間違い続けてきたたくさんの自分がずっとずっと自分に気づいてくれとぶつけてくれていた苦しみ。本当に愛だったと今は思えます。

2008 年（平成 20 年）10 月に出会われた下境田良子さん

1	２００８年１０月の出版セミナー
2	学びの動機は、長男の考えていることを知りたい、チャネリングに興味を持ったからです。 セミナーに参加したのは、意識基盤の幸せを見てみたいと思ったからです。
3	全てを見ている天の神様と共にありました。平等公平に審判を下す、その審判は、最善を尽くしてこそ受けられると感じていました。よく「一生懸命だね」と云われてきました。結婚してからは家族の幸せが私の幸せと生きてきました。その為には、自分自身を好きである人生を歩まなければならないと感じていました。人との繋がりも大事にしてきました。自分自身が万能ではないからです。いざという時に備えていました。
4	人間をやったり、意識ですよと瞑想の時だけやったりしません。私の全てを見ている沢山の自分にただまっすぐに意識ですと伝え続けています。瞑想で伝えていることと行動は伴う生き方をしています。まだ、反転されていない肉の部分が出てきたら、すぐに自己供養に入ります。すぐに瞑想状態に入れない時は、気づいたよ、田池留吉と伝え、後でしっかりと瞑想します。

2009 年（平成 21 年）2 月に出会われた阿部奈月さん

1	2009 年 2 月初参加者対象のセミナー
2	本物とは何か、心の世界とは何かを知りたかった。
3	自由を求め、自由に生きてきたと思ってきたけれど、いつも恐怖、不安、寂しさを抱えていた。それがなぜなのか、どうすればいいのか分からず、誤魔化し生きてきた。
4	苦しみがどんどん心に響いてくるようになった。誤魔化しても逃げても益々苦しくて、助けてほしい、救ってほしい、なんとかしろと自分の中が叫んでくる。母親の反省、母を思う瞑想、ゼロ歳の時の自分を思う瞑想を通し、そんな自分を受け入れ包み込むことで安らぎ、喜び、幸せを感じられるようになり、自分にとっての幸せとか喜びの基準がまったく違っていたことを知った。

2011 年（平成 23 年）5 月に出会われた赤間桂子さん

1	2011 年 5 月の琵琶湖セミナーです。
2	友達に誘われての参加です。何か分からないけれども何かを探していたような時に「田池留吉という人がいる、本を読んで一緒にセミナーに行かないか？」というお誘いでした。
3	子育ても終わり、何をしていても、只ただその日一日が過ぎていくといった感じでした。このまま年を取っていくのかな、何か充実した人生を送れるようなものに出会いたい、と思っていました。
4	いつもいつも穏やかな心とまではいきませんがイライラする事も怒る事も減りました。嫌なこと、不愉快な事、周りの人、全てに有難うです。

おわりに

ようやく「おわりに」に漕ぎつけました。『Taike Tomekichi』という本の編集作業は、まるで複雑なジグソーパズルを組んでいくような作業でした。ピースを集める作業からはじまり、集まったピースを「章」という部分ごとに分け、これを組み立てていくのですが、ピースが見つからず立ち往生することもしばしば。仲間の方からお話をお聞きしたり、原稿を募集したり、せっせとピースづくり、ピース探しに励むのですが、訳が分からなくなり、せっかく集まったピースの山をひっくり返してしまいたくなることだってありました。

「やっと組みあがった」と、「絵」を眺(なが)めてみれば、「あっ、あそこが空いている、ここが欠けている」と、チーズのように穴だらけ。

編集力の未熟さをさらけ出したようなものです。せっかくピースづくりにご協力いただいたにもかかわらず、ピースを活かしきれない場合も多々あるかと思います。未熟さゆえとご容赦(ようしゃ)ください。

さて、この『Taike Tomekichi』というジグソーパズル、全部が組みあがりますと、大きく３つの部分に分かれます。

１巻は「反省研修会時代」、２巻は「エルランティの光セミナー時代」、３巻は「『意識の流れ』出版セミナー時代とその後 」

こんな感じで、いまやっと１巻が終わったところ、「おわりに」どころの話ではありません。

しかし未熟な仕事ではありますが、組みあがった「絵」を眺めてみると、田池先生の足跡が見えてきて、同じように田池先生の周りに集ってきた仲間たちの息づかいまで感じられ、「次元移行」に至る道を整備された田池先生、その道をよろよろしながらも歩き続けようとする仲間の足取り、その足取りに励まされて歩く自分の姿さえ見えてきます。

田池留吉の足取りは、そのまま、私たちの足下を照らす光から、永遠を照らし出す光への道筋でした。

さて、いよいよ第２巻は、「エルランティの光セミナー時代」ですが、この時期に、塩川香世さんも田池先生のもとに集ってくることになります。その部分のピースを少し眺めてみましょう。

証言によれば、塩川香世さんが最初に私たちの前に姿を現すのは、1992 年（平成 4 年）の 12 月 28 日、大阪研修センターで開かれた臨時のチャネリング講習会の時だと言います。ある方によれば、「自分のチャネリングのときに目を開けて周りの様子を眺めておられた」と言います。その塩川さんが宿泊セミナーに初参加されたのは、翌年の 4 月 25 日～ 27 日、熱海で開催された「第 62 回エルランティの光セミナー」のこと、さらに翌 1994 年 5 月には、ＮＹ、ＬＡのアメリカセミナーに参加されています。

最後に紹介するのは、その塩川香世さんが書かれた、「第 134 回エルランティの光セミナー（滋賀・ホテルレーク琵琶）」の体験文です。

闇出し現象で感じた心

塩川香世（大阪府）

いわゆる「闇出し」現象がセミナーで始まってから、私は初めて一回のセミナーで、一日ずつ合計三回、円陣の中へ希望という形で出してもらいました。それは私にとって、大変勇気のいることでした。希望という形で出たにもかかわらず、「自分の肉に響いてこなければ」という不安がありました。

先生は以前に、「何もなかったっていいじゃないですか。また次に希望すればいいのです」って、何度もそう言われていたけれど、私は、どうしても素直にはなれませんでした。

「出ようかなあ、出たいけどなあ」って、いつもそんなことでウジウジしている自分がイヤでした。そして前に出て、反省につながる思いを、私は、一つの現象でたくさん感じたいって思ってきました。

以下、三回の闇出し現象の時の「私の思い」をノートから拾い出します。

【1日目】

宇宙に向けての瞑想が始まり、だんだんと身体が回転するスピードが増してくる。そして、立っていられなくなり、倒れて起きあがろうとする時に、いつも出てくる思いは、「こんなことで負けられへん。こんなことでへこたれへんで」って、そんな思いを出しながら、倒れては起き、倒れては起きしていました。

今回、自分の身体の回転に、一瞬「怖い」と思ったら、その思いが声となって出ていました。声を出したら解放感がありました。もっともっと、その思いを出したくなりました。自分の思いを出すということに対して、うれしいと思いました。

「心を解放しなさい。もっともっと自分の心を自由にしていきなさい」、やさしい温もりの思いが伝わってきました。

【2日目】

前日、自分の中の恐怖の思いの中では、田池留吉も、エルランティ田池も、何も思うことはできなかった。ただ自分の出しているエネルギーのすさまじさに気を取られているだけでした。

ただ怖い、怖い、そんな思いの中で、私は叫び声をあげるしかありませんでした。だから今日は、その闇の思いの中で、そちら

のほうに心を向けてみようという思いで前に出ました。

身体が回転していく中で、「私はお母さんなんか呼べない」って、「お母さんなんか、絶対呼べない。お母さんなんか呼ぶもんか」って、そういう思いばかり出てきました。

そして、自分の手や足に触れるものが、ただただ、うっとおしくて、邪魔で、みんなみんなどけどけって、みんな邪魔、みんな消え失せろ」という感じで、思いは「己、己、己一番、私が一番」でした。

戦(たたか)いの心、競(きそ)い合い、敵を倒して突き進む思いでした。

【3日目】

午後に前に出た。大勢だった。たくさんの人がいた。先生の合図で身体が回りはじめた。自分は根なし草のように頼りなかった。本当に頼りないものだった。私はどこにいるのか、私がしっかりと、「これが私だ」と、つかまえていた私がないと思った。

何もわからなかった。ただ、さまよっているだけだった。何もない、自分がどこにいるのかわからないという感じだった。大勢の人たちの中で、自分の身体の回転が早くなるうちに、このまま回っていたら、身体がどこかに飛んでいくように思った。

そして上を向いたら、頭の上のほうで、グルグルとエネルギーの渦(うず)に吸い込まれていきそうで、自分の身を守る思いが出た。そう思ったとたんに回転がゆるくなっていった。

塩川さんが、この感想を書かれた際のセミナー会場「ホテル・レーク琵琶」

２日目、そして３日目のセミナーの終わりに、母を思う、神を思う瞑想がありました。

私はゆだねていくことの安心感、ゆだねていくことが、こんなに安心で、うれしいことなんだって、大きく大きく包まれていることを感じさせてもらいました。

（1997・10・15）

資料提供（敬称略）

浅尾宣子／荒木紘美／石橋章子／板倉充宏／市川明子／梅本清子／大槻明子／大平佳子／奥出康子／片山由紀子／金子恵／小林荘一／佐藤延生／Jennie Lai／田中美穂／谷村美智子／中島一二／中田和子／中村康一／東野治／穂積徳造／牧村市太郎／松村謙三／満尾保子／三ツ矢照雄／脇本佳子／渡辺久記／柳生三千子／山之口全

※このほか、たくさんの方から情報をいただいたり、原稿をいただいたりしましたが、
紙面の関係もあり、そのすべてを収録することはできませんでした。ご容赦ください。

Taike Tomekichi　vol.1

初版発行　2021 年3月 12 日

編　　者　UTAブック編集部
監　　修　塩川香世
発　　行　一般社団法人ＵＴＡブック
　奈良県北葛城郡広陵町三吉 345-14
発 行 者　桐生敏明
英語監修　大槻明子・大槻洋三
制作協力　朝日めぐみ・牧華江
営　　業　桐生紘次

印刷・製本　モリモト印刷株式会社

◎ UTA-BOOK, Printed in Japan 2021